

第5部
筑紫の水・人・祈り

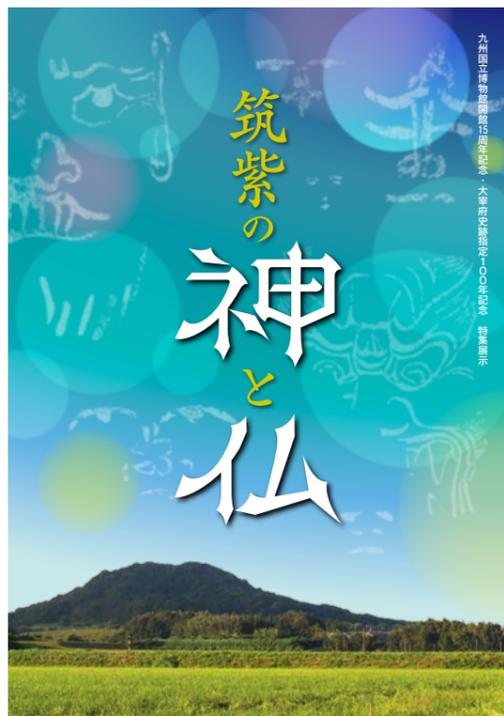


筑後川の山田堰（福岡県朝倉市山田）

第5部 筑紫の水・人・祈り

| | | |
|----------------------|---------------------|-----|
| 第1章 川の歴史学—認識・調査・記録— | 朝岡 俊也・小嶋 篤・ 中島 圭 | 267 |
| 第2章 水利の技術と思想 | 朝岡 俊也 | 291 |
| 第3章 川と信仰 | 中島 圭 | 319 |
| 第4章 神仏と向き合う人の歴史 | 小嶋 篤 | 329 |
| 第5章 風水思想と古墳・都市 | 下原 幸裕 | 339 |
| 第6章 航路でつながる信仰 | 山内 亮平 | 353 |
| 第7章 海を渡った陶磁器と土師器の交差点 | 小野 裕子 | 365 |
| 第8章 基肄城跡と水門 | 主税 英徳 | 379 |
| 第9章 山城で水をつかう | 小澤 佳憲 | 389 |

第5部では「筑紫の水・人・祈り」と題し、水にまつわる歴史の体系的な研究を試みる。第1章では、人類による河川利用の類型と痕跡を整理（認識）した後、それらを歴史資料としていかに記録し、調査するのかという現実的問題に挑戦する。第2・3章では、人類による利水を通史的に俯瞰しながら、具体的な水制の事例を紹介する。また、利水に附属する信仰について遺物や遺構から検討する。第4・5章では、律令国家形成期の思想・信仰を俯瞰した上で、信仰面での河川の存在について触れる。第5・7章では、海・川の物資運搬力に着目し、石造物や陶磁器を素材に信仰や物流の実像に迫る。第6・7章では、山城における水源や流路について発掘調査成果を基に検討する。



特集展示「筑紫の神と仏」図録の表紙

第1章

川の歴史学—認識・調査・記録—

朝岡 俊也・小嶋 篤・中島 圭

1. 問題提起

日本列島の主要都市の多くは、河川作用（浸食・運搬・堆積）で形成された沖積平野に立地している。河川作用は自然営為そのものであるが、現代日本においてはコンクリート護岸を多用した流路の固定により、その機能の範囲を人為的に制限している。これにより、氾濫原が広域になる下流域でも、水面の際にまで居住地や耕作地を広げることが可能になった。利水・治水技術の発展と平地の拡大は、生産力・運搬力を飛躍的に増幅させ、都市基盤を支えている¹⁾。しかし、近年頻発する豪雨災害、さらには地震による津波等の被害により、これまでの治山・治水事業や都市計画は大幅な見直しを迫られている。

日本の河川景観の大半は、自然営為の河川作用と連綿と続く人々の営みが複合した姿である。考古学が主な研究対象とする人為的痕跡は、一つの河川に幾重にも累積されており、コンクリート護岸の間や内側、川岸や川底、旧流路として土中で眠っている。あるいは、過去の水利施設や漁労仕掛けの一部は人知れず、その機能を維持し続けている。これらの人為的痕跡が歴史を構成する重要な要素であることは、多言を要さない。本研究は、治山・治水事業や都市計画の転換期とも言える今日において、景観から消え去りゆく歴史資料をいかに認識し、調査し、記録していくのかという現実的問題に対する試みである。

2. 研究動向

(1) 中世以前

世界四大文明が大河川の恵みを受けて成立したとされるように、歴史学では集団形成に川が重要な役割を果たすことは自明のことと理解されてきた。その背景には農業用水の獲得や水運の発達があると考えられ、『漢書地理志』に「百余国」と記される弥生時代の「国」も、水利用を巡る利害調整や軋轢の結果、河川流域の平野部や盆地を一単位として成立するとされる（武末2011等）。

日本考古学からの川へのアプローチは、主に水田経営や、それに関連した「農耕社会」の発展を視野に行われている。川から水を取水する堰（菅原1980・山崎2005・上田2010・小山田2011・朝岡2013等）や水制（山田2009等）などの河川内に築かれる水利施設の研究、川の付け替えを含む水路の研究（能登1990・吉留2004・池淵2015・朝岡2020等）、水田と川・水路の関係から水がかりを考察する研究（大庭2020等）などがある。現代の水路の水がかりを参考に中世以前の水利を検討する手法は、これまで歴史地理学や文献史学の中で主に用いられたが、近年ではこれに考古遺跡の発掘調査成果を加え考察する論考も増えている（朝岡2017・池淵2019等）。なお、こうした視点を総合した、弥生時代から古代までの水利の通史的検討は広瀬和雄氏や都出比呂志氏の論考（広瀬1983・都出1989）が代表的である。また、集落や古墳などの遺跡の動態の検討を軸に、水利開発の様相が地域社会の形成に大きな影響を与えることを論ずるものもある（若狭2007等）。

川そのものの変化については、縄文時代から中世までの平野の微地形変動をまとめた高橋学氏の研究があり（高橋2003）、現在の川の姿が決して恒常的なものではなく、気候変動や開発の進展に応じて大きく変化してきたと示されている。そのほか、川に関わる考古学的研究に、漁労施設の研究（大沼2013等）などがある。

(2) 近世以後

近世以後における河川技術関係の研究は、近世の地方書の研究や現代の河川技術・工法への応用の観点から、土木史研究の分野から進められてきた(眞田1932、山本1996等)。近年では近世の利水・治水遺構から水利技術やシステムを河川工学的な視線から研究・検証するものがある(知野他1994、坂本他1994、吉村他2009等)。

考古学的な側面からの検討は近世の河川構造物の調査事例として宇治川の太閤堤跡の調査例(永野2010、荒川2013等)や仁淀川の護岸遺構(池澤2013等)、紀ノ川の護岸施設や嘉瀬川の石井樋の調査例等がある。

護岸と片枠や胴木などの他その内部構造、水制等の付帯構造物の検討例(畑2018、北垣2010、斎藤2010・2013等)もあり、近世の地方書に留まらない実際の遺構を検討する研究が進んできている。それらと並行して、利水や治水に関わる遺構や歴史的背景の全容、その機能を把握するための総合調査も着手され、遠賀川から取水する堀川(水巻町2017)や白川から取水する馬場楠井手の鼻ぐり(菊陽町2016)等が報告される。近世には河川技術を応用した干拓事業も盛んに行われ、干拓堤防に関する調査例もある。

(3) 現状と課題

川に関わる研究の現状を鑑みるに、これまでの文化財行政での記録調査は、基本的に埋蔵文化財に対して進められてきた。川に関わる文化財の調査は、堰や石橋等の一部の水利施設・建築物や民俗行事・文書を対象とするのみで、多くの人為的痕跡が記録のないまま消失し続けている。これは川に遺された人為的痕跡に対する体系的認識・整理が、文化財的視点・歴史資料的視点で醸成されていないことが大きな要因である。研究蓄積の厚い河川絵図等の文献史学、実体験の記録に基づく民俗学、治水に関わる土木工学等の成果とともに、考古学の調査成果を加えた「歴史学」という複合的視野が必要である。

以上の課題を見据え、本研究では、人類による河川利用形態を類型化した上で、各類型での人為的痕跡に対する認識を構築する。そして、本認識を基に福岡県朝倉市小石原川を実験の対象とした調査・記録を試みる。

3. 川の認識—河川利用の類型と痕跡—

本節では、実際に川を調査する際にどのような視点で、何に着目すべきかを認識するため、人々がどのような形で川を利用してきたか、また人々がどのように川へ働きかけてきたかを類型化し、それぞれの利用方法で残りうる人為的痕跡を把握する。なお、それぞれの痕跡は利用方法の類型を横断する例もある。またここでは川に残される痕跡の代表例を取り上げた。

(1) 利水

① 農業用水

川の水の利用で、最も一般的なのは、水田を中心とする農地への導水である。その構造を時間軸で単純化すると「水量・水質の安定的確保→川から水路への取水→水路から田への導水→田から水路への排水→水路から川への排水」という工程で把握できる。これらに伴う人為的痕跡は主に「(貯水池・水制)→取水施設・取水口→給水路→水田→排水路」が残る。

| 類型 | 関連する施設・キーワード |
|-----------|-------------------------|
| (1) 利水 | ① 農業用水 水路・堰・水口・溜池・水車 |
| | ② 生活用水 水路・調理・洗濯・厠 |
| | ③ 工業用水 水車(タービン)・貯木・鉄穴流し |
| (2) 治水 | ① 水害防止 堤防・護岸・水制・溜池・樹林帯 |
| | ② 排水 干拓・防潮堤・クリーク・水車・龍骨車 |
| (3) 交通・運搬 | 運河・舟道(水制)・港(船着き場)・橋 |
| (4) 漁労 | 築(梁)・舢・網・釣り |
| (5) 軍事 | 戦場・境界・渡河地点・濠・水攻め |
| (6) 信仰 | ① 信仰対象 社・水神(龍神)・河童 |
| | ② 祭場 流し場・導水施設 |
| | ③ 刑場・葬地 河原 |
| (7) 娯楽 | 庭園・絵画・釣り・川床・川下り |

※多くの場合、ひとつの施設が複数の利用目的をもつ。



佐賀県石井樋に導水するための大井手堰 (井堰)



裂田溝 (古墳時代の水路を踏襲する)



白水川 (弥生時代の水路を踏襲する)



春日市白水大池 (近世に大規模改修)



白水大池の余水吐け



図1 利水 (農業用水)

水田稲作には給水も重要だが、生育期には水を落とすことで稲の成長を促すため、排水も同様に重要である。

取水施設として最も一般的なのは堰である。河川から取水するための堰を特に井堰・取水堰等と呼ぶ²⁾。堰は流路に直交して築くことで上流側の水位を上げ、水口や水門から水路へ導水するための水嵩を確保する。古い時代には木組みや盛土によるものが一般的だったが、中世末以降に石組みによるものが増加し、近代以降はコンクリート造りで金属製の昇降板がつくものに置き換わっていった。近年のものでは伸縮性のあるゴムなど素材でできた大型の管を河川に直交して配置し、その中に取水の時だけ空気や水を入れ膨らませ、水位を上げるゴム引き布製起伏堰もある。東南アジアの民族例では、タムノップと呼ばれる河川をせき止めるように盛土し、水を意図的に溢れさせ周囲の水田に導水する非越流型の非常設的な堰の形態が存在し（福井・星川2009）、より初期の開発の様相を持つ堰の構造を示すものとして注目できる。常設的な施設として堰を設置する場合は、越流する水による下流側の洗堀を防ぐための強固な構造が必要で、下流側で川底への貼り石や木組みなどによる護床工を施す場合もある。

なお、有明海沿岸地域などの海に近い土地では、満潮に押されて逆流したアオと呼ばれる淡水を、水門からクリークと呼ばれる水路（後述）に導水し、水田に利用するアオ取水（潮汐灌漑）も行われた。

水路から水路への導水や、水路から水田への導水には、堰に加え、水車や竜骨車（近代以降はポンプも）などの揚水機も用いられた。なお、小水路からの取水であれば、より簡易な施設として板を設置して堰の代わりとしたり、一時的に土で水路を塞いで水位を確保する場合もあり、民族例では大型の柄杓を用いた人力での取水もある。必ずしも痕跡として残らない点には注意すべきだろう。

川から農業用水を得るための施設で、最も残りやすいのは水路である。給水路は河川からの取水後、より高いところを通すことで、水を供給できる農地の面積が広がる。水は低いところを流れるから、周辺で最も低いところを流れていけば自然の河川というのが基本原則なので、現在の河川の中で元々は人工的に付け替えられた人工流路であるものを見分ける際の目安となる（吉留2004・池淵2015・朝岡2020等）。なお、地形的に水利の要衝となり、水路を通しやすい場所はどの時代も共通し、また大変な工事であるほど、水路を含む既存の水利施設を利用して踏襲する。現代の水利も古い水利を踏襲することが多々あり、過去の水利の検討には現代の水がかりや発掘調査で検出された給排水路の分析が有効である（朝岡2017）。

河川をせき止めるようにして水を溜める溜池は、堤の盛土が痕跡として残る場合がある。7世紀前半に築造された現役の溜池として有名な大阪府狭山池の発掘調査では、古い溜池の堤に盛土を嵩増しして繰り返し改修した様相が明らかにされている。また溜池の堤の隅には、溜池の水が溜まりすぎて堤を越流することを防ぐため、余分な水を逃がすための溝である余水吐けが必ず設けられる。

農地への導水に適さない水の水質・水温を改善するための施設が設けられる事例もある。秋田県の玉川温泉の源泉は極めて強い酸性のため「玉川毒水」と呼ばれ、玉川流域に農業被害を与えていた。この水質を改善するため、江戸時代には地表に降った雨が噴出する酸性水と混じらないよう水路を掘削したり沈殿池を作ったりした。昭和初期には井戸を掘って毒水を注入し、地下で粘土や岩石類と接触させることで毒を中和させ、川に戻すという方法も取られている。また寒冷地や湧水利用地では、農地に導水するには冷たすぎる水を温めるための「ぬるめ」と呼ばれる施設を設けることがある。形態は様々で、温め用の貯水施設や水田区画を設けるほか、幅広く浅い水路を採用したり、水路をわざと蛇行させて距離を長くする方法がある。また井堰には、水路に土砂が流れ込むのを防ぐため、水を回り込ませて土砂を沈殿させたり、上澄みの綺麗な水のみを取水するための工夫がみられ、そうした工夫は佐賀県石井樋など近世以降の事例に顕著にみられる。

なお、池や水路の脇には、その開発の偉業をたたえる石碑が設置されることも多い。ただし、これは開発者がその流域に対する支配を強める政治的意図をもって設置する場合もあり、注意を要する。前述した狭山池では堤が壊れて水が流れていた状態を中世に改修して機能を復活させたが、その背景にも開

発の主導した池の管理者が流域に対する権利を強める意図があったと考えられる。また重源への狭山池改修要請と周辺農民の改修への参加は、支配を民衆救済の中に位置づけ正当化する荘園領主の宗教政策の一環であった（小山田2014）。

②生活用水

川の水は炊事・飲用や洗濯、トイレなどにも利用される。その痕跡は農業用水同様に水路や取水施設などとして残るが、純粋な農業用水路との違いは集落との位置関係から把握できる。実際、生活用水路は農業用水路としての機能も併せ持つ場合が多いが、基本的には、集落→水田というルートをとると考えられる。ラオスのドンクワーイ村の民族例では、集落の生活排水や家畜の糞尿を放置し、雨期になると集落内に水が流れ、その水が田へ流れ込む。安定して高収量が得られる水田は集落の傍にあり、集落からの流出水による施肥効果が見られるという（竹中・富岡2008）。なお、特に炊事に関しては井戸水を用いることもある。弥生時代の九州北部で井戸が急増する背景には、人々の農業開発や工業利用による川の水質汚染があるとの見解もあり（久住・久住2008）、井戸水と川の水の利用頻度の差は、何らかの社会的背景から生ずるものである。

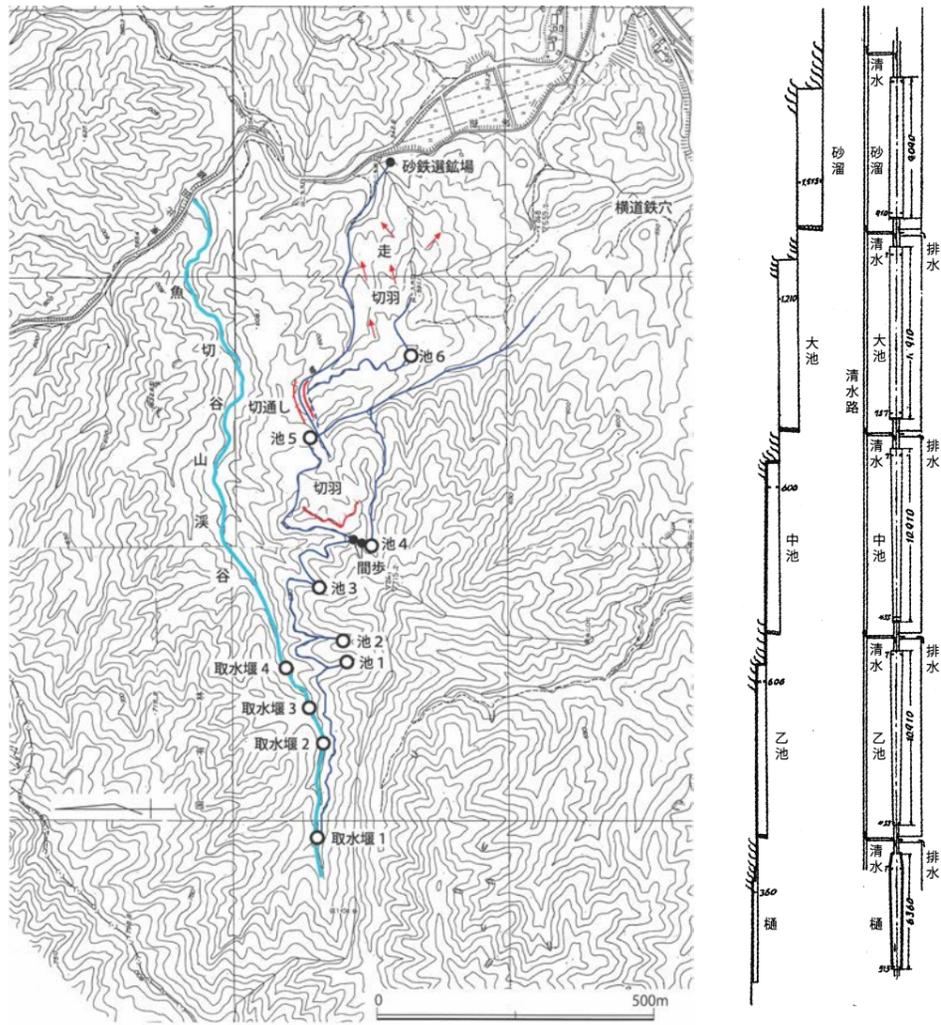
河川は水流を利用した動力源としても利用されており、近世以前の農村景観に組み込まれた水車小屋が最たるものである。揚水機としての水車は前項で述べたが、精米精麦や製粉、油の生産などの動力にも用いられた。水車には下部を流れる水の力を利用するものと、上から落ちる水の力を利用するものがある。

③工業用水

水流の動力変換を高めた水車は、近世以降には工業動力・発電装置としても利用された。日本列島における営業目的の水力発電（ペルトン式水車）は、明治24年（1891）に琵琶湖疎水第1疎水に設けられた蹴上発電所が初現である。水資源が豊富な日本列島では、ダム建設を伴う大規模な水力発電所が各地に築かれ、今日も一般電気事業用電力の一翼を担っている。工場動力・発電装置の構造を時間軸で単純化すると、「水量の安定確保→水流の強化→動力変換→排水」という工程で把握できる。これらに伴う人為的痕跡としては、「河川本流・貯水施設と取水口→傾斜がある水路→水車・タービン→排水路」となる。

上記のような工場動力・発電では、水流を利用する地点（動力に変換する地点（水車・タービン））は局所的だが、日本列島では広範囲で水流を利用する工業用水が独自の発展してきた。中国山地で営まれてきた「たたら製鉄」の鉄穴流しである。鉄穴流しとは、製鉄の始発原料となる砂鉄（山砂鉄）を母岩から直接採取する採鉱方法である。鉄穴流しの構造を時間軸で単純化すると、「水量の安定確保→採掘地点への導水→採掘地点→土砂の運搬→砂鉄の選鉱→排水」という工程で把握できる。これらに伴う人為的痕跡は、「取水堰・取水口・貯水池→水路（井手・間歩・切通し）→採掘場（切羽・母岩）→水路（走）→砂鉄選鉱場（砂溜・池・樋・清水路）→排水路」となる。このうち水流の動力・運搬利用地点となるのは、採掘場から砂鉄選鉱場をつなぐ水路（走）であり、母岩から掘り崩した土砂を走で押し流し、砂鉄選鉱場にいたるまでの水流を活かして土砂と砂鉄の分離を促した。この分離作用を促進するため、走となる水路の傾斜角度が大きく、かつ分離距離を確保できる場所に砂鉄選鉱場を配した。走の総距離はおおよそ短くて0.5km、長くて4kmに達する。また、鉄穴流しによる山間部の地形改変、土砂排水の規模は大きく、下流域の都市空間・港湾を含めた広域に痕跡を遺した。

水流（動力）利用以外の工業用水としては、貯木施設が挙げられる。木材の収縮による亀裂を防ぐため、建材等に利用する伐採木材は乾燥工程を挟む必要がある。水資源が豊富な日本列島では、伐採木材の運搬とも接続する水中貯木が発達した。水中に木材を浸けることで、心材と辺材の乾燥差の抑制や殺虫効果、さらに菌作用による細胞崩壊で乾燥期間自体を短くする効果が得られる。貯木施設の人為的痕跡としては、「搬出・搬入水路↔貯木空間・杭」がある。自然の帯水域を利用した縄文時代以降の小貯木空間では、井桁状に木材を組んで区画施設をつくる事例が確認できる。港湾施設を大規模に整備し



砥波上鉄穴全体図(左)と砂鉄選鉱場(右)(山陰たたら製鉄研究会2017)

図2 利水(工業用水)

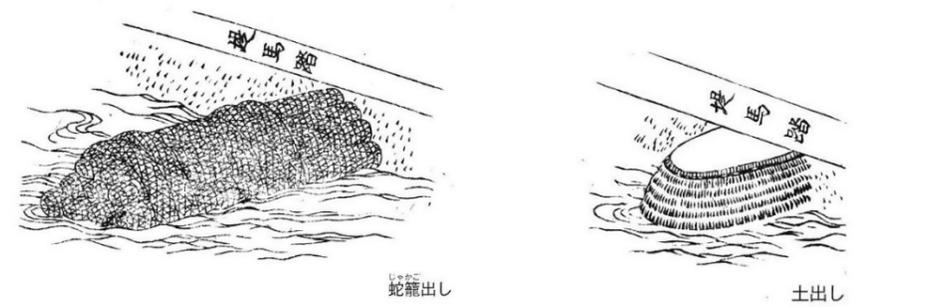
た近世以降の大貯木空間は、都市設計の中で設定する。貯木場内部では、杭・縄を利用して区画をつくり、適宜、水中貯木を行う。

(2) 治水

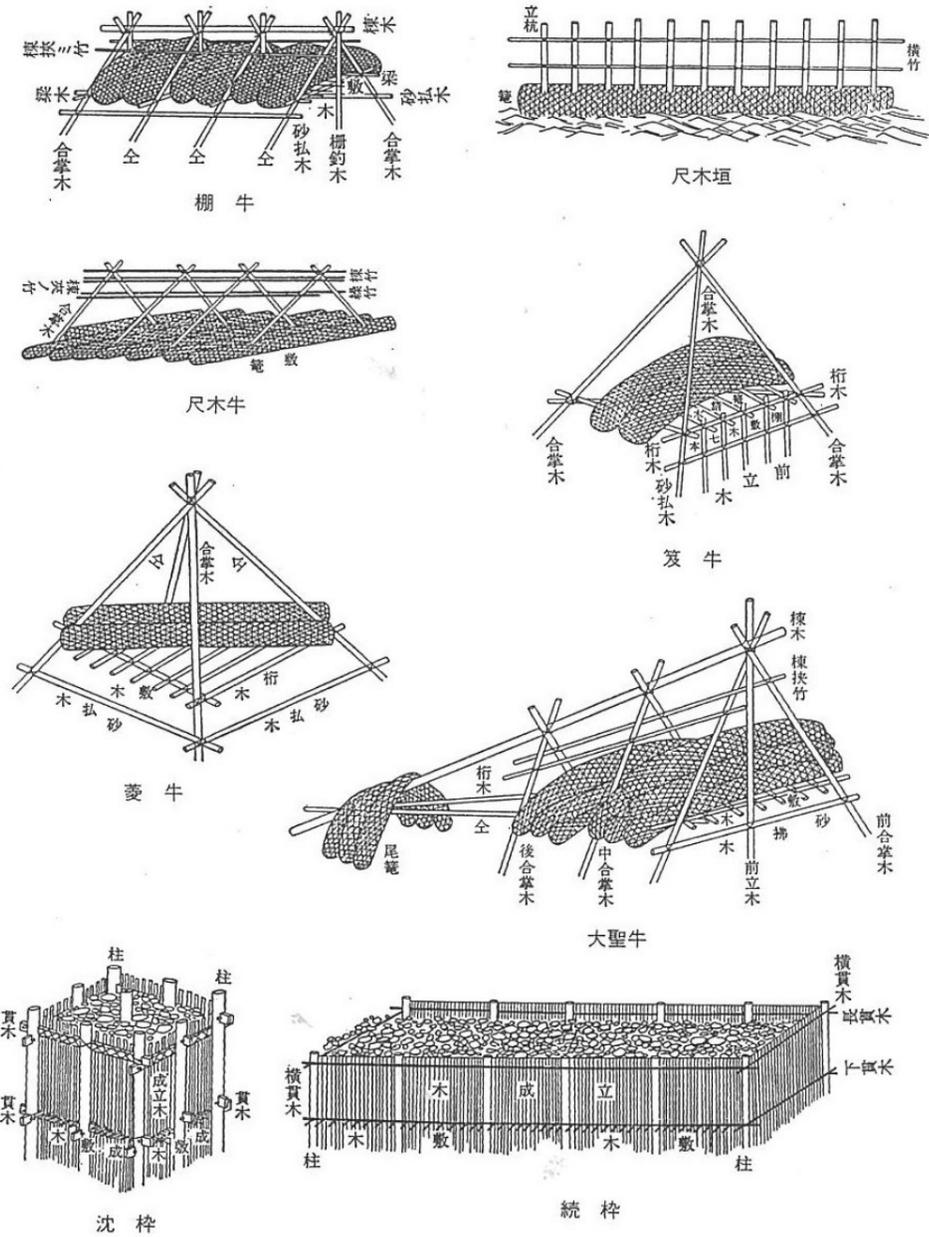
① 水害防止

流路を固定し、水害を防ぐ治水事業の痕跡も河川本流やその流域に残る。木組みや石積みで川岸の崩壊を防ぐ護岸や、井堰などの施設および川の屈曲点などへぶつかる水流をコントロールし、流水を河川の中央部に追いやる水制が代表的で、堰同様に石材を用いた例が中世末以降増加する(畑2018)。

水制には川の岸から張り出す「出し類」(杭出し・土出し・石出し・籠出し等)や、木材を三角錐形等に組んで蛇籠で固定した「牛類」、木材を直方体などに組んで中に礫を充填した「枠類」がある。このうち杭出し水制は「透過水制」の典型で、水制背後に土砂を堆積させ、その土砂によって川岸や堤防を守るものである(山田編2020)。近世には一国一城令以後、元々城づくりの技術者だった人々が河川工事に携わることも多くなるようで、城づくりと河川工事に技術の共通性があることも指摘される。



『改正地方大成』の出し類水制(山田編2020より)



『地方凡例録』の牛類・枠類(畑2018より)

図3 治水

増水時の溢水を防ぐために川岸に沿って盛土された堤防も痕跡として残りやすい。大阪府を流れる現在の大和川は1704年に付け替えられたものだが、発掘調査で現在の堤防の下から付け替え当時の盛土が確認されている。このように、過去に盛土された堤防の上に嵩増しされて現在の河川の堤防が機能する場合もあれば、流路が変わって堤防だけが残る場合もある。濃尾平野などの一部の地域では、河川氾濫原の中に集落や耕地の周囲を堤防で囲んだ輪中が発達した。

堤防には意図的に切れ目をつくる霞堤防と呼ばれる形態のものがある。増水時に上流側でわざと氾濫させ、堤外に貯水することで下流側での急激な水量の上昇を防ぐ³⁾。似たような構造として佐賀県石井樋では二重堤防の内側の堤防の一部を低くして（野越）、増水時に意図的にここから溢れさせ、外側の堤防との間を一時的に水を溜めおき洪水の被害を減少させる遊水地とする。遊水地には竹林を整備し、水流の勢いを弱める工夫を施した。また、堰の中には水口を伴わず、水位調整による水流の調整を目的とするものがあるし、堺市佐網池や伊丹市昆陽池など、利水だけでなく下流側の洪水被害軽減を目的とした溜池は古代から築造された（小山田1999）。近代以降は土砂災害を防止する砂防ダムも築造された。

近世淀川では、土砂流入と川床上昇を防ぐため、周辺の山間部で木の根を掘ることを禁じ、植林を推奨することもあった（村田2009）。

②排水

治水における排水とは、湿地環境を改善し、土地利用の安定を図るものを指す。古い時代の代表的な例は古墳時代に掘削されたという難波堀江である。河内平野には古来、河内湖と呼ばれる潟湖があり、北東から淀川、南東から大和川などが流れこみ、洪水が頻発した。そこで大和川の水を直接海へ排水したものとされる。

京都盆地での平安京の造営にあたっては、その範囲に複数の河川の氾濫原を含むため、その水の処理が問題となった。そのため、排水や物資の運搬を目的とする堀川が右京と左京それぞれに掘削された。京内に降った雨水は、小路の溝を通して大路の溝や東西の堀川に集められ、排水されたとされる（神吉他1993）。また造営に先立ち、鴨川の流路を東側の京外に付け替えたとの説もある。

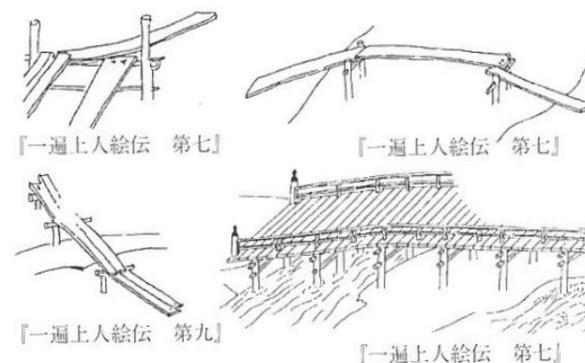
有明海・瀬戸内海・伊勢湾などの沿岸部の低地では、海岸に沿って築造され、耕地への海水の流入を防ぐ防潮堤と、満潮時は閉じて海水の侵入を防ぎ、干潮時は開けて陸側の水を排水する水門を用い、干潟を耕地化する開発が中世から本格化した（小山田2013）。防潮堤は二重・三重となることがあり、段階的に少しずつ開発が進められる場合も存在した。こうした沿岸地域では佐賀平野に代表されるクリークと呼ばれる水路網も形成された。クリークは潮汐により生じた水の通り道等を利用して整備されたもので、用水路・排水路・溜池としての機能を併せ持つ。用水は個々の農家で個別に汲み上げられ、独特の水利用システムを持っていたという。

(3) 交通・運搬

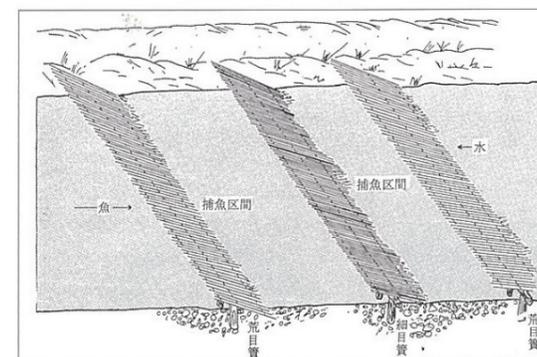
川に残る人々の交通の痕跡として、まず橋がある。672年壬申の乱の決戦の舞台となった瀬田唐橋は、発掘調査で橋脚の基礎が見つかっており、川底に丸太を並べた上に角材を六角形に組み、その上に橋脚を建て上げる強固な構造が明らかにされている。対して簡易な橋の例は中近世の絵画資料等をみると明らかで、並列する2列の杭を打ち込み、その上に木材を掛ける。近世以降はアーチ橋などの石橋、コンクリート造りの橋も築造された。また橋を架けることが困難な場所や、橋を架けることが許されなかった場所では渡し舟が行われ、乗り降りや舟の停泊に使う渡し場が整備された。川へ突き出した木造や石積みの中には舟を留め置くためのものもあるだろう。

人々の交通や物資の運搬は、より古い時代になるほど水運が重要だった。前述した水制の中には設置することで河川の一部で水流の幅を狭め、舟が上下流を行き来するのに必要な流量（水深）を確保するものもあった。

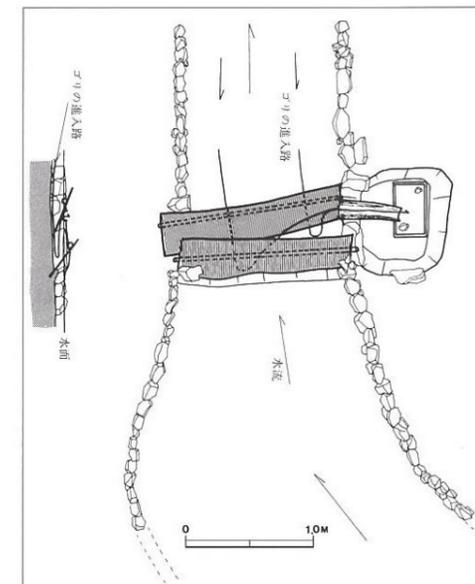
物資の運搬について特徴的な例として木材の流送がある。山林で伐採した木材を河川の上流から下流



絵巻物に描かれた橋（松村2005より）

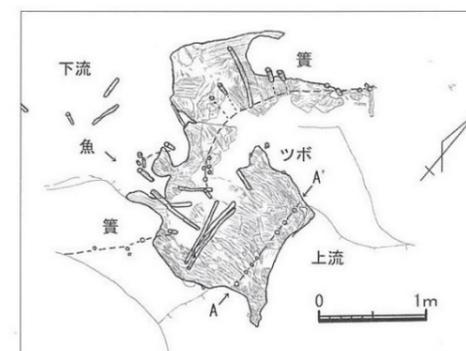


斗西遺跡の古墳時代のノボリヤナ復元模式図（大沼・藤崎編2013より）



ゴリス（大津市志賀町和邇川）
川を遡上するヨシノボリを捕るための小型の築。遡上してきたゴリは、図に示した2枚の篋の間に閉じ込められ、ウロウロしているうちに横に仕掛けられた箱に落ちてしまう。

ノボリヤナの例（大沼・藤崎編2013より）



古高遺跡・経田遺跡の古墳時代の川エリ（大沼・藤崎編2013より）



関津遺跡の中世のノボリヤナ（大沼・藤崎編2013より）

図4 交通・運搬、漁労

へ流して運ぶもので、木材を一本ずつ流下させる管流しという方法と、筏を組んで人が乗り、棹や櫂でコントロールしながら下る筏流しという方法があった。絵図などで中世に遡ることは確認できる。近代に陸運が発達すると、橋への影響などの要因から姿を消していった。なお、流量が少ない上流側の沢や小河川では、木材で鉄砲堰と呼ばれる小型のダムを作り水を溜め、一気に流すことで木材を下流に押し流す鉄砲流しという方法も取られた。

河岸や海岸沿いには輸送する物資や舟を管理・備蓄するための港が整備される。壱岐市原の辻遺跡では、弥生時代の河川に張り出す2列の突堤状石積みが見つかり、発掘された日本最古の港遺構である。また、川同士や川と海を結び、舟の行き来を可能とするための水路である運河が整備される。江戸時代初期に掘削された京都市の高瀬川が代表的で、その名称は近世以降に全国に普及した船底が浅く広い運搬用の川舟である高瀬舟に由来する。高瀬川には物資の上げ下ろしや舟が方向転換するための舟入が設けられ、また舟を人力で陸上運搬するための曳舟道も整備された。また赤レンガ倉庫が有名な小樽市の小樽運河は、荷揚げの効率化を目的として海面を埋め立てて整備されたとされる。福岡市比恵遺跡群で検出された弥生時代の運河でも、脇に舟を引き込むための舟入を設け、その周囲に倉庫群が広がる例があり、時代を通して港と運河、そして倉庫は結びつきが強い。

(4) 漁労

川での漁労活動の結果、痕跡が残るものに漁獲用の罟である築や魴がある。築は落差のある川の一部に簀を設置するなどして、水の流れとともに下ってくる魚を捕るクダリヤナと、障害物を設け、これを飛び越えたところに柵網を設置するなどして、川を遡上してくる魚を捕るノボリヤナに分かれる。ノボリヤナには下流側に膨らむアーチ状に川を遮断して水流を兩岸付近に集め、そこを遡上してくる魚を脇の漁獲部（カトリ）に落とすカトリヤナと呼ばれるものもある。また、魴は遡上もしくは遊泳する魚をカエリの付いた漁具の中に閉じ込める定置陥罟漁具である。これらは滋賀県の琵琶湖周辺などで古墳時代～中世の発掘調査例もある（大沼・藤崎編2013）。

福岡市を流れる室見川のシロウオ漁では、準備段階として築の少し上流の川底に、魚が産卵しやすいように小石を集めるなど、痕跡が集石として残る場合もある。また、円形の杭列の内側に大量の柴を沈め、寄ってくる魚を投網などで捕る漬柴漁という漁法があり（大沼・藤崎編2013）、発掘調査で流路内に検出される円形杭列の一部は、こうした漁獲施設かもしれない。

また、魚の養殖は近世には行われていた。海の入江を利用して整備された福岡城の「大濠」と海を結ぶ福岡市の黒門川では、江戸時代に一部を築で区画して生け簀とし、「築所」と呼ばれる藩営の養殖所が設置された。築所の脇には小さな建物があり、ここで競りが行われた可能性もあるという（宮崎編2005）。

なお、遺構として痕跡が残るものではないが、発掘調査で出土する石錘（重り）は、川や海、また使用する網や漁獲対象などによって使い分けられるため、重量や形態の分析から、周辺でどのような漁に重点が置かれたかを検討することができる。

(5) 軍事

川は人類の集団戦闘でも利用されてきた。軍事史における最古の河川利用は、「戦場」としての利用であろう。陸地を隔てる大河川は集団間の地理的境界となりやすく、水・水産資源の管理とも絡みながら、現在でも紛争が絶えない場所である。このような社会的要因に加え、『日本書紀』記載の集団戦闘を通覧すると、河川が戦場となる直接要因が見えてくる。その要因は、①交通の要所であること、②進軍速度が遅くなること、③進軍路（渡河地点）が限定されることが挙げられ、迎撃地点としての利点を多く有するためと考えられる（小嶋2016 a b）。また、川辺や港での陣営・兵の集結記事も散見され、④集結・屯営が容易な平地が確保できること、⑤守衛に適していること、⑥飲料水が確保できること等の要因も



水城跡

画面右が大宰府側、画面左が博多湾側である。画面中央の高速道路が横断する部分が欠堤部であり、同箇所御笠川が北流する。御笠川の氾濫により、水城中央の土塁端部は浸食を受けるものの、土塁の大部分は今日まで残されている。つまり、同地点における御笠川の流路は664年より二日市地帯の谷底にほぼ固定されていることは確実である。このため、博多湾側に設けられた外濠への導水は、御笠川からの取水では難しい条件にあることがうかがえる。



水城模型（九州国立博物館所蔵）

土塁直下には幾条もの導水路が設けられている。本導水路に接続する水路や水源、外濠を滞水させるための区画施設等の確認が今後の調査に期待される。

図5 軍事

存在する。少なくとも、『日本書紀』が編纂された7世紀後半には、河川や港に対する戦略・戦術面での合理的思考が存在したと判断できる。戦場としての河川利用は、人為痕跡の特定が難しい。実証的研究のためには、戦闘時における流路や交通路の特定等の古環境復元と、文献史料・絵画資料との相互検証が求められる。

河川の改変を伴うより積極的な軍事利用では、防衛のための「濠」が挙げられる。日本列島においては環溝集落がその初現的事例である。ただし、河川から水を引き込む環溝だけではなく、空堀も内包する。その後、区画施設としての溝は日本列島に定着し、環溝集落の衰退以後も墳墓の周溝や豪族居館に取り込まれて存続する。明確な軍事利用としての濠は、664年に築造された水城が挙げられる。その由来のとおり、築造当時の前面（博多湾側）には水を湛えた濠が築かれていた。濠への通水には土塁下に埋設された導水路を用いているが、水源（河川・貯水池）や取水路、滞水用区画施設等の細部は未特定である。7世紀後半に築造された水城をはじめとする交通路遮断施設（土塁・濠）は、日本列島での伝統的戦術（評造軍の戦術）と組み合わせるものではあるが、施行技術自体は朝鮮半島からの技術導入に依るところが大きい（小嶋2021）。その後、濠は官衙・客館等の区画施設として存続し、古代末以降は居館・城郭の濠として、より軍事的色彩を帯びた形で日本列島内での独自の展開を見せる。その最終形態では、城郭・港・河川運搬とも組み合わせることで都市基盤に取り込まれた。中近世につくられた濠を取り込んだ都市基盤は、今日の都市にも名残を留める。

上記の守衛のための河川利用以外にも、攻撃のための河川利用も存在する。大規模なものは、備中高松城攻めや忍城攻めに用いられた「水攻め用の堤」である。

濠は掘削面積が広く、掘削深度も深いため、遺構残存率が高い。このため、環溝集落から近世城郭まで通時的に研究対象となっている。掘削・埋没過程等の復元、時期特定は考古学が得意とする分野であり、実証的な研究素材を提供できる。

（6）信仰

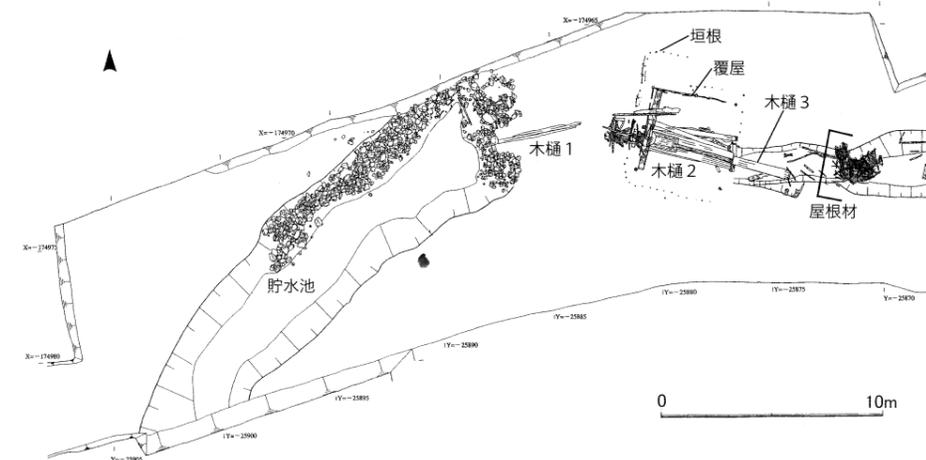
①信仰対象

人々に恵みを与え、ときには猛威を振るう水は、古くから信仰の対象にもなった。特に龍神や蛇神は水とのかかわりが深く、そのルーツは弥生時代まで遡りうる（本書第5部第2章参照）。常陸国風土記（行方条）には、継体天皇の時代に矢筈氏麻多智が郡家の西の谷の葦原を開墾したときに、蛇身をもつ夜刀神がそれを妨害したため、麻多智は夜刀神を山口に追い上げ、神と人との境界を定め、社を建てて神を祀ったと記されている。その後、孝徳天皇の時代に茨城国造壬生連麿がその谷を占拠して池の堤を築いた時にも夜刀神が群れて出現した。この説話は湧水のある谷が初期の開発の拠点となったことや、その開発に対抗する水神・地霊を鎮めるために社を建立する場合があったと示す（松村1997）。水神は、渇水や洪水を防ぎ、水場を正常に保つため、現代では川や湧水点で社や石塔に祀られている。特に分水地点や過去の決壊地点などに多い。なお、井堰や溜池を祀る神社は少なくとも平安時代には存在したらしい（木下2014）。

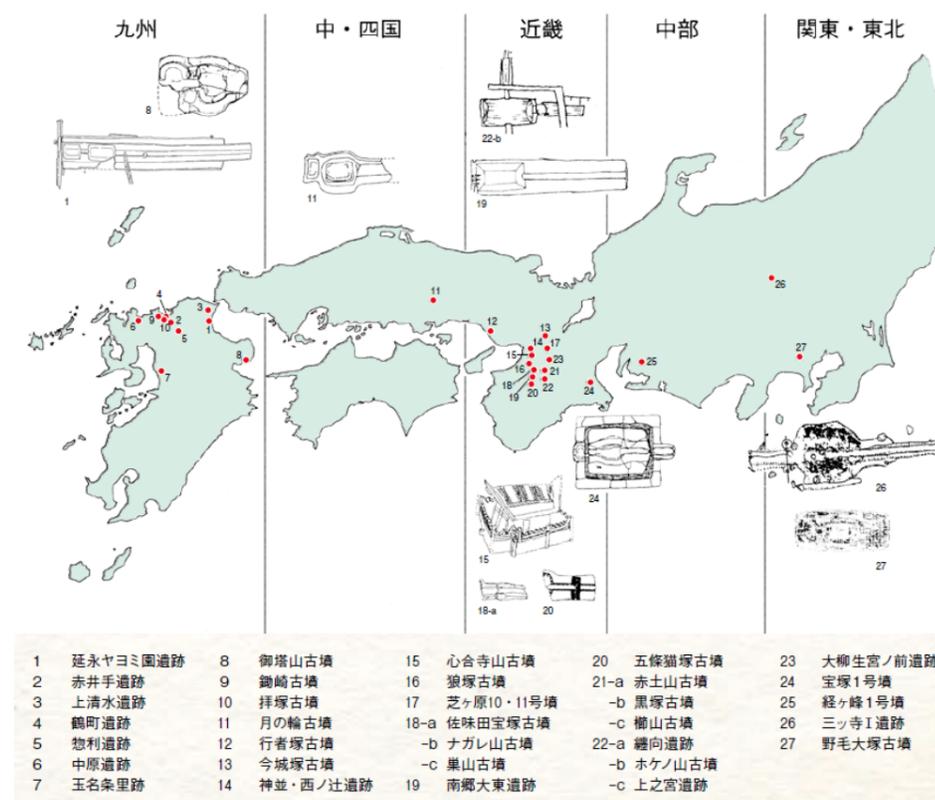
水辺の妖怪である河童は近世には登場する。人間や牛馬を水に引きこむとも言われるが、「河童の体の一部」が水神として祀られることもある。東京の合羽橋には、湿地帯の治水工事を河童が助けたとの伝説もある。

②祭場

陸地と大海をつなぎ流れ続ける川は、境界認識・他界観とも相まって、各宗教における構成要素にもなっている。今日の日本で見られる宗教行為としては、精霊流しの流し場が代表格であり、ここでの川は現世と他界をつなぐ境界であるとともに、その水流は精霊流しそのものを構成している。このような多要素を内包する河川の祭場利用は、通時的に見られ、流路の発掘調査では古代の人面墨書土器や人形・斎串等の祭具が代表的な痕跡である。当時の医療行為にもなっていた、これらの祭具もまた、川に流す・



南郷大東遺跡の導水施設跡



導水施設関連遺跡の分布
（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 2005 を一部改変）

図6 信仰（祭場）

沈めるという行為を前提とする。いわゆる「流し場」に伴う人為的痕跡としては、その多くで遺構認識が難しく、精霊船や人面墨書土器等の祭具の出土状況や使用痕跡が主要検討対象となる。

祭場として明確な遺構痕跡が確認できるものが、古墳時代に利用された導水施設である。導水施設の中心は「清水」を汲み上げるための木樋で、単なる導水管ではなく、上流から流れてきた不純物を沈殿する槽を彫り込む。また、木樋の周囲には砂利を敷き、周囲を柵で囲む等の祭場整備もなされた。その様は古墳にならべられた導水施設形埴輪でも忠実に表現されている。通常、埴輪は墳丘表飾として表面情報に特化しているが、導水施設形埴輪では、柵形埴輪で遮蔽した上で内部に覆屋をつくり、さらにその内部に木樋や井戸を設置している。古墳時代の豪族にとって、本祭場（導水施設）がいかに重要であったかを物語っている。導水施設は水路・導水管を通じて小河川から引き込む事例や、湧水地点に近い場所に設置する事例が確認できる。

③刑場・葬地

人々の生活圏内で居住空間の外縁に位置する川は、為政者による見せしめとして「刑場」にも利用されてきた歴史がある。三条河原・六条河原がその代表格であり、罪人の処刑を強調するために、他の刑場から首級を運搬して晒した場合もあった。この他、古代～中世にかけては、山野とともに河原を葬地として利用していた。



図7 娯楽

(7) 娯楽

人類にとって川は実利を得る場であるとともに、娯楽の対象・場所としても利用し続けている。娯楽の多様性は人類の生物的特質であり、川の娯楽利用もまた際限がない。ここでは歴史資料として把握できる娯楽利用のいくつかを取り上げる。

大規模な人為的痕跡を残す川の娯楽利用では庭園造営があり、世界各地で見られる。日本列島では『日本書紀』の推古紀20年（612）に、渡来系工人である路子工による庭園造作の記載が最古の文字史料となる。また、庭園とは異なるが、大型前方後円墳（築山古墳等）に見られる出島状遺構や連結円形石積みは、水鳥形埴輪とも組み合わせることで「苑池」のような景観を形成している。これらの前方後円墳付随遺構・遺物は多くの要素を複合するが、「鳥養部」・「養鳥人」等の存在から想定できる実在の宮付随苑池の姿も反映している可能性がある。発掘調査による確実な宮付随の苑池には7世紀後半の飛鳥京跡苑池があり、石組みの人工池・溝・石敷きを確認できる。また、石神遺跡から出土した通称「須弥山石」・「石人」像は噴水構造をもち、日本列島外からの庭園造営技術の体系的な導入がうかがえる⁴⁾。

庭園造営は自然環境を人為的に再構成し、造営者の理想郷を擬似的に再現する行為であり、川や水路も構成要素として組み込まれる場合が多い。川や水路は庭園造営（三次元表現）だけでなく、絵画（二次元表現）の被写体にも頻繁に登場する。中国王朝を中心に東アジアで盛んに描かれた山水画はその代表格である。山水画に頻繁に登場する漁師は、「社会的束縛からの解脱者」という象徴となっており、生業としての「釣り」ではない娯楽要素も内包する。

実利を兼ねた川の娯楽利用では、避暑地としての利用も代表格である。人為痕跡を残すものとして、日本列島では「川床（納涼床）」が見られる。川の涼気とともに眺めを楽しむ夏の風物詩として、鴨川・貴船の川床が著名である。同じく川の景観・水流を楽しむものとしては、「川下り」等もある。

4. 川の調査と記録—福岡県朝倉市小石原川の人為痕跡—

(1) 筑後川中流域の中河川

川は人々の生活に密接するため、治水や利水を目的に積極的に手を加えられてきた。筑後川水系で言えば、暴れ川である筑後川を治めることは治水の要であり、長い連続堤防で集落や農地を守り、近世の堰も形を変えながら活躍している。一方で水刳や荒籠、乱杭といった水制工のうち不要なものは撤去され、明治時代以前の遺構は少ない。支流の小河川は手を加えることが容易であるため早くからコンクリート護岸化が進み、近世の遺構でさえ痕跡を認めるのは困難である。朝倉地域では、平成29年九州北部豪雨災害以降、桂川、荷原川、妙見川、新立川、奈良ヶ谷川、北川、寒水川、白木谷川、赤谷川等、ほぼ全域にわたって河川拡幅等の改良復旧が加えられ、こうした事実を拍車をかける。一方で、小石原川や佐田川などの中河川は古くから治水や利水が進められたこともあり、明治時代以前の古い様相を残している箇所がある。ここでは小石原川流域の上流部を例として取り上げ、川の歴史の調査・記録方法の具体例を提示する。なお、小石原川上流を構成する小河川として野鳥川や空谷川、鳴渡川や高内川、甘水川などがある。

(2) 秋月城下と野鳥川

野鳥川は古処山を水源とし、秋月の城下町を通過して女男石付近で小石原川と合流する。そのため、秋月城下町の整備と併せて野鳥川は大幅な改修がなされたと考えられる。現在の野鳥川を観察すると、番所橋や野鳥橋や秋月橋、猿鹿堰、目鏡橋の下流などで同様の石張り確認できる。石は表面が水平になるように配置され、傾斜に沿って階段状になる。こうした空石積み護床工は河川工学の視点からも検証され、洪水時の流速を低減する効果と平常時の流れが射流にならないようにする効果がある（林他2018）。またこの石張りが最も力を発揮しているのは、流れが急な野鳥川の河床が洗堀され、堰や橋脚



図8 福岡県朝倉市小石原川における人為痕跡

が崩落するのを防ぐ効果である。番所橋や猿鹿堰の下流には石張りの小規模な水列状の河床隆起がある。この水列状の河床隆起により日常的に川の流れを受け流し、番所橋下流では城下町へ向かう流れの向きを変え、猿鹿堰下流では目鏡橋の橋台への水流の直撃を防いでいる。目鏡橋は文化7年(1810)に完成した石造アーチ橋で、長崎警護に出向いた際に当地の石橋を見た当時の8代藩主黒田長舒の命令で、長崎から石工を招来し建築したものである。それまで幾度も木製橋が流されたが、石橋完成後は一度も崩落していない。猿鹿堰は野鳥川が生成した小規模な扇状地の頂部にあたり、そこから扇状地に広がる耕作地の用水元となっている。

秋月城下町の中には、野鳥川に限らずの鳴渡川や高内川、秋月城の脇を流れる空谷川等の小河川や水路がある。現在は耕作地となっている旧武家屋敷や町屋の跡地への給水路がとしての性格が主であるが、江戸時代は排水路としての機能が主であったと思われる。こうした小河川や水路にも護岸の石垣や河床の石張りが見られる。

(3) 小石原川左岸の利水

小石原川には多くの堰が存在するが、上流部の例として黒岩堰がある。黒岩堰は石張りの斜め堰で、小石原川の水を取水し、山裾を巡りながら谷川の水を集めつつ、女男石対岸の小規模な耕作地を潤して小石原川へ流れ戻る。

(4) 女男石護岸施設と荒川井手

女男石護岸施設は朝倉市千手字女男石に位置し、小石原川が東から南へと大きく流れを変える屈曲部に築造された河川護岸と河床に置かれた捨石群からなる治水施設である。特に6mを超える二つの巨石は女男石と呼ばれ、この地域の名称の由来となった。この護岸の特徴は、小石原川が秋月から流れてくる野鳥川と合流した後、山に突き当たり流れを直角に変える扇状地頂部に設けられていることから、その水勢を和らげ、河川の流路をコントロールする機能を果たしている点である(島谷2015)。前述の河床に置かれた捨石は径1.5mを超え、護岸の石積みも三重構造になっていると伝えられる(『望春随筆』による)。この護岸施設に突き当たった水流は南に流れを変えるが、それは単に水勢を和らげるだけでなく、流路を河川の東寄りに通すことにより、下流の荒川井手の西側に設けられた取水口を直撃しないよう配慮されたもので、下流の扇状地全体に安定した耕地を実現している利水施設でもある。秋月藩成立時の付け家老として赴任した堀平衛門の普請とされ、江戸時代初期の築造である。また一説には慶長年間に荒川井手取水水系の耕作地の石高が増加することから、黒田直之の頃に井手と共に整備された可能性もある(佐藤2013)。また女男石の下流に設けられた荒川井手は、草場川となり千手～旧三輪町の広大な範囲の田を潤す重要な取水口でもある。現在、荒川井手は女男石頭首工と呼ばれ農業用水のみならず、水道用水として大野城市の乙金浄水場まで送られ、福岡市へと供給されている。

女男石護岸施設は秋月街道の護岸施設でもあり、街道を守る役割も持っていた。街道に面する女男石の河原は切支丹河原とも言われ処刑場とされる時期もあった。また女男石護岸施設の護岸上には八大龍王が祀られる。日照りや雨乞いに際して、必ず祈りを捧げたという。また下流の荒川井手には水神社が建てられ、岡像女神(ミツハノメノカミ)が祀られている。

このように、治水機能だけではなく、水を介した「場」としての空間が、女男石護岸施設の歴史的・文化的背景をより重厚なものとしている。

荒川井手は荒籠井手がなまったものと言われ、そもそもは荒籠を並べて堰としていた。文政6年(1823)に石井手となったが、それは文化8年(1811)の秋月藩内の政変(「織部崩れ」)後に間小四郎らが行った改革の中で「石方郷夫」を新設したことによると思われる。設置にあたり先進地とされる諸国へ視察に行ったが、結局筑後川の普請技術にたどり着き、上座郡の郷夫頭取、田中村の惣次を召し抱え、その技術の伝授と組織化に努めたという。



①番所橋と貼石・水刴

番所橋は秋月城下町の東の入り口である。橋の下流の貼石が水流による河床の浸食を防ぎ、橋の基礎を守る。更に水刴で水流を西に寄せて、城下町へ水流が向くのを防ぐ。

②貼石（野鳥橋下流）

野鳥橋の下流の貼石。河床の洗掘及び橋脚の流失を防ぐ。



⑥女男石護岸施設

女男石護岸施設は近世初頭に築かれた治水施設。石積護岸と河床に置かれた捨石群からなる。川が山に突当り、直角に流れを変える扇状地の頂部に位置し、石積護岸と女男石に代表される捨石群で水流を受け止めて川の流れを緩やかにする。



⑦荒川井手の貼石

荒川井手を支えていた貼石の名残。この井手から取水し、田に水を引くことで石高は増大した。女男石護岸と共に整備されたと思われる。

⑧大園橋付近の貼石

大園橋下流の貼石。堰に伴うものか。



⑨尻切れ土居（霞堤）

小石原川には今も尻切れ土居が見られる。不連続堤で増水時に隙間から水を溢れさせて遊水地とし、洪水の力を減少させる。



⑩ホウキ谷水道

近世に築造されたと考えられる谷止め遺構。



③貼石（秋月橋下流）

秋月橋下流の貼石。河床の洗掘及び橋脚の流失を防ぐ。



④貼石（猿鹿堰下流）

猿鹿堰を支える貼石。同時に下流の目鏡橋への水流の影響を抑える。野鳥川は他にも小規模な堰が随所に見られる。



⑤目鏡橋

目鏡橋は長崎の石工を招来し、文化7年に石造のアーチ橋となった。それ以前は木製橋であった。前後の貼石が要。

図9 小石原川上流の人為痕跡①

図10 小石原川上流の人為痕跡②

(5) 尻切れ土居（霞堤防）

現代の河川堤防は連続堤が基本だが、小石原川や佐田川では地元で尻切れ土居と呼ばれる非連続堤（霞堤防）が用いられた。当地の尻切れ土居は小河川の合流部などで大きく八の字状に開く形態となり、洪水時に逆流する水を開いた堤防で受け、遊水地をつくる。こうした工事がいつなされたか不明だが、さきの石方郷夫の成立を加味すると、少なくとも江戸時代後期には成立していたと判断できる。

(6) ホウキ谷水道（谷止工）

小石原川沿いの檜原にあるホウキ谷水道は近世に築造されたと考えられる谷止工である。高さ約10m、幅約3mの範囲に石積を行い、流水による谷の深化や土砂災害を防ぐ目的を持つと考えられる。谷止工や砂防ダムの多くは、明治時代以降の西洋技術の導入により全国的に普及する。ただ、福山の別所砂留群のように在来技術で谷止工や砂防ダムを江戸時代に築造した例があり、ホウキ谷水道も西洋技術導入以前の谷止工と考えられる。

(7) 小結

調査・記録の足掛かりとして、まず小石原川上流域の人為痕跡を認識することを努めた。現在は県指定史跡となっている女男石護岸施設であるが、道路拡幅による消滅の危機に瀕するまで、歴史的・文化的評価は極めて低かった。「女男石」という地名の由来となった大岩がある程度の認識で、何故そこにあり、何を成していたのかという認識が欠落していたためである。人々の生活の中にある川とその周辺。それらは実利性が高いものほど最新仕様に改変されていることが多いが、過去の遺産であっても必要な機能を十分に果たしているものもある。小石原川や支流の野鳥川の治水・利水工はその典型例であり、過去の治水と利水技術は今も人々の生活の風景の一部として残されていることがわかった。ただし、これらの遺産も近年多発する豪雨災害の危機に直面しており、実際に損害が出ている。今後の課題として、これら人為痕跡の技術の系譜を探り、年代観を構築できる図面や資料を蓄積し、歴史的背景の裏付けを強化する必要がある。また本遺産を後世の人々へ伝えていく努力も必要である。

5. 総括と展望

本稿では、河川の今日的景観を構成する歴史資料を「認識・調査・記録」するために、まず文化人類学的視点から、有形・無形を包括した人類による河川利用形態を俯瞰し、各類型でどのような物質文化（痕跡）が形成されるのかを追究した。その狙いは、資料として痕跡を見出し難い河川利用を把握することで、より先鋭化した問題意識をつくりあげることにある。そして、本認識をふまえて福岡県朝倉市小石原川の人為痕跡について、調査と記録を試みた。結果、有形文化財を中心とした歴史資料の時空間的全体像の把握について、一定の成果を上げることができた。とくにホウキ谷水道の存在は重要で、西洋技術導入以前にも九州北部に谷止工が存在したことを示している。本文化財については、S f M技術を利用してオルソ画像を作成した（中島・寺村2018）。各自治体では小石原川流域の水制工のような文化財について重要性を認識しつつも、財政的な理由や優先度から調査に踏み込むことが難しいことが多々ある。近年、進展著しいS f M技術等を駆使して、より効率的に調査・記録を進める体制を構築することが必要である。

最後に「川の歴史（記録）」をいかに活用するかについて展望を述べる。現在・未来の生活と直結する川の景観は、各時代の人々の営みに応じて改変されていく存在である。本改変は人類だけでなく、水生生物を中心とした動植物の営みにも多大な影響を与えることは多言を要さない。川の人為的改変は、必ずしも善悪では判断できない多面的な影響を生じさせる。本研究は闇雲に川の人為的改変を非難する



図-1 ホウキ谷水道の位置

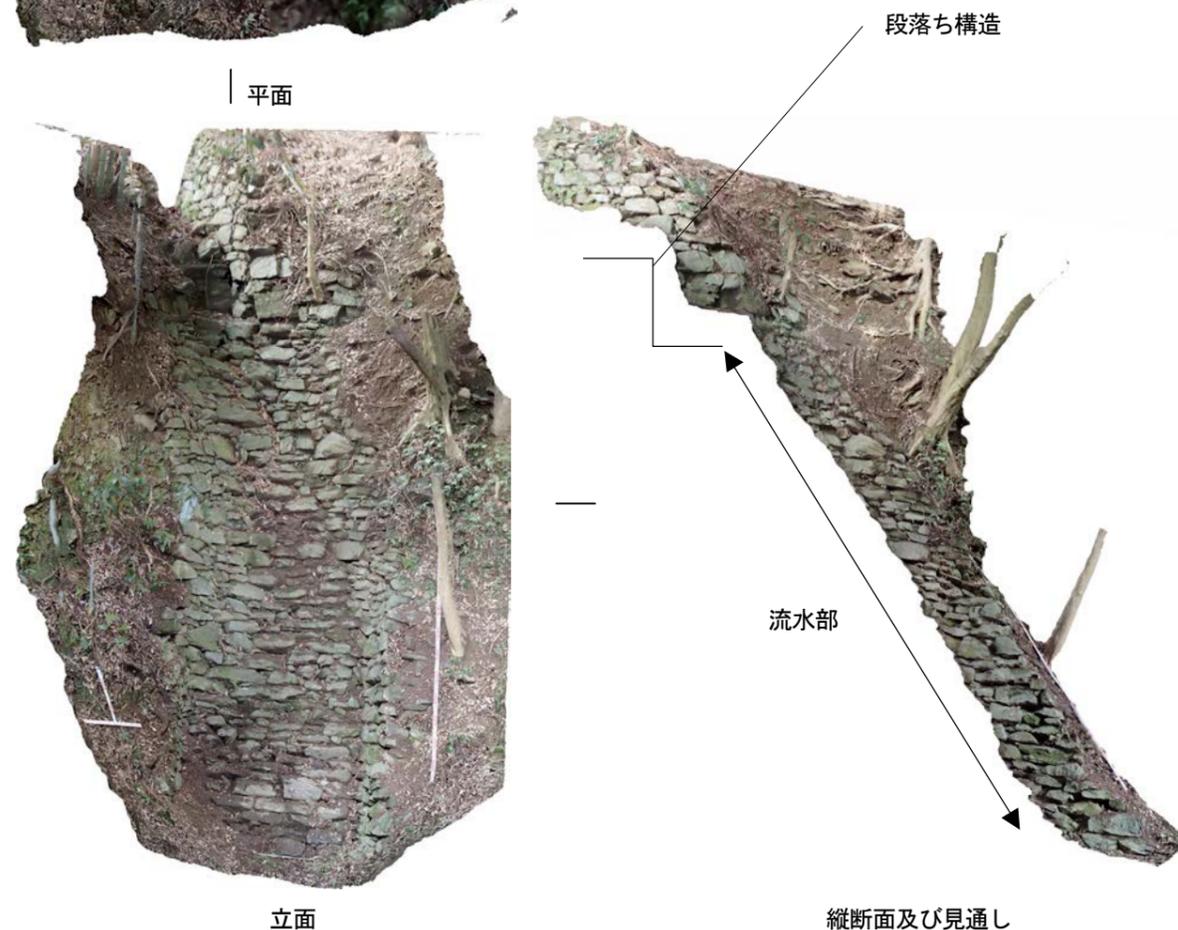


図-2 PhotoScanによる展開画像（任意縮尺）（中島・寺村 2018 より）

ホウキ谷水道（谷止め）
 ホウキ谷水道は福岡県朝倉市檜原にある、近世～近代に築造されたと考えられる石積みの谷止めである。高さ約10m、幅3mの規模で、傾斜角度は60～70度である。正確な築造時期は不明だが、石の積み方等を勘案すると近世であろう。近世の谷止めや砂止め遺構は広島県の別所砂止めが知られるが、技術的関連は無いようである。基本的に砂防ダムや谷止め工は明治以降の近代化に伴い導入されたと言われるが、ホウキ谷水道は近世に遡る可能性があり、日本の砂防・治山の歴史を再考する必要がある。

図11 S f M技術と文化財の記録

ものではない。危惧しているのは、歴史資料を認識・記録がないまま消失させる事態、あるいは効果的に機能していた水制工等を無意識的に改変することでかえって環境を悪化させてしまう事態等である。地域の歴史、よりよい生活環境の構築のために、「川の歴史（記録）」を活用できるよう情報発信し、環境を整えていくことが望まれる⁵⁾。また、本記録は地下に眠る埋蔵文化財の分析でも有益に機能するだろう。

追記

本稿は平成30年度九州考古学会総会ポスターセッションを基にした新稿である。執筆分担は、朝岡が「2-(1)中世以前、3-(1)①農業用水・②生活用水、(2)治水、(3)交通・運搬、(4)漁労、(6)①信仰対象」、小嶋が「1. 問題提起、2-(3)現状と課題、3-(1)③工業用水、(5)軍事、(6)②祭場・③刑場・葬地、(7)娯楽、5. 総括と展望」、中島が「2-(2)近世以後、4. 川の調査と記録」を担当した。

注

- 日本列島における河川運搬は、近代以降の陸上運搬の整備に伴い、急激に衰退した。その結果、運河としての水路網は都市基盤から取り除かれることになった。
- 井堰と導水する水路などの総称を井手などと呼ぶ地域もある。
- なお、霞堤防については山梨県の信玄堤が代表的だが、現在の信玄堤については長年の開発の賜物であり、霞堤防の形態がいつまで遡るかどうかは議論がある。
- 苑池の整備は娯楽的要素だけでなく、政治的・宗教的要素も内包する。
- 国道交通省HPの河川伝統技術データベースを参照すると、大河川を中心に各地方の様相を把握できる。

参考文献

朝岡俊也2013「福岡平野における堰灌漑の展開－弥生時代～古墳時代前期を中心に－」『九州考古学』第88号

朝岡俊也2017「大野城市域の中世村落－貿易都市博多の周辺1－」『七隈史学』第19号

朝岡俊也2020「日本考古学における水路研究の手法－弥生時代～中世－」『福岡大学考古学論集3』

荒川史2013「宇治川太閤堤跡の築造技術」『考古学ジャーナル』No.639

池澤俊幸2013「高知県上ノ村遺跡の仁淀川護岸遺構」『考古学ジャーナル』No.639

池淵俊一2015「第6章 意宇平野の開発史－5世紀代の評価を中心に」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集 第14集

池淵俊一2019「出雲平野における6・7世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集 第22集

上田健太郎2010「弥生時代の取水堰について」『先史学・考古学論究』V上巻

大沼芳幸2013「ノボリヤナの系譜：知内川のカットリヤナと関津遺跡出土のヤナを通して」『滋賀県文化財保護協会紀要』26

大沼芳幸・藤崎高志編2013『平成25年夏季特別展 華麗なる漁と美味なる食 魚・人・琵琶湖の過去・現在・未来』滋賀県立安土城考古博物館

大庭重信2020「西日本弥生時代開始期の灌漑水稲農耕と畠作－韓国青銅器時代との比較から」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書 論考編）』

北垣聰一郎2010「近世河川の護岸堤防における付属構造物の「水制」－とくに杵木（木杵）について－」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第14集

木下晴一2014『古代日本の河川灌漑』同成社

小嶋篤2016a「兵器の様相から見た古代社会」『築城技術と遺物から見た古代山城』熊本県教育委員会

小嶋篤2016b『大宰府の軍備に関する考古学的研究』平成25～27年度科学研究費助成事業若手研究（B）研究成果報告書 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター

小嶋篤2021「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会

小山田宏一1999「古代の開発と治水」『狭山池 論考編』

小山田宏一2011「古代日本の堰の構造と「敷葉工法」－弥生水利技術と鳥城里遺跡の堰の比較－」『古代東北アジアの水利と祭祀』書景文化社（韓国）

小山田宏一2013「『東アジア海』が結ぶ沿海低地の開発方式」『東アジア海文明の歴史と環境』学習院大学東洋文化研究叢書

小山田宏一2014「重源の改修と狭山池水下の土地開発」『重源と東大寺 鎌倉時代の復興を支えた人びと』大阪狭山市立郷土資料館

神吉和夫・神田徹・増味康彰・中山卓1993「古代都市の雨水排除計画－平安京を事例に－」『水工学論文集』第37巻

国土交通省 河川伝統技術データベース

郷土史馬田編纂委員会1992『郷土史 馬田』

佐藤尚隆2013「秋月城下町と女男石シンポジウム資料」

眞田秀吉1932『日本水制工論』

斎藤秀樹2010「堤防遺跡における胴木の変遷」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第14集

坂本紘二 外井哲志1994「筑後川中流域における水利の技術システムの変遷に関する研究」『土木史研究』第14号

山陰たたら製鉄研究会2017『砥波における砂鉄採取の研究』

島谷幸宏2015「秋月藩「女男石」の水利システム」『土木史研究 講演集』Vol.35

菅原康夫1980「弥生系農業における水利施設の意義と展開」『古代学研究』92・93

林博徳 兒嶋力也 寺村淳 島谷幸宏2018「野鳥川に現存する伝統的河川構造物」『土木史研究 講演集』Vol.38

高橋学2003『平野の環境考古学』古今書院

武末純一2011「九州北部地域」『弥生時代』上 青木書店

竹中千里・富岡利恵2008「第4章 天水田稲作地域の水 水質の視点から」『ヴィエンチャン平野の暮らし 天水田村の多様な環境利用』めこん

知野泰明 大熊孝1994「近世治水における堰に関する研究－その技術的な変遷について－」『土木史研究』第14号

都出比呂志1989『日本農耕社会の成立』岩波書店

中島圭 寺村淳2018「福岡県朝倉市における谷止の例－ホウキ谷水道（谷止）－」『土木史研究 講演集』Vol.38

永野宏樹2010「太閤堤について」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第14集

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編2005『水と祭祀の考古学』学生社

能登健1990「三ツ寺I遺跡の成立とその背景－5世紀代における河川移動を伴う水田耕地の拡大について－」『古代文化』第42巻 第2号

畑大介2010「引っ張り構造をもつ護岸施設の展開」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第14集

畑大介2018『治水技術の歴史』高志書院

広瀬和雄1983「古代の開発」『考古学研究』第30巻第2号

松村恵司1997「西本6号遺跡の歴史的性格について」『西本6号遺跡発掘調査報告書2』東広島市教育文化振興事業団文化財センター 調査報告書第11集

松村博2005「中世の橋の構造」『中世のみちと橋』高志書院

宮崎克則・福岡アーカイブ研究会編『古地図の中の福岡・博多 1800年頃の町並み』海鳥社

村田路人2009『近世の淀川治水』日本史リブレット93 山川出版社

山崎頼人2005「初期灌漑技術の発展過程I－水田稲作開始期における井堰構築技術とその集団－」『九州考古学』第80号

山田隆一2009「大阪の水制－杭出し水制について」『大阪府立狭山池博物館研究報告』6

山田隆一編2020『令和2年度特別展 発掘された土木技術 大和川流域の開発と水制』大阪府立狭山池博物館

山本晃一1996『日本の水制』山海堂

吉留秀敏2004「水稲農耕導入期の灌漑技術」『福岡大学考古学論集』

吉村伸一 島谷幸宏2009「嘉瀬川・石井樋の水システムに関する考察」『土木史研究 論文集』Vol.28

若狭徹2007『古墳時代の水利社会研究』学生社

四王寺山山裾を巡る御笠川は、大宰府条坊内ではおおよそ東から西に向かって流れる。この御笠川は大宰府条坊内の区画も兼ねていたと見られ、大宰府政庁周辺官衙や「府の大寺」観世音寺等の重要施設が御笠川の北岸に並んでいる。また、大宰府政庁正面の御笠川川底からは巨大礎石（SB4650：長軸2.37m×短軸1.86m×厚さ0.8m）が昭和57年の河川改修工事で発見された。巨大な礎石を据えるための大型基壇、すなわち大宰府政庁の正門（朱雀門）が御笠川沿い付近に存在したことを示す。加えて、御笠川は運河の役割も果たしており、大宰府政庁周辺官衙の区画溝を兼ねた南北大溝（SD320）とも接続している。このように御笠川は多面的な要素とともに、大宰府の都市設計に組み込まれていた。

一方で、御笠川も他の河川と同様に幾度も氾濫を繰り返し、流路を動かしてきた歴史もある。大宰府政庁および周辺官衙での政務機能が消失した中世以降、大宰府官衙は草地や田畑に没した状態で近世の地誌類に登場するが、その間に生じた御笠川の氾濫は遺跡としての大宰府跡を幾度も削り取っていった。このため大宰府官衙の南側、すなわち御笠川沿いの遺構面は残存状況が悪い。河川作用による遺跡の破壊も、「大宰府を基点に形成された歴史的環境」の一事象として認識する必要がある。

（小嶋 篤）



大宰府官衙（府庁域）の南限を流れる御笠川

参考文献

一瀬智2010「御笠川河床出土の礎石（SB4650）について」『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ－政庁前面広場地区－』九州歴史資料館

第2章

水利の技術と思想

朝岡 俊也

はじめに

韓半島から水田稲作を導入し、日本で弥生時代が始まる。水田稲作はまず北部九州で定着し、弥生時代前期の間に東北地方まで急速に広がった（中沢2017など）。

佐藤洋一郎氏の積算によると、100人が一年間食する米を生産するのに必要な水田面積は6.7ha＝67000㎡で、この面積を開墾するには50人で1600日の労働が必要らしい（佐藤2020）¹⁾。当然、水田経営や水路の維持管理には別途の労働力が必要となる。民族学の研究では狩猟採集民が農耕民よりもはるかに短い労働時間で多くの食料を得られると明らかにされており（マーシャル・サーリンズ1984）、弥生時代に「大変な」農業をわざわざ取り入れた理由は単純な技術伝播ではなかったらしい。

本章では、水利の変遷を辿れる考古資料が豊富な博多湾沿岸を対象に、弥生時代以来の農業を支えた水利を考古学的に検討する。多人数を組織的に動員する水利事業は、集団の形成・維持・解体、また各時代の組織支配構造にも大きく関わり、社会や文化の影響を受けつつ、それらを動かす原動力にもなったため、歴史を叙述する上で重要である。まずは技術と思想という2つの側面からそれぞれの様相をまとめ、最後にそれらを総合して、労働力の編成や地域空間設計にも言及してみたい。

1. 水利の技術

(1) 弥生時代の水利技術

民族例を参考にすると、開発が進んでいない原始的な水田地帯では、自然災害や異常気象、病気の拡散などの有事に稲の全滅を防ぐため、様々な品種の稲を混ぜて育てる。そのため、同じ水田区画の中でも稲穂ごとに生育具合や収穫時期がずれるため、収穫は根刈りをせず穂刈りする。弥生時代の稲の収穫に石包丁を用いるのはこのためである²⁾。米粒の形質変異の研究では、板付遺跡・宇木汲田貝塚・菜畑遺跡で出土した弥生時代早期の炭化米は、粒が小さく、粒型（長さとの比）にばらつきが多い傾向があり、弥生時代前期の灌漑水田の普及に際して、それに適した品種が選択されていったと指摘される（上條2018）。

さて、水田稲作開始期には、水路を掘削して河川から水を引く水田（板付遺跡など）のほか、低湿地を流れる自然流路を堰き止めて水を溢れさせる洪水利用型水田（橋本一丁田遺跡など）や、湧水と雨水に頼る天水田（比恵遺跡など）などもあった。水田稲作には給水も重要だが、排水も同様に重要で、生育期には水を落とすことで稲の成長を促すため、通常は完全に水を落とせない低湿地の水

表1 乾田と湿田（坂上ほか編2010を基に作成）

| | 長所 | 短所 |
|---------------------|--|--|
| 湿田 (地下水の影響の強い低地) | ①人為的な水の供給の必要が少ない ②河川の氾濫や灌漑により、 <u>養分の天然供給量が高い</u> ③土がやわらかく耕作しやすい | ④通気性がなく、還元障害によって作物の育成が阻害される ⑤塩類を集積しやすく、塩害が起こりやすい ⑥洪水の被害を受けやすい |
| 乾田 (地下水の影響の弱い高地) | ④通気性があり、 <u>還元障害がない</u> ため、生産性が高い ⑤塩害が起きにくい ⑥洪水の被害を受けにくい | ①人為的に多くの水を供給する必要がある ②（特に連作に際して）人為的に十分な養分を与える必要がある ③土が固く、耕作しづらい |

※考古学における水田土壌の検討では、この間に半湿田や半乾田を設定するのが一般的である（田崎2002 a b など）。

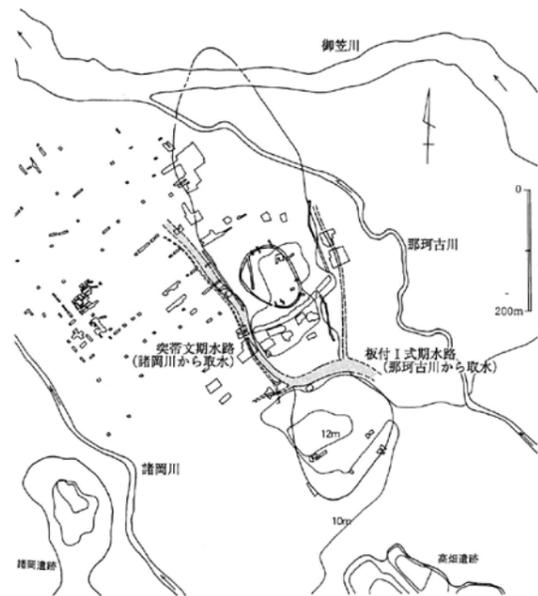


図1 板付遺跡の水路 (吉留2004に加筆)

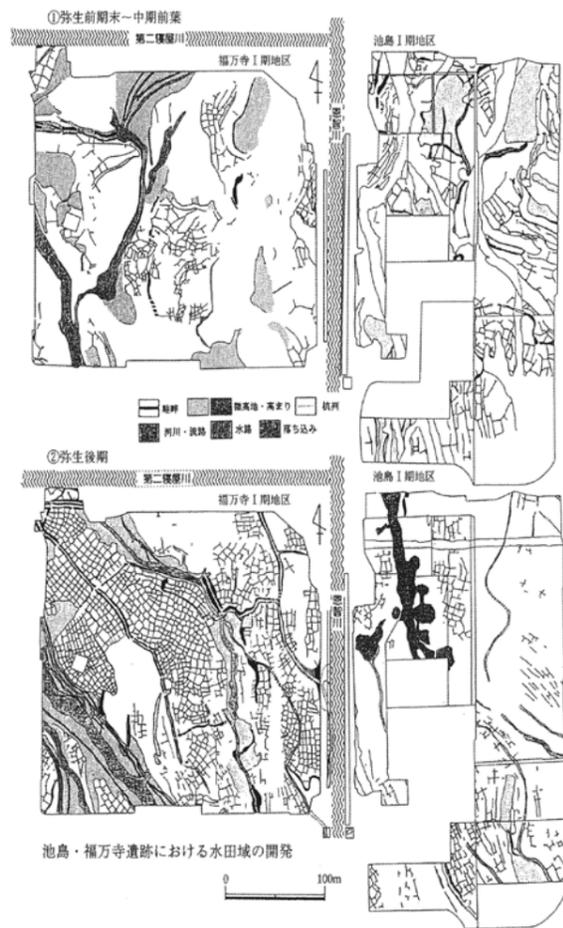


図2 池島・福万寺遺跡の水田域の拡大 (田崎2002aより)

田は生産性が低くなる(表1)。すなわち、水田稲作最初期に未開の地では水の得やすさが重視され、立地環境に合わせて、生産性が低いはずの低湿地などでも水田を営んだようだ(朝岡2013a)。

これに対し、板付遺跡では当初から水路を掘削し、水田に水を引く。早期段階では集落の西側を南北に流れる諸岡川から取水し、集落が立地する丘陵の西側で水田を営み、環壕が掘削される前期段階には集落が立地する丘陵を横断した水路を掘削し、東側的那珂古川からも取水する(図1)。将来的な生産力の増大や耕地拡大を視野に入れた「開発発展志向」の強い水利様式を当初から採用した点が重要だろう³⁾。

弥生時代前期末の博多湾沿岸地域では、比恵・那珂遺跡群で水路とみられる溝が散見される(朝岡2015)ように、低湿地水田は規模を縮小し、水路灌漑への集約化が進む。筆者はこの頃から谷部に堤を築いて貯水する小規模な溜池も利用されると考える⁴⁾。前期末～中期初頭は集落の数が多く増える時期(小澤2013など)で、森林伐採のための両刃石斧の出土数も激増する(森2018など)から、集落と水利の両方が活発に開発された時期と位置付けられる。前段階からの開発の蓄積を軸に、可耕地を外へと広げていったのだろう。

博多湾沿岸での次の水利史的な画期は弥生時代中期末～後期初頭にあり、須玖遺跡群や比恵・那珂遺跡群などの拠点的な集落に近接して、幅20m前後に達する堰(取水施設)など大規模な事業が確認される⁵⁾。また、新たに多角形の水田区画も出現し(朝岡2013b)、木製の農具や土工具にも変化がある(山口2000)。その背景には、中期末～後期初頭に多くの集落が廃絶(小澤2013・遠藤・上田2009)し、須玖遺跡群や比恵・那珂遺跡群などの拠点的な集落で中期から人口増加が進む(井上2009・久住2009)集住現象があり、その結果、前段階のように可耕地を外へ広げるよりも、拠点集落周辺の限られた範囲内での生産性の向上に重点が置かれたと考えられる。広大な範囲が面的に調査された好例の大府池島・福万寺遺跡をみると、弥生時代前期段階では微高地間のやや低い湿潤な場所に水田が

点在する状況から、後期には微高地を含む調査区全体に水田が広がり(田崎2002a)、水田区画の工夫などで限られた面積の中で水田を広げる過程を理解しやすい(図2)。

(2) 古墳時代の水利技術

早良平野は弥生時代後期に集落の空白地帯(小澤2013)となるが、弥生時代終末期から古墳時代前期に免遺跡や原遺跡、重留遺跡、四箇遺跡など、室見川東岸の広い範囲で大規模に水利が開発される。注目されるのは、この大開発に対応する大集落の不在で、周辺集落が協力して広大な水田を営んだような様相を示す(朝岡2013b)。堰や護岸の構築技術では、流水に対する前後面の斜杭とそれを支える横木の組み合わせが複数回に重なる「合掌堰」が出現するほか、弥生時代の福岡平野にみられた縦杭を密に打ち込む形態など、バラエティに富む様々な構造の大規模堰がみられる。

5世紀(古墳時代中期)になると、全国的に堰や護岸などの水利施設の検出例が減少し、その状況は中世まで続く。博多湾沿岸も例外でなく、少数の類例がみられるのみである。この現象を積極的に評価すれば、水田の乾田化(やや高地への移動)や治水事業の進展で洪水埋没による遺構の残存が減少したことや、掘削された水路が改修などを経て現代の水路に引き継がれたことに起因するとも考えられる(朝岡2020)。後述する水辺の祭祀は5世紀にも活発だから、古墳時代前期の室見川東岸域の大規模開発は5世紀まで引き継がれた可能性が高い。室見川東岸には5世紀前半の前方後円墳である拝塚古墳が築造され、この古墳の盛土には水路の掘削や水田造成で生じた廃土が使われたと考えられる。被葬者は開発を主導した人物だろう。

裂田溝は那珂川上流より取水する全長4kmの現役の人工水路で、神功皇后の掘削伝承がある(図3)。後述する松木遺跡の土器祭祀はこの溝に伴う可能性が高く、5世紀前半には周辺の集落や古墳には竈や半島系土器などの渡来系文化とともに鉄製U字形鋤先を生産するような高度な鍛冶集団が現れる⁶⁾ことから、裂田溝が5世紀に遡る可能性が高まってきた⁷⁾。出雲地域でも意宇川が付け替えられたと推測される(池淵2015)ほか、古墳時代中・後期の大規模水利開発を示唆する例は増えている。これらには渡来人の関与がみられる事例が多く、彼らは鉄製土工具を生産する鍛冶技術や、高度な土木技術をもたらしたと考えられる(朝岡2020)。竈による調理に適した品種の選択や、それに伴う水利の変化もあったかもしれない。

(3) 律令期の水利技術

当該期の水利開発を示す博多湾沿岸地域での発掘調査事例は少ない(朝岡2012)。よって、一般的な話となるが、7～8世紀は統一された意志の下で、国家が直接的に人民を支配しようとした時代である。公地公民制の論理のもと、国家主導の大規模水利事業が行われた。その代表例は7世紀前半築造の溜池、大阪府の狭山池である。築造時は丘陵に挟まれた谷状地形に直交して高さ5.4m・底幅27mに推定300mの長さで盛土して堤が築かれ、貯水面積は推定で約26万㎡に及び、周辺の溜池にも水を供給した。また、8世紀に河内の淀川や遠江の荒玉河が決壊した際は、改修に30万人が動員された(狭山池博物館2001)。

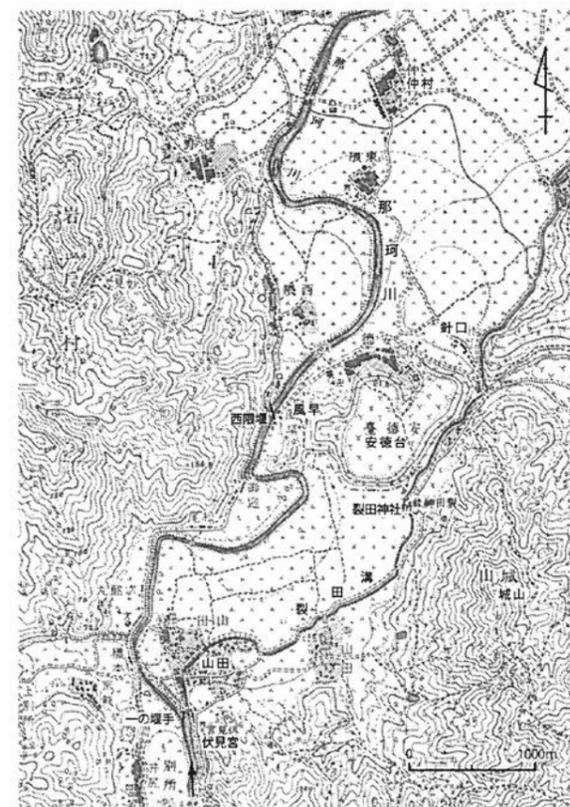


図3 裂田溝 (木下2014より)

技術面では、盛土に葉付きの枝（粗朶という）を面的に挟み込む「敷葉工法」が目される。盛土の透水性を上げるとともに、土滑りへの抵抗力を高める工法で、溜池の堤や流路の堤防、水辺の道路などの盛土に用いられる。国家主導の土木事業と考えられる遺構を中心に確認され、ルーツは古墳時代に韓半島からの導入された技術だが、7世紀に国家が整理・管理した技術のひとつとみられる（小山田2018）。北部九州でも、みやこ町池田遺跡で古代の溜池が発見され、敷葉工法が確認された（井上・木村編2007）。おそらく水路開発についても、古墳時代の渡来系技術が7世紀に国家によって整理され、各地の開発に用いられたであろう。斉明天皇の時代には「水工」と呼ばれる技術者が存在したことも知られ（木下2014など）、その根拠となる。

2. 水利の思想

発掘調査では、洪水砂に覆われた水田や、濁水で流水がなくなり放棄された水路が見つかることがある。そして、そうした洪水や濁水に対して人々が祈りを捧げた痕跡もみつき、考古学で「水辺の祭祀」の痕跡と呼ばれる。この項目では、そうした水辺の祭祀の分析を通じ、弥生時代から律令期の水利の思想を読み解く。

水辺の祭祀の集成に際し注意すべきは、その遺構で祭祀が行われたかどうかは、単に祭祀系の遺物が出土しただけでは判断できない点である。たとえその遺物が祭祀専用の遺物であっても、遺構に埋没した段階は製作段階や保管段階かもしれないし、廃棄についても必ずしも祭祀が行われた場所に廃棄されるとは限らないからだ。また、完形遺物の出土や同一器種の多量出土で祭祀とされることもあるが、祭祀に日常土器などの一般遺物を使用した場合、廃棄との区別が非常に難しい。よって今回の集成は、博多湾沿岸地域で水辺の祭祀に関連する「可能性のある」遺構を集成したもののご理解いただきたい⁸⁾。

(1) 弥生時代の水辺の祭祀(表2)

弥生時代中期前半までは、明確な水辺の祭祀がほとんどない。祭祀に日常土器などを用いるのが基本で、痕跡が残らないのだろう。板付遺跡では弥生時代前期の水田に付属する堰や水口から完形の壺が出土したが、これらは水利施設の維持などに使うために置いていた可能性もあるし、「落とし物」の可能性もある。祭祀の存在を否定するわけではないが、日常土器を用いるこうした例は、明確に祭祀と認定できず、集成的検討は難しい。

水に対する祭祀行為が明確になるのは、弥生時代中期後半から後期にかけてである。井戸の祭祀が代表的で、数が膨大なので、多くは久住愛子・久住猛雄両氏の集成（久住・久住2008）に譲り省略するが、井戸を埋める途中に多数

の完形の土器を投げ込む例がある。井戸の神に、土器あるいはその内容物や盛り付けた食物を捧げる行為とみられ、当該期の大半の井戸の廃棄に伴い、祭祀行為が確認される。また、有田遺跡群3次調査2号井戸などのように、井戸開削時に土器を埋め込む祭祀もあるらしい（辰巳2008）。

小銅鐸・鐸形土製品

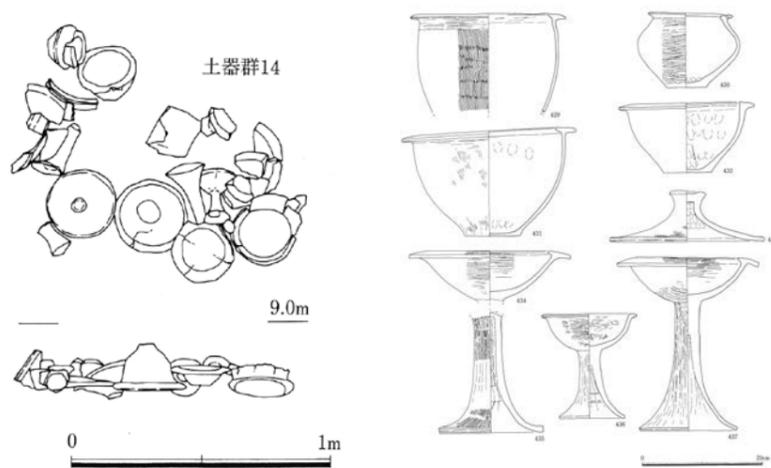


図4 元岡遺跡群42次—土器群14

は、集落域からの出土に比べ、井戸や井泉からの出土のほか、流路や水利施設からの出土が目立ち（辰巳2008・常松2004など）、水辺の祭祀と関わりが深い⁹⁾。元岡遺跡群42次調査自然流路S D01では、水が流れていた状況が一変して滞った段階とみられる堆積層から小銅鐸2点や青銅製鋤先1点、土製勾玉5点、貨泉1点、ガラス小玉2点などがまとまって出土し、水乞いの祭祀の痕跡と考えられている¹⁰⁾。また、小形仿製鏡などの鏡も低地の包含層（夜臼・三代遺跡、仲島遺跡）や井戸（井尻B遺跡）、流路（元岡遺跡群）や谷（今宿五郎江遺跡）などで出土する事例があり、水辺の祭祀で用いられた可能性がある¹¹⁾。

表2-1 弥生時代の水辺の祭祀①

| 報告 | 遺跡 | 次数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|---------------|-------|-------|--------------------|--------------|-------------------------------------|--|
| 糟屋平野以北 | | | | | | |
| 新8 | 夜臼・三代 | 大森区 | 包含層 | 弥生終末期? | 小形仿製鏡 | 水田の存在が想定される谷部出土。報告では丘陵上部からの流れ込みと判断している |
| 福岡平野 | | | | | | |
| 601 | 板付 | 31 | 井堰 | 弥生前期 | 完形壺1 | 井堰下流側の1段目構築部より出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 水口 | 弥生前期 | 完形壺1 | |
| 832 | 比恵 | 82 | SE21 | 弥生後期後半～終末期 | 龍文?付長頸壺1、短頸壺1 | どちらも完形井戸を埋める際に入れられている |
| 1237 | 比恵 | 125 | SE523 | 弥生終末期? | 小銅鐸 | 土器は小片のみ井戸を埋める際に入れられている |
| 407 | 雀居 | 5 | SD-002 | 弥生後期後半～終末期 | 小型仿製鏡(完形) | 環溝か上層の粘質土から出土 |
| 837 | 久保園 | 3 | SD001 | 弥生中期末～後期初頭 | 鐸形土製品1ほか丹塗り土器など | 報告では谷状の自然流路とされる鐸形土製品は最下層出土 |
| 1148 | 久保園 | 4 | SD0003 | 弥生後期前半 | 鐸形土製品3 | 幅1mほどの流路(水路か) |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD0053 | 弥生後期前半 | 鐸形土製品1 | 幅3mほど。環溝状の区画溝? |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD0065 | 弥生後期か | 鐸形土製品2 | 土堤防で整備された流路(幹線水路か) |
| 〃 | 〃 | 〃 | SX528 | 弥生後期 | 鐸形土製品1、土製勾玉1 | 遺物の集積遺構で、人為的なものか、流れ込みか不明 |
| 795 | 下月隈C | 5 | 第4遺構検出面 | 弥生後期か | 鐸形土製品1 | 弥生後期～古墳前期を中心とする遺構面で、流路を検出している |
| 932 | 下月隈C | 8 | SX1186 | 弥生後期～古墳前期 | 鐸形土製品1 | SD818に関連する土器群 |
| 410 | 板付 | 54・59 | 住居跡 | 弥生後期? | 小銅鐸1 | 住居内の小穴から出土。小銅鐸が溝以外から出土した例。 |
| 539 | 板付 | 20 | 井戸 | 弥生後期前半 | 完形複合口縁壺1、手づくね土器4ほか | 井戸祭祀とみられる。完形複合口縁壺は口縁部に三角形の文様を持つ。比恵82次の類似か? |
| 年32 | 仲島 | 5 | 包含層 | 弥生後期 | 内行花文鏡 | 河川際 |
| 644 | 井尻B | 11 | 包含層 | 弥生中期後半～末 | 鐸形土製品(丹塗り)1 | 青銅器鋳型も出土。包含層は古代の整地層か。 |
| 918 | 井尻B | 17 | SE05 | 弥生後期 | 小型仿製鏡1、ガラス勾玉鑄型1、手づくね土器2 | |
| 752 | 笠拔 | 1 | 貯水遺構 | 弥生中期末～後期前半 | 鐸形土製品1(線刻あり)、銅矛中子、勾玉、木剣、弓、ほか丹塗り土器など | 5C前半の土器混じる勾玉と木剣と弓はどちらの時期か要検討 |
| 85 | 野多目前田 | 1 | 第3号溝状遺構 | 弥生後期(遺構は古代?) | 内行花文鏡 | 遺構は8Cの遺物が多く、古墳時代の遺物が混じる。上層からは中世の遺物が出土。鏡は再堆積層からの出土で、祭祀に結びつくかは不明 |
| 春63 | 先ノ原 | 3 | 2号溝 | 弥生後期前半 | 鉄剣1 | ほぼ完形で、弥生の鉄剣としては最大規模。 |
| 樋井川流域 | | | | | | |
| 417 | 長尾 | 1 | 谷(最下層遺物) | 弥生中期末～後期初頭 | 土器多数(完形品は壺、器台が多い) | 谷頭底面から完形土器がまとまって出土。湧水点祭祀の可能性。 |
| 早良平野 | | | | | | |
| 1067 | 有田 | 137 | 段落ち土器群(包含層南側下層土器群) | 弥生中期後半～末 | 窓付きの甕2、丹塗り土器多数、器台21などを含む土器群 | 有田丘陵東縁部の金屑側に向かって落ちる段落ちで集中的に出土した土器群 |
| 188 | 羽根戸原C | 4 | 1号河川 | 弥生後期初頭 | 甕7、袋状口縁壺4、鉢1、蓋1 | 河川(最大幅65m)岸への土器の一括放棄で、河川の岸に打ち込まれた護岸杭列とみられる110号杭列が土器を貫いている。 |

表2-2 弥生時代の水辺の祭祀②

| 報告 | 遺跡 | 次数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|------|-------|------|-------------------------------|-------------|--|---|
| 糸島地域 | | | | | | |
| 1174 | 元岡 | 42 | 自然流路SD01 (C-1・2区出土遺物) | 弥生後期～終末期 | 小銅鐸2、土製勾玉5、青銅製鋤先1、貨泉1、ガラス小玉2ほか手づくね土器などを含む土器多数 | 谷の自然流路で、北西約250mが谷頭となる。吉留秀敏氏は弥生中期後半に溜池が築かれたと推測した。祭祀遺物が出土した2層の下の3層は粗砂を多く含み、水が流れていた様相を示すが、2層は砂が減っており、報告では水乞いの祭祀と推測された。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD01 (A-1・2区～E0・1・2区出土遺物) | 弥生中期～古墳前期 | 杓子30、鐸形土製品(有文)2、碧玉製管玉1、ひょうたん形土器、桃の種3000以上など土器多数 | 手づくね土器なども出土するが、膨大な土器が出土しており、明確に祭祀と認定できないものも多い。 |
| 1275 | 元岡 | 42 | 自然流路SD01 (土器群14) | 弥生中期中頃 | 甕1、無頸壺1、鉢2、蓋1、高坏3 | 本来は赤彩土器の完形品のみで構成される土器群か。並べて埋置されており、SD01の利用開始に関する祭祀と推測されている。建物の横で出土。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD01 (土器群16) | 弥生後期? | 小型仿製鏡1、貨泉1 | 古墳時代後期に堆積した層への紛れ込み |
| 1276 | 元岡 | 42 | 自然流路SD02 (土器群112) | 弥生後期 | 鳥形木製品2、鐸形土製品1、杓子2、手づくね土器5、器台38など土器多数 | 器台の比率が高い |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (土器群103) | 弥生中期末～後期前半 | 窓付き甕5、丹塗り高坏5、手づくね土器12、器台6ほか完形に近い丹塗り土器多数 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (土器群106) | 弥生中期末～後期 | 窓付き甕12、手づくね土器38ほか完形に近い丹塗り土器多数 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (土器群136) | 弥生後期前半 | 龍文?壺1、手づくね土器13など | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (包含層ほか) | 弥生中期～古墳前期 | 手づくね土器19、不明土製品4、土製勾玉4、土製丸玉7、杓子31、動物形土製品1、碧玉製管玉3、緑泥変岩製管玉2、ガラス小玉27、水晶小玉1、滑石製白玉44 | 動物形土製品はブタ?イヌ?ヒツジ?とされる。 |
| 1246 | 元岡 | 42 | 自然流路SD02 (1区) | 弥生中期中後半～後期 | 絵画線刻琴、剣形木製品、木偶、陽物形木器 | 祭祀的木製品が約50mの限られた範囲から集中して出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (2区) | 弥生中期中後半 | 鳥形木製品3 | 祭祀と認定できるは不明確 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (3区) | 弥生中期中後半 | 有文木製品(サシバ?)、貨泉2 | 祭祀と認定できるは不明確 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 (4区) | 弥生後期? | 小形仿製鏡1、貨泉1 | 祭祀と認定できるは不明確 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 自然流路SD02 | 弥生中期中後半～後期? | 舟形木製品1、琴板10 | 祭祀と認定できるは不明確 |
| 238 | 今宿五郎江 | 2 | SD-100 | 弥生中期末～後期前半 | 小銅鐸1、舟形木製品?2、杓子6、丹塗り土器多数、器台22、手づくね土器37など | 谷部を利用した大溝で、初期の環濠を構成?湧水を利用するものか? |
| 1066 | 今宿五郎江 | 12 | SD-01 (A) (西肩部) | 弥生中期末～後期初頭 | 壺4、袋状口縁壺3、高坏1、脚付短頸壺1、鉢1(丹塗り磨研土器主体) | 環濠を構成する大溝に先行する流路。肩部より丹塗り磨研土器が集中して出土。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 井泉(堤裏込め) | 弥生後期 | ガラス小玉1、鉄鎌1、貨泉1 | 木組みと粗砂で構築された井泉の堤の裏込めから完形遺物が出土。井泉構築時の祭祀か。 |
| 1180 | 今宿五郎江 | 3 | 2号溝 | 弥生中期末～後期前半 | 杓子1、丹塗り土器多数、窓付き土器1、手づくね土器18、器台43ほか遺物多数 | 区画溝か。そもそもの遺物量が多いため、明確に祭祀が行われたと認定できない。 |
| 1221 | 今宿五郎江 | 11 | 谷1203 | 弥生後期 | 小型仿製鏡3、銅鏡片1、小銅鐸1、鳥形?1、人形1ほか遺物多数 | 環濠の一部を構成する谷部 |
| 前 | 上罐子 | 5 | 谷部 | 弥生中～後期 | 人物線刻板、矢形木製品、鳥形木製品、犬?形木製品、琴など | |
| 前89 | 潤地頭給 | 1-E区 | 弥生後期～終末期 | 10号祭祀土坑 | 龍?線刻壺1 | |
| 前15 | 浦志 | A地点 | 溝状遺構 | 弥生後期 | 小銅鐸1 | 流路 |

廃棄との区別が難しく、明確に認定可能な例は稀だが、日常土器を用いた祭祀も確かに存在するようだ。元岡遺跡群42次調査では地山を方形に成形した中に立つ2棟の掘立柱建物のすぐ横から、流路岸に並べ置かれた弥生時代中期中頃の甕1点、無頸壺1点、鉢2点、蓋1点、高坏3点の完形の赤彩土器が出土し(土器群14)、流路の利用開始に関する祭祀と推測されている(図4)。土器を用いた河川祭祀のセットが伺える貴重な例である。なお、今宿五郎江遺跡12次調査(SD-01(A))や羽根戸原C遺跡4次調査(1号河川)などでも同様に完形土器のセットを用いた河川祭祀が行われた可能性があるが、土器の組み合わせの比率に共通性はない¹²⁾。また、長尾遺跡1次調査では湧水する谷頭の最下層から、弥生時代中期末～後期初頭の壺や器台などの完形土器がまとまって出土し、湧水点に対する祭祀が行われた可能性がある。

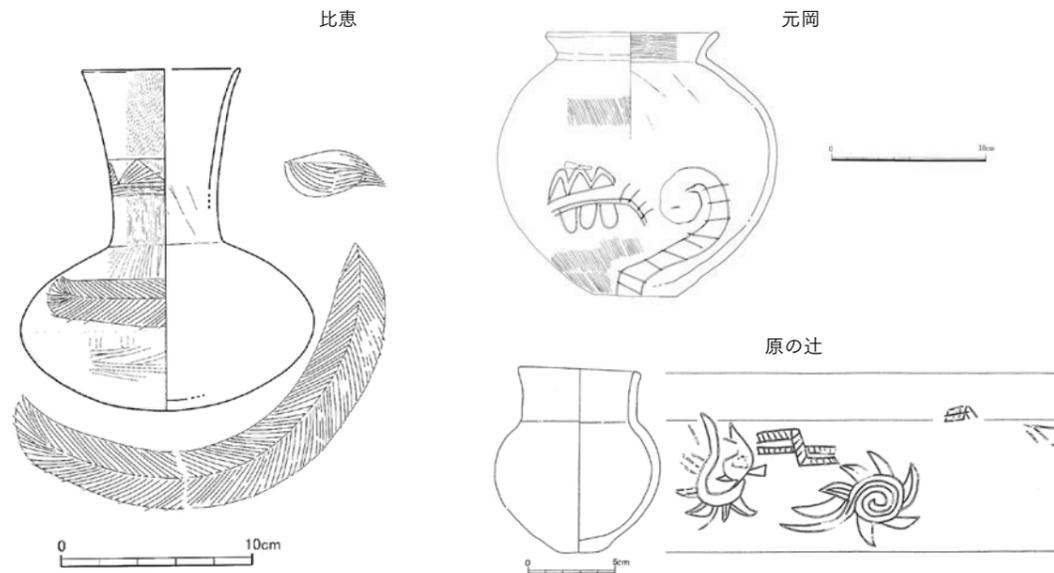


図5 龍表象をもつ土器

さて、当該期に水辺の祭祀と関わりの深い絵画表象に龍がある。龍のモチーフは弥生時代後期から壺などの土器に線刻された絵画にみられ、井泉や井戸などから何らかの祭祀を行った状況を伴って出土することが多い(辰巳2008)。博多湾沿岸地域では弥生時代後期の比恵遺跡群第82次調査S E 21井戸や、元岡遺跡群第42次調査自然流路SD02(土器群136)などで出土した土器に刻まれた文様が、龍を表す可能性が指摘される(図5)。特に後者は原の辻遺跡で出土した土器と同様に、天に昇る昇竜と淵に潜む伏竜が描かれているとされ、『脱文解字』(永元12(紀元100年))の「竜は春分に天に昇り、秋分に淵に潜む」という記述との関連が指摘され(古澤2016・常松2019)、弥生時代の龍表象は中国古代の雨乞い神事に作られた土竜を祖形とするとの見方もある(春成2011)。

暴れ川や流れる水を龍や蛇に見立てる例は現代にも残り、文献史料をみると少なくとも奈良時代までは遡る。例えば、仁徳紀には吉備中国にある川嶋河の淵に棲み、人々を苦しめる大虬(みつち=龍をさす)を笠臣の祖の県守が鎮める説話がある。県守は三つのヒサゴを水に投げ込み、それを沈めることができなかった大虬とその仲間を伐った(辰巳2008)。記紀などに記された有名なスサノオのヤマタノオロチ退治も、暴れ川である出雲の斐伊川を大蛇に見立て、地域の有力者が治水灌漑事業によってそれを制御したことをモデルとしたというのが有力な説と

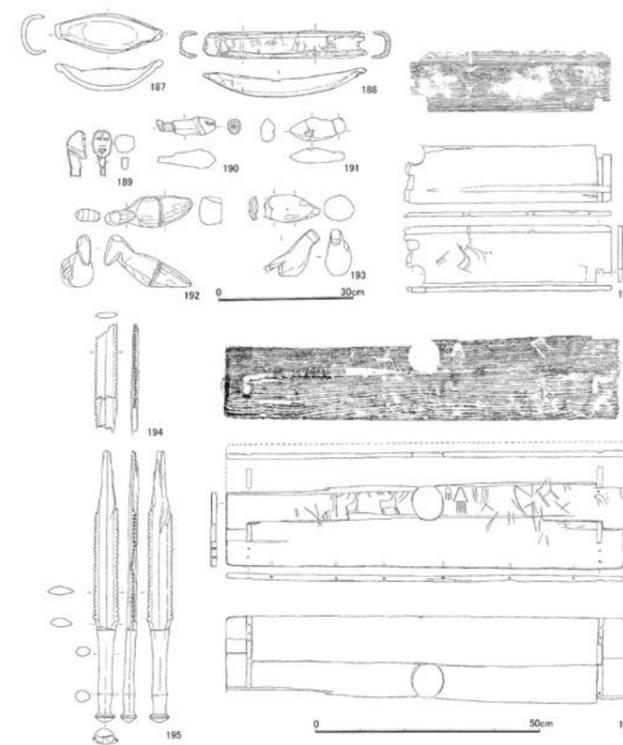


図6 元岡遺跡群42次出土の木製祭祀具(常松2019より)

表3-1 古墳時代の水辺の祭祀①

| 報告 | 遺跡 | 次数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|---------------|-------|-------|----------------------|-------------|---|--|
| 糟屋平野以北 | | | | | | |
| 新7 | 夜臼・三代 | 夜臼4区 | 祭祀土壌 | 5C前半 | 小形丸底壺33、手づくね土器48、高環16、滑石製白玉6400、有孔円盤122、未製品、原石ほか | 5C前半主体だが、6Cの須恵器も混じる。包含層からも手づくね土器、滑石製有孔円盤、勾玉などの祭祀遺物多数 |
| 新9 | 夜臼・三代 | 大森6区 | 包含層 | 5C前半 | 小型丸底壺107、手づくね土器22、高環138、勾玉1ほか | 水田の存在が想定される丘陵裾部。報告では遺物は丘陵上部からの流れ込みと判断している。韓式系土器も出土 |
| 1072 | 香椎A | 4 | SD4107(2層) 河川沿いの低地の谷 | 5C前半 | 小形丸底壺11、手づくね土器7、高環20ほか、甕・壺など | 弥生後期～5Cの遺物が出土する谷。30cm埋没した層より完形に近い壺・高環が多数出土。須恵器少量出土。この谷に導水する5C前半の水路?(SD4109)あり。 |
| 福岡平野 | | | | | | |
| 782 | 比恵 | 81 | SX08 | 弥生終末期～古墳前期 | 手焙形土器1(完形)ほか | 堰もしくは築とみられる木組みの最下段から、甕などとままとって出土。構築時の祭祀か? |
| 208 | 那珂君休 | 4 | 2号井堰 | 古墳前期 | 完形甕1、完形小型丸底壺1ほか | 堰の杭材の間から出土。構築時の祭祀か。前期後半に近い時期か |
| 635 | 雀居 | 7 | 1号溝状遺構 | 古墳前期 | 小型丸底壺27、高環15、小型器台18、手づくね土器15ほか土器多数、貨泉1 | 集落がある微高地を囲む落ちに土器の集中がみられる状況で、環溝の可能性はある |
| 635 | 雀居 | 9 | 1号溝状遺構 | 古墳前期 | 小型丸底壺18、高環11、小型器台12、手づくね土器3、手焙形土器1(完形に近い)など土器多数 | 集落がある微高地を囲む落ちに土器の集中がみられる状況で、環溝の可能性はある。9次調査と一連 |
| 大50 | 石勺 | H地点 | SX19 | 古墳前期～5C | 蛇紋岩製有孔円盤1、手焙形土器1、手づくね土器2 | 牛頸川氾濫原と切りあう土坑 |
| 208 | 那珂君休 | 4 | 旧河川 | 古墳前期～5C前半 | 小型丸底壺60、高環14ほか完形甕など | 5世紀代の須恵器、わずかに出土 |
| 57 | 高畑 | 4 | SD-01 | 5C前半 | 管玉1、滑石製勾玉1、ガラス小玉1、暗赤色玉1、小型丸底壺113、手づくね土器1、高環72 | 土器の約半数を小型丸底壺が占め、1/4を高環が占める |
| 210 | 高畑 | 12 | 1号溝 | 5C前半 | 小型丸底壺27、高環30、杓子1、手づくね土器12、滑石製剣形1 ※以下、木製品舟形4、鏡矢形? 1、木鏝1、弓1 | 弥生終末期の流路と重なる須恵器少し混じる |
| 〃 | 〃 | 〃 | 2号溝 | 5C前半 | 手づくね土器1 | 報告では1号溝の改修とみる |
| 1150 | 高畑 | 20 | 10号河川 | 5C前半 | 小型丸底壺219、手づくね土器68、高環90、舟形木製品? 1、斎串? 1、滑石製白玉1、滑石製有孔円盤4(136号溝出土を含む) | 韓式系土器(平底軟質土器)も出土。弥生時代の河川(那珂古川か?)と重なっている |
| 69 | 三筑 | 1 | 第2・3井堰 | 5C前半 | 小型丸底壺12 | 完形多い |
| 〃 | 〃 | 〃 | 水田5水口 | 5C前半 | 完形木製槽1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第6水溜状遺構 | 5C前半 | 小型丸底壺3 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第7水溜状遺構 | 5C前半 | 小型丸底壺3 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 川 | 5C | 木製鉢1、小型丸底壺7 | |
| 那11上 | 松木 | 140街区 | 祭祀遺構 | 5C前半 | 手づくね土器多数、高環12以上、小型丸底壺6以上、土製勾玉1、スタンプ台状石製品1、鉄鏝1、刀子2 | 裂田溝から枝状に伸びるように検出された溝。高環や手づくね土器などの祭祀遺物は底から浮いた状態で出土。初期須恵器片も出土。 |
| 752 | 笠抜 | 1 | 貯水遺構 | 5C前半(遺構は弥生) | 小型丸底壺13、手づくね土器8、土製勾玉、木剣、弓 | 遺構の時期は弥生。勾玉と木剣と弓はどちらの時期か要検討 |
| 702 | 立花寺B | 6 | SD14 | 5C中頃～6世紀前半 | 手づくね土器6、大甕 ※以下、全て滑石製白玉1、白玉未製品17、子持勾玉2、紡錘車4、紡錘車未製品1、有孔円盤1、滑石製品2、チップ、原石ほか土器多数 | 同時期の集落のすぐそばを流れる幅10mを超える流路(報告では自然流路)。陶質土器も出土。須恵器環や土師器碗を並べたような所もある。5C後半が中心か。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SX15 | 5C中頃～6世紀前半 | 手づくね土器11 ※以下、全て滑石製白玉2、子持勾玉3、紡錘車1、紡錘車未製品1、有孔円盤2、 | 窪地(谷か?)。集落を挟んでSD14の反対側。5C後半が中心か |
| 406 | 雀居 | 4 | 包含層ほか | 5～6C | 小型丸底壺5、手づくね土器?、土製模造鏡1、土製勾玉2、土玉3、滑石製勾玉3、滑石製有孔円盤3ほか | |
| 38 | 板付 | 16 | 包含層 | 古墳? | 滑石製模造鏡1、勾玉未製品? 1 | 板付丘陵北端の落ち際。土器は弥生前～中期および中世のもののみ。 |
| 85 | 野多目前田 | 1 | 第3号溝状遺構 | 5～6C | 手づくね土器11、小型丸底壺11、土製模造鏡5、土製勾玉3、土製丸玉1、滑石製有孔円盤2 | 遺構は8Cの遺物が多く、古墳時代の遺物が混じる。上層からは中世の遺物が出土。溜池の可能性が指摘されている。 |
| 1286 | 那珂 | 151 | SD03 | 6C中頃 | ガラス玉2、滑石製有孔円盤1、滑石製垂飾1、滑石製白玉114、土製模造鏡4、土製丸玉3 | 溝の性格は不明 |
| 881 | 下月隈C | 7 | SD747 | 6C後半? | 手づくね土器5 | 水路か |
| 大20 | 仲島 | 11区 | SD13 | 6C後半～7C前半 | 滑石製刀子模造品1、滑石製子持勾玉1、滑石製有孔円盤? (紡錘車?) 2、馬の骨、須恵器大甕、下駄など | 10区と一連の溝 |
| 大34 | 仲島 | 10区 | SD13 | 6C後半～7C前半 | 須恵器大甕、移動式竈、鏝形土器、馬の骨 | 11区と一連の溝 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD04 | 6C | 土製模造鏡1 | SD13と切りあい、近い方向に伸びる。水路か |
| 大42 | 日ノ浦 | 1 | 大溝(SD01) | 6C末～7C中頃 | 子持勾玉1、移動式竈1、須恵器大甕多数 | 水路か |

表3-2 古墳時代の水辺の祭祀②

| 報告 | 遺跡 | 次数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|--------------|--------|----|---------------|-----------|---|--|
| 樋井川流域 | | | | | | |
| 819 | 樋井川B | 1 | 谷部(小河川) | 古墳前期 | 小型丸底壺(煤が付くものあり)22、高環46、器台16、手づくね土器6、土製勾玉1ほか煤が付く甕、壺など | 東西を丘陵に挟まれた谷部で、縄文時代～弥生時代の小河川が古墳時代前期に有機質を含む層で覆われ、以後埋没していった。現在、この谷部には樋井川から取水した水路が通っている。 |
| 1239 | 桧原 | 1 | 谷部祭祀遺構 SX08 | 5C後半～6C前半 | 手づくね土器54、土製模造鏡8、高環1、土製勾玉2、土製丸玉1、土製垂飾? 1、絵画土器(甕。3匹の蛇もしくは龍?) | 谷頭の湧水点祭祀か。祭祀遺物は谷の両岸から投棄されたような状況。枝葉や先端を落とされ、太さや長さが増えられた自然木も多く出土→祭壇の部材の可能性が指摘されている。韓式系土器(軟質土器など)も出土。 |
| 早良平野 | | | | | | |
| 71 | 原 | 深町 | 大溝 | 4C | 完形二重口縁壺2、完形甕2、小型丸底壺2、高環15など | 完形壺の一つは堰の背面から出土 |
| 536 | 免 | 2 | 1号溝第5井堰 | 古墳前期か | 完形小壺1 | 煤が付着 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 3号溝(水口) | 古墳前期 | 完形甕1 | 水口もしくは井堰祭祀に用いられた可能性が指摘されている |
| 428 | 四箇 | 17 | 流路 | 古墳前期 | 完形甕2 | 水利施設が多数構築された流路 |
| 1032 | 上籠 | 1 | 包含層 | 5C前半 | 小型丸底壺4、高環11など | 微高地縁辺の谷の落ち際。 |
| 71 | 原 | 深町 | 1号溝 | 5C前半 | 小型丸底壺2、手づくね土器5、高環3など | 韓式系土器(平底軟質土器)も出土(ただし、時期下る?) |
| 〃 | 〃 | 〃 | 2号溝 | 5C前半 | 小型丸底壺6、手づくね土器2など | |
| 576 | 野芥 | 8 | SD02C群土器群 | 5C前半 | 小型丸底壺19、高環9、手づくね土器5、土製模造鏡1、滑石製有孔円盤2ほか | 中層出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD02A群土器群 | 5C | 小型丸底壺3、高環11、手づくね土器3ほか | 上層出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD02E群土器群 | 5C | 高環6、小型丸底壺2、滑石製有孔円盤1ほか | 上層出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD02その他(上・中層) | 5C | 小型丸底壺7、高環8、手づくね土器9、土製管玉1、土製勾玉1、土製模造鏡1、滑石製有孔円盤5ほか | 須恵器混じる。下層出土土器の時期は古墳時代前期に遡りうる遺物を含む。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SD03 | 5C | 小型丸底壺3、高環9 | 陶質土器?(縄文)も出土。 |
| 467 | 次郎丸 | 1 | 第6号溝 | 5C前半 | 小型丸底壺36、高環78ほか | 水路がある程度埋まったところで、高環の環のみや脚部のみ、小型丸底壺や甕が据え置かれた状態で並んで出土した。土器より上の層は水平堆積(報告では人為的に埋められたと考えられるとされる)。一部古墳前期に遡る土器もあるが、祭祀の主体は5C前半で溝の廃棄時期に近い。 |
| 468 | 次郎丸 | 3 | 第10号溝 | 5C前半 | 小型丸底壺37、高環51、絵画?線刻土製品ほか | 1次調査と一連の溝で、流路の水の流れが止まった時点での祭祀の様相。韓半島系瓦質土器・陶質土器も出土 |
| 979 | 重留村下 | 5 | 流路SD01 | 5C前半 | 手づくね土器3、小型丸底壺8、高環9、舟形木製品、刀形木製品ほか | 水路か。陶質土器?も出土。 |
| 911 | 吉武 | 4 | SE01 | 5C | — | 流路SD01岸の湾入部に設けられた井戸で、石組の中に木材割り貫きの水溜を設置する |
| 〃 | 〃 | 〃 | 3号水路SD02溝 | 5C前半か | 舟形木製品1、高環7、小型丸底壺1ほか | 幅40m程度の浅い自然流路。半島系土器も出土。 |
| 92 | 拾六町ツイジ | 1 | 包含層 | 5～6C | 小型丸底壺7、手づくね土器9など | 低湿地での祭祀あるいは水田に伴う祭祀か? |
| 349 | 拾六町平田 | 2 | 包含層 | 5C後半～6C前半 | 手づくね土器8、土製模造鏡1、土製丸玉1、土製勾玉? 1、滑石製白玉2、滑石製管玉1、滑石製子持勾玉1、滑石製勾玉1、滑石製円盤1 | 旧河川が埋まりきらず、その窪みに堆積した包含層。水辺かどうかは不明確だが、低地ではある。 |
| 23 | 下山門 | 1 | 包含層 | 6C後半 | 土製円盤1、土製模造鏡2、手づくね土器4、土製丸玉2、滑石製有孔円盤1、滑石製勾玉? 1、滑石製白玉1、ガラス小玉1、滑石製垂飾? 2、滑石製鏝形? 2、滑石製刀形? 3など | 低湿地縁辺部での祭祀か? |
| 1310 | 下山門 | 2 | 包含層 | 6C後半 | 手づくね土器2、土製模造鏡7 | 低湿地縁辺部での祭祀か? |
| 485 | 東入部 | 3 | 0901溝 | 6C後半～7C前半 | 土製模造鏡1 | 流路 把手に切り込みのある甕も出土。 |

なっている(山陰中央信報社2012など)¹³⁾。

なお、弥生時代中期後半(あるいは末)の北部九州での長頸の袋状口縁壺やヒョウタン形土器、筒形器台などの出現は、北部九州の祭祀儀礼が神仙思想の隆盛という外的要因の影響下で成立したことを示唆するとされる(常松2019)。高倉洋彰氏は貝輪が多数装着された墓の被葬者について祭祀を執り行う司祭者と想定し、弥生時代中期中頃から政治的権力者(弥生的)と司祭者(縄文的)が一致してくるとしている(高倉1975)。韓半島での楽浪郡設置前後からの中国系文物の多量流入に伴い、祭祀儀礼に一部残されていた縄文時代的要素も、大陸系の思想に急速に置き換えられた可能性があり、興味深い指摘である。水辺の祭祀が中期後半以降に目立つようになる現象も、こうした中で理解できるのだろう。

表3-3 古墳時代の水辺の祭祀③

| 報告 | 遺跡 | 次数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|------|-----|----|--------------|-----------|---|---|
| 糸島地域 | | | | | | |
| 1103 | 元岡 | 31 | 谷流路 | 古墳時代前期～8C | 子持勾玉2、滑石製白玉745、滑石製有孔円盤2、滑石製有孔円柱製品1、滑石製模造鏡2、滑石製不明品2、手づくね土器32、土製丸玉3、高坏62、小型丸底壺61など | 一部8～9Cの土器も混じる。土壌分析の結果、子持勾玉が出土した層より下層は、水のある環境を示すが、上層は乾燥した環境を示す。したがって、水乞いの祭祀の可能性が高い。 |
| 1246 | 元岡 | 59 | 谷SX24 (SD33) | 5C | 滑石製白玉26、胴下部穿孔壺2、小型丸底壺3、高坏4、手づくね土器1、須恵器大甕 | 31次谷流路と一連。 |
| 1013 | 元岡 | 20 | 池状遺構SX044 | 古墳時代前期～7C | 手づくね土器74、小型丸底壺110、高坏85、鉄刀1、鞘入り鉄剣1、鑄造鉄斧1、土製模造鏡1、滑石製勾玉5、滑石製有孔円盤2、蛇紋岩製勾玉1、滑石製子持勾玉2、水晶製玉1、滑石製白玉451、馬の歯など | 狭小な長さ65mほどの谷部で、大きな谷に合流する地点に木組みを設け貯水し、溜池状にしている。湧水点祭祀か。小型丸底壺や高坏などは5C前半とみられるものが多いが、7世紀後半の完形の須恵器のまつまりなどもあり、何度かの祭祀が行われている。 |
| 1185 | 大塚 | 9 | SX01 | 5C | 手づくね土器600以上、小型丸底壺8、土製勾玉1、土製模造鏡1、滑石製有孔円盤8、滑石製剣形模造品1、滑石製勾玉2、滑石製白玉1699、滑石製隼玉4、滑石製管玉2、滑石製未製品8、碧玉製管玉2、ガラス小玉265 | 丘陵から谷に向かって注ぎ込むように伸びる流路（水路か） |
| 475 | 堀ノ内 | 1 | 101 (SD) | 6C後半 | 手づくね土器4ほか | 幅8mの自然流路か？ |
| 〃 | 〃 | 〃 | 126 (SX) | 6C後半 | 手づくね土器3、土製模造鏡2 | 溝の可能性はあるが、遺構の残存状態が悪く、不明確。 |

その他、特殊な例を挙げると、今宿五郎江12次調査では、環濠を構成する流路に付属して井泉が設けられ、その貯水のために木組みと粗砂で構築された堤の裏込めから、完形の鉄鎌1点、ガラス小玉1点、貨泉1点が出土した。井泉構築時の祭祀の可能性がある。

元岡遺跡群や今宿五郎江遺跡、上罐子遺跡などでは流路から鳥形木製品や動物形土製品、木偶や琴、剣形木製品や陽物形木器、人物線刻板などの特殊な遺物が出土し、祭祀で使われた可能性が指摘される(図6)。また、元岡遺跡群第42次調査(自然流路S D01)では桃(ヤマモモ)の種が3000点以上出土した。

単に食された桃の種の廃棄かもしれないが、黄泉国神話などから桃の種は少なくとも古墳時代には邪を払う呪具として利用されており(桃崎2011など)、注目できる例である。

(2) 古墳時代の水辺の祭祀(表3)

古墳時代前期の祭祀は、流路に設けられた堰などの水利施設から完形の甕や壺などが1～数点出土する例があり、福岡平野の那珂君休遺跡や早良平野の原遺跡・免遺跡・四箇遺跡などで確認される。なお、比恵遺跡群81次調査では堰か漁獲用の築とみられる木組みの最下段から、雀居遺跡9次調査では溝状遺構から完形の手焙形土器が出土した¹⁴⁾。本来はもっと多くの遺跡・遺構で祭祀が行われただろうが、少数の日常土器を用いた祭祀は認定が難しく、また水利施設以外の流路での祭祀は、祭祀の後に土器が完形の状態を保つことが少なく、痕跡が残らない場合が多いのだろう。小型丸底壺のような古墳時代的な土器を導入してはいるが、土器を用いた祭祀の内容は弥生時代から変わっていないようだ。

こうした状況が変化するのは5世紀前半で、流路で小型丸底壺や手づくね土器(実用できな

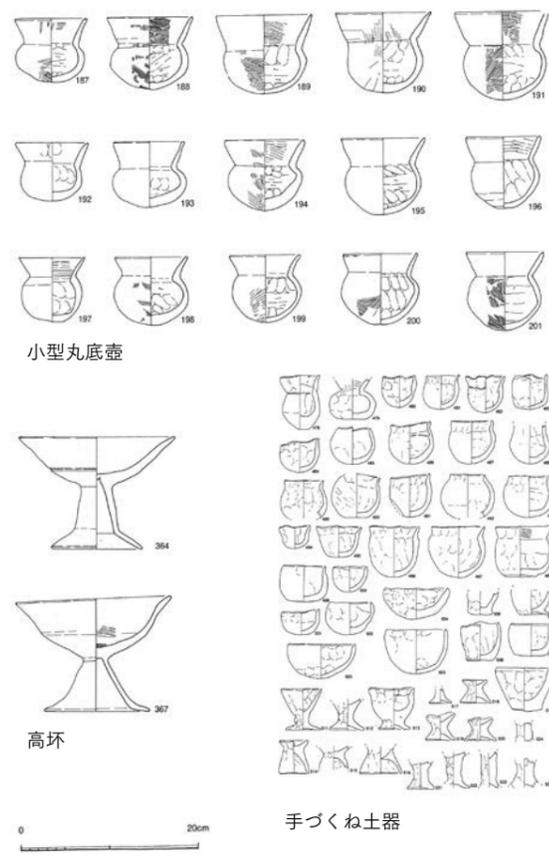


図7 高畑遺跡10号溝出土土器(一部)

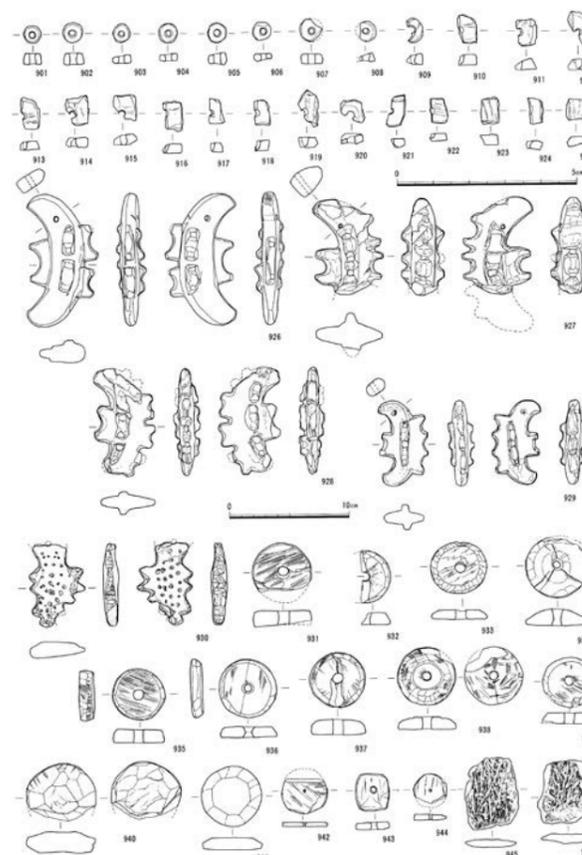


図8 立花寺B遺跡出土の滑石製品

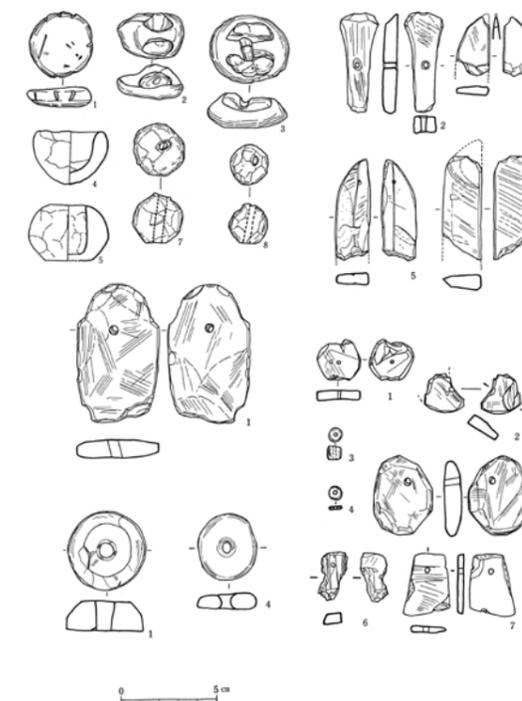


図9 下山門遺跡1次出土土製品・滑石製品(一部)

い小型の土器で、「ミニチュア土器」ともされる。)、高坏などが多量に出土する例がみられる(図7)。用いる土器の器種自体は前期から連続するものだが、祭祀の内容は明らかに変化する。次郎丸遺跡1次調査第6号溝および連続する3次調査第10号溝では、高坏の坏のみや脚部のみ、小型丸底壺や甕が並べられていた。土層の観察から、流路の水の流れが止まった段階に据え置かれたと考えられ、水乞いの祭祀と想定できる。2地点合わせ、小型丸底壺は73点、高坏は129点出土した。手づくね土器は出土していない。

次郎丸遺跡では高坏が最も多かったが、5世紀前半の水辺の祭祀に関わる小型丸底壺・高坏・手づくね土器の出土数の比率はいくつかパターンがあるらしい。高畑遺跡4・12・20次調査で一連の流路(自然流路とするか人工流路とするかは意見が分かれる)で、小型丸底壺が359点と多量出土し、対して手づくね土器は82点、高坏は192点出土した。那珂君休遺跡4次調査でも、河川から小型丸底壺60点、高坏14点が出土し、福岡平野の御笠川中流域では小型丸底壺優勢の出土状況がある。なお、那珂川上流の裂田溝関連とみられる松木遺跡の祭祀遺構は、点数は不明だが、「手づくねの小型土器が無数に出土し、高坏片も多い」と報告される。

早良平野では前述した次郎丸遺跡のほか、野芥遺跡8次調査SD02では小型丸底壺31点、高坏34点、手づくね土器17点が出土した。また重留村下遺跡5次調査流路SD01では小型丸底壺8点、高坏9点、手づくね土器3点が、吉武遺跡群4次調査3号水路SD02溝では小型丸底壺1点、高坏7点が出土し、早良平野では小型丸底壺に対し高坏がやや優勢で、手づくね土器は少ない傾向がある。

広義の糸島地域に含まれる今宿の大塚遺跡9次調査では、手づくね土器が600点以上出土したが、小型丸底壺は8点(報告数)に止まり、高坏の出土はない。類例が少な

く、不確定だが、今宿地域では手づくね土器が優勢かもしれない。

このように、5世紀前半に一齐に大量の土器を用いる祭祀が行われるようになるにも関わらず、地域によって傾向が異なる点は重要である¹⁵⁾。なお、これらの祭祀遺構からは韓式系土器が出土する例が少ない。水に対する祭祀行為に関して、渡来人の何らかの関与を想定してもよいようだ¹⁶⁾。前述の通り、5世紀代には渡来系の水利技術がもたらされ、大規模な利水・治水事業が行われたと考えられる。水に対する祭祀の方法も水利技術の中に含まれていたのだろう。

さて、5世紀前半の大量の土器を用いた祭祀は、5世紀後半に手づくね土器を含む小型の土製品と滑石製品を主体とする祭祀に移っていく（その一部は5世紀前半に遡る）ようで、1遺構での遺物の数が

表4-2 滑石製品工房関連遺構②

| 報告 | 遺跡 | 回数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|--------------|--------|-----|---------------|-----------|--|---|
| 志6 | 松ヶ上 | 1 | 滑石製品工房跡(竪穴建物) | 6C前半 | 滑石製白玉未製品79、滑石製白玉42、板状未製品2 | P165に考察あり。表に入れた以外にも、土坑や柱穴、表探などで滑石製品多数(子持勾玉-4点、勾玉、有孔円盤、紡錘車など) |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC6 | ? | 滑石製白玉未製品4 | 方形竪穴建物の一部 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC10 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉未製品8 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC12 | 6C後半 | ※全て滑石製 白玉8、白玉未製品6、模造品2、紡錘車1、紡錘車未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC14 | 5C後半～6C | ※全て滑石製 白玉3、白玉未製品5、紡錘車1、板状未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC16 | 6C前半 | ※全て滑石製 白玉4、白玉未製品11、紡錘車4 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC17 | ? | 滑石製白玉未製品3 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC19 | ? | 滑石製白玉21、滑石製白玉未製品6 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC20 | ? | 滑石製白玉2、滑石製白玉未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC21 | ? | 滑石製白玉78、滑石製白玉未製品3、未製品2 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC22 | ? | 滑石製紡錘車1、未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SK57 | 5～6C | ※全て滑石製 白玉未製品312、白玉363、有孔円盤19、棒状未製品3、板状未製品2、模造品4、勾玉1、模造品未製品1、紡錘車2 | 土器は5C、6C前半、6C後半のものが混在手づくね土器も多数出土 |
| 志13 | 松ヶ下 | 1 | 1号竪穴住居跡 | ? | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品4、碧玉製管玉2 | 松ヶ上遺跡隣接 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 3号竪穴住居跡 | 5C後半～6C | 滑石製紡錘車2、滑石製白玉未製品31 | |
| 須6 | 牛カ熊 | 1 | 第6号住居 | 6～7C | 滑石原石1 | 須恵器系土師器出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第7号住居 | 6C後半～7C前半 | 滑石原石1、作業台石 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第9号住居 | 6C後半～7C前半 | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品5、滑石片多数 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第10号住居 | 6C末～7C前半 | 滑石製紡錘車1、板状滑石片1、滑石片多数、作業台石 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第11号住居 | 6～7C | 板状滑石片1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第12号住居 | 6～7C | 滑石原石1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第13号住居 | 6C末～7C前半 | 滑石製紡錘車1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第14号住居 | 6C末～7C前半 | 滑石製勾玉1、滑石片多数 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第21号住居 | 6C後半～末 | 滑石製白玉未製品1、滑石製有孔円盤1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第22号住居 | 6～7C | 滑石2孔製品 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第23号住居 | 6C末～7C前半 | 滑石片多数 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 第28号住居 | ? | 滑石製白玉 | |
| 福岡平野 | | | | | | |
| 1286 | 那珂 | 154 | SC041 | 6C後半 | 滑石製白玉未製品1、滑石製白玉2、ガラス玉1 | |
| 699 | 高畑 | 18 | SC058 | 5C後半～6C前半 | ※全て滑石製 白玉78、白玉未製品24、勾玉未製品1、滑石原石20、屑600g | 調査区から陶質土器出土 |
| 大2 | 中・西コモリ | 1 | 住居跡 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉3、滑石製白玉未製品3、板状石材3 | 作業台とみられる手ごろな石も出土 |
| 九大3 | 筑紫地区遺跡 | 1 | 413号住居 | (5C後半)※ | 白玉・未製品・原石・板状加工品など | ※平尾2005より |
| 樋井川流域 | | | | | | |
| 723 | 田島A | 3 | SC01 | 5C後半～6Cか | 不明鉄器、碧玉製管玉 ※以下、全て滑石製有孔円盤3、滑石製品1、白玉23、白玉未製品1、滑石未製品?1、滑石礫、 | 滑石製品製作の痕跡?。調査は115㎡の調査であり、周辺に同様な住居跡が広がるかどうかは不明。鋤壺や山陰系甌形土器なども出土 |
| 早良平野 | | | | | | |
| 684 | 有田 | 180 | SC09 | 5C初頭～前半 | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品21、滑石素材1、滑石屑、作業台(砥石) | |

落ち着く傾向にあり、水辺の祭祀と認識できる例も少なくなる。

代表例は立花寺B遺跡6次調査S D14流路およびS X15(窪地)である。滑石原石やチップ、未製品なども出土したため、単なる滑石製品製作時に伴う廃棄とする見方もあるが、手づくね土器や子持勾玉も出土するため、石製模造品製作集団もしくはその管理者による5世紀中頃～6世紀前半の水辺の祭祀があったとみてよい(平尾2008)。5点の子持勾玉や有孔円盤、白玉、紡錘車などが出土した(図8)。また滑石製品を用いた祭祀の例は、拾六町平田遺跡2次調査の5世紀後半～6世紀前半の包含層、下山門遺跡1次および2次調査の6世紀後半の包含層(図9)のように、流路以外の低湿地でも認められる。

6世紀後半～7世紀前半の例では、引き続き滑石製品と小型の土製品を用いた祭祀が散見されるが、大野城市に位置する仲島遺跡S D13や日ノ浦遺跡1次調査大溝(S D01)では多数の完形に近い須恵器大甕が滑石製品などの傍から出土した¹⁷⁾。須恵器の大甕は醸造酒の生産にも用いられ、弥生時代以来の造酒法に大きな変革をもたらした(桃崎2016・櫃原考古学研究所附属博物館2013など)。祭祀に用いた大甕

表4-1 滑石製品工房関連遺構①

| 報告 | 遺跡 | 回数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|---------------|-------|-----|-------------|-------------|--|--|
| 糟屋平野以北 | | | | | | |
| 477 | 三苦 | 2・3 | SC0001 | 5C後半 | ※全て滑石製 白玉未製品425、白玉201、勾玉(欠損品3)、管玉1、有孔円盤未製品2、紡錘車3、板状原石1 | 滑石製品製作跡・鉄錐など出土 作業用土坑などもあり、「工房」か他の竪穴建物からやや離れた陶質土器?(縄蓆文)あり |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0002 | 5C後半 | ※全て滑石製 白玉未製品225、白玉35、有孔円盤1、棒状製品1 | 滑石製品製作跡 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0004 | 5C後半か | 滑石製勾玉1、滑石屑43.7g | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0005 | 5C後半か | 滑石板状品 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0015 | 5C後半か | 滑石製有孔円盤1、滑石屑35.3g | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0075 | ? | 滑石製白玉96 | 住居内の一部でまとまって出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1005 | 5C後半 | 滑石製勾玉2(うち一つは丁字頭)、勾玉未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1007 | 5C後半 | 滑石製白玉、滑石製白玉未製品 | 個数記載なし |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1008 | 5C後半か | ※全て滑石製 有孔円盤未製品3、白玉未製品1、勾玉未製品1、勾玉1、紡錘車2 | 滑石製品製作跡・鉄錐出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1009 | 5後半か | 滑石製紡錘車1、滑石製白玉、未製品 | 白玉・未製品は個数記載なし |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1011 | 5C後半 | 滑石製白玉、滑石製白玉未製品 | 数点ずつ |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1036 | 5C後半 | 滑石製白玉30以上、白玉未製品、砥石 | |
| 773 | 三苦 | 5 | SC0049 | 5C後半 | 滑石製白玉8 | 自然石を利用した作業台あり 陶質土器?(縄蓆文)あり |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0050 | 5C後半 | 滑石製白玉300以上(3か所に集中)、滑石製紡錘車1(舟状線刻あり) | 製品のみのため、製作跡ではない |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0392・0393 | 5C後半か | 滑石製白玉6、滑石未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0397 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉15、滑石製白玉未製品3、滑石製有孔円盤1 | 6世紀後半の住居と切りあう |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0400 | 5C後半か | ※全て滑石製 白玉2、白玉未製品4、勾玉2 | 竪穴建物の一部を調査 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0401 | 5～6C | ※全て滑石製 白玉1、白玉未製品2、有孔円盤1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0865 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品3 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0871 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉21、滑石製紡錘車1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC876 | 5C後半～6C前半 | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品1 | 作業用台石?あり |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0891 | 5C中頃～後半 | 滑石製子持勾玉1、滑石製白玉1 | 他よりも少し古い型式の土器共存 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0892 | 5C後半 | ※全て滑石製 紡錘車2、有孔円盤1、白玉3、白玉未製品2 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0893 | 5C後半 | 滑石製有孔円盤1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0894 | 5C後半 | 滑石製品1、滑石製白玉数点、滑石製白玉未製品数点 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0921 | 5C後半 | 滑石製白玉3、滑石製白玉未製品2 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC0922 | 5C後半 | 滑石製白玉未製品1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1252 | 5C後半か | 滑石製白玉1、滑石製白玉未製品1、滑石屑 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1255 | 5C後半～6C | 滑石製白玉1、滑石製子持勾玉片1 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1258 | 5C後半 | ※全て滑石製 有孔円盤2、白玉35、白玉未製品6以上、滑石屑 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | SC1264 | 5C後半 | 滑石製白玉22 | |
| 446 | 蒲田部木原 | 3 | 5号竪穴住居跡 | 弥生後期後半～終末期? | 滑石礫1、滑石板状未製品51、滑石製白玉未製品252、滑石製白玉 | 出土した土器は小片で紛れ込みの可能性 6Cまで下る可能性あり |
| 〃 | 〃 | 〃 | 31号竪穴住居跡 | 不明 | ※全て滑石製 大型円盤状未製品1、有孔円盤未製品1、白玉未製品3、白玉8、板状未製品、屑 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 32号竪穴住居跡 | 5世紀後半か | 滑石製白玉4、滑石製勾玉1、滑石未製品数点 | |
| 粕32 | 新大間池 | 1 | 竪穴式住居 | 6C後半～7C前半か | ※全て滑石製 原石1、荒割石材5、板状加工品4、棒状加工品9、白玉未製品12、有孔円盤未製品?1 | |
| 粕44 | 内橋坪見 | 1 | SC6 | 5C前半～中頃 | 滑石製棒状加工品4、滑石製白玉未製品8、滑石屑60 | |

表5-1 福岡県出土の土製模造鏡①

筑後平野北部

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|-------------|------|----|------------------|-----------|---|---------------|
| 飯塚南遺跡 | 筑紫野市 | 1 | 19号住居 | 6C後半～末 | | 福岡県筑紫野バイパス関係3 |
| 〃 | 〃 | 1 | 21号住居 | 6C後半～末 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 22号住居 | 6C後半～末 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 表探 | 6C後半～末? | | 〃 |
| 山の谷遺跡 | 筑紫野市 | 3 | ? | 6C末～7C前半? | ひとつは炉の中から出土 | 小田1972 |
| 鷲田山東遺跡 | 筑紫野市 | ? | 住居跡 | 8C? | | 小田1972 |
| 大曲り遺跡 | 筑紫野市 | 2 | 第2号住居跡 | 6C後半 | 同住居より手づくね土器出土 | 福岡県福岡南バイパス関係1 |
| 野黒板遺跡 | 筑紫野市 | 1 | 北区 | 6C後半か | 集落域 | 福岡県福岡南バイパス関係1 |
| ごこく山古墳 | 筑紫野市 | ? | ? | ? | | 上野1973 |
| 長道遺跡 | 筑紫野市 | 6 | ? | ? | | 小田1972 |
| 杉塚麁寺 | 筑紫野市 | 1 | 表土 | ? | 基壇の下より6C後半～末の須恵器出土 | 筑紫野市4 |
| 脇田遺跡 | 筑紫野市 | 1 | 5号住居跡 | 5C前半～中頃 | 同住居内より滑石製品など出土 | 筑紫野市9 |
| 八ヶ坪遺跡第6地点 | 筑紫野市 | 1 | 第1号竪穴式住居跡 | 5C前半～中頃 | 炉址内より出土 | 筑紫野市22 |
| 岡田地区遺跡群1区 | 筑紫野市 | 1 | 14号住居址 (SC14) | 5C中頃～後半 | | 筑紫野市56 |
| 〃 | 〃 | 1 | 50号溝 (SD50) | 5C中頃～後半 | 同溝より手づくね土器・滑石製有孔円板などが出土 溝幅が部分的に広い場所に手づくね土器が集中 | 〃 |
| トドキ遺跡 | 筑紫野市 | 1 | 53号土坑? (SK53) | ? | | 筑紫野市58 |
| 貝元遺跡 | 筑紫野市 | 1 | 42号住居(SC42) | ? | 埋土中より土製丸玉とともに出土 | 筑紫野市60 |
| 〃 | 〃 | 4 | 68号住居(SC68) | 6C後半～末 | 同住居より滑石製円板・手づくね土器などが出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 柱穴 | ? | — | 〃 |
| 干湯遺跡 | 小都市 | 2 | Cトレンチ表層 | 7C前半～中頃? | 1次被熱を受ける 竈内出土 | 福岡県59 |
| 三沢栗原遺跡1区 | 小都市 | 1 | 1号住居跡 | 5C後半 | 同住居より手づくね土器出土 | 小都市15 |
| 三国の鼻遺跡IV地区 | 小都市 | 5 | 26号住居跡 | 6C前半～中頃 | 同住居より手づくね土器・玉・滑石製有孔円板・鉄鏃など出土 | 小都市39 |
| 津古生掛遺跡1区 | 小都市 | 2 | 57号住居跡 | 5C後半 | | 小都市50 |
| 〃 | 〃 | 1 | 60号住居跡 | 5C後半～6C? | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 100号住居跡 | 5C後半～6C? | | 〃 |
| 津古土取遺跡 | 小都市 | 1 | 包含層 | 5C後半～6C中頃 | 紐なし | 小都市59-3 |
| 干湯城山遺跡 | 小都市 | 1 | 63号住居跡 | 7C中頃～後半 | | 小都市102 |
| 西島遺跡1区 | 小都市 | 2 | 6号住居跡 | 6C後半～7C初頭 | 竈より出土 | 小都市109 |
| 三沢宮ノ原遺跡 | 小都市 | 1 | 7号竪穴建物 (SC07) | 5C前半～中頃? | — | 小都市185 |
| 上岩田遺跡6b区 | 小都市 | 1 | 12069号ピット | 6C末～7C? | | 小都市248 |
| 小坂井蓮輪遺跡 | 小都市 | 1 | 7号竪穴住居跡 (SC07) | 6C末～7C初頭 | | 小都市251 |
| 八並遺跡 | 筑前町 | 3 | ? | ? | 箱式石棺墓付近 | 小田1972 |
| 八ヶ坪遺跡第14地点 | 筑前町 | 1 | B区東端段落ち | 5C中頃～後半? | | 福岡県冷水バイパス関係 |
| 七坂遺跡F区 | 筑前町 | 1 | 3号竪穴住居跡 | 6C中頃～末 | 2次被熱を受ける 竈脇出土 同住居より手づくね土器出土 | 福岡県70 |
| 梶原遺跡 | 筑前町 | 1 | 包含層 | — | | 夜須町22 |
| 松崎遺跡 | 筑前町 | 1 | 表土糜土 | — | | 夜須町28 |
| 切杭遺跡 | 筑前町 | 1 | 8号溝 | ? | 溝のL字状コーナーのやや幅が広がったところで手づくね土器・滑石製品などとともに出土 8C～11C頃の土器が出土 | 夜須町36 |
| 梨子木遺跡 | 筑前町 | 12 | 第1調査区住居 | ? | 竈やその周辺より出土 手づくね土器・ミニチュア移動式竈・土製丸玉など出土 | 夜須町46 |
| 〃 | 〃 | 19 | 72号住居 | 6C中頃 | 竈やその周辺より出土 同住居より土製丸玉・土製勾玉・手づくね土器など出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 12 | 第3調査区 | ? | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 6 | 14号掘立柱建物 | ? | 同掘立柱建物より手づくね土器・土製丸玉・人形土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 土壇 | ? | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | 溝 | ? | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 包含層 | ? | | 〃 |
| 竹ノ子遺跡 | 筑前町 | 1 | 9号住居 | 6C中頃 | 同住居より手づくね土器・鉄鏃など出土 | 夜須町58 |
| 〃 | 〃 | 1 | 17号住居 | 6C中頃～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 6号土壇墓 (古代末～中世初頭) | ? | 紛れ込みか | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | 6号土壇 | ? | 同土壇より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 8号土壇 | 6C中頃 | 同土壇より手づくね土器・土製丸玉・玉・鋤未製品など出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 自然河道 | 6C | 同河道より手づくね土器・土製丸玉・管玉・耳環など出土 | 〃 |
| 三国手遺跡 | 筑前町 | 4 | 1号住居 | 6C | 竈周辺の埋土中より出土 同住居より手づくね土器・土製丸玉・鉄鏃など出土 | 夜須町59 |
| 〃 | 〃 | 7 | 3号住居 | 6C後半 | 同住居より手づくね土器など出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 4号住居 | 6C後半～末 | 同住居より手づくね土器・手鏃など出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 7号住居 | 5C後半～6C | 同住居内から手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 8号住居 | 6C後半～末 | 竈付近の埋土中より出土 同住居内から手づくね土器出土 | 〃 |
| 口ヶ坪遺跡B区 | 筑前町 | 3 | 4号竪穴住居跡 | 6C末～7C初頭 | 同住居跡より手づくね土器出土 | 筑前町12 |
| ヒルハタ遺跡 | 筑前町 | 1 | 62号住居 | ? | — | 筑前町14中 |
| 下高橋馬屋元遺跡(9) | 大刀洗町 | 2 | 1号竪穴住居跡 (SC1) | 6C末～7C初頭 | 竈に塗られて出土と竈全面より出土 紐なし | 大刀洗町31 |

の内容物も酒だろうか。ヤマタノオロチ退治の神話においても、暴れ川をモデルとするオロチは強い酒に酔わされ、眠ったところを退治される。5世紀前半に水辺の祭祀で多量に使用された小型丸底壺も、酒器だったかもしれない。

また、仲島遺跡S D13では20体分以上とみられる首より上だけの馬の骨が出土した。時期は下るが、日本書紀に「(642年は早魃の年で) 戊寅に郡臣が、村々の祝部(神職)が教えたとおりに牛や馬を殺し、それを供えて諸社の神々に祈ったり、市をしきりに移したり、河伯(水神)に祈祷したりしましたが、さっぱり雨が降りません。」という記述があり、関連が指摘されている。元岡遺跡群第20次調査池状遺跡S X044でも馬の歯が出土した。

(3) 滑石製品生産について(表4)

滑石製品生産については平尾氏による集成・検討(平尾2005)があるが、水辺の祭祀と深く関わるため、確認しておく。

博多湾沿岸地域の滑石産地は糟屋郡の三郡山地が知られ、滑石製品生産関連遺跡も糟屋地域やその周辺に集中する。滑石製品生産関連遺跡とは、未製品¹⁸⁾や原石、屑などを出土する竪穴建物を工房と認定するもので、石製の作業台や鉄錐などの鉄製工具が出土することもある。工房の可能性のある竪穴建物が単独で存在する遺跡(仮にA類とする)と、複数集中する遺跡(仮にB類とする)がある。

時期ごとに糟屋地域以北の遺跡をみると、5世紀前半にはA類の内橋坪見遺跡1次調査S C 6がある。三苦遺跡2・3・5次の例はB類で、5世紀後半(末に近い時期)を中心的な時期とし、滑石関連遺物を出土する竪穴建物は31軒ある。三苦遺跡は滑石の産地である糟屋平野から水運で宗像に至るルート上に立地し、沖ノ島祭祀などに関連する工房群と想定してもいいかもしれない¹⁹⁾。また、蒲田部木原遺跡では滑石関連遺物を出土する竪穴建物が3軒あり、うち5号竪穴住居跡は弥生時代の土器が出土したが、小片で紛れ込みの可能性があり、32号竪穴住居に近い5世紀後半頃と考えたほうがよいだろう。5世紀後半に滑石製品の需要の増加に伴ってB類が出現したとも考えられる。

松ヶ上遺跡と松ヶ下遺跡は隣接する一連の遺跡で、B類の工房群である。滑石関連遺物が出土する竪穴建物は合わせて13軒あり、6世紀前半を中心とする時期である。6世紀後半～7世紀前半の時期では新大間池遺跡の例(A類)と、6世紀末頃を中心とする牛熊遺跡の例(B類・12軒)がある。以上から、糟屋地域以北には複数の滑石製品生産関連遺跡が存在するが、現在の資料ではB類は少しずつ時期を異にして継続的に存在する。これが工人の移動を示すものかは検討を要するが、5～6世紀を通して間違いなく生産拠点的な集落が存在する。

糟屋地域以北以外の滑石生産関連遺跡をみると、5世紀前半の有田遺跡群第180次S C 09(早良平野)、5世紀中頃～6世紀前半の立花寺B遺跡(福岡平野)、5世紀後半～6世紀前半の高畑遺跡18次調査S C 058や中・西コモリ遺跡住居跡(福岡平野)、5世紀後半～6世紀の田島A遺跡(樋井川流域)、6世紀後半の那珂遺跡群154次調査S C 041(福岡平野)がある。未製品のほとんどが流路から出土した立花寺B遺跡を除き、全てA類である。このうち6世紀後半の那珂遺跡群例は住居から滑石製白玉未製品1点と滑石製白玉2点が出土したのみで明確な工房とは認められず、これが工房でないならば、6世紀後半代は糟屋平野以外に工房が認められない。この時期には糟屋平野で一元的に周辺地域に供給する滑石製品を生産していた状況に近いのだろう。

(4) 土製模造鏡について(表5・6)

土製模造鏡とは、径3～6cm程の円盤の中央を摘まみ上げ、そこに穴をあけた小型の土製品である(IV類)。折原洋一氏の整理を参考にすると、関東に集中する例(Ⅲ類-粘土紐を橋状に貼り付けるもの)は北部九州に集中する例(IV類)と鈕の形態が異なり、系譜を異にする可能性が高い(折原2003)。北部九州の例は、鏡を模したものかどうか怪しく、土製丸玉と共伴する例が多いから、紐を通してネックレスや腕輪とする土製丸玉の亜種かもしれない。

福岡県下の土製模造鏡を集成したのが表5である²⁰⁾。林潤也氏も指摘した通り、北部九州の土製模造

表5-2 福岡県出土の土製模造鏡②

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|------------|------|---|----------------|-----------|---|-------------------|
| 玉満松木ソノ遺跡 | 久留米市 | 3 | 10号竪穴式住居(SI10) | 5C中頃～後半 | 紐なし 竈より出土 | 三猪町6 |
| 津福西小路遺跡 | 久留米市 | 1 | 5号住居跡(SI5) | 5C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 完形に近い遺物は壁付近に置かれ、住居の廃絶に伴う祭祀か？ | 久留米95 |
| 碓遺跡(4) | 久留米市 | 1 | 20号溝(SD20・中世) | ? | 紛れ込みか | 久留米196 |
| 塚堂遺跡D地区 | うきは市 | 1 | 5号住居 | 5C前半～中頃 | 竈内より出土 家屋の廃棄に伴う竈祭祀が想定されている | 福岡県浮羽バイパス関係4・2分冊 |
| 船越二ノ上遺跡 | 久留米市 | 1 | 3号竪穴住居跡 | 5C後半～7C中頃 | | 福岡県(A版)浮羽バイパス関係11 |
| 大的遺跡 | 久留米市 | 1 | 4号土坑(廃棄土坑) | 4～5C | 同土坑より手づくね土器・土製勾玉など出土 | 福岡県(A版)浮羽バイパス関係19 |
| 割子田遺跡 | 広川町 | 3 | 2号大溝 | 6C中頃～後半 | 同溝より土製丸玉・土製勾玉・手づくね土器など出土 | 広川町7 |
| 北の前遺跡(2) | 広川町 | 1 | 1号竪穴住居跡 | 6C前半～中頃 | 床面より出土 同住居より土製丸玉・手づくね土器など出土 | 広川町10 |
| 田佛遺跡 | 筑後市 | 1 | 6号住居跡 | 5C初頭～中頃 | 同住居より手づくね土器など出土 | 筑後市5 |
| 森ノ木遺跡 | 筑後市 | 1 | 227号竪穴住居跡 | ? | — | 筑後市6 |
| 鶴田西畑遺跡 | 筑後市 | 1 | 10号竪穴住居(SI10) | 5C前半～中頃 | 同住居内より手づくね土器・蛇紋岩製勾玉・方形板刃先など出土 | 筑後市25 |
| 津島九反坪遺跡 | 筑後市 | 1 | SX300(溜まり) | 5C? | 同遺構より手づくね土器など出土 | 筑後市42 |
| 蔵敷東野屋敷遺跡 | 筑後市 | 1 | 1号土坑(SK01) | 5C前半～中頃 | 同土坑より馬形土製品・竈支脚など出土 | 筑後市93 |
| 梅津横馬場遺跡(2) | みやま市 | 1 | 包含層 | ?(弥生?) | | 九州新幹線関係1 |
| 小川遺跡 | みやま市 | 1 | 表探 | ? | — | 九州新幹線関係3 |
| 藤の尾垣添遺跡 | みやま市 | 1 | 25号住居跡 | 5C後半～6C中頃 | 竈燃焼部出土 同住居内より手づくね土器出土 | 九州新幹線関係9 |
| 蒲船津江頭遺跡 | 柳川市 | 1 | 包含層(谷周辺) | 5C後半? | | 福岡県大川バイパス関係6 |
| 上寺嶋遺跡 | 大牟田市 | 1 | 1号土坑(竪穴住居?) | 5C中頃 | 遺構は竪穴住居の可能性アリ 同土坑より滑石製白玉・ガラス小玉・手づくね土器・滑石製紡錘車模造品・鳥形土製品など出土 | 大牟田市43 |

二日市地狭帯

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|-------------|------|---|-----------|---------|----------------------------------|--------|
| 太宰府不丁遺跡 | 太宰府市 | 1 | 溝 | 8C? | | 小田1972 |
| 裏の田遺跡 | 太宰府市 | ? | 18号住居跡 | ? | | 上野1973 |
| 大宰府条坊跡(241) | 太宰府市 | 1 | 包含層 | ? | 新羅土器、土玉、羽口なども出土しているが、層の中心年代は8～9C | 太宰府市82 |
| 京ノ尾遺跡(4) | 太宰府市 | 3 | 流路(SX100) | 5C後半～8C | 6C末～7C初の土器が多い 同流路から手づくね土器出土 | 太宰府市85 |

鏡は竪穴建物から出土する例が多く、特に竈周辺から出土する(林2012)。下高橋馬屋元遺跡の例のように竈の壁体内に塗り込まれており、竈構築の際の祭祀に用いられたと考えられる例や、竈の燃焼部から出土したにも関わらず2次的焼成を受けておらず、竈の廃棄の際の祭祀に用いられたと考えられる例もある²¹⁾。竈の神あるいは火の神への祭祀と考えられる。なお、八ヶ坪遺跡第6地点の竪穴建物のように、土製模造鏡出現期である5世紀前半～中頃の炉跡から出土した例もあり、示唆的である。

さて、土製模造鏡を水辺の祭祀に用いる例も少数ある。そこで地域ごとに出土遺構を遺構の種類と時期別にカウントしたのが表6である。まず分布をみると5世紀～6世紀前半の分布の中心は筑後平野だが、6世紀後半～7世紀には筑後平野南部にみられなくなり、筑後平野北部や福岡平野で集中的に出土し、また豊前東部でも多く出土するようになる。

出土遺構をみると、筑後平野北部・筑後平野南部・福岡平野・筑豊地域・豊前東部では竪穴建物(特に竈周辺)での出土が多いが、早良平野や糸島地域では竪穴建物での出土がほとんどなく、むしろ溝や流路、また下山門遺跡や拾六町平田遺跡で多数の滑石製品とともに出土したように低湿地の包含層での出土が多い。つまり、これらの地域には竈祭祀に土製模造鏡を用いる習慣が伝わらず、滑石製品と共に水辺の祭祀に用いられることも多かったようだ。

(5) 古墳時代の祭祀と神話

古墳時代の祭祀と神話との関連性を考える上で穂積裕昌氏の論文が参考となる。穂積氏は三重県津市六六A遺跡の井泉の床面から1点ずつ出土した木製刀形と滑石製勾玉に注目し、記紀に記された誓約儀礼との共通性を指摘する。説話はアマテラスとスサノヲが「天ノ安ノ河」の「天真名井」で、水に剣や

表5-3 福岡県出土の土製模造鏡③

福岡平野

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|-----------|------|---|---------------|-----------|---|---------|
| 比恵遺跡群(25) | 福岡市 | 1 | 包含層 | ? | 弥生時代包含層より出土 土製模造鏡ではない? | 福岡市255 |
| 比恵遺跡群(46) | 福岡市 | 1 | 包含層 | ? | | 福岡市403 |
| 東比恵(2) | 福岡市 | 1 | 混入 | ? | 低地の遺跡 | 福岡市1051 |
| 雀居遺跡(4) | 福岡市 | 1 | 包含層 | ? | 土製丸玉とともに出土 | 福岡市406 |
| 野多目前田遺跡 | 福岡市 | 5 | 3号溝状遺構 | ? | 手づくね土器・土製勾玉なども出土 | 福岡市85 |
| 松木遺跡142街区 | 那珂川市 | 2 | 1号住居址 | 6C後半 | 同住居内から手づくね土器や玉・滑石製白玉などが出土 | 那珂川町11上 |
| 松木遺跡150街区 | 那珂川市 | 2 | 6号竪穴住居跡(竈内出土) | 5C中頃～後半 | 同住居内より手づくね土器出土 作りが雑 | 那珂川町11下 |
| 井河遺跡群 | 那珂川市 | 3 | 3号住居址 | 6C末～7C初頭 | 床面直下出土 同住居より鉄鏃・手づくね土器・鉄滓・勾玉・玉など出土 | 那珂川町19 |
| 〃 | 〃 | 4 | 3号土坑 | 6C末～7C初頭 | 同調査区内より子持勾玉出土 出土遺構は3号住居址に切られる 同遺構より勾玉・玉など出土 | 〃 |
| 平蔵遺跡群 | 那珂川市 | 1 | 表層 | 6C末～7C初頭? | | 那珂川町22 |
| 惣利西遺跡 | 春日市 | 1 | 11号住居跡 | 7C中頃 | 同調査区より玉類多数出土 近接する窯跡に関連か? | 春日市15 |
| 〃 | 〃 | 1 | 14号住居跡 | 7C中頃 | 同住居より鉄鏃・鉄鏃・玉・土鈴・土製勾玉など出土 | 〃 |
| 下白水大塚古墳 | 春日市 | 1 | 盛土中 | 6C後半～7C前半 | 土製人形・土製獣・土製勾玉・手づくね土器など出土 | 小田1972 |
| 仲島遺跡10区 | 大野城市 | 1 | 4号溝(SD4) | 6C後半～7C初頭 | | 大野城34 |
| 〃 | 〃 | 1 | ? | ? | | 〃 |
| 仲島遺跡7区 | 大野城市 | 1 | 1号竪穴住居(SB01) | 6C後半～7C初頭 | | 大野城37 |
| 牛頭梅頭遺跡(2) | 大野城市 | 2 | 造成平坦面(SX07) | 6C末～7C中頃 | 炭化物が集中する場所より出土 同遺構より手づくね土器・滑石製紡錘車など出土 | 大野城84 |
| 〃 | 〃 | 1 | 造成平坦面(SX08) | 6C末～7C | | 〃 |
| 牛頭梅頭遺跡(3) | 大野城市 | 2 | 竪穴住居?(SX15) | 6C末～7C | 同住居より土製丸玉出土 | 大野城85 |
| 〃 | 〃 | 2 | 土坑(SX18) | 6C末～7C中頃 | — | 〃 |
| 葉師の森遺跡(5) | 大野城市 | 1 | SC04 | 6C後半～7C初頭 | | 大野城100 |
| 〃 | 〃 | 7 | SC11 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | SC12 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | SC16 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SC20 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SC25 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より丸玉出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SC26 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SC26 周辺 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SC27 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | SC28 | 6C後半～7C初頭 | 同住居より丸玉出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SX73(土坑) | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | SX74(土坑) | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SX91(土坑) | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SX102(土坑) | 6C後半～7C初頭 | 手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | SX104(土坑) | 6C後半～7C初頭 | 手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 4 | A区北辺包含層 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 2 | 検出面 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 水田埋土 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | SD25 | 6C後半～7C初頭 | | 〃 |

樋井川流域

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|-----------|-----|---|------|------|-------|--------|
| 樋井川A遺跡(1) | 福岡市 | 2 | 混入 | ? | | 福岡市682 |
| 梅林遺跡(2) | 福岡市 | 1 | SC06 | 6C後半 | 溝付き住居 | 福岡市660 |

早良平野

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|-----------|-----|---|-------------|------------|-------------------|--------------|
| 大又遺跡 | 福岡市 | 5 | 竪穴状遺構(祭祀場?) | 6C中頃～7C初頭? | 住居? | 福岡県今宿バイパス関係3 |
| 下山門遺跡B地点 | 福岡市 | 3 | 包含層(杭列あり) | 6C中頃～末 | 紐なし 土製模造鏡か? | 福岡市23 |
| 下山門遺跡(2) | 福岡市 | 7 | 包含層 | 6C後半 | 低湿地縁辺部での祭祀か | 福岡市1310 |
| 拾六町平田(2) | 福岡市 | 1 | 包含層 | 5C後半～6C前半 | 低地の包含層 | 福岡市349 |
| 野芥遺跡(8) | 福岡市 | 2 | SD02 | 5C前半 | 水路か | 福岡市576 |
| 東入部遺跡群(3) | 福岡市 | 1 | 0901溝 | 6C末～7C初頭 | 同溝より把手に切り込みのある甌出土 | 福岡市485 |

糸島地域

| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
|----------|-----|---|----------|-----------|--------------|---------|
| 堀ノ内遺跡(1) | 福岡市 | 2 | SD126 | 6C後半～7C初頭 | 同溝より手づくね土器出土 | 福岡市475 |
| 大塚(9) | 福岡市 | 1 | SX01(流路) | 5C前半 | 多数の祭祀遺物と出土 | 福岡市1185 |

表5-4 福岡県出土の土製模造鏡④

| 宗像地域 | | | | | | |
|-------------|------|---|--------------------|-----------|---|---------------|
| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
| 夜臼・三代地区遺跡群 | 新宮町 | 1 | 貝塚(弥生) | ? | — | 新宮町8 |
| 井ノ上遺跡2区 | 古賀市 | 6 | 1号祭祀遺構 | 6C? | 祭祀遺構は溝に近接する | 古賀市48 |
| 野坂一町間遺跡 | 宗像市 | 1 | 第5号住居跡 | 5C前半~中頃 | 同住居より手づくね土器出土 | 宗像市9 |
| 久原ヶ下遺跡 | 宗像市 | 1 | 72号竪穴住居跡(SC72) | 5C初頭~中頃 | 床面より出土 同住居より手づくね土器出土 | 宗像市48 |
| 尾崎・天神遺跡 | 遠賀町 | 1 | 33号住居 | ? | 竈壁内より出土 同住居より手づくね土器出土 | 遠賀町4 |
| 〃 | 〃 | 4 | 谷2(祭祀跡) | 6C末~7C中頃 | 同谷より手づくね土器・土製丸玉・鉄滓など出土 | 〃 |
| 夏井ヶ浜遺跡 | 芦屋町 | 1 | ? | ? | — | 小田1972 |
| 立屋敷遠賀川川底 | 水巻町 | 2 | — | ? | — | 小田1972 |
| 筑豊地域 | | | | | | |
| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
| 宮ノ下遺跡I区 | 宮若市 | 1 | 3号掘立柱建物 | 6C後半 | 紐なし | 若宮町18 |
| 川島嘉麻川川底 | 飯塚市 | ? | ? | ? | — | 上野1973 |
| 香塚遺跡 | 飯塚市 | 1 | 1号住居跡 | ? | 土製模造鏡でない可能性あり | 穂波町6 |
| 〃 | 〃 | 3 | 8号住居跡 | ? | — | 〃 |
| 〃 | 〃 | 3 | 18号住居跡 | 5C後半 | 同住居より手づくね土器大きく穿孔した甕が出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 19号住居跡 | 5C後半~6C前半 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 影塚東遺跡 | 桂川町 | 1 | 25号住居跡 | 6C中頃~後半 | 同住居より手づくね土器出土 | 桂川町6 |
| 北九州地域 | | | | | | |
| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
| 黒崎貝塚(5) | 北九州市 | 1 | 包含層 | 5C後半~7C初頭 | — | 北九州市財団275 |
| 大積前田遺跡 | 北九州市 | 1 | 包含層 | ? | — | 北九州市財団201 |
| 勝円遺跡C地点 | 北九州市 | 2 | 包含層(A区) | 5C後半~7C | — | 北九州市財団41 |
| 〃 | 〃 | 4 | 包含層(G区) | 6C | — | 〃 |
| 長野E遺跡 | 北九州市 | 1 | 13号住居跡 | 6C末~7C初頭 | 紐なし 同住居跡より手づくね土器出土 | 北九州市財団42 |
| 潤崎遺跡 | 北九州市 | 1 | 土壇2 | 5C中頃~後半 | 土坑中層に穿孔された壺や甕が据え置かれる | 北九州市財団49 |
| 畠山遺跡 | 北九州市 | 1 | 21号柱穴(P-21) | 6C末~7C初頭 | — | 北九州市財団57 |
| 森山遺跡 | 北九州市 | 1 | 包含層 | 6C | — | 北九州市財団154 |
| 上清水遺跡 | 北九州市 | 1 | 包含層 | 5C後半~7C? | — | 北九州市財団160 |
| 上清水遺跡IV区 | 北九州市 | 1 | 包含層 | ? | — | 北九州市財団290 |
| 長野フンズ遺跡 | 北九州市 | 3 | 包含層(流路?) | 5C前半~中頃? | — | 北九州市財団301 |
| 貫・裏ノ谷遺跡 | 北九州市 | 1 | 流路1 | — | 同流路より土製勾玉・製塩土器・手づくね土器出土 | 北九州市財団415 |
| 豊前東部 | | | | | | |
| 遺跡名 | 所在 | 数 | 出土遺構 | 時期 | 備考 | 報告書 |
| 辻垣ヲサマル遺跡 | 行橋市 | 1 | 大溝 | 5C後半~7C | 同溝よりガラス小玉出土 | 福岡県椎田道路関係1 |
| 皆見遺跡 | みやこ町 | 3 | 2号竪穴住居跡 | 6C末~7C前半 | 同住居より手づくね土器・土製丸玉など出土 | 福岡県椎田バイパス関係3 |
| 〃 | 〃 | 3 | 3号竪穴住居跡 | 6C中頃~後半 | 同住居より土製丸玉など出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | ビット206 | ? | 手づくね土器とともに出土 | 〃 |
| 一の塚古墳 | みやこ町 | 1 | 盛土内 | 6C | 土製勾玉や丸玉と出土 | 小田1972 |
| 犀川小学校西側遺跡 | みやこ町 | 1 | 住居跡 | ? | 土製丸玉などとともに出土 | 小田1972 |
| 末江畑田遺跡 | みやこ町 | 1 | 3号竪穴住居跡 | 6C末~7C前半 | 同住居より手づくね土器出土 | みやこ町3 |
| 〃 | 〃 | 2 | 4号竪穴住居跡 | 6C後半~7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 8号竪穴住居跡 | 6C末~7C初頭 | 同住居より手づくね土器出土 | 〃 |
| 大久保小田遺跡 | みやこ町 | 1 | 3号住居 | 6C後半 | 紐なし 同調査区内より手づくね土器出土 | みやこ町4 |
| 花熊帯田遺跡 | みやこ町 | 2 | 1号竪穴住居跡 | 6C末~7C初頭? | 紐なし 時期は調査区出土の遺物による | みやこ町5 |
| 山崎遺跡 | 築上町 | 2 | 16号住居跡 | 6C後半~7C初頭 | 竈内より出土 | 福岡県椎田バイパス関係7下 |
| 赤幡森ヶ坪遺跡 | 築上町 | 3 | 107号住居跡 | 6C後半 | — | 福岡県椎田バイパス関係8中 |
| 〃 | 〃 | 1 | 11号土壇 | 6C後半? | — | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 遺構検出面 | 6C後半? | — | 〃 |
| 〃 | 〃 | 3 | 34号土壇 | 6C後半? | 巨石を取り囲む土壇 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 1 | 45号土壇 | 6C後半? | — | 〃 |
| 〃 | 〃 | 7 | 46号土壇(107号住居と同一か?) | 6C後半? | — | 〃 |
| 築城五反田遺跡第2地点 | 築上町 | 1 | 7号住居跡 | 5C中頃 | 土製勾玉・土製管玉とともに、竈脇の浅いビットで甕の下より出土 同住居跡より手づくね土器出土 | 福岡県153(豊前) |
| 大村石畑遺跡 | 豊前市 | 1 | 5号住居跡 | 6C前半 | 同住居跡より手づくね土器など出土 | 豊前市22 |
| 塔田琵琶田遺跡 | 豊前市 | 1 | 2号溝状遺構(中世) | 5C中頃~後半 | 混入か 同調査区より | 豊前市29 |
| 石筆遺跡 | 上毛町 | 1 | 9号溝状遺構(SD09) | 6C末~7C初頭? | 複数の遺構が絡まりあう 同調査区より土製丸玉 | 上毛町12 |

表6 土製模造鏡の出土遺構と時期

| 筑後平野北部 | | | | |
|--------|---------|-----------|---------|--------|
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | 3 | 9 | 17 | 4 |
| 柱穴 | | | 1 | 2 |
| 土坑 | | | 1 | 3 |
| 溝・流路 | | 1 | 1 | 2 |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | 1 | | 2 |
| 筑後平野南部 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | 4 | 3 | | 2 |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | 2 | | | 1 |
| 溝・流路 | | | 1 | |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | 1 | | 1 |
| その他 | | | | 3 |
| 二日市地狭帯 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | | | 1 |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | | | | 2 |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | 1 |
| その他 | | | | |
| 福岡平野 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | 1 | 15 | |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | 7 | |
| 溝・流路 | | | 2 | 1 |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | 1 | 3 |
| その他 | | | 7 | 2 |
| 樋井川流域 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | | 1 | |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | | | | |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | | | 1 |
| 早良平野 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | | 1 | |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | 1 | | 1 | |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | 1 | 2 | |
| その他 | | | | |
| 糸島地域 | | | | |
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | | | |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | 1 | | 1 | |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | | | |

| 宗像地域 | | | | |
|------|---------|-----------|---------|--------|
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | 2 | | | 1 |
| 柱穴 | | | | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | | | | |
| 谷 | | | 1 | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | | | 4 |

| 筑豊地域 | | | | |
|------|---------|-----------|---------|--------|
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | 2 | 1 | 2 |
| 柱穴 | | | 1 | |
| 土坑 | | | | |
| 溝・流路 | | | | |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | | | 1 |

| 北九州地域 | | | | |
|-------|---------|-----------|---------|--------|
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | | | 1 | |
| 柱穴 | | | 1 | |
| 土坑 | | 1 | | |
| 溝・流路 | | | | 1 |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | 1 | | | 7 |
| その他 | | | | |

| 豊前東部 | | | | |
|------|---------|-----------|---------|--------|
| | 5C前半~中頃 | 5C後半~6C中頃 | 6C後半~7C | 不明・その他 |
| 竪穴建物 | 1 | 1 | 9 | 1 |
| 柱穴 | | | | 1 |
| 土坑 | | | 4 | |
| 溝・流路 | | | 1 | 1 |
| 谷 | | | | |
| 包含層 | | | | |
| その他 | | 1 | 1 | 1 |

※5世紀中頃~後半は5C後半としてカウント
6世紀中頃~後半は6C後半としてカウント
網掛けは多数出土で注目すべき部分

玉を割り入れ、濯いで嚙んで息を吹き出すとそこから神々が現れるというもので、この時生まれた神々の性別によって占い（ウケヒ）を行っている（ちなみに宗像の三女神はこのとき生まれている）。六大A遺跡の井泉は、湧水の吹き出し口となる大溝の右岸に石を貼り、板材でL字状に囲った直径2.5mのもので、河（大溝）・井戸（湧水点）・剣・玉といった内容が、記紀の誓約儀礼と対応し、その原形が古

表7 7世紀後半以降の水辺の祭祀

| 報告 | 遺跡 | 回数 | 遺構 | 時期 | 遺物 | 備考 |
|---------------|-------|-----|----------------|-----------------|---|---|
| 糟屋平野以北 | | | | | | |
| 189 | 戸原麦尾 | 1 | SD3802 | 11C後半頃 | 馬を描いた板絵 | 幅5m以上、深さ1.5m以上の直線的大溝217集に考察あり |
| 621 | 香椎B | 1~4 | SD103 方形区画溝 | 12C前半 | 斎串2・刀形木製品3・五輪塔形木製品1 | 斎串は人物（仏？）墨書付 |
| 志6 | 松ヶ上 | 1 | 2号井戸 | 13C後半~ 14C前半 | 呪符木簡 | 「天」と5文字書いてある、それ以下の文字は判読不明 |
| 福岡平野 | | | | | | |
| 1388 | 雀居 | 14 | 水田耕作土 | 6~8C | 小枝束（クリ・ウツギ・バラ属など）、桃の種64（第1面出土種子の8割以上がモモ） | バラ属は棘をもつことから、魔除けの意味合いがある可能性が指摘される。 |
| 932 | 下月隈C | 8 | SD735 | 8C | 人面墨書土器1、完形土師器甕（煤付着）1 | 「香」「依」「美」と書いた墨書土器も出土。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SX1050 | 8C | 人形1 | SD735から堰で導水する水口 |
| 大6 | 仲島 | 6区 | 氾濫原（御笠川） | 8C | 人面墨書土器2 | それぞれ2面に人面を描く |
| 大47 | 石勺 | H地点 | 牛頭川氾濫原 | 8C? | 土馬1 | |
| 春30 | 天田 | 1 | 水田畦畔 | 8C | 完形須恵器坏2 | 異なる地点で畦畔上で倒置して出土 |
| 大81 | 本堂 | 7 | 谷部 | 8C後半 | 香炉蓋、相輪形鈕付蓋、仏鉢形土器、墨書土器、墨書土器（「千万」「口」「山門」「吉口」「罪依」など）、斎串、煤付着土器（灯明具？）、大甕、土馬3など | 谷頭から近い谷部で仏教色の強い多数の祭祀遺物が多数出土。近接する大型建物は村落寺院の可能性はある。 |
| 747 | 雀居 | 12 | 上面水田 | 8C後半~9Cか | 人形1、斎串1、瓢箪2 | 大型の人形。水田を覆う砂層からの出土 |
| 747 | 雀居 | 12 | 上面水田 | 8C後半~9Cか | 人形1、斎串1、瓢箪2 | 大型の人形。水田を覆う砂層からの出土 |
| 839 | 下月隈C | 6 | SX395 | 8C末~9C前半 | 人形2、斎串3、馬形？1、鉾形？1、弓形1、曲物13 | 河川の護岸杭列。「大」墨書土器も出土。斎串のひとつは「ささら子」として使われた可能性が指摘される（P53）。 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SX403 | 8C末~9C前半 | 人形1、斎串1、馬形？1 | SX395が構築された河川にかけられた堰か |
| 881 | 下月隈C | 7 | SX744 | 8C | 斎串 | 堰。「皇后官職」木簡も出土 |
| 〃 | 〃 | 〃 | SX395 | 8C~9C前半 | 人形1、斎串1 | 堰か |
| 152 | 井相田C | 1 | 大溝（SD-1） | 8C~9C前半 | 人面墨書土器1、曲物10、斎串？1、舟形？1 | 「酒杯」「麻呂」「×」「向」「吉」「井」などの墨書土器も出土。石製権も出土。官道に近接。 |
| 676 | 高畑 | 17 | 大溝 | 8C~10C | 人面墨書土器2、曲物7、絵馬1、人形1、勾玉2 | 「田口」「常陸」などの墨書土器も出土 |
| 639 | 那珂 | 68 | SE08 | 9C前半 | 斎串2 | 素掘り井戸か？ |
| 322 | 雀居 | 2 | SD101 | 10C後半~ 11C前半 | 斎串1 | 報告では自然流路とされる |
| 大81 | 本堂 | 7 | 谷部 | 11C後半~12C 前半 | 銅鈴、相輪形木製品、舟形木製品、鈴形木製品、呪符木簡（男女や「急々如律令」などを墨書）、墨書土器（「大日如来」「醫王」「黄世」「乳院」「いわう」など）、馬の歯、桃の種など | 仏教的な遺物と呪術的な遺物が混じる。谷頭の斜面を造成して建てられた掘立柱建物も検出し、祭祀に関わる「草堂」の可能性もある。 |
| 206 | 板付 | 53 | SD01 | 12C後半? | 斎串1、曲物2 | 幅9mの流路 |
| 早良平野 | | | | | | |
| 223 | 七反田 | 1 | 河川SD02 | 8C~9C初頃か | 滑石製有孔円盤（垂飾？）9、桃の種24、「田マ」墨書土器、「合九人」墨書木簡、馬形？2、鳥形？1、陽物形？1、曲物 | 幅30mの河川。台地上には製鉄遺構あり。 |
| 965 | 吉武 | 6 | SD05 | 8~10C | 舟形？1 | 自然流路か |
| 〃 | 〃 | 〃 | I-11調査区SD01 | 7C後半~10C | 斎串1 | 自然流路か |
| 1146 | 金武青木A | 1 | 谷 | 8C | 人形？木製品（グリップ形）6、斎串1 | |
| 542 | 橋本榎田 | 1 | SM04（溝） | 11C後半~ 12C前半 | 馬下顎骨1 | 溝の性格は不明。直線的な溝。 |
| 糸島地域 | | | | | | |
| 860 | 元岡 | 15 | 6層堆積（谷底部） | 7C後半~8C | 「解除」木簡（「解除（祓）」儀式に関する物品リスト） | 7世紀後半~8世紀前半であれば、湧水点に近い谷部を利用した「祓場」と想定でき、8世紀後半ならば、製鉄炉操業に関わる儀礼（地鎮？）と考えられるが、祭祀遺物そのものは出土していない。 |
| 962 | 元岡 | 20 | 池状遺構SX001 | 7C後半~8C | 舟形木製品23、陽物形木製品1、人形？木製品（グリップ形）21、弓、鉄鎌（鎗矢含む）、鳴鏞、「道楽」木簡（道祖神信仰に関連か）など | 谷部に築堤により貯水した池で、約120m南で谷頭となる。多数の木簡のほか、「案主（下級役人を指す）」「作善（仏教用語）」「日日日」「依」など墨書土器も多数出土。 |
| 1102 | 元岡 | 18 | SX100 | 7C後半~8C | 陽物木製品1、曲物1、人形？木製品（グリップ形）1など | 造成が加えられた谷部流路。調査区内に谷頭あり。木製祭祀具は池状遺構から出土し、周りには製鉄遺構がある。 |

墳時代には形成されはじめていた可能性が指摘できるという。さらに穂積氏は日本書紀に丹生川で諸神を祀り、土器を投げ込んでウケヒを行う場面や、河に瓢箪を投げ入れてその浮き沈みで真偽を判断する場面が記されていることを上げ、井泉や河川などにおいて、カミを前にした神聖な場で、神意を占って今後の行いの方向を決定するような儀礼が首長層を中心として古墳時代から広く行われていた可能性を指摘する（穂積1999）。このように、水辺の祭祀には水辺を祭祀の場として利用するものと、水そのものに祈りを捧げるものと2種類がある点は注意すべきだろう（穂積2013など）²²⁾。

なお、吉武遺跡群4次調査では流路岸の湾入部に設けた5世紀の井戸SE01を検出した。石組の中に木材を削り貫いた水溜が設置された特異な構造である。上記の誓約神話との関わりを考えたいところだが、出土遺物がなく、何とも判断できない。

前述した裂田溝についての日本書紀の記事も確認しておこう。神功皇后の西征の際、難の河（那珂川）の水を引いて田を潤すために溝を掘ったが、迹驚（とどろき）の岡に及ぶと大岩が塞がっていた。そこで武内宿禰を召し、剣と鏡を捧げて祈らせたところ、雷が落ちて岩を裂き、水が通った。そこでこの溝を裂田溝と呼んだという話である。現在の裂田神社がある付近には花崗岩の硬い岩盤があり、水路掘削を妨げた大岩に符合する（佐藤編2005）。特異な状況で出土した剣や鏡にも注意する必要があるが、松木遺跡の祭祀遺構では出土していない。

(6) 律令期以降の水辺の祭祀(表7)

7世紀後半以降、斎串や人形、舟形や馬形、鳥形などの木製品、人面墨書土器といった遺物が流路や水田から出土する(図10)。これらは罪穢れの解消や、疫病の予防退散を目的に、それらを「水に流す」祓などの律令的祭祀に用いられるものである(金子2000など)。ともに出土する例が多い曲げ物も、祭祀に用いられたかもしれない。水そのものに対する祭祀ではなく、水辺を祭祀

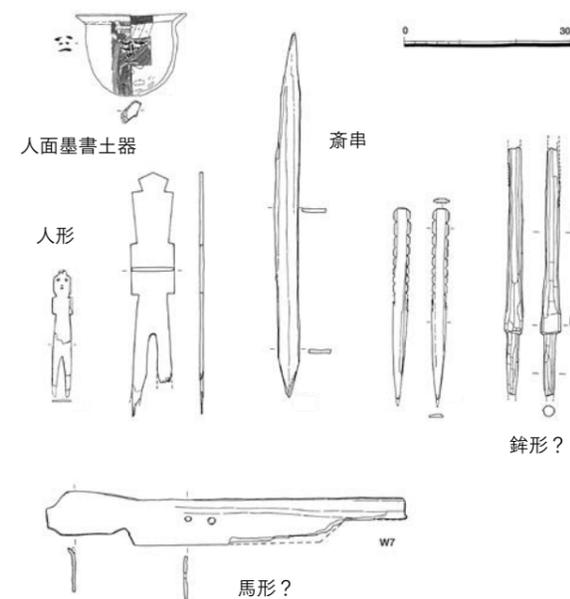


図10 律令期の水辺の祭祀遺物例 (高畑遺跡・下月隈C遺跡出土)



図11 本堂遺跡群谷部出土遺物

の場として利用する祭祀である。博多湾沿岸では、御笠川流域の特に古代官道に近い遺跡での出土例が多い。

元岡遺跡群では第15次調査谷底部で8世紀の祓に関わる物品リストとみられる木簡が出土し、湧水点に近い谷部を利用した祓場が存在した可能性がある(菅波2001)。また水に関わる祭祀かどうかは検討を要するが、第20次調査では池状遺跡S X001で、「道塞」と記された木簡が出土し、陽物形(男根形)木製品と共に道祖神信仰に関わるものと指摘される。遺跡立地が対外交流の要地にあたることから、外国使節等の来着などによる疫病などの侵入を防ぐための境界での祭祀が行われた可能性がある(平川2006)。

本堂遺跡群では谷頭を含む谷部が調査され、多くの祭祀系遺物が出土した。2時期に分かれ、8世紀後半には土師器蓋の内外面に5弁花や葉、雲文が描かれた墨画土器や、「千万」「罪依」「山門」などの墨書土器、相輪形鈕付蓋、仏鉢形土器、斎串などが出土し、仏教色の強い祭祀の様相が伺える。また、空白期間を置いて11世紀後半～12世紀前半にも銅鈴や相輪形木製品、男女の像および「鬼鬼急々如律令」と書かれた呪符木簡、「大日如来」「醫王」(薬師如来)などの墨書土器などが出土した(図11)。前述した龍や蛇の神話にも関わるが、常陸国風土記(行方条)によると、継体天皇の時代に矢筈氏麻多智が郡家の西の谷の葦原を開墾したときに、蛇身をもつ夜刀神がそれを妨害したため、麻多智は夜刀神を山口に追い上げ、神と人との境界を定め、社を建てて神を祀ったという。その後、孝徳天皇の時代に茨城国造壬生連鷹がその谷を占拠して池の堤を築いた時にも夜刀神が出現しており、この説話は湧水のある谷の開墾に際し、開墾に対抗する水神・地霊を鎮めるために社を建立することがあったと示すとされる(松村1997)。本堂遺跡群の祭祀遺物の一部も、谷の湧水への祭祀の様相を示すのだろうか²³⁾。

その他の事例としては、天田遺跡の複数の地点で8世紀の水田畦畔上に完形の須恵器坏を逆さに設置された例があり、水田祭祀の可能性もある²⁴⁾。また、石勺遺跡や本堂遺跡群では土馬が出土し、前述した馬を用いた雨乞いに関わる可能性がある。橋本榎田遺跡第1次調査S M04溝(11世紀後半～12世紀前半)で出土した馬の下顎骨や、戸原麦尾遺跡第1次調査S D3802(11世紀後半頃)で出土した馬を描いた板絵は、こうした祭祀の下限を示す可能性がある(図11)。

3. 水利からみた集団の組織と領域

以上において、技術と思想という二つの側面から、博多湾沿岸地域の弥生時代から古代の水利をみてきた。最後に集団の組織化や領域の形成を、水利の様相から考えることでまとめにかえたい。

朝鮮半島から水田稲作が伝わり、弥生時代が始まる。縄文時代にも主食となりうるマメなどの植物は栽培された(小畑2016など)が、大きく土地を改変し、自然の回復力をあてにせず食糧を生産する弥生時代の新しい生活様式は、社会や文化に大きな影響を与えた。水田や水路での漁労活動や、水田にやってくる獣の捕獲などを含め、水田が食料獲得の中心的存在となる。また長期保存可能な米は蓄積可能な富としての性格も持ち、「米を持つ者」と「米を持たぬ者」の間で人々の階層分化も進む。そして、水や米を巡る争いも起こり、人々の組織化が進んでいくと考えられている。

弥生時代前期末、前代からの開墾の蓄積などを基盤として灌漑用水路がさかんに掘削されると、活発に集落や水田の開墾が行われた。新たな集落の開墾に際しては、周辺集落と水利や土地利用の折り合いをつけ、承認を得る必要がある。前期末～中期初頭には弥生時代小海進が起こったとも考えられており(安田1990・齊藤2010など)、低地の水田に塩害をもたらしただろうから、その中で軋轢も生じただろう²⁵⁾。集落の優劣がついていく中で、多数の青銅器を副葬する吉武遺跡3号木棺墓の被葬者のような有力者も出現したと考えられ、各平野や河川流域などを単位とする政治組織による利害調整も想定される(武末2011など)。ただし、各集落あるいはひとつのまとまりと捉えられる各集落群はそれぞれの近辺でそれぞれに水田を営んでいたとみられ、まだ強い自主性と自立性を持っていたと考えられる。

中期末から後期にかけては集落内部での区画化(小澤2013)や方形環溝の展開(武末2011)も認められ、中期後半に本格的に普及した鉄器の入手・配分などを巡って急速に階層分化が進んだ結果と考えられる²⁶⁾。各拠点集落では増加した人口を支えるため、水田面積の増加を図った。ただし、このときの水田開墾は水田を外に広げるものでなく、集落近辺の限られた範囲での水田の密度を上げる「再開墾」を中心とした。大規模な水利施設や水田遺構は、大規模な集落に近接して分布しており、各集落・集落群単位で水田を営んでいると考えられる(朝岡2013b)。比恵・那珂遺跡群では那珂川と御笠川という二つの大河川を結ぶ運河が掘削されており、統一された意志による土地利用・水利がより広い範囲で可能となっている(朝岡2015)ことも確かだが、労働力編成はまだ各集落単位で行われていた可能性が高い。

その様相が変化するのは弥生時代終末期である²⁷⁾。早良平野では室見川東岸の広い範囲で大規模な水利開墾が行われるが、これに対応する大集落は特定できず、周辺集落が協力して広大な水田を営んだかの様相を示す。堰の構造はバラエティに富み、このことを示唆する。この時期、海沿いの砂丘上には対外貿易の拠点的な港である西新町遺跡が成立(武末1996・久住2007など)し、隣接する藤崎遺跡では三角縁神獣鏡などを出土する墓群があることから、各集落の意志よりもっと大きな意志の下(例えば「奴国」もしくは「北部九州連合」や「倭政権」か)で「港」や「生産域」などが平野の中に配置され、平野全体が広範囲に有機的に結びついた地域経営がなされていると考えられる。この時期には水利事業や古墳築造に関わる労働力編成も平野単位で行われただろう。

5世紀になると、渡来系の技術が導入され、山裾逕流型水路²⁸⁾などの大規模な水利開墾が行われる。ただし、渡来人集団は隔絶して地域に存在するのではなく、首長層を核に在来集団と一つの共同体を形成し、共存する(小嶋2013など)。水利開墾に関わる渡来人集団も河川上流側の水利の重要拠点に居住するから、地域首長らにより「配されて」開墾にあたった可能性が高い(朝岡2020)。滑石製品製作の様相をみると、水利に関わる祭祀の実施も決して1集落といった狭い範囲の意思のみで行われたわけではないだろう。やはり、引き続き平野単位で労働力編成や地域空間設計がなされている可能性が高く、これを古墳時代的な地域経営と呼べるかもしれない。加えて、5世紀前半には地域ごとに異なる水辺の祭祀が行われていた点は注目でき、それぞれの地域に導入された水利技術もそれぞれ違う集団がもたらしたものであった可能性がある。

さて、水利の技術はそれぞれの立地環境に対応して変化もするので、分析をしても技術の伝播や集団の移動などの現象は捉えにくい。これに対して儀礼・祭祀のようなソフト面の検討は、その分布範囲などから集団差や集団の移動を認識する上で有効である(小嶋2012)。こうした視点で土製模造鏡の分布をみると、6世紀後半に中心が筑後平野の南北地域から、福岡平野～筑後平野北部や豊前に移っており、(糟屋平野の様相が不明確だが)筑紫君磐井の乱後の糟屋屯倉や那津官家あるいは筑前町惣利遺跡で見つかった文献未記載の屯倉などの屯倉の設置を契機に、旧筑紫君勢力下の人々が移住した(移住させられた)可能性もある²⁹⁾。これに加え、6世紀後半には糟屋地域で一元的に周辺地域に供給する滑石製品を生産した状況が伺えるし、早良平野～糸島地域東部で鉄生産が本格化する(長家2005・中島2008)ほか、福岡平野南部で那津官家の設置前後の6世紀前半に牛頸窯跡群が成立するといったように、律令期に続く長期的な山林資源の利用に関しての住み分けも意識され始めている。山林資源は農業用水に養分を供給する役割もあり、農地との住み分けもあっただろう。つまり、この時期には平野を跨いだ地域空間設計や労働力編成が確認され、中央集権国家の形成へ向けた動きと評価できる。ただし、早良平野や糸島地域では土製模造鏡を本来の使い方で用いていないことが示すように、祭祀の統一は果たされていなかった。こうしたことから統一された思想の必要性が意識されたのだろう。

7世紀には国家主導の大規模水利事業が行われる。戸籍を用いて人民を管理しようとする国家体制の確立・維持のため、洪水被害などによる人々の移動を防ぎ(朝岡2012)、可耕地の拡大で地域内の生産力を上げ、人口増加に伴う分村を防止した(山中1986)ものであったのだろう。洪水被害の軽減を目的とした溜池も築造され、こうした治水灌漑事業により可耕地の拡大と再生産を保証し、国家が在地首長

社会に対して影響力を強めた（小山田1999）。このような中で、統一された思想として律令祭祀や仏教が整備されていったと考えられる。

おわりに

博多湾沿岸の水利の様相を概観すると、技術の大きな画期は弥生時代早期と5世紀前半に、集団組織の大きな画期は弥生時代終末期と6世紀後半に位置づけできる。今回の検討は博多湾沿岸という限られた地域でのものとなり、全国的な視野での検討は今後の課題としたい。

註

- 1) 一人当たり年間100kgの米が必要で、ha当たりの生産量を鎌倉時代と同等の1.5 t と仮定する。またha当たりの開墾に必要な労力はのべ1万2000人・日とする。
- 2) 博多湾沿岸地域で、いつ根刈りに移行したかは、弥生時代から古墳時代の収穫具である石包丁や石鎌、鉄製の手鎌や鎌などの分析が必要である。ただし、穂摘具は稲以外の雑穀などにも使われた可能性があるし、鎌は伐採具としても使われるため、難しい問題である（寺澤1994）。
- 3) 今後はこうした「開発発展志向」型の集落とその他の集落の違いが何に求められるか、また集落同士の関係性がどうだったか（そこから派生して、渡来人たちは共通した一つの意志を持って渡来したのか、またバラバラにそれぞれ渡来したのか）を検討する必要がある。
- 4) 現在発見されている最も古い例は中期の三苦永浦遺跡例である。吉留秀敏氏はこれを「溜井」とする（吉留2014）が、筆者は谷部に堤を築いたと想定される点を重視し、「溜池」に含める。
- 5) この時期の大規模な堰は縦杭を密に打ち込み、横木をあまり用いない。縦杭は水流のある中でも打ち込めるため、このような形態になると筆者は考える。また、平面がアーチ形の例も出現するが、アーチ堰の優位性は堰背面の水が落ちる面積を広げ、洗堀のダメージを分散できる点にある（小山田宏一氏のご教示）。よって、これらの堰の形態変化は新しい技術が伝播してきたというよりは、より幅広い流路に対応するために選択されたと考えerほうがよい。
- 6) 阿南翔悟氏のご教示。
- 7) 森貞次郎氏は早くから安徳大塚古墳の被葬者が裂田溝の開削を主導した可能性を指摘した（森1976）。ただし、安徳大塚古墳は現在では4世紀後半と考えられる。裂田溝が4世紀まで遡る可能性はあるが、現在のところそれを裏付ける資料は少ない。
- 8) 流路から滑石製品や勾玉、手づくね土器が1～2点のみ出土した例は、単なる紛れ込みの可能性を排除できず、一部を残して集成から除外した。遺物の数は報告数を基本とするが、文中に未報告を合わせた出土数の記述がある場合はそちらを優先した。ただし、手づくね土器はどの大きさから手づくねとするかでカウント数が変わるが、筆者の力量では明確な基準を決め難い。また、「小型丸底壺」としたものは、5世紀代の「小型丸底壺の成れの果て」のような「小型の丸底の壺」を含む。こうした不安定要素が多いため、カウント数は正確でないかもしれず、また取り上げる遺構も集成の過程で基準が変わっている可能性も否めない。こうした点をご容赦いただきたい。
- 9) 神尾恵一氏による鐸形土製品の全国集成では、出土状況が不明なものや包含層出土のものを除いた144例のうち、溝や流路、井戸などの「水に関連した遺構」から出土した事例が77例と半数以上を占める。このうち井戸は4例で、特に溝や流路との関連が強い（ただし、溝が全て水に関わるかどうかはわからない）。神尾氏は水利用に関する銅鐸祭祀について、銅鐸を用いた祭祀が「制御不能の水」に対する祭祀なのに対し、銅鐸形土製品を用いた祭祀が取水・貯水・配水・排水などの「制御された水」に対する祭祀である可能性を指摘する（神尾2012）。また、いわゆる小銅鐸のうち神尾氏が「銅鈴」と分類する北部九州に集中する型式では、鐸形土製品と同様に「水に関連した遺構」からの出土が半数を占める（神尾2013）。なお、一部の銅鐸についても湧水点や低湿地などの水に関わる場所に埋納された可能性が指摘される（辰巳2008）。
- 10) 全国の例をみると、岡山県下市瀬遺跡で弥生後期の井泉ととりつく祭壇状の構造物から角柱が立ち、その先端近くに入れられた抉りに紐状のものが残存し、そこから転がり落ちたかのように小銅鐸が出土した例など、井戸や井泉での祭祀に小銅鐸が用いられた例も散見される（辰巳2008など）。
- 11) さて、辰巳和弘氏は古代文献にヒサゴ（瓢箪）を水神を鎮める呪具として用いる例があると指摘し、雀居遺跡や比恵遺跡の井戸から出土したヒサゴ製柄杓を模した木製杓や杓子形土製品（以下、杓子とする。匙とされる場合もある。）を祭祀に用いたものと想定した（辰巳2008）。また、杓子と手づくね土器が靉島遺跡などの朝鮮半島南部で多量に出土する例もあり、海を越えた祭祀の共通性も指摘される（森本2019）。そこで集成表未掲載だが、溝から出土した杓子を集めてみた。結論から言うと、杓子を水辺の祭祀と密接に関連付けるのは難しいようである。確かに、溝からの出土例はあるが、竪穴建物から出土する例も多い。杓子が出土した溝の性格も、流路よりもむしろ区画溝の性格を示すものが多く、環濠等の中から大量の日常土器の廃棄に紛れて出土する事例が目立ち、通常の土器のセット・比率から外れるものではない。この時期の手づくね土器に関して同様で、

特異な出土状況がなければ、祭祀と認定するのは難しい。

- 12) 河川に土器を据え置く例は奈良県保津・宮古遺跡などもある（辰巳2008）。また、韓国無文土器時代の東三洞遺跡では集石した小穴が河道岸に沿って並び、水辺の祭祀の可能性が指摘される（武末2005）。
- 13) 肥後国司道君首名が造ったと伝えられる味生池にも、悪竜（竜神）が棲み人畜を害するため、僧真澄が悪竜退散の祈願をし、その後銅三（710）年に池辺寺を建立したとの伝説がある。実際の寺の建立時期は不明確な点があるが、池は降雨の多いときに氾濫を繰り返し、周囲から供給された土砂により次第に浅くなったため、貯水池としての機能を失ったと考えられるという。ついには江戸時代の坪井川の河道変更工事に伴い、加藤清正によって排水されて田と化した（村井1980）。
- 14) 手焙形土器については高橋一夫氏の集成的研究がある。内部で火を燃やした祭祀用の土器と考えられる（高橋1998）。
- 15) 奈良県布留遺跡の祭祀遺構でも、小型丸底壺中心の祭祀跡や高坏主体の祭祀跡などいくつかのバリエーションがあるらしい（日野2019）。いずれ機会があれば、全国的な視野で検討したい。なお、水辺の祭祀に関し、1996年時点での集成的検討がある（日本考古学協会三重県実行委員会編1996）。
- 16) 播磨國風土記には「佐比岡」において、従来 of 鋤を供える祭祀では荒ぶる神を鎮めることができなかったが、河内の茨田の渡来人が祀ったことにより鎮まったとの記述がある（桃崎2016）。
- 17) 須恵器大甕については分析の終盤に水辺の祭祀との関連性に気が付いたため、集成に抜けがあるかもしれない。牛頸窯跡群に近接する地域でのみ、水辺の祭祀に用いられる可能性も考えたが、今回は判断を保留したい。
- 18) 方形チップは、今回未製品に含める。ただし、方形チップのまま祭祀に用いる事例がある（平尾2005）。
- 19) 具体的な論証には滑石製品の比較が必要である。
- 20) 2012年に筆者が集成したものに手を加えたもので、それ以降に公表された資料は含まない。
- 21) 古墳時代の甕祭祀に関する検討は佐々木1984・寺沢1992・久松1992などがある。
- 22) 博多湾沿岸では未発見だが、いわゆる「導水（祭祀）施設」遺構も前者の例といえよう。
- 23) 東広島市西本6号遺跡では、湧水する谷部に面する斜面を造成して溝で区画した内部に建物群があり、「解口（除?）」と墨書された須恵器の存在などから、7世紀後半の神社遺構と考えられる（松村1997）。
- 24) 水田畦畔で完形の土器を用いた祭祀の例は大阪府池島・福万寺遺跡などにもある（秋山ほか2020など）。
- 25) 弥生時代前期末～中期初頭の人口増加などに伴う集落の分村や軋轢の発生については、山崎頼人氏による三国丘陵を対象とした検討などがある（山崎2010）。
- 26) 石器の場合は道具の種類や用途に応じて適する石材が異なっており、石材ごとの様々な産地を中心とする多様な流通が行われていた。これに対し、鉄器は鉄という共通の素材を用い、用途に応じて機能分化を可能とするから、鉄の入手ルートを掌握した集団に力が集中することとなった（森2018など）。
- 27) あるいはこの変化を重視するならば、この時期（あるいは終末期後半）を古墳時代早期と呼ぶほうが良いのかもしれない。
- 28) 丘陵地帯や盆地から河川が流れ出し、平野が広がる始点から取水し、山裾を巡る水路。裂田溝などがこれにあたる（朝岡2020）。
- 29) 出雲においては、6世紀末に多くの移住者が流入し、大規模な水利開発を行うきっかけとなったとされる（池淵2019）。

参考文献

- 秋山浩三・山崎頼人・朝田公年2020「池島・福万寺遺跡の土器埋納遺構ほか集成とその特質」『河内・和泉の考古記録』清風堂書店
朝岡俊也2012「福岡市の遺跡にみられる古代律令期の灌漑水利」『久保園4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1148集
朝岡俊也2013a「福岡平野周辺にみる開始期の灌漑水利－その多様性と展開－」『七隈史学』第15号
朝岡俊也2013b「福岡平野における堰灌漑の展開－弥生時代～古墳時代前期を中心に－」『九州考古学』第88号
朝岡俊也2015「奴国の時代の土木考古学」『新・奴国展－ふくおか創世記－』福岡市博物館
朝岡俊也2020「日本考古学における水路研究の手法－弥生時代～中世－」『福岡大学考古学論集』3
池淵俊一2015「第6章 意宇平野の開発史－5世紀代の評価を中心に－」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』鳥根県古代文化センター研究論集第14集
池淵俊一2019「出雲平野における6・7世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』鳥根県古代文館センター研究論集第22集
井上信隆・木村達美編2007『みやこ町内遺跡群』Ⅰ みやこ町文化財調査報告書第2集
井上義也2009「須玖遺跡群の集落構造」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会
遠藤茜・上田龍児2009「九州地方の弥生時代後期集落－玄海灘沿岸地域を中心に－」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会
小澤佳憲2013「弥生時代の集落の変遷と社会」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史特別編
小畑弘己2016『タネをまく縄文人 最新科学が覆す農耕の起源』歴史文化ライブラリー 416 吉川弘文館
折原洋一2003「古墳時代土製模造鏡の類型と拡散に関する覚書」『山武考古学研究所 研究紀要』5（千葉県）
櫃原考古学研究所附属博物館2013『美酒発掘』平成25年度秋季特別展

金子裕之2000「考古学からみた律令的祭祀の成立」『考古学研究』第47巻第2号

神尾恵一2012「銅鐸形土製品祭祀の研究」『古文化談叢』第67集

神尾恵一2013「銅鐸形銅製品祭祀の研究－いわゆる小銅鐸祭祀について－」『古文化談叢』第69集

上條信彦2018「水稻農耕定着段階における九州出土米の粒形質変異」『九州考古学』第93号

木下晴一2014『古代日本の河川灌漑』同成社

久住愛子・久住猛雄2008「九州Ⅰ（福岡県）－福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について－」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として』第57回埋蔵文化財研究集会

久住猛雄2007「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』第53巻第4号

久住猛雄2009「比恵・那珂遺跡群－弥生時代後期の集落動態を中心として－」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会

小嶋篤2012「墓域と領域-胸肩君一族の足跡-」『九州歴史資料館研究論集』37

小嶋篤2013「九州北部の渡来人集団と地域社会－古寺・池の上墳墓群と吉武遺跡群の検討－」『九州歴史資料館研究論集』38

小山田宏一1999「古代の開発と治水」『狭山池 論考編』

小山田宏一2018「古代日韓補強土工法の俯瞰的整理」『纏向学研究』6 纏向学研究センター研究紀要

齊藤瑞穂2010「九州弥生時代研究における福岡市城南区浄泉寺遺跡の役割」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集

坂上潤一・中國幹生・島村聡・伊藤治・石澤公明編2010『湿地環境と作物－環境と調和した作物生産をめざして－』養賢社

佐々木隆彦1984「竈祭祀考－北部九州を中心として－」『松木遺跡』Ⅰ 那珂川町11集

佐藤昭則編2005『裂田溝－裂田溝総合調査報告書－』那珂川町文化財調査報告書第65集

佐藤洋一郎2020『米の日本史』中公新書2579

狭山池博物館2001『常設展示案内』

澤田康夫編1984『松木遺跡』那珂川町文化財調査報告書第11集

山陰中央信報社2012『古事記1300年 神話のふるさと～山陰のゆかりの地を訪ねる～』

菅波正人2001「福岡県元岡・桑原遺跡群の調査」『考古学研究』第48巻第3号

高倉洋彰1975「右手の不使用」『九州歴史資料館研究論集』2

高橋一夫1998『手焙形土器の研究』六一書房

武末純一1996「西新町遺跡の竈－その歴史的意義－」『碩晤尹容鎮教授定年退任記念論叢』

武末純一2005『韓国無文土器・原三国時代の集落構造研究』－平成14～16年度科学研究費補助金〈基盤研究（C）（2）〉研究成果報告書－

武末純一2011「九州北部地域」『弥生時代』上 青木書店

田崎博之2002a「日本列島の水田稲作－紀元前1千年紀の水田遺構からの検討－」『東アジアと日本の考古学』Ⅳ 同成社

田崎博之2002b「朝鮮半島の初期水田稲作－初期水田遺構と農具の検討」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店

辰巳和弘2008「水と井戸のまつり」『弥生時代の考古学7 儀礼と権力』同成社

常松幹雄2004「鐸形土製品に描かれた絵画と記号」『日本考古学』第17号

常松幹雄2019「元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物の諸相」『元岡・桑原遺跡群』34 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1385集

寺澤薫1994「穂刈りから根刈りへ」『古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－発表要旨集』第4回東日本埋蔵文化財研究会

寺沢知子1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ

中沢道彦2017「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』第138号 雄山閣

中島圭2008「6. 福岡県内における製鉄・鍛冶の様相」『牛頸本堂遺跡群』Ⅶ 大野城市文化財調査報告書第81集

長家伸2005「福岡市西部地域の鉄・鉄器生産と渡来系遺物について」『九州における渡来人の需要と展開』第8回九州前方後円墳研究会

日本考古学協会三重県実行委員会編1996『シンポジウム1 水辺の祭祀』

林潤也2012「4. 土製模造鏡について」『乙金地区遺跡群』4 大野城市文化財調査報告書第100集

春成秀爾2011「弥生の龍」『祭りと呪術の考古学』塙書房

久松哉須子1992「カマドをめぐる祭祀」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ

日野宏2019『物部氏の拠点集落 布留遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」140 新泉社

平尾和久2005「滑石石材の流通と模造品生産－工房跡から復元される石材の流通－」『古墳時代の滑石製品－その生産と消費－』第54回埋蔵文化財研究集会

平尾和久2008「古墳時代集落祭祀の一形態－立花寺B遺跡出土滑石石材の紹介をかねて－」『七隈史学』第9号

平川南2006「道祖神信仰の源流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集

古澤義久2016「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『靫島と原の辻を通じた東アジア交流の様相』

穂積裕昌1999「井泉と誓約儀礼－記紀誓約神話成立の背景－」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ

穂積裕昌2013「祭祀・儀礼と井戸～古墳時代王権・首長との関係を中心に～」『続・井戸再考－古墳・飛鳥時代の井戸－』第62回埋蔵文化財研究集会

マーシャル・サーリンズ1984『石器時代の経済学』（山内昶訳）法政大学出版社

松村恵司1997「西本6号遺跡の歴史的 성격について」東広島市教育文化振興事業団『西本6号遺跡発掘調査報告書』2 文化財センター調査報告書第11集

村井真輝1980「味生池考」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念

桃崎祐輔2011「横穴式石室から出土する桃核と黄泉国神話」『古文化談叢』第65集（3）

桃崎祐輔2016「第四章 古墳時代」『筑前町史』上

森貴教2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学出版会

森貞次郎1976『北部九州の古代文化』明文社

森本幹彦2019「元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流」『元岡・桑原遺跡群』34 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1385集

安田喜憲1990『気候と文明の盛衰』朝倉書店

山口譲治2000「弥生時代の木製農具－韓国光州新昌洞遺跡出土農具から－」『韓国古代文化の変遷と交渉』書景文化社

山崎頼人2010「環濠と集団－筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生前期環濠の諸問題－」『古文化談叢』第65集

山中敏史1986「律令国家の成立」『岩波講座日本考古学6 変化と画期』岩波書店

吉留秀敏2014「北部九州弥生時代における「溜池」の出現とその背景－元岡・桑原遺跡群42・52次調査から－」『大阪府狭山池博物館研究報告』8

特集展示「筑紫の神と仏」は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大という未曾有の事態下で準備が進められた。開催自体も危ぶまれたが、感染抑止の対策を経た上で、本来の会期よりも短縮して、2020年6月1日より何とか開催することができた。しかし、多くの方に見学して頂きたい一方で、感染拡大が頭をよぎるジレンマを抱えた状態であったのが実態である。ここではいくつかの展示風景を厳選し、会場の雰囲気を紹介したい。

(小嶋 篤)



観世音寺の梵鐘と不空羅索観音立像旧像心木



西堂古賀崎古墳の副葬品



長安寺廃寺の出土品と大宰府の鬼瓦



金武城田遺跡の埋納土器群



花立山と日方郷（模型）

第3章

川と信仰—筑後川中流域を中心に—

中島 圭

はじめに

水は生きる上で欠かせないものであり、それゆえに古くから信仰の対象となってきた。水辺の祭祀の痕跡は古墳時代にはすでに確認されているし、首長権や王権の儀礼の中で水を介した祭祀が重要であったことは導水施設の遺構や、導水施設を模した埴輪の存在からも明らかである。

「水神」は水の神様ではあるが、川の神であり、池の神であり、日本の神話の中ではミズハノメ（罔象女神・弥都波能売神）や淤加美神（甕神）として登場するが、水や川は、ある時は龍であり、ある時は蛇や亀、河童として表現・信仰され、水が流れるままに姿形を変えるように、水の神もまた獺として捉えにくい。水源地であれば水分神として信仰され、日照りが続けば降雨を祈り、洪水を起こして荒ぶれば治水と安寧を願う対象となる。水は五穀豊穡をもたらす源でもあるから、農耕の神でもあり、牛馬の庇護の神ともなる。今回はこうした「水神」の姿を、筑後川中流域をケーススタディとして見ていきたい。

1. 朝倉地域の川と信仰

(1) 佐田川流域の様相 佐田川流域には三奈木に美奈宜神社があり、蜷城にも美奈宜神社がある。美奈宜神社は『延喜式神名帳』に「下座郡 美奈宜神社 三座 並名神大」と記載され、江戸時代には双方とも式内社である美奈宜神社と主張したため、論争がおきていた。祭神は美奈宜神社（三奈木）が天照大神、住吉大明神、春日大明神、美奈宜神社（蜷城）は大己貴命、素戔鳴命、事代主命であり、それぞれ三神を祀る。

栗尾大明神（三奈木の美奈宜神社）の縁起によれば、この社は現在の社殿の位置よりも上流の池辺という地にヒモロギを立てて神を祀ったのが始まりであるが、大宝元年（701）に信託によって喰那尾山頂に社殿を建立した。のちに暴風雨等の憂いから山麓の大宮谷に社を遷して中宮としたが、天正2年（1574）に大宮谷は谷深く陰湿にして境内が狭く道が険しいという理由から現在の社地に遷座したという。こうした伝承から、佐田川の上流でヒモロギを立てて神を招き、それを喰那尾山頂に祀ったという最も古い水分神を祀る形がうかがえる。山麓の大宮谷の社を中宮と呼んでいることから、『延喜式神名帳』の「美奈宜神社 三座」とは相殿三神ではなく、上宮・中宮・下宮の三座構成であった可能性があり、佐田川水系という視点から、佐田川上流の喰那尾山頂の上宮（喰那尾神社）、山麓の下宮（三奈木の美奈宜神社）、佐田川下流の下宮（蜷城の美奈宜神社）が水分神の信仰を軸として姿を現す（佐々木1981）。佐田川上流の荷原の池辺では三奈木神社の旧所在地の後背地から中広銅戈が3本発見された。埋納遺構であり、水源地を祀る行為が弥生時代の後期前半には始まっていた可能性もある。

現在の美奈宜神社（三奈木）神社の近くの佐田川では、寺内井手（籠井手・東井手とも言われる）が作られ、現在も伝統的な石張りの堰で農地への取水を行っている。寺内井手は天和3年（1683）の記事に登場し、それ以前から存在していたことがうかがえる。三奈木村の石高が慶長12年（1607）の3547石と天保5年（1834）の3680石で大差がないことから、寺内井手は慶長12年以前と推定される（安陪2009）。寛保3年（1743）銘の石井樋の石材が残されていることや、延享3年（1744）には石井手普請の記事がみられるため、このころには現在の姿が完成していた。取水口のたもとには「水神」とされ

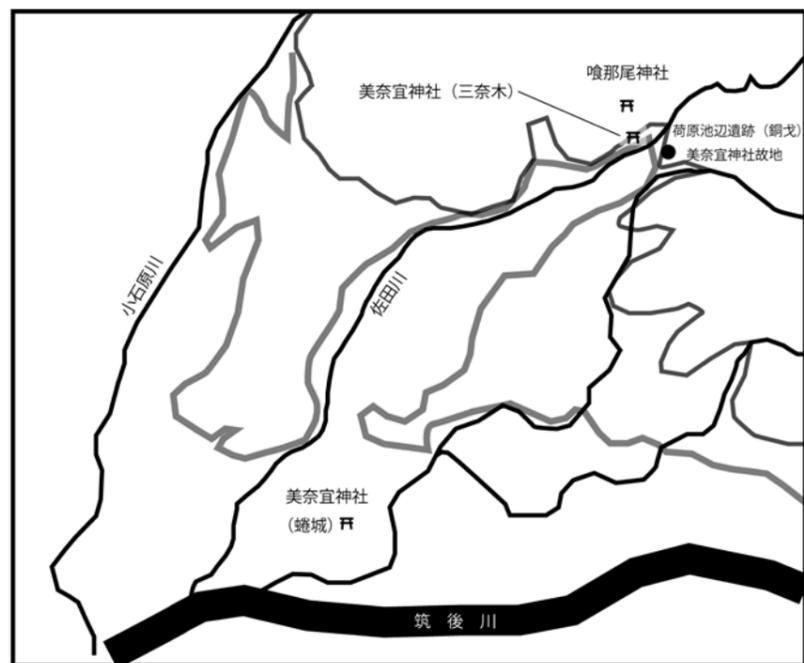


図1 佐田川と美奈宜神社

表1 筑後川中流域の石祠・石碑

| 番号 | 祀るかたち | 種類 | 御神体(文字) | 年号(西暦) | 建立日 | 寄進者 | 石工 | 場所 | 備考 |
|----|--------|---------|-----------------|--|-----------------|-----------------------|----------------|----------------|--|
| 1 | C | 石祠(水天宮) | 自然石2体 | 明治35年(1902) | 旧8月25日 | | | 福岡県朝倉市杷木津坂 | |
| 2 | E | 石祠 | 井形木像 | 明治36年(1903) | 旧11月20日 | 菅原 城主? ○年若中 | | 福岡県朝倉市杷木津坂 | 井形池に伴うものか |
| 3 | E | 石祠 | 石(水神) | — | — | — | — | 福岡県朝倉市杷木津坂 | 井形池と筑後川の合流点近く |
| 4 | H | 石祠(水天宮) | 木彫女神像 | 昭和31年(1956) | 3月吉日 | 昭和26年伊勢開行石井池 | 石工 江藤猪之助 | 福岡県うきは市浮羽町三幸 | 鳥居には水神社 |
| 5 | B | 石碑 | 自然石(水天宮) | 昭和28年(1953) | 8月5日 | — | — | 福岡県うきは市浮羽町三幸 | 鳥居には水神社 |
| 6 | E | 石祠(水天宮) | 紙札(水天宮) | 明治26年(1893) | 11月 | — | 石工 熊幡豊治 | 福岡県うきは市浮羽町古川 | |
| 7 | C~F | 石祠 | 不明 | — | — | — | — | 福岡県うきは市浮羽町古川 | 素戔嗚神社に合祀 大石塚境 |
| 8 | C~F | 石祠 | 不明 | — | — | — | — | 福岡県うきは市浮羽町古川 | 傍らの石柱に水天宮 |
| 9 | G | 小堂(水神社) | 石仏7体 木仏7体 一字一石塔 | 明治4年(1833) 昭和29年(1954)再建 | 3月 10月20日再建 | 仙臺(一字一石塔)に由来 | — | 福岡県朝倉市杷木池田 | 昭和26年水害で流失後再建 |
| 10 | D | 石祠(水神社) | 自然石(水神社) | 昭和51年(1976) 寛延2年(1749):灯籠 | 大安吉日 5月上旬:灯籠 | 吉賀浜川一岡 十時七蔵他:灯籠 | — | 福岡県朝倉市杷木吉賀 | |
| 11 | B | 石碑 | 自然石(水天神) | 天保4年(1833)巳 動火に祀られる | — | 永瀬善七 船次 | — | 福岡県うきは市吉井町千年 | 平成17年に遷座 |
| 12 | C~F | 石祠 | 不明 | 文久3年(1863)亥 | — | 南原(8月) 泉殿 藤沢○兵衛 | — | 福岡県うきは市吉井町千年 | 平成17年に遷座 |
| 13 | B | 石碑 | 自然石(河童大明神) | 寛文元年(1661) | 吉日 | — | — | 福岡県朝倉市杷木志波 | |
| 14 | B | 石碑 | 自然石(水神) | — | — | — | — | 福岡県朝倉市杷木志波 | 渡し場 |
| 15 | C | 石祠 | 自然石 | 明治13年(1880)辰 | 10月 | 織田昭子中 | 山北村 石工 藤藤七 | 福岡県うきは市吉井町橋田 | 「奉再建」童子丸水神社・河童伝説 |
| 16 | C | 石祠(水神社) | 自然石 | 明治19年(1886) | 4月 | 室村中 世孫 舟田○石工門物 | — | 福岡県朝倉市田中 | |
| 17 | B A | 石碑 | 自然石(水神) | 明治12年(1879) | 9月吉日 | 上寺村舟守中 | — | 福岡県朝倉市上寺 | 横に自然石2体が立つ |
| 18 | B | 石碑 | 自然石(水神社) | 文久3年(1863) | — | — | — | 福岡県朝倉市長洲 | 虚空蔵神社に合祀したものと思われる |
| 19 | B | 石碑 | 自然石(水神) | — | — | — | — | 福岡県朝倉市長洲 | 虚空蔵神社に合祀したものと思われる |
| 20 | C | 石祠 | 自然石 | 明治17年(1884) | 3月吉日 | 用水宮○石工 行徳実○ 永利○蔵 他 | — | 福岡県久留米市田主丸町野田 | 奥津留川の船着き場 |
| 21 | C | 石祠 | 自然石 | 明治41年(1908) | 9月 | 氏子中 | — | 福岡県久留米市田主丸町野田 | 奥津留川の船着き場 |
| 22 | C | 石碑 | 自然石 | — | — | — | — | 福岡県朝倉市橋 | |
| 23 | C | 石碑 | 自然石 | — | — | — | — | 福岡県朝倉市中 | |
| 24 | C~F | 石祠 | 不明 | 明治9年(1876) | 4月13日 | — | — | 福岡県朝倉市長田 | 床島塚 横は明治42年(1909) |
| 25 | B | 石碑 | 自然石(水神) | — | — | — | — | 福岡県朝倉市長田 | 床島塚 横は明治42年(1909) |
| 26 | D | 石祠(水神社) | 自然石(水天宮) | 明治22年(1889) | 春 | 八幡村大塚名中 世孫人高山山吉他7名 | 生業 原口名 石工 桑作太郎 | 福岡県久留米市田主丸町八幡 | |
| 27 | E | 石碑 | 神像 | — | — | — | — | 福岡県三井郡大刀洗町西原 | |
| 28 | C | 石祠(水神社) | 自然石 | 明治6年(1873) | 8月 | — | — | 福岡県久留米市田主丸町野田 | 園に月光菩薩像 |
| 29 | D | 石碑 | 自然石(水神) | — | — | — | — | 福岡県久留米市田主丸町野田 | 園は近代 |
| 30 | C~F | 石祠 | 不明 | 平成18年(2006) 改修前 寛政年間(1789 ~1801) | — | — | — | 福岡県久留米市北野町金島 | 船次には弘化2年(1845)銘 |
| 31 | F | 石祠 | 石蔵(水神社) | 昭和31年(1956) | 5月5日 | 南原用水耕作者一岡 | 井福益吾 浮羽郡浮羽町小塚 | 福岡県久留米市北野町金島 | 雨水溜裏の上に建立 |
| 32 | E | 石祠 | 龍王像? | 寛永6年(1653) | 12月吉日 | — | ○田石工 利助 | 福岡県久留米市北野町大城 | 今高八幡宮内 |
| 33 | C | 石祠 | 自然石 | — | — | — | — | 福岡県久留米市北野町金島 | 塚島神社(水神社)に合祀したものと思われる |
| 34 | C~F | 石祠 | 石(水神) | 天明3年(1783)癸卯 | 3月吉日 | — | — | 福岡県久留米市北野町高良 | 享保10(1725)年の久久保新川堰替え を祈念するものか |
| 35 | F | 石祠(水天宮) | 石蔵(水神社) | 明治31年(1898) | 6月 | — | — | 福岡県久留米市善通寺町木塚 | |
| 36 | E | 石祠(水天宮) | 神像 | 平成15年(2003) | 9月吉日 | — | — | 福岡県久留米市水田原町 | 近年の改修あり |
| 37 | E | 石祠 | 石仏 | — | — | — | — | 福岡県久留米市北野町石崎 | 近年の改修あり |
| 38 | C | 石碑 | 自然石 | 大正11年(1922) | 5月建之 | — | — | 福岡県久留米市山川神代2丁目 | 水神かどうか不明(田神社?) |
| 39 | C | 石碑 | 自然石2体 | 明治34年(1901) | 旧9月吉日 | 佐田善吾 | — | 福岡県久留米市山川神代2丁目 | 水神かどうか不明 |
| 40 | F | 石祠(水天宮) | 石蔵(水神社) | 「創祀のため不詳」申 | 5月 | 多数 | — | 福岡県久留米市東合川 | |
| 41 | D | 石碑 | 自然石(水天宮) | 安永5年(1776) | 3月25日 | — | — | 福岡県久留米市宮ノ陣町大城 | 川の瀬淵点、今も多重堤防・渡し |
| 42 | A | 自然石 | 灯籠 天明2年(1782) | — | — | — | — | 朝倉市千早 | 八大龍王 女男石護岸施設 |
| 43 | A | 自然石 | — | — | — | — | — | 福岡県朝倉市宿原 | 佐田川 寺内井手取水口 |
| 44 | B | 石碑 | 自然石(水神社) | 明治26年(1893) | 10月吉日 | 川原通中 4名 | — | 福岡県朝倉市原形原 | 佐田川 原形原境 |
| 45 | C~F | 石祠 | 不明 | 明治10年(1877) | 9月 | 保長 藤山二十重 他 | 山北 石工 江藤猪七 | 福岡県朝倉市原原 | 岩瀬神社 明徳女神を祀る |
| 46 | C | 石祠(水神社) | 自然石?(石仏片?) | 大正8年(1919) | 5月吉日 | 川原通 長島他 | 石工 野木 中村大工平 | 福岡県朝倉市原原 | 佐田川 原原境 |
| 47 | C~F | 石祠 | 不明 | 明治12年(1879)再建 | — | — | 石工 江藤 | 福岡県朝倉市小田 | 入道神社(入道神社)享保年間に牛馬 の病が流行ったため水神を元文3年 (1738)に勧請(地理全集) |

る自然石塔が立つ。石は何も銘打たれることなくたゞみ、一見すると何を祀るものかわからないが、おそらく堰や用水路開削の開削後にたてられたものである。これが近世における水神信仰の古い姿であり、依代として崇められるものであると考えられる。

(2) 小石原川 小石原川の上流部には女男石護岸施設があり、護岸の上には八大龍王が祀られる。女男石護岸施設は江戸時代初期に秋月街道の保護や治水や利水を目的として築造された護岸の石垣とその前の河床に置かれた捨て石群からなる施設で、扇状地へ流れ出る小石原川の扇頂部を抑える要である。八大龍王は雨乞い・日乞いの神様として有名である。天保5年(1834)に書かれた『望春随筆』には八大龍王として記述があり、昔から雨乞いや日乞いに際して女男石に人々が集まって祈願したとあり、古くから信仰されていたことがわかる。下流の荒川井手のあった袂には水神社が建ち、罔象女神が祀られる。

2. 筑後川と信仰

(1) 筑後川沿いに祀られる「水神」 現在、筑後川は連続堤防になっており、堤防上の道を通ると、多くの石祠や石碑を見ることができる。その多くは水神を祀ったものであり、堤防の上や用水の近くなど、治水や利水を願うものである。ここでは、そうした水神を祀る祠や石碑の立地や造営年代などから、そこから見えてく歴史的背景を検証したい。同じ視点を持った先行研究では平野氏らの研究がある(平野ほか2014)。平野氏らは筑後川上中流域の水神祠群に着目し、その建立理由を大きく7つに分類した。

- ①集落を拠り所として祀られた水神祠
- ②農業利水にまつわる水神祠
- ③川港にまつわる水神祠
- ④筏にまつわる水神祠
- ⑤水難事故犠牲者の供養のための水神祠
- ⑥川漁
- ⑦渡しにまつわる水神祠

石碑や石祠の立地と地形や災害との関連性については明確にわかるものは少ない。表2は「福岡県近世災異誌」等をもとに中世末～近代までの洪水記録をまとめたものである。こうした災害記録と石祠や石碑の建立は連動しない。むしろ、洪水等による流失や被災を再建の契機とするほうが目立つ。朝倉市杷木池田の杷木の水刃の所に立つ水神社とされる小堂には水難者供養のために天保4年(1833)に仙厓が建てた一字一石塔が昭和28年(1953)の水害で流失し、昭和29年(1954)に再建される。

地形との関連でいえば、久留米市宮ノ陣町大社の石祠は筑後川が屈曲して水流が当たる所で、現在も二重の堤防に守られる地点である。こうした水害に遭いやすい地点の鎮めとして水神(水天宮)が祀られる可能性もある。またここは古来より「杜の渡し」として交通の要衝であり、延文4年(1359)年の筑後川の戦いにおいては南朝方が陣を敷いた。渡し場の守り神としての性格も垣間見えてくる。

こうしてみると平野氏らの指摘にあるように、そもそも水害に遭いやすい集落が集落の拠り所として水神を祀るが、被災箇所をピンポイントで祀るものではなく、集落の性格や渡し場など立地にあわせて、上記の大きく7つに分かれることになる。

(2) 「水神」を祀るかたち 「水神」を祀るかたちについては様々な方法があるが、筑後川の中流域では自然石碑や石祠などに水神を祀る姿がよくみられる。ここでは水神を祀るかたちを分類し、その傾向を見ていきたい。筑後川中流域の水神を祀る方法は大きく以下のA～Iに分類できる。

【水神を祀るかたちの分類】

- A 自然石碑
- B 自然石碑に「水神」ないし「水天宮」と刻むもの
- C 石祠に自然石を祀るもの
- D 石祠に「水天神」「水神」「水天宮」等と自然石に刻んだものを祀るもの
- E 石祠に神像もしくは札を祀るもの
- F 石祠の奥壁に石龕状に「水神」や「水天神社」と刻むもの
- G 木造の社に祀るもの
- H 石祠を本殿とし、前面に木造拝殿がつくもの
- I 本殿も拝殿も木造社殿

紀年銘のないものは不明であるが、自然石碑、石祠で建造年が分かるものの大半が江戸後期～明治時代に建てられたものである。朝倉市の原鶴にある「河童大明神」と記された自然石碑には寛文元年(1661)の年号が記され、筑後川中流域の水神関係の石碑や石祠では、最も古い年号を持つ。大石神社は大石堰や用水が完成した際に堰や水路の守り神として自然石を立てたのが始まりとされ、元文年間(1736～1741)に郡奉行からの寄進を受けて祠と社殿を有するようになり、昭和28年(1953)の水害による拝殿流失のため、現在地に祀られるようになったという。江戸初期の築造とされる女男石護岸施設の八大龍王や同じく江戸初期の築造と考えられる寺内井手は祭神名がない自然石である。水辺にあり、地元の方の伝承で「龍王様」や「水神様」と言われているから「水神」を祀っていることがわかる。

つまり、佐田川の例であげたように、近世における初現的な水神を祀る形として、自然石を祀る形(A)から始まり、その後の改修を機に石碑に祭神名を刻んだり(B)、石祠や社に御神体としての自然石を祀る形が追加され(C)、祠や社に祀る御神体も神像や自然石、祭神名を刻んだ石やお札など様々なバリエーションが追加される(D～G)。そして祀る人々の組織力や経済力を背景に、祠に拝殿がついたり(H)、祠ではなく社殿を有する「神社」として発展(I)するものもある。明治時代に石祠が急増する際に、現在につながる大枠が決まり、現在も改修の際は、基本的に前代の形を踏襲する形でされるのが殆どである。

うきは市浮羽町三春の水神社は昭和28年(1953)の「水天宮」銘自然石碑(B)と昭和31年銘の「水天宮」石祠(E・H)が併存しているし、うきは市吉井町千年のものは紀年銘のない「水天神」銘自然石碑(B)に天保4年(1833)銘の狛犬がつくものと文久3年(1863)銘のある石祠が共に現地へ遷座し並び立つ。床島堰の近くにある朝倉市長田には年号のない「水神」銘自然石碑(B)と明治9年(1876)銘の石祠が併存する。渡し場のあった朝倉市上寺の舟守地区には無銘自然石碑(A)が2体と明治12年(1879)の「水神」銘自然石碑(B)が併せて立つ。朝倉市長洲の虚空蔵神社内には年号のない「水神」銘自然石碑(B)と文久3年(1863)の「水神社」銘自然石碑(B)が併存する。これらは新旧関係を表すものと他の場所にあったものを合祀するものがあり、判断が難しい。長洲のものは虚空蔵神社の境内内であることから他から合祀されたものとされる。他は自然石碑と石祠が併存するが、自然石碑に年号がないか、年号あるものは石祠より先行することから、新旧関係を示すものと思われる。

(3)「水神」を祀るかたちの地域性 水神を祀るかたちについては、ある程度地域性を見ることが出来る。筑後川上流域は自然石碑の水神が多い。石の大きさも上流が大きく下流につれて小さくなる傾向がある(平野ほか2014)。日田地域では石碑が主体であり、夜明～床島堰付近までは石碑と石祠が混在する。それより下流の宮ノ陣あたりまではほぼ石祠に祀る形のものである。こうした石碑や石祠は水天宮の本宮がある瀬ノ下より下流になると、筑後川の本流沿いにはほぼ見られなくなる。

この現象は御神体として筑後川から入手される石の大きさが密接に関わっていると考えられる。日田



A類
荷原水神



B類
舟守水神



B類
河童大明神



C類
穂坂水天宮



D類
大杜水天宮



E類
西原水神



F類
東合川水天神社



G類
杷木池田小堂



H類
大石水神社



I類
長野水神社

図2 「水神」を祀るかたちの分類

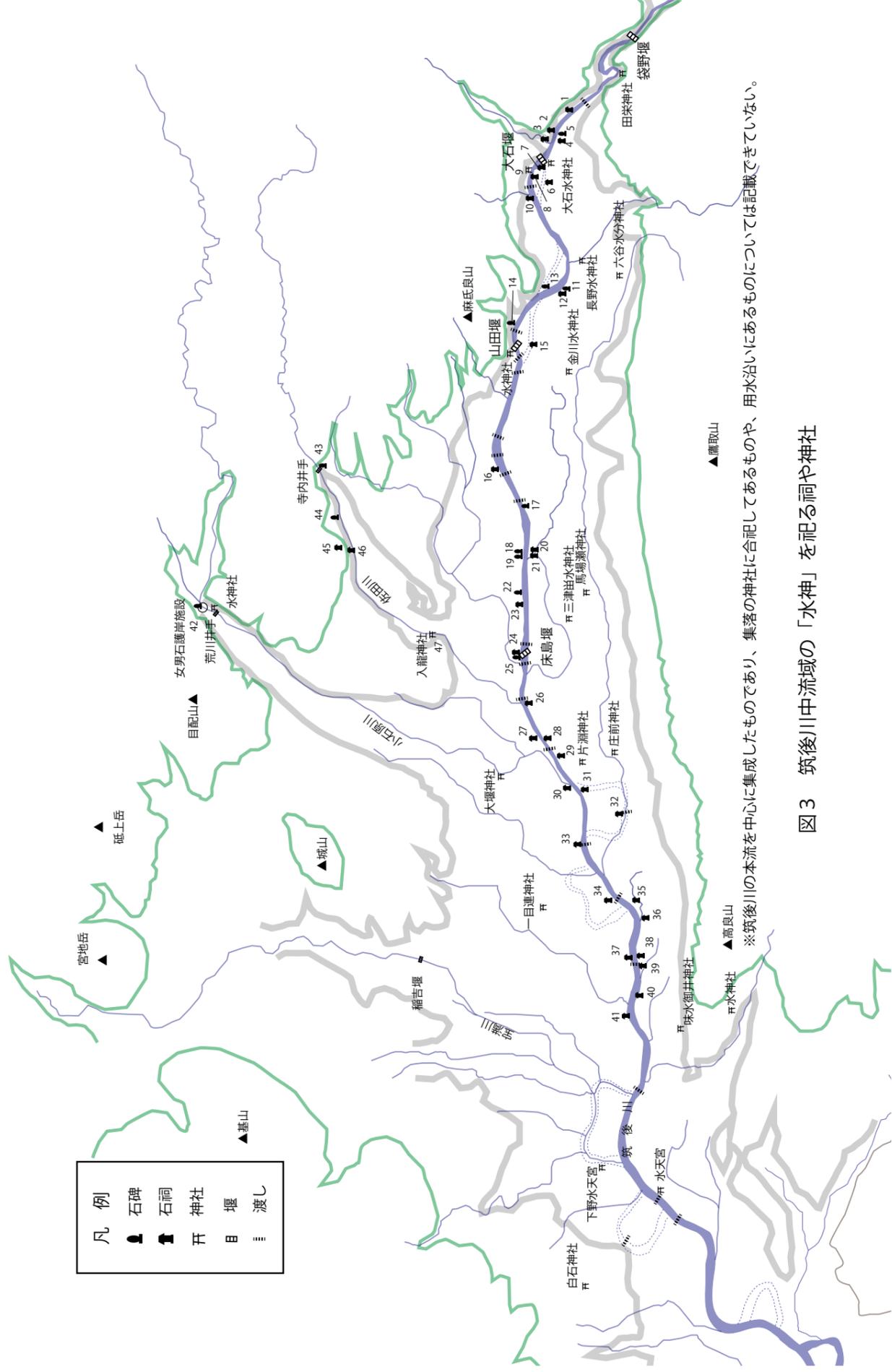


図3 筑後川中流域の「水神」を祀る祠や神社

表2 災害記録と石祠・石碑の建立

| 年号 | 西暦 | 治水・利水関係 | 災害 | 備考 | 年号 | 西暦 | 治水・利水関係 | 災害 | 備考 | 備考 |
|------|------|---------------|---------|----------|-------|------|---------|-----------------------|----|-------------|
| 天正6 | 1578 | | 洪水(筑後川) | | 文化6 | 1809 | | 日照り | | 調査 |
| 慶長5 | 1600 | | | | 文政8 | 1825 | 尾田福遊工事 | | | |
| 慶長5 | 1600 | 女男石屋岸施設 | | | 文政11 | 1828 | | 大雨洪水 荒川井手掘運(小石原川) | | 9・11 (1833) |
| 慶長6 | 1601 | 瀬ノ下新川開削(田中吉政) | | | 天保9 | 1838 | | 大洪水(筑後川・佐田川) | | |
| 慶長17 | 1612 | 空堀開削(加藤十兵衛) | | | 天保12 | 1841 | | 洪水(佐田川) | | |
| 慶長19 | 1614 | | | | 嘉永3 | 1850 | | 大雨洪水 橋梁流失(小石原川) | | 32(1853) |
| 寛永年間 | 1624 | 千栗土井(成富兵衛) | | | 万延元年 | 1860 | | 大水 筑後國大冨(筑後川) | | 12(1863) |
| 寛文3 | 1663 | 堀川開削 | | 13(1661) | 1874 | 1874 | | 大風・洪水(筑後川) | | 18(1865) |
| 寛文4 | 1664 | 山田堰・大石屋築造 | | | 明治7 | | | 大風・洪水(筑後川) | | 28(1873) |
| 延享元年 | 1673 | 袋野陸道掘削・袋野堰築造 | | | 明治11 | 1878 | | 洪水(三浦) | | 24(1876) |
| 延享2 | 1674 | | | | 明治18 | 1885 | | 洪水(筑後川) | | 45(1877) |
| 延享3 | 1675 | | | | 明治22 | 1889 | | 大水 耳納の窟~鹿野・大瀬の如し(筑後川) | | 17(1879) |
| 延享7 | 1679 | | | | 明治24 | 1891 | | 大雨洪水 女男石屋水(小石原川) | | 15(1890) |
| 延享8 | 1680 | | | | 明治28 | 1895 | | 大風・洪水(筑後川) | | 20(1884) |
| 貞享元年 | 1684 | | | | 明治32 | 1899 | | 洪水(筑後川) | | 16(1886) |
| 元禄15 | 1702 | | | | 明治34 | 1901 | | 洪水(筑後川) | | 44・6 (1893) |
| 元禄16 | 1703 | | | | 大正10年 | 1921 | | 大洪水(筑後川) | | 35(1898) |
| 宝永3 | 1712 | 床島堰築造 | | | 昭和3 | 1928 | | 洪水(三井・新倉・三浦) | | 39(1901) |
| 正徳5 | 1715 | | | | 昭和10 | 1935 | | 洪水(筑後川) | | 1(1902) |
| 享保元年 | 1716 | | | | 昭和14 | 1949 | | 大洪水(筑後川) | | 2(1903) |
| 享保4 | 1719 | | | | 昭和15 | 1950 | | 大風・洪水(筑後川) | | 21(1908) |
| 享保5 | 1720 | | | | 昭和18 | 1953 | | 大風・洪水(筑後川) | | 46(1919) |
| 享保6 | 1721 | | | | 昭和19 | 1954 | | 大洪水(筑後川) | | 38(1922) |
| 享保7 | 1722 | | | | 昭和20 | 1955 | | | | |
| 享保8 | 1723 | | | | 昭和21 | 1956 | | | | |
| 享保9 | 1724 | | | | 昭和22 | 1957 | | | | |
| 享保10 | 1725 | 松久保新川掘削 | | | 昭和23 | 1958 | | | | |
| 享保14 | 1729 | | | | 昭和24 | 1959 | | | | |
| 享保17 | 1732 | | | | 昭和25 | 1960 | | | | |
| 享保18 | 1733 | | | | 昭和26 | 1961 | | | | |
| 寛保2 | 1742 | | | | 昭和27 | 1962 | | | | |
| 寛保5年 | 1744 | 寺内堰石置引に(佐田川) | | | 昭和28 | 1963 | | | | |
| 延享2 | 1745 | | | | 昭和29 | 1964 | | | | |
| 享保5 | 1755 | | | | 昭和30 | 1965 | | | | |
| 享保8 | 1758 | | | | 昭和31 | 1966 | | | | |
| 享保12 | 1762 | | | | 昭和32 | 1967 | | | | |
| 明和元年 | 1764 | 新堀川築成(古賀西工) | | | 昭和33 | 1968 | | | | |
| 明和4 | 1767 | | | | 昭和34 | 1969 | | | | |
| 明和5 | 1768 | | | | 昭和35 | 1970 | | | | |
| 明和7 | 1770 | | | | 昭和36 | 1971 | | | | |
| 明和8 | 1771 | | | | 昭和37 | 1972 | | | | |
| 安永5 | 1776 | | | | 昭和38 | 1973 | | | | |
| 安永8 | 1779 | | | | 昭和39 | 1974 | | | | |
| 天明5 | 1785 | | | | 昭和40 | 1975 | | | | |
| 天明8 | 1788 | | | | 昭和41 | 1976 | | | | |
| 寛政元年 | 1789 | | | | 昭和42 | 1977 | | | | |
| 寛政2 | 1790 | 山田堰大改修(古賀西工) | | | 昭和43 | 1978 | | | | |
| 寛政3 | 1791 | | | | 昭和44 | 1979 | | | | |
| 寛政4 | 1792 | | | | 昭和45 | 1980 | | | | |
| 寛政8 | 1796 | | | | 昭和46 | 1981 | | | | |
| 寛政11 | 1799 | | | | 昭和47 | 1982 | | | | |
| 寛政12 | 1802 | | | | 昭和48 | 1983 | | | | |
| 文化3 | 1806 | | | | 昭和49 | 1984 | | | | |

※石祠・石碑の番号は表1と対応する

この表を見ると、災害の発生と石祠や石碑の建立はリンクしないことがわかる。

～床島付近（上流部）では存在感のある石碑形の石が容易に入手でき、石祠の建立が盛んになる江戸後期～明治時代になっても祠に収まる大きさにないため、そのまま残るか石祠と併存する。床島付近～宮ノ陣（中流部）では石祠に収まる大きさの御神体が主体であるため、石祠が主流となる。所謂河原石が広がるような河原が河川に形成されるのは宮ノ陣あたりまでであり、それより下流は土砂が堆積し、御神体となるような石の入手が難しい。そのため、河川沿いに祠や石碑で水神を祀る光景は見られない。

（4）水神祭りと**牛馬** 甘木朝倉地方では水神祭りの事を「ダブリュー」と呼ぶ。八朔の頃（時期は地域によって様々）に、川端に竹を立て、そこに一節ごとに切った竹筒に御神酒やご飯を入れ、御頭付の魚をつるす（佐々木1981）。本来は「駄風流」で、牛馬祭りであったものが、恐らくは農業の機械化とともに牛馬の要素が薄れ、水神祭りとなっている。朝倉市の入龍神社は、享保年間に牛馬の病が流行ったために元文3年（1738）に水神を勧請したとあり、牛馬と水神信仰は密接な関係にあった。筑後川流域の河童伝説には水辺で牛馬に悪さをする話がでてくるが、こうしたことに端を発しているのかもしれない。

3. 筑後川四堰と神社

（1）山田堰と堀川用水 山田堰は寛文3年（1663）に築造され、堀川も掘削される。宝暦7年（1757）に作られた「上座下座両郡大川絵図」には山田堰は突堤状の姿で描かれる。その後、砂が堆積し取水に不都合が生じ始め、享保7年（1722）、奉行川崎伝次郎、麻生四郎右エ門により用水取水口が上流に変更される。巨岩を開削し、内法5尺、長さ11間の切貫水門となった。宝暦9年（1759）には大川奉行十時源助、郡奉行寺田庄左衛門等により切貫水門がさらに5尺拡張される。明和元（1764）年には郡奉行寺田庄左衛門、属吏森喜作、大庭村庄屋古賀百工を中心に突分けより中村方面に至る新堀川を開削する。寛政2年（1790）には古賀百工により山田堰の大改修がなされ、現在の山田堰の形がほぼ完成した。その後昭和28年（1953）の水害で被害を受けるが、当時の面影を残す形で修築される。堀川用水及び朝倉の水車は国指定史跡となり、堀川用水から菱野の三連水車、三島の二連水車、久重の二連水車と合わせて約35haを潤している。水神社は享保7年（1722）の切貫水門工事や水難退除を祈願し、堀川関係各村の農民が共同で建立し、罔象女神が祀られる。

（2）大石堰 寛文4～5年（1664～1665）に丹羽頼母を普請奉行とし、五庄屋（栗林次兵衛・本松平右衛門・山下助左衛門・重富平左衛門・猪山作之丞）らを中心に開削した大石長野用水の水量を確保するため、延宝2年（1674）に築造。五庄屋は現場に礫具を立て、決死の覚悟で工事に臨む。大石堰の脇には大石水神社が建つ。また長野用水には長野水神社が建ち、大正元年（1912）には五庄屋の御霊も長野水神社に合祀され、祭神として祀られる。

（3）床島堰 床島堰は恵利堰・床島堰・佐田堰と、床島用水からなる施設である。築堰に適した床島の地は筑前藩との境にあり、工事が難しく、計画は見送られ続けていた。五庄屋（高山六右衛門・秋山新左衛門・中垣清右衛門・鹿毛甚右衛門・丸林善左衛門）の嘆願や尽力のもと、草野又六や野村宗之丞らを中心に工事がなされる。正徳2年（1712）4月に完成した。また、用水への水の流入が十分でなかったため、正徳4年（1714）に改修を実施している。

堰から少し離れてはいるが、大堰地区に大正15年（1926）に天満神社と水神社を合祀して大堰神社とし、草野又六と五庄屋が祀られる。

（4）袋野堰・袋野隧道 袋野堰は、延宝元年（1673）に開削された袋野水道に十分な水を流すため

に延宝2～4年（1674～1676）頃に造られた。袋野水道は吉井の大庄屋田代弥三左衛門重栄とその子重仍により開削されたが、そのうち1.8キロが隧道（トンネル）を掘る難工事であった。隧道を掘る工人は出雲の銀山の工夫が招かれ、工事にあたってといわれる。

田栄神社は、工事が完成した際に隧道掘削をした工夫たちが、岩壁に田代重栄の姿を彫りこんでこの地を去ったことからはじまり、今なお人々の信仰を集めている。

筑後川の左岸の久留米藩側の堰の立役者（袋野堰の庄屋、大石堰・床島堰の五庄屋、草野又六）は後に神格化され、神として祀られる。しかし、袋野堰や大石堰の普請や設計において不可欠であった丹羽頼母は祀れていない。久留米藩の治水と利水における「神」ともいべき丹羽頼母は祀られないが、佐賀藩の治水と利水の礎を築いた成富兵庫茂安は明治になって白石神社に祀られる。大石堰の築造に際して庄屋たちの礫台が用意されていたことは有名な話で、五庄屋たちの覚悟と藩としての覚悟の無さが明確に語られる。同じ治水と利水の功績者であっても、最終的な藩としての責任の取り方の違いが後世の神格化に影響を与えているのだろう。北岸の黒田藩では古賀百工や松岡家など尽力者がいて、その業績は今なお称えられ、感謝されているが、神格化まではされていない。それぞれの地域の事情が垣間見えて興味深い。

4. 水天宮

水天宮は天之御中主神・安徳天皇・高倉平中宮・二位の尼を祭神としている。そもそもは安徳天皇の母である高倉平中宮に仕えていた按察使局伊勢が壇ノ浦の戦い後に落ちのび、千歳川の鷺野ヶ原で建久元年（1190）に水天宮を祀り、尼御前神社といわれていた。その後慶安3年（1650）に久留米藩2代藩主有馬忠頼の社地・社殿の寄進により現在地に至る。元々は水天を祀っていたが、神仏分離の際に天之御中主神が祭神となったと言われる。水天は十二天部の一人で、西の守護を司り、水の神である。また安徳天皇は入水したことから水天皇とも言われ、水の神とも言われる。さらに水天宮の前身の尼御前神社には尼御前大明神・荒五郎大明神・安坊大明神が祀られていた。尼御前大明神や荒五郎大明神は筑後川の神とも伝えられる。このように水の神たる水天宮の祭神と水との関わりは諸説あり明確でない。

現在は水の神であると同時に農業・漁業・海運の神であり、安産・子授け等子供の守り神としても信仰を集める。昔は子供たちの首に木製の小さな瓢箪を象ったものをぶら下げている光景が良く見られた。これは河童に水中に引き込まれても、沈まないようにという水難除けのお守りであった。筑後川沿いの石祠や石碑にも「水天宮」として祀られ、水の筑後川流域の水の神の中では中心にいたことがわかる。鳥居の額に水神社と書かれていても実際には水天宮と書かれた石祠が祀られていたりする例や、祭神が何かわからない自然石が置かれた石祠に「水天宮」と書かれた例もあり、水の神と言えば水天宮という筑後川沿岸の人々の思いが如実に表れている。

明治11年（1878）、久留米藩の旧土族たちは福島県の安積原野を開拓すべく入植した。猪苗代湖の水を、安積疎水を開削して安積原野を開拓する困難なものであった。その際に、郡山の地にも水天宮を分霊し心の拠り所とした。この例からも人々と水天宮の関わりが良くわかる。

おわりに

今回は筑後川中流域の筑後川沿いの水神を祀る石祠・石碑や堰の築造にまつわる神社を概観した。川と人々の関係は深く、それ故に「水の神」という漠然とした概念のもとで今なお畏敬の念をもって人々が接していることがわかった。今回は筑後川沿岸の石祠の解明を研究の発端としていたため、筑後川の中流域にしぼったが、今後は上流と下流、支流や各集落を含めて検討を行いたい。そうすることで、よ

り具体的な信仰の在り方が見えてくるだろう。

参考文献

- 安陪光正 2009『村のくらし—筑前三奈木—』
 佐々木哲哉 1981「第9編民俗 第1章村落の神と仏」『甘木市史』下巻 甘木市史編さん委員会
 立石 晶編 1992『福岡県近世災異誌』
 平野哲也・樋口明彦・榎本碧・永村景子 2014「筑後川上中流域の水神祠群に着目した人々の暮らしと川との歴史的關係性の読み解き」『景観・デザイン研究講演集』No.10



写真1
寺内井手と水神 (43)



写真2
志波の渡しと水神 (14)



写真3
筑後川と塚島水神 (33)

第4章

神仏と向き合う人の歴史

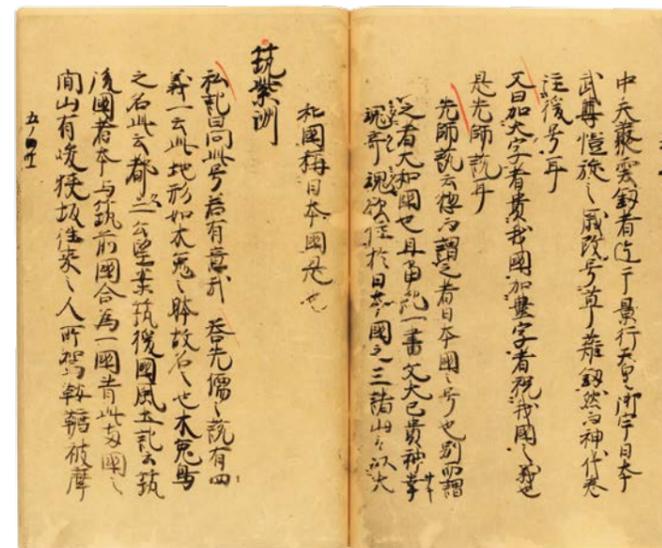
小嶋 篤

はじめに

特集展示「筑紫の神と仏」は、日本列島での律令国家形成が進んだ飛鳥時代から奈良時代(7~8世紀)の信仰に焦点を当てた展覧会である。本期間は前方後円墳等の巨大古墳の築造が終焉を迎え、仏教の広がりに伴う寺院造営が進む時期にあたり、日本の宗教史における転換点にあたる。また、律令制の施行による社会組織の改編、古代山城や都市の建設による生活空間の変容も急激に進んだ。このような多面的かつ複合的な過渡期における信仰を把握する上では、旧来の要素と新来の要素が、どのように並存や融合、あるいは淘汰されているのか、という「過程」と「結果」に目を配らなければならない。以上の視点から、歴史的前提となる神観を整理した上で、「神仏と向き合う人の歴史」を特集展示「筑紫の神と仏」の出品資料の解説と絡めながら説明していく。

1. 古代の神観

鹿猛神 『筑後国風土記』逸文で確認できる筑紫神の説話(画像1)には、古代祭祀の構成要素が散見され、『古事記』・『日本書紀』等の文献史料や、発掘調査等の考古資料と整合する部分が認められる。まず、祭神となる筑紫神が鹿猛神(人の命尽くしの神)として登場する点が注目でき、「神の脅威」という認識の存在が想定できる。人々に害をなす、あるいは強い神威で人々に影響を与える神の姿は、『古事記』・『日本書紀』に度々登場し、『風土記』を含めた史料の編纂が進められた飛鳥時代から奈良時代(7世紀後半~8世紀前半)の神観を反映していると見てよい。宗像神も同様の性格がうかがえ、『日本書紀』履中天皇5年に筑紫に派遣された車持君が「筑紫所居三神(宗像三女神)」に充てられていた「筑紫之車持部」を独断で使役したことに対し、「筑紫所居三神」が宮中に現れ「何奪我民矣、吾今慚汝。(なぜ我が民を奪うのか、今にお前に恥をかかせる。)」と非難を述べる記事が見られる(画像2)。本記事は古墳時代の統治方式(豪族私有民である



画像1 筑紫神説話(『積日本紀』複製九州国立博物館蔵)

公望案ずるに、筑後国の風土記に云はく、筑後国は、本、筑前国と合せて、一つの国たりき。昔、此の両の国の間の山に峻しく狭き坂ありて、往來の人、駕る所の鞍轡を摩り尽されき。土人、鞍轡尽しの坂と曰ひき。三に云はく、昔、此の界の上に鹿猛神あり、往來の人、半は生き、半ば死にき。其数極く多なりき。因りて人の命尽の神と曰ひき。時に、筑紫君と肥君等之を占へて、筑紫君等の祖の豊依姫を祝と為して之を祭らしめき。爾より以降、路行くの人、神に害はれず。是を以て、筑紫の神と曰ふ。四に云はく、其の死にし者を葬らむ為に、此の山の木を伐りて、棺輿を造作りき。茲れに因りて山の木尽さむと欲す。因りて筑紫の国と曰ひき。後に両の国に分ちて、前と後と爲す。

部曲の帰属問題)にも関わるが、神への丁寧な姿勢・祭祀を欠くことが非社会的行為であったことを示す。

神観と認知機能 古代の神観を把握する上で、近年の認知宗教学の成果も参考となる。人が神を信じ、祭祀を行う背景には、「人間の脳の認知機能」が大きく関わっている。人は特定の現象(雨・風等の自然現象や病等)に對峙した際、その現象を生じさせる「行為者」を直観的に感じ、自らの姿や性格と同じように「人格化」して把握する癖をもっている(ポイヤー 2008、ガスリー 2016)。このような認知機能は、古代日本の人と神にも当てはまり、特定の現象が現れる環境・場所には、それを起こし司る神が居られると直観する(笹生2019a)。宗像三女神も、玄界灘の海上にでる霧にもとづく神名「タゴリヒメ(タギリヒメ)」、激しい潮流の動きにもとづく神名「タギツヒメ」、真水が湧く島にもとづく神名「イツキシマヒメ」をもつことから、自然現象を人格化して把握する認識方法が反映されている。筑紫神の説話では「此界上 有^{あらぶる}猛神(筑前国と筑後国の境に^{げんかいなだ}猛神有り)」とあり、境界が「坐す(居られる)」場所であったと分かる。この境界での現象の要因と過程は不明だが、「往来之人 半生半死(往来する人の半分は生き、半分は死んだ)」という結果が生じ、その現象(人の命尽くし)に由来する神名「ツクシノカミ」が付けられている。



画像2 「筑紫所居三神」が坐す宗像・沖ノ島と玄界灘

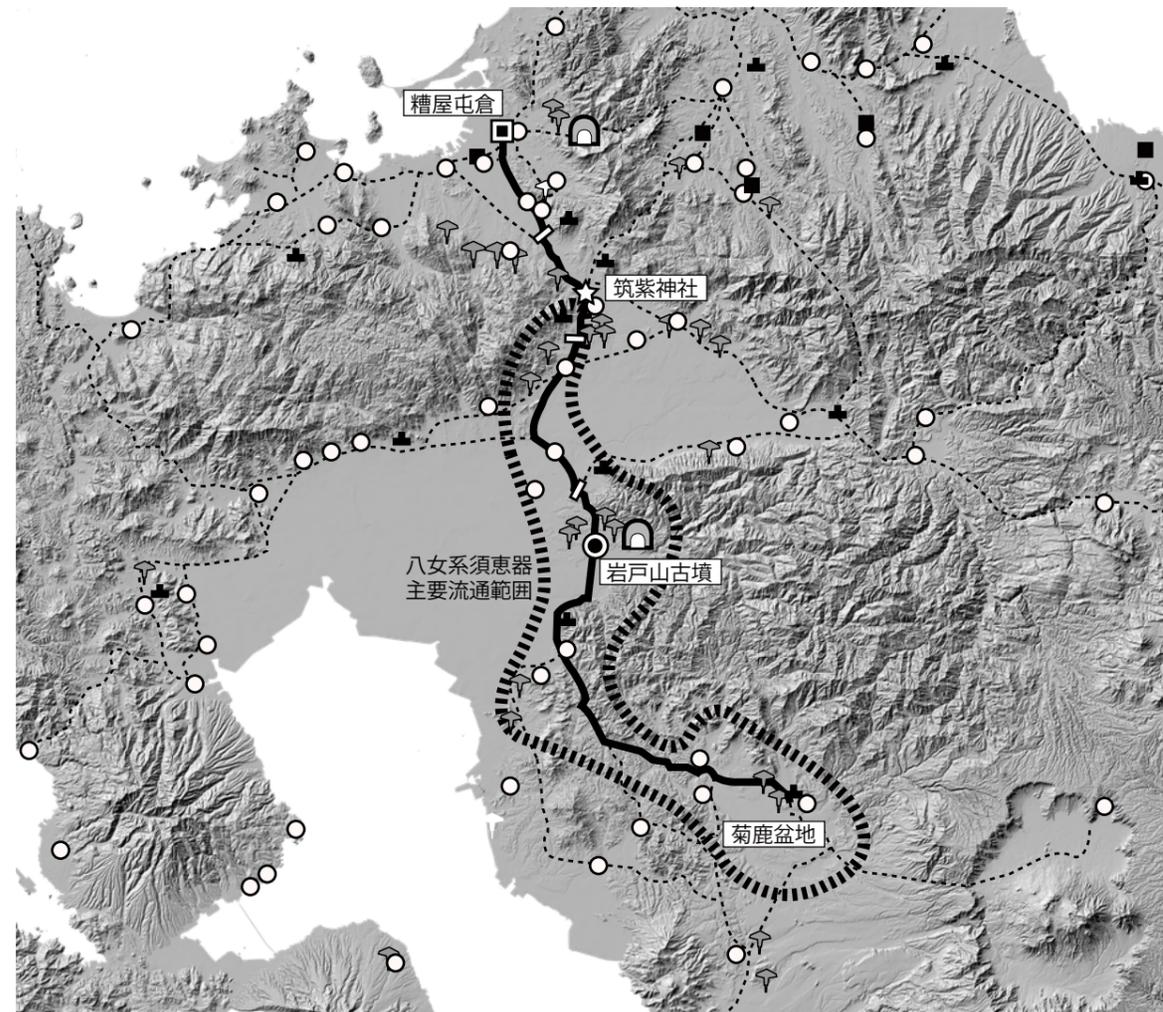
的に感じ、自らの姿や性格と同じように「人格化」して把握する癖をもっている(ポイヤー 2008、ガスリー 2016)。このような認知機能は、古代日本の人と神にも当てはまり、特定の現象が現れる環境・場所には、それを起こし司る神が居られると直観する(笹生2019a)。宗像三女神も、玄界灘の海上にでる霧にもとづく神名「タゴリヒメ(タギリヒメ)」、激しい潮流の動きにもとづく神名「タギツヒメ」、真水が湧く島にもとづく神名「イツキシマヒメ」をもつことから、自然現象を人格化して把握する認識方法が反映されている。筑紫神の説話では「此界上 有^{あらぶる}猛神(筑前国と筑後国の境に^{げんかいなだ}猛神有り)」とあり、境界が「坐す(居られる)」場所であったと分かる。この境界での現象の要因と過程は不明だが、「往来之人 半生半死(往来する人の半分は生き、半分は死んだ)」という結果が生じ、その現象(人の命尽くし)に由来する神名「ツクシノカミ」が付けられている。

2. 神まつり

祭祀の目的 九州国立博物館隣の太宰府天満宮は、新年正月に約200万人が初詣に訪れる。初詣の目的は人それぞれだが、受験直前ということもあり、祭神・菅原道真にあやかり合格祈願をする参拝者も多いだろう。志望校への「合格」という希望に対し、学問の神様の後押しをお願いするわけである。神に祈ることで、人々が望む神の働きを願うという構図は、古代の神観とも共通する。筑紫神の説話では、「往来之人 半生半死」という事態を避けることを望んだ人々は、祝(神職)を立てて神に願うことで、坂(境界)を安全に往来するという目的を果たした(図1)。神が坐す場所で祭祀を行い、神は返礼として人の願いを聞き入れるという関係には、「何かを提供すれば、何かが返されるはず」という人間関係の直観が当てはめられている(笹生2019a)。古代の人々が神を認識する際に、人間と同じような姿・性格で把握を試みていることが分かる。

祭祀の所作 古代の人々が神に人格を見出している以上、人間の基本感情である「喜怒哀楽」も神に反映される。冒頭の^{たたり}猛神で記したように、非礼な行為は神の怒り・祟りと直結する。その反面、丁寧に^{たたり}お祭りすれば神は喜び、人の願いを聞き入れてくれる。この丁寧なお祭りの作法が^{さいしき}祭式であり、非礼とならないよう、^{けっさい}厳重な潔斎とあわせて^{じゅんしゆ}遵守する必要がある。

宗像・沖ノ島に遺された祭祀遺跡の出土品は古墳副葬品と類似する。この類似は「葬祭の未分化」とも捉えられているが、未分化と言うよりも、「葬祭で共通した品物を用いた」と表現した方が適切である。沖ノ島祭祀では、古墳時代前期から中期(4~5世紀)にかけては大型の青銅鏡や腕輪形石製品、古墳時代後期から飛鳥時代(6~7世紀)にかけては黄金に輝く大刀や馬具を神に捧げる。これらの品物は、古墳時代の人々が大切にしていた宝物であり、神に捧げるべき品物(神が喜ぶと考えた品物)であった。



○:大型古墳・大規模群集墳 飛燕式鉄鏡 八女系須恵器窯 水城・土壘 古代山城 宮家・屯倉
 ※地形を基に、①大型古墳・大規模群集墳の立地、②古墳構築技術(横穴式石室墳・埴輪)の共有関係、③須恵器の流通状況、④『日本書紀』・『風土記』記載記事を組み合わせ、古墳時代後期~飛鳥時代(白村江の戦い以前)の主要陸路を想定した。古代山城や土壘は参考までに図示している。

図1 筑紫神社と筑紫縦貫道(小嶋2021)

つまり、社会組織の頂点にいる豪族の所有品と、神への奉納品が共通することは、葬祭の未分化ではない。葬祭は分化した上で、「豪族という人格に対する葬送」、「神という人格に対する祭祀」を執り行い、価値ある品物をそれぞれに捧げたのが実情であろう。品物への社会的価値観は遷り変わるため、古墳副葬品と沖ノ島祭祀遺跡出土品の種類も変遷する。逆に言えば、沖ノ島祭祀遺跡出土品が古墳副葬品と連動するように変遷する様は、沖ノ島祭祀がいかに丁寧になされていたかを物語る。また、あわせて出土位置が巨岩の上から巨岩の岩陰へと変遷することも、祭祀の所作を各時代の神観や価値観にあわせて、より丁寧になるよう改善していった結果であろう。

沖ノ島祭祀との比較研究では、巨岩群を核とする祭祀遺跡の後野・山ノ神前遺跡群が注目できる。本遺跡群では発掘調査の記録と出土遺物の観察から、奈良時代における祭祀の所作の一部が把握できる。片縄山の山頂近くにある本遺跡群では、参道を通して奉納品や祭具を運び、祭祀に先立ち、^{こしき}炉・甗等を用いた^{しんせん}神饌(神の食事)の調理がなされている。出土品には^{しんせん}転用硯も認められることから、祭祀の準備、あるいは祭祀執行時に筆記行為も行っている(図2)。祭祀自体の中身は不明だが、調理痕跡と多量の^{ぜん}膳具の存在から、神の存在を象徴する巨岩(御形)の前面で神饌を捧げ、祝詞を奏上した姿が描ける。

祭祀の最後には、巨岩の岩陰等に供膳具を集めて祭場を清めた。また、巨岩からやや離れた位置で土器の埋納も行っている。この埋納には灯明皿を用いていることから、夜間に実施された可能性がある。祭祀の所作において、祭祀執行の時間帯も重要な要素である。

このような山中の祭祀遺跡の事例は、片縄山と四王寺山を挟んで向かい合う宝満山でも複数見られる。宝満山遺跡群における祭祀遺跡は散在する上、その多くは発掘調査を経ていないため詳細は不明だが、大宰府政庁の整備（Ⅱ期政庁の整備）と同時期には、山中での祭祀が開始されていたことがうかがえる。その中心となる辛野地区では、後野・山ノ神前遺跡群と同様に調理具・供膳具・筆記具・照明具が確認でき、特定地点に集積する状況がうかがえる。調理具のうち移動式竈の存在は重要で、祭場の近辺で神饌の調理がなされていたことを示す。

これら山中の祭祀遺跡と共通する痕跡を残すのが、福岡平野西部に位置する金武城田遺跡である。本遺跡では、柵列と二重の区画溝に囲まれた特殊な総柱建物（本殿）が確認され、その前面に築かれた方形石積みを中心に、調理具・供膳具・照明具の集積や埋納が認められた（図3）。埋納は方形石積みの下層でなされており、やはり、灯明皿を用いて土器類を埋納してい



図2 後野・山ノ神前遺跡群をモデルとした社の想定図

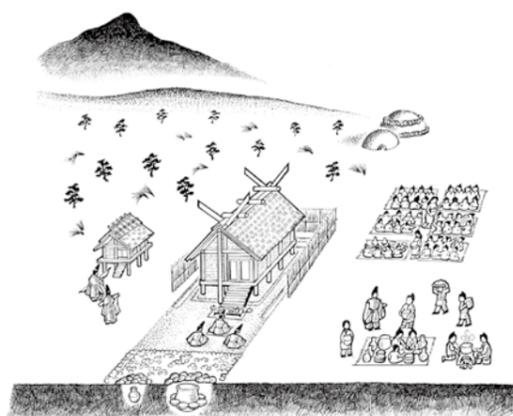
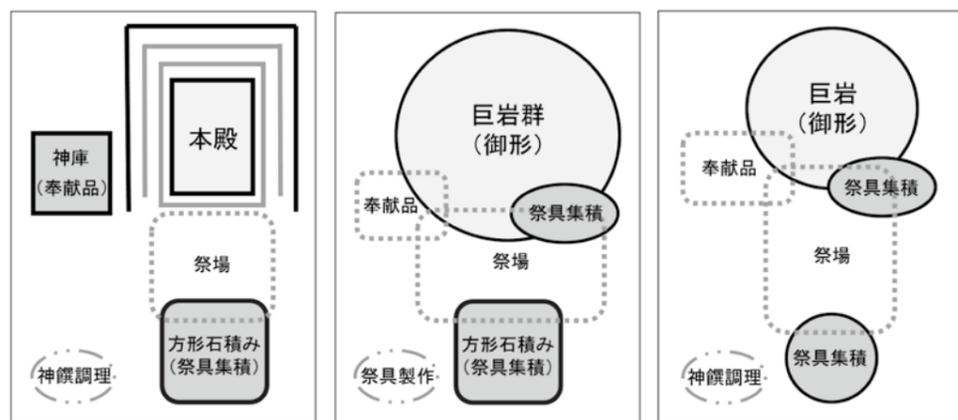


図3 金武城田遺跡をモデルとした社の想定図



後野・山ノ神前遺跡群、沖ノ島祭祀遺跡、金武城田遺跡を素材とした、奈良時代の大宰府管内における社の空間模式図である。物質資料で確認できる巨岩や本殿、祭具集積の位置関係から、祭場の位置を想定している。考古資料では、金武城田遺跡のタイル状礎敷（本殿と方形石積みの間の区画）が祭場の傍証である。祭具集積は考古資料からおおよその配置を特定でき、明確な遺構をもつ「埋納」は、本殿や巨岩と有機的関係をもちつつも、やや離れた場所となされる。神饌の調理は、後野・山ノ神前遺跡群で炉と調理具が確認できるため、祭場の近傍でなされたかと判断できる。沖ノ島でも神饌の調理がなされた可能性はあるが、現状で確実な物証はない。沖ノ島祭祀遺跡の祭祀空間は巨岩と社殿の双方の要素をもつため、古代の社殿の有無は未確定である。

図4 筑紫の社における空間構成

る。埋納した土器には、加熱調理の痕跡をのこす甕が含まれており、神饌を調理した特別な調理具であったと考えられる。

以上から、奈良時代の大宰府管内では、「神の存在を象徴する巨岩」と「神の占有空間である本殿」を核とする社が並存し、比較的共通した祭祀を執り行っていたと分かる（小嶋2019a）。なお、このような祭祀遺跡の空間構成は、奈良時代における沖ノ島祭祀遺跡にも当てはまり、巨岩群（御形）と祭場、そして巨岩の岩陰や巨岩群から離れた方形石積みへの祭具集積という配置が共通する（図4）。

祝と豪族 筑紫神説話では、鹿猛神を鎮めるために「筑紫君肥君等占之 令筑紫君等之祖甕依媛 為祝祭之（筑紫君や肥君等が占い、筑紫君の祖となる甕依媛を祝（神職）と定め、鹿猛神をお祭りした）」という対応が記されており、祝の選定のみならず、豪族自らが祝を兼ねていることが分かる。政教一致の統治がなされた古代において、豪族は集団の代表者として、神と向き合う責務を担っていた。このような祝と豪族の関係は筑紫神に限定されず、日本各地で普遍的に見られる。倭政権から委託される形で沖ノ島祭祀を担った宗像君（宗形朝臣氏）もその一事例であり、文献史料が複数確認できる奈良時代においては、宗像郡の郡司と神主を一族で世襲する状況にある（亀井2011、小田2019）。これら文献史料の状況は考古資料からも裏付けられ、沖ノ島祭祀固有の特殊器台（沖ノ島系祭祀遺物）は、古墳時代の宗像君の領域内に分布が収まるだけでなく、前方後円墳や大型円墳等の上位階層墓から出土しており、宗像君と沖ノ島祭祀のつながりを実証する（井浦2017、小嶋2012・2019b、白木2018）。また、筑紫における初期の滑石製祭具の分布範囲が、宗像君の領域と重なることも重要で、倭政権からの祝・采女の派遣等を通じて、宗像君の祭祀の所作（祭祀）も変遷していく様子うかがえる（清喜2018）。

3. 神と仏の出会い

仏を祭る 古墳時代の人々にとって、新たに日本列島に渡って来た仏は「蕃神」（画像3）であった。蕃神である仏の信奉方法については、物部氏と蘇我氏の政争と絡み合いながら、世代をまたいで議論される様が『古事記』・『日本書紀』に記されている。倭政権内での公的な仏の信奉については、欽明天皇13年（552）に天皇から蘇我稲目に委託される形で試行された。天皇からの祭祀の委託は、天津神・国津神の祭祀方式と同じ構造であり、伝統的な神観を応用することで仏の信奉を試みる状況がうかがえる。この際、物部尾輿により問題視されたのが「国津神の怒り」であり、古くから信奉する神への丁寧な姿勢・祭祀を欠くことへの畏れであった。最終的には、蘇我氏が丁未の乱（587年）を経て朝廷内に一強体制を築いたことで、公的に仏の信奉が推進され、以後、寺院造営を含む新たな祭祀が日本各地へと広がっていった。このように公的な仏教の信奉は無秩序になされたのではなく、政争等とも絡みながら、35年以上の月日をかけて既存の秩序（神観）との整合が図られたのである。古代国家はあらゆる神を肯定し、受け入れたのではなく、「常世神」（皇極天皇3年（644）のように社会秩序を脅かす信仰に対しては弾圧も肯定している。常世神とは、富士川のほとりの人・大生部多が勧めた虫祭り、その信奉者は都にまで広がったと『日本書紀』に記載がある。そして、秦河勝が民衆を惑わすことをにくみ、大生部多を打ち懲らしめたとされる。この大生部多が常世神とした虫についても記述があり、「常に橘の木に生じ、あるいは山椒の木にもつく。長さは四寸あまり、その大きさは親指ほど、色はみどり黒いまだらがある。その形は蚕に似



画像3 墨書土器「蕃」（宝満山遺跡群）

ていた」とある(宇治谷1988)(画像4)。以後、『日本書紀』に常世神信仰の記述はなくなるが、蕃神とされた仏もまた、その初期(欽明天皇13年仏教公伝説話の末尾)には既存の神観に基づいて弾圧の対象にもなり、仏像は流し捨てられ、寺は焼かれたと記される。



画像4 「常世神」を想起させる蚕

寺院の造営 飛鳥ではじまった寺院造営は、倭政権の統治組織を介して日本列島の各地へと広がった。筑紫における寺院造営の代表事例として、観世音寺、上岩田遺跡を取り上げる。観世音寺の造営は、古代都市・大宰府の建設と連動して進められた国家事業であり、本事業には筑紫の豪族も関わっていた。筑紫の豪族の関与については、具体的には梵鐘の鐘身に陰刻された「上三毛」・「麻呂」の文字や、鐘身の唐草文から豊国の豪族とのつながりがうかがえる。また、観世音寺の梵鐘と同一工房で製作された兄弟鐘、京都・妙心寺の梵鐘には「糟屋評造春米連廣國」が陽鑄されており、製作者(財源支出者)が筑紫国糟屋評(後の糟屋郡)の豪族であったことが確認できる。

上岩田遺跡は、発掘調査により筑紫国大地震(679年)の被災が確認され、寺院の造営時期が絞り込める貴重な事例となっている。寺院は塔を備えるような定型伽藍ではなく、評衙(役所)と柵列で連結する変則的な仏堂であった。地震により仏堂から崩れ落ちた瓦類には、畿内等で洗練された技術が駆使されており、遠方からの技術者の招来が認められる。豪族名は不明だが、筑紫国御原評造が仏堂の造営者と想定できる。

古墳・火葬墓・土坑墓 中央、地方を問わず、仏教の拠点施設である寺院の造営は、国家による財源確保、豪族による財政支援で成立していた。また、仏僧自身も当初は祝(神職)を選出するように、豪族一族から選出される形で増加した。このように古代日本の仏教普及は上位階層からはじまり、その影響は部曲(豪族私有民)の私的動員抑止による古墳墓制の衰退と相まって、火葬墓の出現という形でも表出した。

筑紫の火葬墓の代表的事例として、宮地嶽神社境内出土蔵骨器と多久遺跡群D地点1号火葬墓を取り上げる。現在の宮地嶽神社境内は、飛鳥時代(7世紀中頃)に長大な横穴式石室をもつ宮地嶽古墳が築かれた有力者の墓域と重なる。蔵骨器自体もガラス壺・銅壺・土師器深鉢の3重の容器が用いられ、舍利容器を模倣した格の高いものであり、古墳の墓域を継承する形で宗像郡の郡司層が葬られたと見られる。

多久遺跡群D地点1号火葬墓は、終末期古墳で見られる小石室に蔵骨器を繰り返し追葬したもので、古墳墓制との連続性がうかがえる(画像5)。加えて、墳丘には鉄滓を集積していたと把握でき、古墳時代から奈良時代(6~8世紀)に福岡平野西部から糸島にかけて普及していた「鉄滓供献」の風習が認められる(小嶋2008・2009・2010)。つまり、本火葬墓には被葬者である豪族を介して、仏教・古墳・鉄生産という3つの要



画像5 多久遺跡群D地点1号火葬墓の蔵骨器と鉄滓



画像6 干潟城山遺跡の土坑墓(模型)

による部曲の私的動員の抑止と直結する。筑紫における薄葬化の動態の初期の事例では干潟城山遺跡の土坑墓が目に見える。本土坑墓の副葬品は、終末期古墳の副葬品と同一組成であり、両者の葬送が極めて類似したものであったと判断できる。このように人々の信仰が強く表出する葬送の場面においても、政治・軍事制度の強い影響がうかがえる点は重要である。

山の寺 平野での寺院造営が一段落した後、人里から離れた山間部で寺院の造営も始まった。弘仁11年(820)3月4日の大宰府牒案では、古代山城・大野城の城内に造営された四王寺での法会の実態が記されている。四王寺は宝亀5年(774)に国土護持のために造営された公的寺院である。仏教にはさまざまな経典があり、四天王信仰は『金光明最勝王経』を典拠とする。本経典は国分寺でも転読されており、国家がつくり上げた寺院組織を総動員して、国土護持が祈られていたことがうかがえる。国土の守護者として可視化された四天王像は、視覚的・概念的な軍事境界を象徴する軍事施設と結びつく形で安置されたのである(画像7)。

四王寺は大野城という古代山城と結びつくことで山間部に造営されたが、一方で世俗から離れた山林は、古くから仏僧の修行の場として利用されてきた歴史もある。巨岩祭祀が執り行われた後野・山ノ神前遺跡群に隣接する大藪池遺跡群は、発掘調査により瓦片・墨書土器等が出土した。建物自体は未確認だが、調査地点の付近に山林寺院の存在が想定できる。このような山林寺院の確かな事例は、近隣では薬王寺廃寺跡があり、山間部での修行の拠点施設であったと見られる。大藪池遺跡群や後野・山ノ神前遺跡群のような、聖域である山林に神と仏が同居する宗教空間は、祝と仏僧の双方とつながりをもつ豪族(郡司・郷長)の承諾により成立し、聖域維持の秩序・人材・財源についても担保されていたと考えられる。

日本で神仏習合が進む背景には、神祇祭祀と仏教という異なる宗教体系が、郡司層の同一人物、あるいは親類間で重なっていたことも要因の一つになっている。山林における神と仏の同居は、神仏分離以前にひろく認められ、大宰府の鬼門に位置する宝満山遺跡群も該当する。山中の祭祀遺跡の代表格である辛野地区では、墨書土器「神」と墨書土器「寺」が同一地点で発見されて

素が複合されている。また、同遺跡に隣接する奈良尾遺跡からは、仏堂内の装飾等に用いる埴土片が出土しており、付近に未知の古代寺院が存在した可能性が高い。

列島規模での古墳墓制の衰退後、上位階層を中心に火葬墓という新たな墓制が普及する一方で、伝統的な墓制と言える土葬(土坑墓)も飛鳥時代以降(7世紀後半以降)に増加する(画像6)。土坑墓の急激な増加には、造墓動員数の減少が大きく関わっている。国家が定めた法令である「大化の薄葬令」は、律令的身分制の施行を念頭におくが、より切実な問題として軍事力の国家管理、すなわち豪族



画像7 大野城跡・増長天地区の礎石群

おり、奈良時代に進む神仏習合の様相が考古資料からうかがえる（画像8）。



画像8 墨書土器「神」・「寺」（宝満山遺跡群）

4. 筑紫を覆う信仰

地鎮 古代都市・大宰府の建設は、往時の最先端の技術・思想を取り込んで進められた（画像9）。その様子は発掘調査からうかがえ、大宰府政庁の隣接地からは、鍛冶や漆工等の異業種の工房を一箇所に集め、複合的に運営することで生産効率を高めた状況がうかがえる。このような最新の技術や組織の導入だけでなく、儀礼においても、古墳時代以前には見られない地鎮（鎮壇）が導入されている。発掘調査がなされた政庁南門・中門では、基壇造成の途中で埋納した須恵器壺が確認された。須恵器壺には赤色顔料が塗られ、内部には水晶を納めていることから、儀礼による埋納がなされたかと判断できる。地鎮祭は今日でも結婚式や葬式とならんで広くなされる宗教行為だが、日本古来の信仰体系にはもともとなかった儀礼であり、大宰府建設が進められた7世紀後半～8世紀前半では最先端の儀礼（技術）であった。文献史料では『日本書紀』持統天皇5年（691）の「使いを遣して新益京（藤原京）を鎮め祭らしむ」、次いで持統天皇6年（692）の「浄広肆難波王等を遣して、藤原の京の宮地を鎮め祭らしむ」とある。実際に藤原京の発掘調査では、大極殿南門に取り付く回廊から地鎮具が出土した。本地鎮具でも須恵器平瓶に水晶を納めていることから、藤原京と大宰府で類似した儀式が執り行われたと判断してよい。寺院や官衙でなされた地鎮が広く普及した末の姿が、今日の地鎮祭へとつながっている。

大宰府で執り行われた地鎮では、大野城跡の太宰府口城門で発見された雛形鉄製品も注目できる。本品は鋤先形・鉋形・鏡形で構成されており、その形態は古墳時代の工具・農具や、神まつりで用いられた滑石製祭具と同一である。本地鎮は平安時代の城門改修で埋納された品であり、地鎮の普及とあわせて在来の神まつりとも複合していった実態がうかがえる。古墳時代の系譜を受け継ぐ祭具には雛形鉄製品もあり、『日本書紀』においては「手扶」が相当すると見られる。

また、大宰府では地鎮の思想を内包する「買地券」という葬送儀礼も確認できる。買地券は中国で創始された葬送儀礼で、本品には「①父の埋葬に際し、息子の好雄が静寂の地を購入したこと。②土地の



画像9 地鎮を経て建設された大宰府政庁（模型）

購入代価、③子孫繁栄の祈り」という3つの内容が墨書されていた。買地券は日本に散発的にもたらされた道教で見られる葬送儀礼だが、本品の文面には「七珎」等の仏教用語も用いられており、多元的な信仰の重なりが見える（門田2019）。

祓と天然痘 より道教の色彩が強く確認できる儀礼が祓（解除）である。祭祀に関する法令である『養老神祇令』に記される内裏での「祓」では、人形を捧げ、皇天上帝・三極大君・日月星辰・司命司籍・東王父・西王母・五方五帝などの道教の神々の名を唱える（笹生2019b）。このような内裏の祓と同等のものを地方に求めることはできないが、日本各地で出土する人形の存在は、除病・除災・延命を目的とした祓の普及を物語る。祓の祭具には人面墨書土器や馬形も用いられた。これらの祭具は意図的に打撃を加えて、部分的に破損させるという特徴があり、河川から多く見つかることから、川に穢れを流すという目的で用いられたと考えられる（画像10）。

人形・墨書土器・馬形の出土数が増加する奈良時代は、天然痘が大流行した時期（天平7年（735）以降）とも重なる。対外交流の窓口であった大宰府は日本列島における天然痘の発生源であり、『続日本紀』に感染地域が拡大していく経過が記されている。被害の大きさは、「瘡のある疫病が大流行し、はじめ筑紫から伝染してきて、夏を経て秋にまで及び、公卿以下、天下の人民の相ついで死亡するものが、数えきれない程であった。このようなことは近来このかたいまだかつてなかったことである」とつづられている（宇治谷1992）。天然痘の流行により、中央政界では藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が相次いで亡くなり、藤原四子政権は崩壊した。天然痘が引き起こした政局の変動は、藤原宇合の息子、藤原広嗣による西海道諸国の軍団を率いた反乱（天平12年（740））へと繋がり、筑紫にさらなる混迷をもたらした。

なお、天平7年に天然痘が発生した報を受けた聖武天皇は、幣帛を大宰府管内の神祇に捧げるとともに、大宰府の大寺（観世音寺）と西海道諸国の寺に金剛般若経を読誦させる等の対応をとらせた。また、長門国以東の諸国に対し道饗をさせて、感染拡大の防止を試みた。道饗とは、悪鬼の侵入するのを防ぐために官道で執り行った祭祀儀礼である。このように古代国家は複数の信仰体系を駆使することで、現実的問題への対応策を練ったのである。

鎮護国家 唐・新羅との軍事的境界に位置する筑前国は、聖武天皇の統治理念である鎮護国家の範となるべき国であった。また、筑前国は天平7年の天然痘の発生、加えて天平12年の藤原広嗣の乱の舞台でもあり、聖武天皇の治政を大きく揺るがした場所でもあった。このことは国分寺造営を命令された国司以下に、強い緊迫感を与えただろう。筑前国分寺出土瓦や文献史料の検討からは、その造営事業が大規模かつ短期間に進められたことがうかがえる（齋部2018）。筑前国分寺出土軒丸瓦は、国分寺造営のために特注された瓦であり、変則的な蓮華文が特徴である。国分寺造営事業は天平13年（741）の聖武天皇による「国分寺造営の詔」に端を発するが、同詔には「馭を馳せて天下の神宮を増し飾え」の一文もあり、やはり神事の最高司祭者である天皇としての立場も明示されている。

おわりに

古代日本の人々は、歴史的に積み重ねてきた信仰体系（神祇祭祀の神観）を基礎に、仏教をはじめとする新来の信仰体系との整理統合を図った。本整理統合は必ずしも平和的にはなされず、政局とも絡みながら排除・弾圧という経過もたどった。古代の価値観に基づく合理的整理で編まれた信仰体系は、異



画像10 高畑遺跡の人面墨書土器

第5章

風水思想と古墳・都市

下原 幸裕

はじめに

現代の生活のなかに浸透している風水思想。その淵源は中国に求められ、我が国古来からの信仰や思想と結びつき、少しずつその在り方に変化をみせながら、住宅や墓地の占地、あるいは身の回りの吉凶禍福の判断など、様々な場面に息づいている。古代の都城などの都市や庭園などに風水思想やその世界観が取り入れられたことが早くから指摘され、その歴史は古い。さらに、古墳時代の造墓においても風水思想に基づく立地であろうと指摘されている事例も少なくない。

九州においても、「遠の朝廷」と呼ばれた古代大宰府の立地に、都城と同じ風水思想の影響が指摘されており、また大宰府よりも遡る時期の古墳においても風水思想の影響やその可能性が指摘されている事例が存在する。

そこで、改めてそうした事例を一覧しながら、我が国おける風水思想の受容の様相について考えてみることにしたい。

1 風水思想とは

(1) 風水の基層をなす「気」

もともと風水の基層をなすのは、世界の万物がすべて「気」から成り立っているという「気」論による考え方である。様々な物質はもとより、人や大地もまた気によって成り立っていると考えられている。そのため、気が拡散してしまったり、邪気が流入すると、悪しき状態となり崩壊や死に至る場合もあると考えるのである。『青鳥経』（3世紀頃成立とも言われるが後世の編か）にも「内氣萌生、外氣成形。内外相乗、風水自成。」と記され、気論が根底にあることが確認できる。そして大地にも気が流れているという「擬似身体」としての大地観（三浦2006）も合わせ、場所によってその濃淡があることから、いかに良い気が多く流れ、気を囲い込んで拡散させない地を選ぶか、が重要視されるようになるのである。

風水の説明をするのによく引かれるのは、中国西晋代の郭璞（276－324）に仮託される『葬書』（『葬経』とも呼ばれる）の次の一節である。風水の語も登場するが、「経曰、氣乗風則散、界水則止。古人聚之、使不散行之、使有止、故謂之風水。風水之法、得水為上、藏風次之。」（経にいう、気は風に乗って散じ、水によって止まる。古人、之を聚め、之を散行させず、止めた。故に風水という。風水の法、水を得るを上と為し、風を蔵するは之に次ぐ。）と論じている。いわゆる「藏風得水」の地と呼ばれる所以であり、このような理想の地を求めることが肝要なのである。

風水思想の始まりについては諸説あるが、殷・周代にはすでに陽宅と陰宅との区別がみられるといわれ（何1995）、のちの時代になると中国の「地理」や「天文」などの自然哲学や民間信仰などと結びつきながら「卜宅」や「相宅」ということで土地の吉凶が占われているようである。前漢代には『淮南子』に風水を表現する用語として「堪輿」という語もみられ、『説文解字』に「堪、天道。輿、地道。」と解されたように、天地を総合的にみることで土地の吉凶を判断された。これは儒教の経典『易経』に「空を仰いでは天文を観測し、下に俯いては地理を観察する」と述べられていることとも共通する。また『淮南子』には五行説の影響もみられ、陰陽論も含め、多様な思想が融合している。そもそも現世の宅地を

なる系譜をもつ信仰を組み合わせることで、日々の暮らしを豊かにし、戦乱や疫病等の現実的問題への対応を可能とした。このような多元的な信仰の姿は、社宝や寺宝、歴史書の記述、あるいは遺跡として大地に刻まれて、今日に伝わっている。

追記

本稿は令和2年（2020）5月19日（火）～8月30日（日）に開催した特集展示「筑紫の神と仏」の総論を基に加筆した内容となっている。

参考文献

井浦一 2017「胸肩君の領域」『季刊邪馬台国』132号 梓書院

宇治谷孟1988『日本書紀 全現代語訳』株式会社講談社

宇治谷孟1992『続日本紀 全現代語訳』株式会社講談社

小田富士雄2019「宗像・沖ノ島祭祀遺跡の調査と成果」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館

亀井輝一郎 2011「古代の安像氏と宗像信仰」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

小嶋篤2008「金屋子神信仰に見られる黒不浄の一解釈」『九州の中世学－交易・開発・信仰－』七隈史学会第10回大会記念シンポジウム予稿集 七隈史学会

小嶋篤2009「鉄滓出土古墳の研究-九州地域-」『古文化談叢』第61集 九州古文化研究会

小嶋篤2010「鉄滓出土古墳の研究-中国・畿内地域-」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生還暦記念事業会

小嶋篤2012「墓制と領域－胸肩君一族の足跡－」『九州歴史資料館研究論集』37号 九州歴史資料館

小嶋篤2019a「遺跡形成過程から見た巨岩と社殿」『沖ノ島研究』第5号「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

小嶋篤2019b「宗像・沖ノ島と胸肩君」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館

小嶋篤2021「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第9号 熊本県教育委員会

齋部麻矢2018「観世音寺と大宰府の古代寺院」『大宰府への道』九州歴史資料館

笹生衛2019a「宗像・沖ノ島祭祀の実像」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館

笹生衛2019b「祓と人形－その系譜と変遷－」『祓の信仰と系譜』國學院大學研究開発推進機構学術資料センター

白木英敏2018「御嶽山と下高宮の祭祀遺跡」『季刊考古学・別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

スチュアート E ガスリー（藤井修平訳）2016「神仏はなぜ人のかたちをしているのか 擬人観の認知科学」『＜日本文化＞はどこにあるのか』春秋社

清喜裕二 2018「沖ノ島の滑石製品」『季刊考古学・別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣

パスカル ボイヤール（鈴木光太郎・中村潔訳）2008『神はなぜいるのか？』NTT出版

門田誠一2019「宮ノ本遺跡買地券にみる仏教語－大宰府官人の信仰と系譜－」『日本宗教文化史研究』第22巻第2号 日本宗教文化史研究会

陽宅、墓地を陰宅と呼ぶところに陰陽論の影響がみられ、吉凶という二極に分けることはもとより、明と暗、表と裏、天と地、日と月といった相反する概念は風水に取り込みやすい性質のものともいえる。このようにして、風水は多様な思想を巧みに取り込みながら、都市や宅地、墓地など様々な場面に応じた好地が求められていくようになる。そのため、風水は「地理」・「地学」・「陰陽」・「堪輿」・「形法」など様々な呼称でもって呼ばれ、その分だけ好地・吉地の求めた方も多様となる。

(2) 好地を求める法

ここまで述べたように、一言で風水といっても、土地の吉凶禍福の判断に至るまでには様々な思想・理論が介在するため、その在り方は一様ではなく、好地か否かを判断する方法は時代によっても少しずつ変化していると考えられている。また、ここでは主な方法を紹介するが、このすべてが当初からあったものかは別に議論が必要である。

さて、主な方法としては、龍法、穴法、砂法、水法が知られており、以下それぞれの概要について三浦氏の論に従いながら整理しておこう(三浦2006)。

龍法は、「山のつらなり(すなわち山脈)を生動する龍に見立て、その内部に流れる生エネルギー(生氣)を龍の脈」とし、エネルギーの行きつく先である龍穴までの龍脈を探す方法である。より強いエネルギーを得るためには、力強い動きをみせる龍脈が理想であり、ただ直線的に伸びる峰よりも、上下の起伏や左右の曲折などによる変化も重要視される。また、自分たちが居る龍穴へ至るまでの山脈を一族の系譜にみたと、遠い先祖から父母、そして自ら(龍穴の地)へという流れも重視する(図1)。

穴法は、龍脈の上に生氣が濃密に凝縮している地点(龍穴)を探す方法である(図2)。理想的な龍穴の形状は、陰陽論を取り入れ、窪んだ地形にある「窩」や「鉗」と呼ばれる形は、凸型に隆起した龍穴(陽)に対応することから「陽」に分類され、突出した地形にある「乳」や「突」と呼ばれる形は、凹型に窪んだ龍穴(陰)に対応することから「陰」に分類される。それぞれ、地形とは逆の形の龍穴と結合することで、陰陽の和合が図られるのである。

砂法は、龍穴の周囲に配される山々などの地形を砂によって形づくり、弟子に伝授をしたことに由来するとされ、生氣が散じないような砂(山)の在り方が重視される(図3)。とくに四神砂と呼ばれる地形が重要で、龍穴に近い山々に四神をあてて、龍穴からみて背後の山を玄武(主山あるいは後山・鎮山)、左右に青龍と白虎、前方を朱雀(案山や朝山)とする。場合によっては前方の水を朱雀にあてる場合もあるようであるが、もともと山々龍脈を見出すことが肝要であることからすれば、朱雀を水にあてるのは苦肉の策なのかもしれない。いずれにしても『葬書』にも「地に四勢有り、気は八方に従う。故に左を青龍とし、右を白虎とし、前を朱雀とし、後ろを玄武とするをもって葬す。」とあるように、四神に見立てた地勢、とくに山々の在り方が重要視されることに

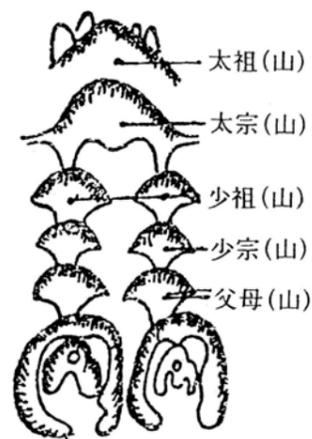


図1 龍脈と生命の連鎖

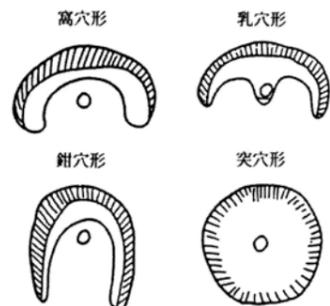


図2 龍穴の4類型



図3 周囲の山々と龍穴

なる。

水法は、気の拡散を遮る水の存在を重視するもので、水の流れが生氣を誘導し、凝集させることに留意する。既述のように『葬書』に「風水之法、得水為上、藏風次之。」と記されているように、風水においては良い水を得ることが優先される。水があるということは、当然山も存在することから、結局は山河の在り方が重要となる。ただし、広大な土地を擁する中国においては、果てしない平坦地もあり、その場合は降雨時のみ河道となるようなわずかな低地を水とみなし、微高地を山とみなすことも行われたようである。

以上の探穴法は、龍穴と呼ばれる生氣が濃厚に凝集している場所をいかに見出すかというものであり、それぞれが全く異なる方法というわけではなく、穴法で求める龍穴は当然ながら龍脈も観察しなければならないし、龍法の山脈もまた砂法という四神砂に該当する山々の位置も重要となる。風水家は、これらの知識を巧みに組み合わせながら「藏風得水」の地か否か判断したのであろう。

(3) 風水思想の日本への影響

中国では前漢・後漢そして魏晋南北朝へと時代が移るにつれ、風水の法は多様な思想や理論を取り入れながら精緻に練り上げられていった。その後も発展を遂げ、何度も取り上げた風水の経典とも言われ、郭璞に仮託された『葬書』も唐代の編によるものと考えられている。この間、意図的か否かは別として、我が国へ風水思想がもたらされる機会は少なからずあったと思われるが、現存する古代の史書が限られる我が国においてはその足跡を辿ることは容易ではない。

記紀のなかにその形跡を求めた場合、『日本書紀』推古天皇10(602)年条に「百済の僧・観勒がきて、曆、天文、地理、遁甲、方術の書を献上した」とする記事が良く知られている。この時、陽胡史の祖・玉陳が曆法を、大友村主高聡は天文遁甲を、山背臣日立は方術を学んで、習得したと伝える。これに先立つ『日本書紀』欽明天皇14(553)年条にも百済から「医博士・易博士・曆博士等」とともに「卜書・曆本・種種藥物」が贈られ、翌年にも百済から五経博士・僧・易博士・曆博士・医博士・採薬師・楽人らが交代で派遣されたことを伝えている。しかし、欽明朝の記事はあくまで新来の知識として持ち込まれたことを記すにとどまり、王権のなかでも受容とまではいかなかったと考えられる。その一方で推古天皇10年条については、明らかに技術の習得が行われており、文化受容の上でも大きな画期を伝えている。

表1 『延喜式』職員令陰陽寮条記載の組織と職掌

| | 職名 | 定員 | 位 | 職掌 |
|---------|------|-----|------|--------------------------|
| 四等官 | 頭 | 1名 | 従五位下 | 掌、天文曆数風雲気色、有異密封奏聞事。 |
| | 助 | 1名 | 従六位上 | |
| | 允 | 1名 | 従七位上 | |
| | 大属 | 1名 | 従八位下 | |
| | 小属 | 1名 | 大初位上 | |
| 専門官・研修生 | 陰陽師 | 6名 | 従七位上 | 掌、占筮相地。 |
| | 陰陽博士 | 1名 | 正七位下 | 掌、教陰陽生等。 |
| | 陰陽生 | 10名 | — | 掌、習陰陽。 |
| | 曆博士 | 1名 | 従七位上 | 掌、造曆、及教曆生等。 |
| | 曆生 | 10名 | — | 掌、習曆。 |
| | 天文博士 | 1名 | 正七位下 | 掌、候天文気色有異密封、及教天文生等。 |
| | 天文生 | 10名 | — | 掌、習候天文気色。 |
| | 漏刻博士 | 2名 | 従七位下 | 掌、率守辰丁伺漏刻之節。 |
| | 守辰丁 | 20名 | — | 掌、伺漏刻之節以時擊鐘鼓。 |
| | その他 | 使部 | 20名 | — |
| | 直丁 | 2名 | — | 諸国から労役(雑徭)で上京した者で、雑用に従事。 |

また、僧侶が技術伝達の役割を果たしていることも重要で、『日本書紀』持統天皇6（692）年条の陰陽博士沙門法藏・道基の存在や、8世紀初頭に勅命により還俗した僧侶が陰陽師・陰陽博士・天文博士となっている事実を考えると（細井2020）、風水の法もまた主にはこうした僧によりもたらされていたことが多かったと考えられる。

ただ、『日本書紀』天武天皇13（684）年2月条には、広瀬王や陰陽師、工匠などを畿内に派遣して、都を営造するにふさわしい土地を「視占」させた、と記し、相地が行われたことがうかがえ、どうい人物かは不明ながら陰陽師が相地に関与している。

陰陽師と相地との関係については、養老2（718）年に成立した『養老令』職員令の陰陽寮条（表1）にもみることができ、陰陽師の職掌に「占筮相地」とあり、律令制度の中にも風水思想が組み込まれていったことがうかがえる。

3 風水思想と都市（都城）

では、実際に我が国の中で、どのような形で風水思想が取り入れられているのかをみてみたい。まずは、先ほど少し登場した都城造営との関係の中に位置づけられる風水思想である。

（1）藤原京（図4）

既述のように、天武天皇13（684）年2月に、新たな都の造営に向けた占地が行われるが、そこに登場する陰陽師は「相地」を行うための要員として派遣されている。天武朝は藤原京の造営のために候補地の現地踏査などが繰り返され、複都制も模索される。その全ての記事に陰陽師が登場するわけではないものの、「相地」の需要も高まったと考えられ、現地視察の際には随行していた可能性があるだろう。同年3月には「宮室之地を定めたまう」とあり、宮地が決定されている。

藤原京は南北10条、東西10坊で、約5.3km四方の条坊の中心に約1km四方の宮室が配置され、『周礼』で理想とされる都城の在り方を実践した事例である。この地には大和三山があり、京の中心にある藤原宮に立つと北に耳成山、東に天香久山、西に畝傍山を望むことができる。南には飛鳥の甘樫丘からのびる丘陵が東西に横たわり、山々に囲まれた地ということになる。これを仮に風水の地形と当てはめてみるならば、北の耳成山が主山（玄武）、東の天香久山が内青龍、西の畝傍山が内白虎、南に横たわる今城の丘が案山、さらに南にそびえる高取や竜門の山地が朝山ということもできる。

ただし、現在復元されている京域に基づくと、三山は条坊の中に取り込まれる位置にあり、京全体が山に囲まれるわけではない。本来であれば、都城全体を囲むように山々が配置されるのが好地・吉地の要件ということになるが、そのような意味では藤原京の立地は要件を十分には満たせていない。また、京域全体が北に向かって下っていく地形にあることも、風水的立地としては違和感を覚える。藤原京の場合、「相地」が行われているものの、「新益京」と呼ばれたように飛鳥諸宮が置かれた倭京の拡大版（市2019）としての位置づけから、飛鳥から離れることができずに選地への制約があったのかもしれない。

なお、『続日本紀』には大宝元（701）年の元日朝賀の儀について、「天皇、大極殿に御しまして朝を受けたまふ。その儀、正門に鳥形の幢を樹つ。左は日像・青竜・朱雀の幡、右は月像・玄武・白虎の幡なり。蕃夷の使者、左右に陳列す。文物の儀、是に備れり。」とあり、四神思想に基づく国家儀礼の文物を整えていたことも伝えている。このことから、四神が国、国土を守護するという観念が認識はすでに定着しているとみられ、大和三山に囲まれた地に都が置かれたことが偶然の産物というわけではなく、一定の知識に基づく「相地」によって選地された結果と理解すべきであろう。

（2）平城京（図5）

694年の藤原京への遷都から14年を経た和銅元（708）年、平城遷都の詔が発せられた。『続日本紀』和銅元年2月条には「方今平城の地、四禽図に叶い、三山鎮を作し、亀筮並びに従う。宜しく都邑を建

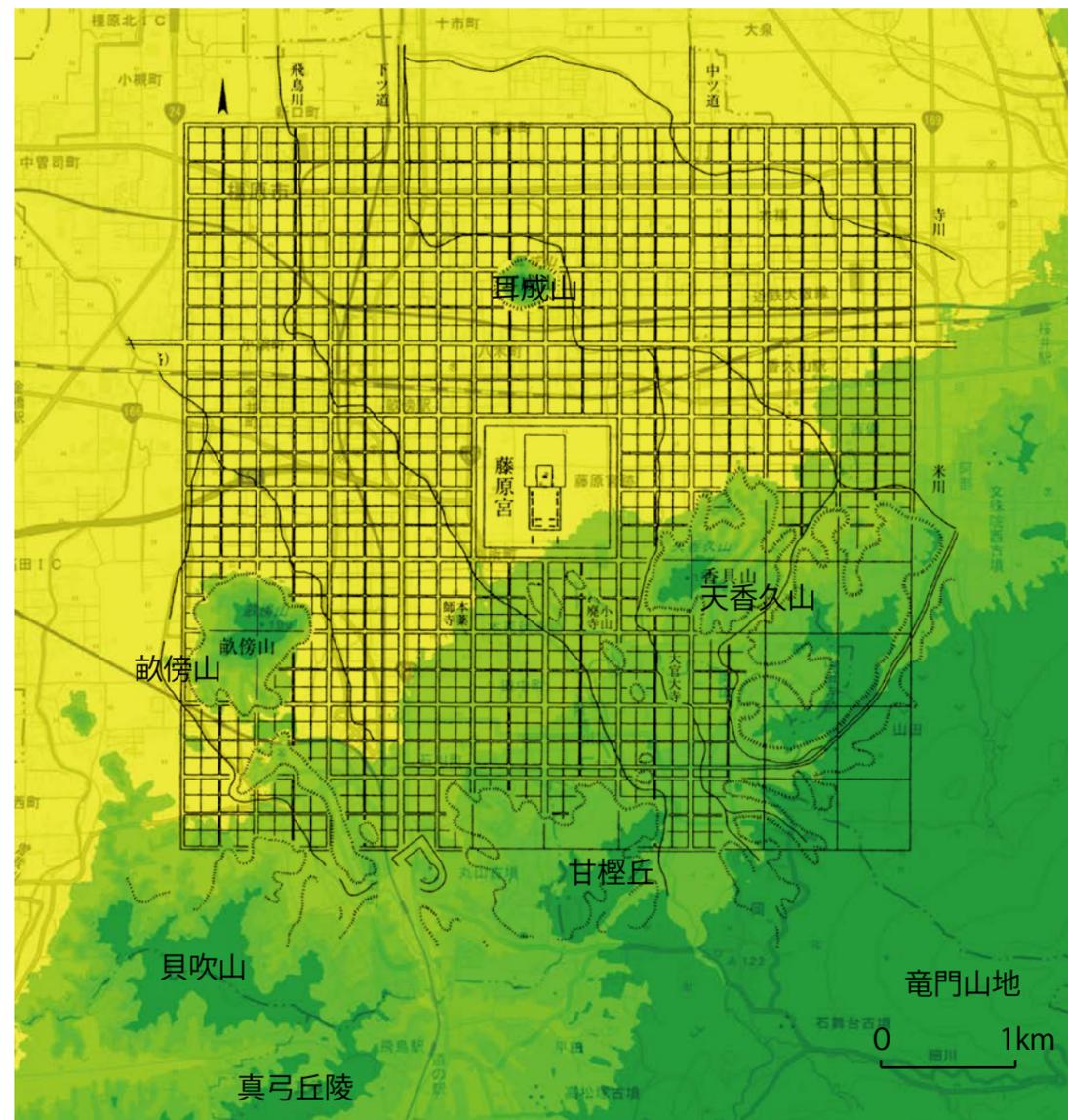


図4 藤原京の京域と山々（縮尺任意）

つべし。」とあり、同年9月には「平城に巡幸し、その地形を観る。」とある。造都に際して風水思想に基づき「相地」が行われ、土地の吉凶の判断によっていたことが明確である。このうち、「四禽」については、四神思想による青龍（東）・朱雀（南）・白虎（西）・玄武（北）を意味し、それが「図」に叶うという。ここでいう「図」は、平城京周辺の地図とする理解もあるが、これとは別に易でいう「河図」する理解もある（金子2014）。これはいわゆる「河図洛書」とよばれるもので、中国の伝説に登場する伏羲の時代に黄河から出現した龍馬の背中に書かれていた図（模様）を「河図」と呼び、同じく中国の夏王朝を建てたといわれる禹の時代に洛水から現れた亀の背に描かれた祥瑞を「洛書」と呼ぶ。河図は陰陽説における八卦のもとになったとされ、洛書は天帝から授けられた法である洪範九疇の起源とされ、五行説とも関わりをもつ。したがって、こうした説に従えば、四禽図が叶うとは四神が理想の配置にあると解することもできるわけである。ただ、一方では『日本書紀』天武天皇13年閏4月条には「三野王等、信濃国の図を進れり。」とあり、ここでいう「図」は、同年2月に信濃の地形をみるために遣わされた三野王たちが作図した地形図とみられることから、「河図」にまで解釈を広げる必要はないのかもしれない。その当否は別としても、とにかく平城の地は、四禽＝四神の配置に叶った理想的な地であるとい

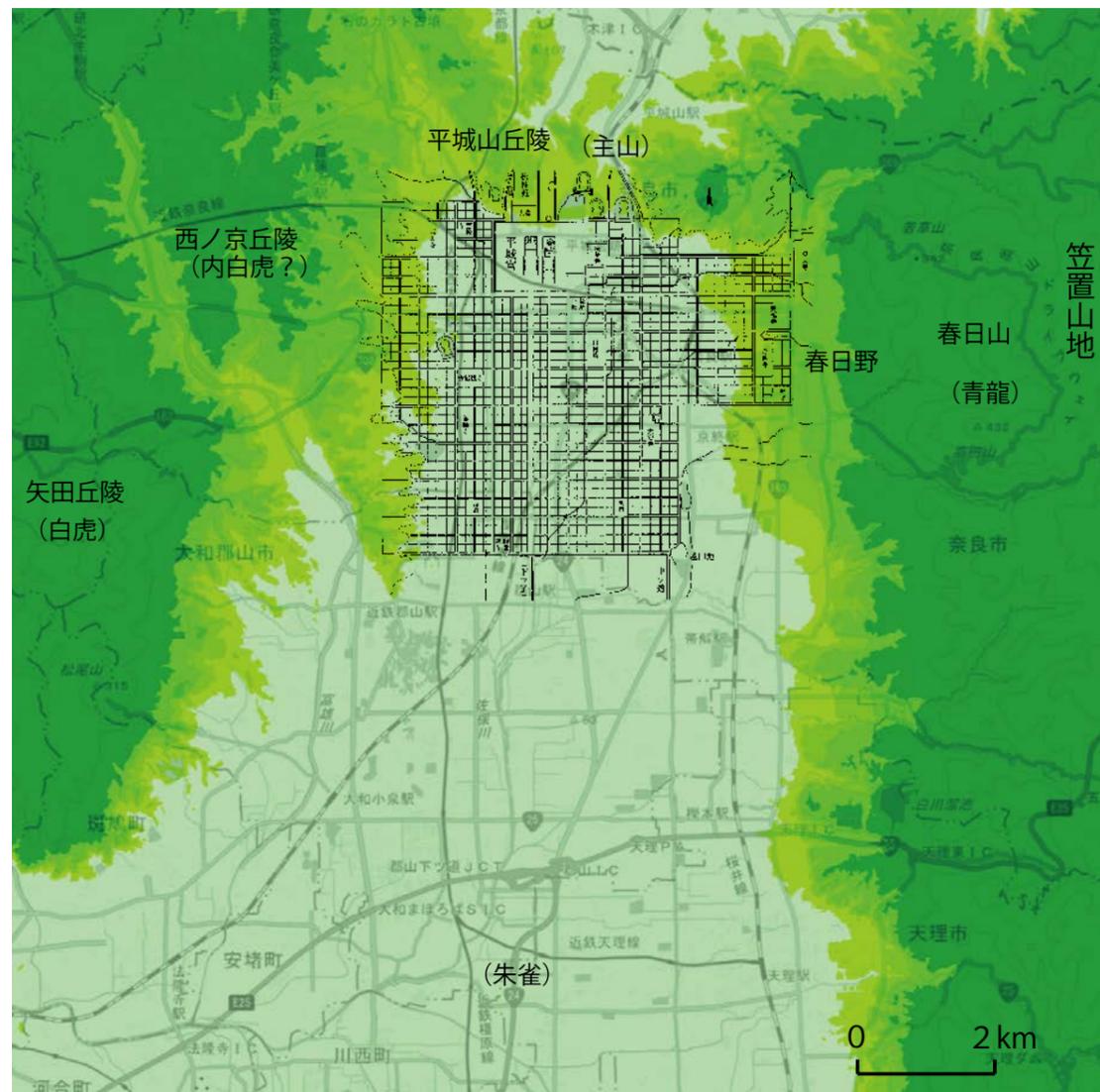


図5 平城京の京城と山々（縮尺任意）

うことに変わりはない。

さて、先の記事によれば、平城の地を囲む「三山」が鎮めの山として機能しているという。神仙思想では蓬莱山、方丈山、瀛州の三山が聖なる山として登場するが（金子2014）、こうした視点もまた渡来思想のなかの一視点として取り込まれている可能性もある。藤原京では大和三山が存在したが、平城の場合にはそうした独立丘はなく、さらに離れた丘陵や山塊に三山を求める必要がある。ただ、これも諸説あるので、どの山を比定すべきか難しいが、北の平城山丘陵、東の春日山、西の矢田丘陵（あるいは西ノ辻丘陵）に求めることが妥当と思われる。これを風水的立地に当てはめれば、平城山丘陵を玄武、春日山を朱雀、矢田丘陵を白虎に、南に開けた平野部を朱雀となろうか。宮城が都城全体のなかの北側中央に位置する北闕型都城となり、「天子南面」を地理的にも実現した平城京は、唐・長安城を範としたこともあって東アジアの先進的な都城として1つの完成をみた。

ちなみに、先の『続日本紀』では「亀筮並びに従う」とも記され、風水による「相地」とともに亀トや筮竹も行われるなど、吉地を求めるための徹底ぶりがうかがえる。平城遷都はこうした様々な思想や吉凶判断のすべてに合格した地ともいえる。

(3) 大宰府と風水思想 (図6・7)

ここまで宮都2例についてみてきたが、次に九州に置かれた大宰府についてみてみよう。

大宰府は都城と同じく碁盤目状の街区を備えた条坊都市で、唐の長安城や、長安城を模した平城京との関わりが指摘されている。造営の手本となった平城京に風水思想の影響がみられるのであれば、いわゆる大宰府都城の造営にも風水思想が取り込まれた可能性は高い。とくに2度の遣唐使経験がある粟田真人が大宰帥に任命されたことは大きな意味を持っていた。

粟田真人は大宝律令の制定にも尽力したが、その後大宝2（702）年に唐へ渡り、翌年には唐の官人に登用され、最先端の政治・文化に触れ、景雲元（704）年に帰国後、様々な国内改革に参加した。粟田真人は和銅元年3月に大宰帥に任ぜられるが、直前の2月には平城遷都の詔が出されるなど、東アジアの最先端の都城制を本格的に導入する方針が公に示された時期でもあった。このとき中納言であった粟田真人は当然ながら平城遷都にも深く関与していたと考えられる。そのような人物が大宰帥に任命されるということは、いわゆる「大宰府都城」の造営に際しても東アジアの最先端の都城の在り方を適用

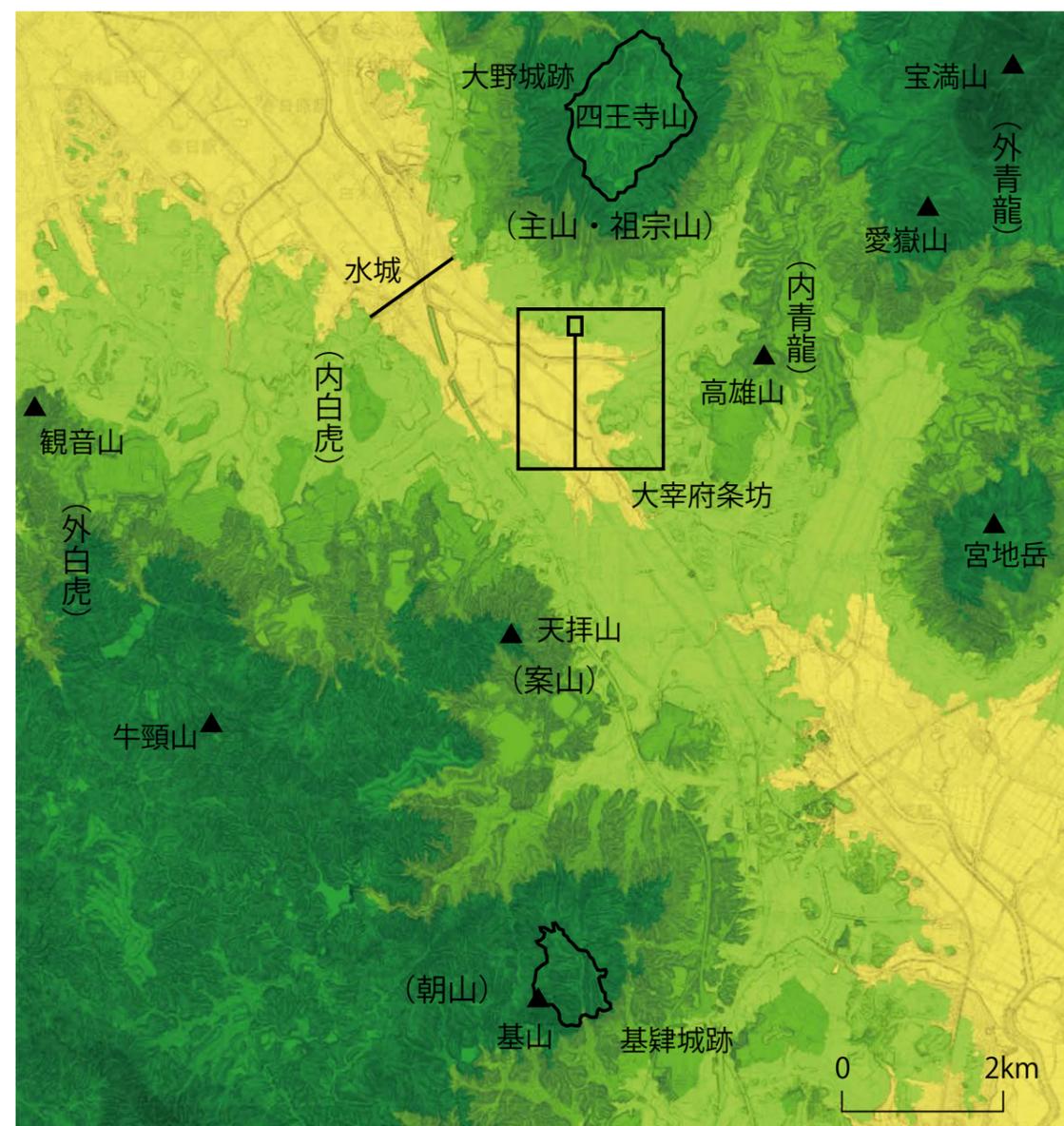


図6 大宰府と周辺の山々（条坊の範囲は井上信正氏復元案による）（縮尺任意）



図7 大宰府政庁周辺の地形(1/4,000)

することを意味し、それを主目的とする人事であったと考えられる。

さて、前置きが長くなったが、大宰府と風水思想との関係については、森弘子氏が詳しく論じている(森1998)。森氏によれば、大宰府政庁の置かれた場所を龍穴とし、その背後にそびえる四王寺山を主山、東の月山丘陵を内青龍、西の蔵司丘陵を内白虎とし、南に向かっては天拝山を案山、基山を朝山にあて、さらに東側の宝満・大根地へと連なる山並みを外青龍、西の背振山地を外白虎と見立てている。現在、大宰府政庁跡に立った時、こうした山々の配置には首肯できる部分もあり、背後に山を背負い、東西を丘陵に挟まれるこの立地には風水思想を強く思わせるものがある。

あわせて、森氏は四神相応の地の別の解釈に基づく風水的立地の解釈についても紹介し、北に玄武の大野山を背負い、東に青龍の御笠川が流れ、西には水城を通る道があり、南の沢畔には次田の湯(二日市温泉)をあてている。これは安倍清明に仮託された『三國相傳陰陽管轄籠蓋内傳金鳥玉兎集』(以下、『籠蓋内伝』とする)にある、「東に流水有るを青龍といい、南に澤畔有るを朱雀といい、西に大道有るを白虎といい、北に高山有るを玄武という。右、この四つの物を具足するはすなわち四神相應の地という。」の記述にも通ずる解釈である。

こうした解釈は平安京と風水思想を論じる場合にも用いられ、北の船岡山(あるいは北山とも)を背負い、東の鴨川を青龍に、西の大路(山陽道・山陰道)を白虎に、そして南の巨椋池を朱雀にあてる説が示されている。

しかし、『籠蓋内伝』は鎌倉時代の作ともいわれ、こうした理解が奈良時代にまで遡らせ得るのかは慎重な判断が必要である。日本最古の庭園書といわれ平安時代後期の著とされる『作庭記』においても、北に玄武の山、東に青龍の流れ、西に白虎の道、南に朱雀の池を配するを良しとするが、この書もまた鎌倉期の写本が最古のものである。むしろ、平安時代以降、中世にかけて完成後の平安京の姿をもとにして、青龍と川、白虎と道の組み合わせを良とする解釈が通説化していく様相を伝えているのかもしれない。

話を戻すと、先にみた藤原京や平城京の状況を踏まえると、あくまで風水は相地により吉地を求める

ことが重要で、山々やその間を流れる水(川)の在り方を判断する必要があり、大宰府の場合には森氏が最初に地形に基づき見立てをした考え方がより適切のように思える。

ただ、大宰府の場合にはもう少し異なる見方もできそうである。大宰府条坊の範囲を囲む山々として周辺地形をみた場合、四王寺山を主山もしくは祖宗山とすることに異論を挟む余地はないが、東西には、宝満山や背振山地よりも手前に丘陵や山塊が存在している。史料に書かれている訳ではないが、平城京と同じく「相地」により条坊都市の選地がなされたのであれば、東にある高尾一帯の丘陵や、西の牛頸窠跡群がある一帯の丘陵もまた目に入ったはずである。屹立した山ではないが、それらを内青龍や内白虎とみなし、さらに外側の宝満山や、牛頸山から石割山や観音山へと至る山並みなどを外青龍、外白虎とみることも可能である(図6)。

その一方で、森氏が指摘するように大宰府政庁跡の両脇にのびる月山や蔵司の丘陵もまた風水地形としての意味を有している可能性がある。この場合、さきほどの都市風水とは別に、宮殿の位置を求める風水において地形を読み解くこともできるのではないだろうか。つまり、四王寺山は祖宗山、政庁背後に伸びる尾根の高まりを主山、東の月山丘陵を内青龍、西の蔵司丘陵を内白虎とし、東から政庁の前を横切って流れる御笠川の流れを朱雀にあてる見方である(図7)。こうした理解が成り立つのであれば、大宰府は幾重にも重なる風水地形によって守護された都市であったということも可能であり、その中心となる大宰府政庁は雄大な龍脈を経て流れくる「気」が溢れ出る龍穴に位置する理想の空間といえることができる。

4 風水思想と古墳

前章に記したように、我が国への風水思想の伝来は、『日本書紀』推古天皇10年条(602)年の記述などからみても、少なくとも7世紀にまで遡ると考えられる。ただし、どの程度社会の中に浸透していたのかは不明である。しかし、当時の墓制のなかに風水思想の影響とみられる様相をみることもできるのも事実である。

概ね7世紀代は古墳時代終末期(あるいは飛鳥時代)と呼ばれ、古墳文化が終焉を迎える時期で、この頃に築かれた古墳は終末期古墳という。終末期古墳の中に、それまでとは異なる立地をみせる事例があることは早くから注目されている。

斎藤忠氏は1935年の論考で、奈良時代の墳墓を中心に議論を進めるなかで、「丘陵の終る末端に位置し、前面は広い平地を望み、左右は丘陵によって擁せられ、後方に山を負ってゐるのが通例である」とし、この立地を風水思想において理想の立地とされる「蔵風得水」の地であると論じた(斎藤1935)。斎藤氏の検討資料の中には7世紀後半に造営された小野毛人墓も含まれており、古代墳墓の論考ではありながら、結果的に終末期古墳と風水思想との関係を論じた最初の論考にもなった。

その後、古墳と風水思想について取り上げた論文はほとんど出されなかったが、九州では1980年に小田富士雄氏が北九州市の八王子教会内古墳を取り上げ(小田1980)、また前田達男氏も大分市の古宮古墳を代表例に挙げて(前田1994)、南斜面に立地し、東西に尾根がのび、前面に川が流れる、さらに横たわる丘陵が前方を遮断する立地を風水思想の影響として指摘した。

関西でも、終末期古墳の概要を論じた河上邦彦氏が、丘陵南斜面に築かれた「いわゆる山寄せの古墳」の立地に関して、「四神思想や風水思想等が入り込んだもの」とし(河上1992)、さらに飛鳥地域の終末期古墳の立地に4つの類型を設定し、それぞれが風水思想の占穴法の吉地とされる型に対応すると論じている(河上1997)。

それでは、実際に九州の終末期古墳について、風水思想の影響とみられる立地の事例を幾つかみてみよう。

大分市・古宮古墳は早くに風水的立地として指摘され、今日まで九州における風水の影響がみられる

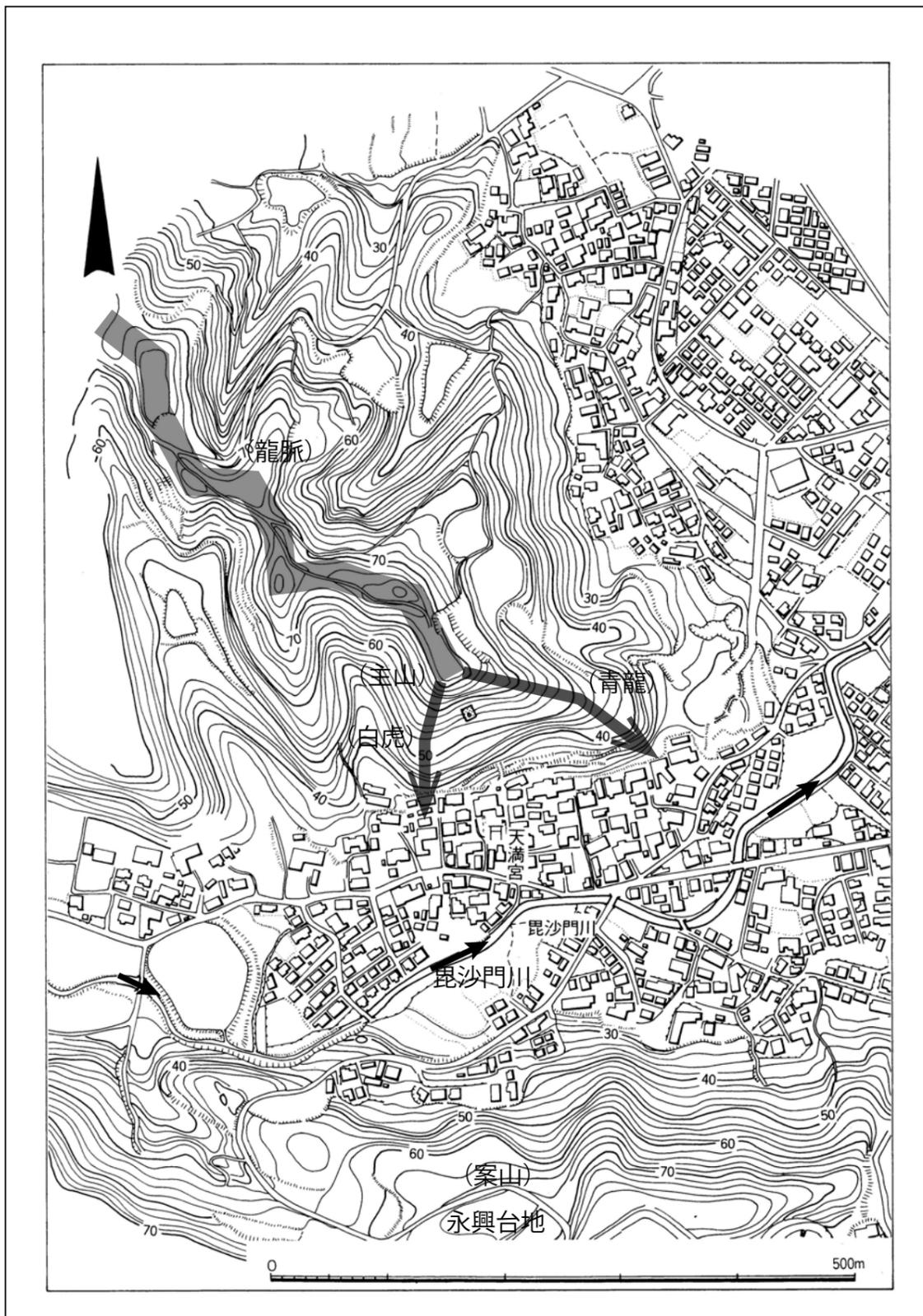


図8 古宮古墳と立地 (1/5,000)

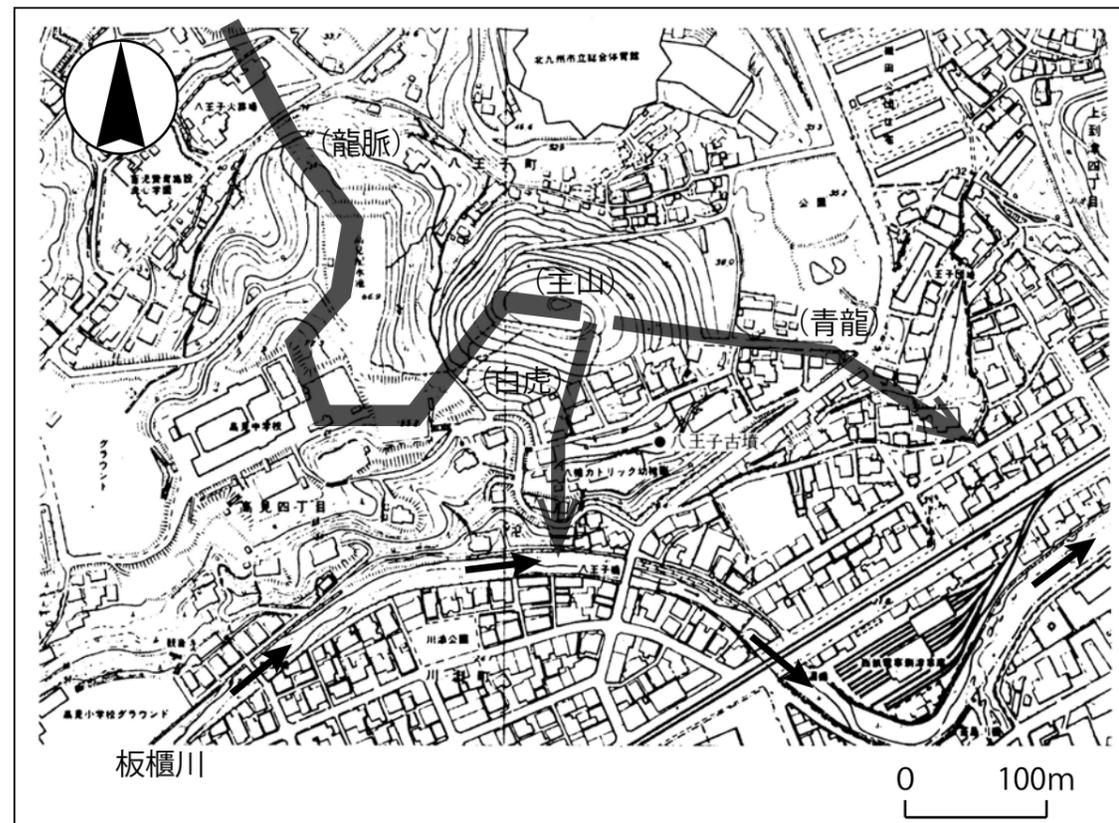


図9 八王子教会内古墳と立地 (1/5,000)

事例として知られている(前田1994)。7世紀後半に築造された南北12.5m、東西12mの方墳で、主体部は畿内に類例が求められる横口式石槨で、石槨部は巨岩を削り抜き埋葬空間としている。古墳周辺は今でこそ住宅街の隙間に残る小さな緑地のような椎迫丘陵の南斜面に立地し、古墳から標高にして15mほど登ったところに北西から続く丘陵の突端に位置する1つのピークがあり、このピークを起点として南方向と東南東方向に大きな尾根が伸び、これが古墳のある斜面の左右を囲んでいる。古墳前面には毘沙門川が東流し、さらに前方には永興台地が東西に横たわる。風水の視点に立つと、背後のピークが主山(玄武)、さらに背後に連なる丘陵を祖宗山からつづく龍脈、東西の尾根を青龍・白虎、前面の毘沙門川を朱雀、永興台地を案山に見立てることもできる。

北九州市・八王子教会内古墳もまた早くに風水的立地を示す古墳として指摘がなされている(小田1980)。古墳の墳丘は明確ではないが、斜面に並んで開口した2基の無袖式の横穴式石室を主体部とするいわゆる双室墳である。皿倉・福智山地から北へ伸びた日明丘陵地に所在し、金刀比羅山から南に派生した一支丘の南斜面の中腹(標高40m強)に立地し、南には板櫃川や槻田川によって開析された東西に細長い小平野が広がっている。現在は宅地が広がり地形を見通すことは難しいが、古墳の背後には標高70m強の小ピークがあり、小ピークから派生する尾根が古墳の西側と東側に伸びる。東側の尾根は東南東方向へと稜線が伸びるため、古墳の前面は全体として南東方向に開けた地形といえる。その眼前には福智山地へと連なる山塊が大きく横たわる。これを風水の視点に立ってみると、背後の小ピークを主山、さらに北の金刀比羅山を祖宗山、西側の南に延びる尾根を白虎、やや開き気味ながら東南東へ伸びる尾根を青龍に、そして古墳の前面(南)を東西に横切る板櫃川とその支流である槻田川が気の拡散を遮る水、さらに南側の視界を遮る山々の重なりを案山や朝山に見立てることができよう。

福津市・宮地嶽古墳は、7世紀中頃に築造された直径約30mの円墳で、畿内の横口式石槨の影響を受けた全長23mにも及ぶ長大な石室を主体部とする。標高約180mの宮地嶽(宮地山)の南麓に所在し、

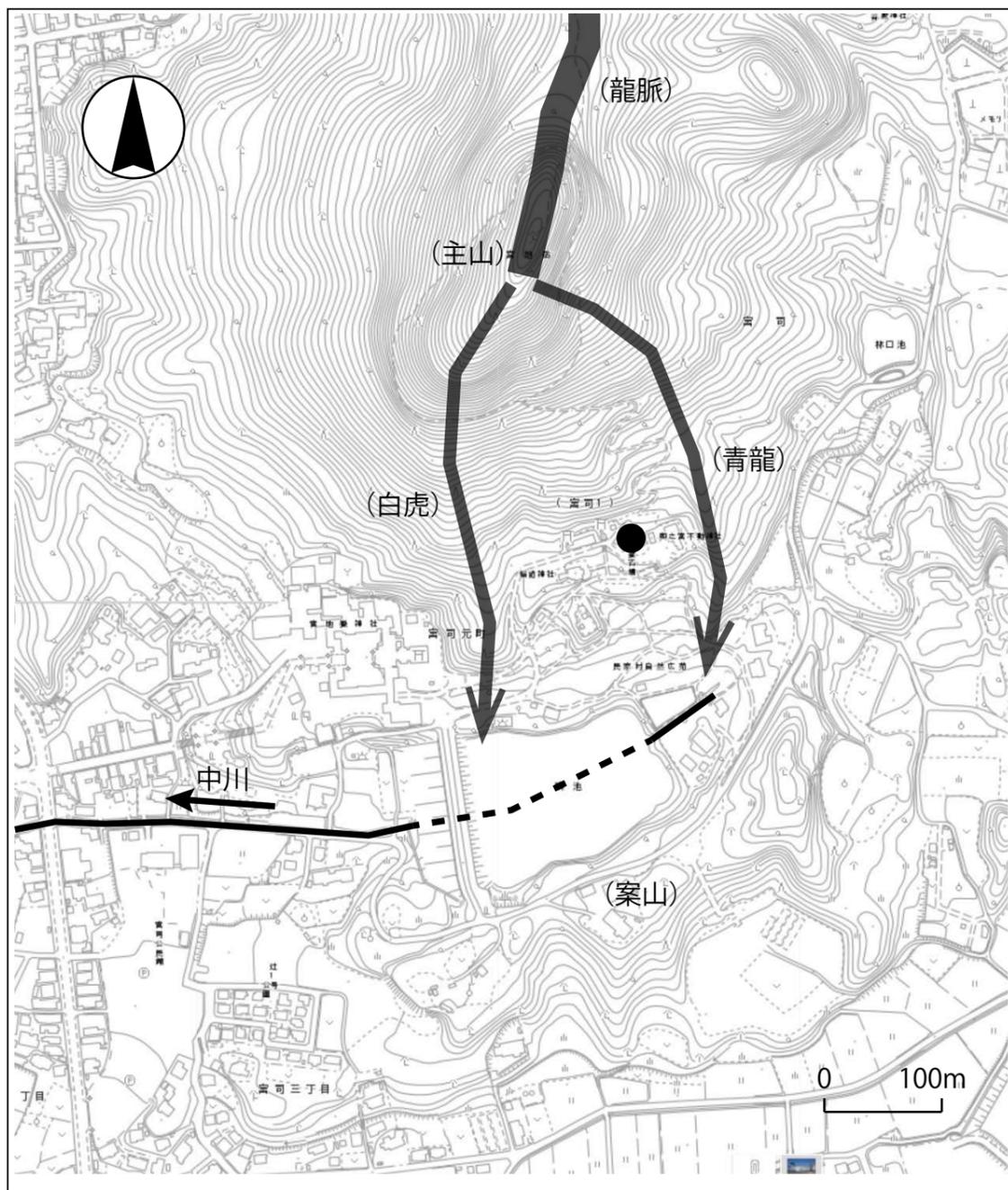


図10 宮地嶽古墳と立地（縮尺任意）

標高は約55mである。石室は東に向かって開口するが、これは、斜面地に長大な石室を構築するための制約によるもので古墳自体の立地を考えると南面する古墳といえる。古墳の東西には、宮地嶽から南に派生する尾根が伸び、谷間の奥に占地している。古墳の前面には禊池があるが、ここは本来東から西に向かって流れる中川により形成された谷地形である。谷を挟んだ南側には東西に横たわる丘陵があり、その奥には犬鳴山地を遠望できる立地である。以上のような立地を風水に当てはめると、北に主山となる宮地嶽、東西に青龍と白虎の尾根を配し、前面には気の流れを防ぐように中川が流れ、対面の丘陵を案山に見立てることができる。

以上に挙げた各古墳は代表的な事例であるが、これらに共通する立地として、まず南面する古墳であ

ること、そして背後に山を背負い、東西を囲むように尾根がのびていること、眼前には川が流れ、別の丘陵や尾根などが遮るように横たわっていること、などが挙げられる。ここでは、そうした立地に四神砂などの理想的立地の要素を当てはめてみたが、古墳の造営において、そこまで厳密な意味での風水を理解していたかは、まだまだ検討が必要である。ただ、早くから古墳の背後に山を背負うという終末期古墳の「山寄せ」の立地が注目されているように、後期古墳までの立地とは明らかに異なる様相を示していることも広く認識されている。畿内を離れた九州においても本稿で掲げた3例のような事例がほかにも散見されることから、列島においても「藏風得水」にかなうような“尾根や丘陵に囲まれた立地”という緩やかな条件でもって風水的立地を実現している事例が7世紀代には存在していたとみて良いのではないだろうか。

おわりに

本稿では、古墳時代の終わりごろから奈良時代にかけて、都市や古墳を素材に風水思想との関係について述べてきた。風水思想は時代によってその在り方に変化が生じているとみられることから、当時、風水思想がどういった理解によって受容・実践されていたのか、ということが常に課題としてある。今回はそうしたある種の制約を認識しつつも、やや強引に風水的立地に当てはめた感も否めない。中国における風水思想の変遷を明確にすることや、国内での事例の積み重ねにより、立地検討の精度をあげていく必要もある。課題多き主題ではあるが、多くの方々が追究することで、当時の人々が眼前の大地に対して、何を想い、何を描き、そして何を求めたのか、より豊かな内容に迫ることができればと思う。本稿が多少なりとも参照するところとなれば幸いである。

参考文献（五十音順・敬称略）

- ・市大樹2019「躍動する飛鳥時代の都」（吉村武彦ほか編『シリーズ古代史をひらく 古代の都』岩波書店）
- ・井上満郎2005「平安京と風水思想」『東アジアの古代文化』124 大和書房
- ・大分市教育委員会1982『古宮古墳』大分市文化財調査報告第4集
- ・小澤毅2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店
- ・小田富士雄1980「横穴式双室古墳とその系譜」『古文化談叢』第7集 九州古文化研究会
- ・何曉昕1995『風水探源 中国風水の歴史と実際』（三浦國雄監訳・宮崎順子訳 人文書院）
- ・金子裕之2014「古代都城と道教思想」『古代都城と律令祭祀』柳原出版株式会社
- ・河上邦彦1997「終末期古墳と風水思想」『堅田直先生古稀記念論文集』堅田直先生古稀記念論文集刊行会
- ・河上邦彦2014「終末期古墳の造墓理念」『月刊 考古学ジャーナル』No.655 ニューサイエンス社
- ・来村多加史2004『風水と天皇陵』講談社現代新書1736 講談社
- ・来村多加史2005『キトラ古墳は語る』生活人新書148 NHK出版
- ・木下正史2006「考古拾遺—終末期古墳と風水思想—」『Archaeo-Clio』第7号 東京学芸大学考古学研究室
- ・九州歴史資料館2011『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ—日吉地区—』
- ・斎藤忠1935「上代に於ける墳墓地の選定」『歴史地理』第65巻第6号 日本歴史地理学会
- ・下原幸裕2006『西日本の終末期古墳』北九州中国書店
- ・鈴木一馨2002『陰陽道 呪術と鬼神の世界』講談社選書メチエ244 講談社
- ・任東権1984「卜占—朝鮮の風水」（井上光貞ほか編『東アジア世界における 日本古代史講座』第10巻 東アジア世界における社会と習俗 学生社）
- ・細井浩志2020「『陰陽道』概念と陰陽道の成立について」（細井浩志編『新陰陽道叢書』第一巻 古代 名著出版）
- ・前田達男1994「終末期古墳における立地形態の共通性とその意義」『牟田祐二君追悼論集』牟田祐二君追悼論集刊行会
- ・三浦國雄2006『風水講義』文春新書488 文藝春秋
- ・森弘子1998「風水都市」『大宰府復元』九州歴史資料館
- ・渡辺欣雄1994「第四章 墓地風水」（渡辺欣雄・三浦國雄編『風水論集』環中国海の民俗と文化 第4巻 凱風社）

図出典

- 図1 三浦國雄2006掲載図を転載。
 図2 任東権1984掲載図を改変。
 図3 渡辺欣雄1994掲載図を転載。
 図4・5 国土地理院地図Webデータ（淡色地図及び色別標高図）をもとに、小澤毅2003掲載図を使用し作成。
 図6 国土地理院地図Webデータ（淡色地図及び色別標高図）をもとに、加筆・作成。
 図7 九州歴史資料館2011掲載図をもとに加筆・作成。
 図8 大分市教育委員会1982掲載図をもとに加筆・作成。
 図9 小田富士雄1980掲載図をもとに加筆・作成。
 図10 福津市都市計画図をもとに加筆作成。

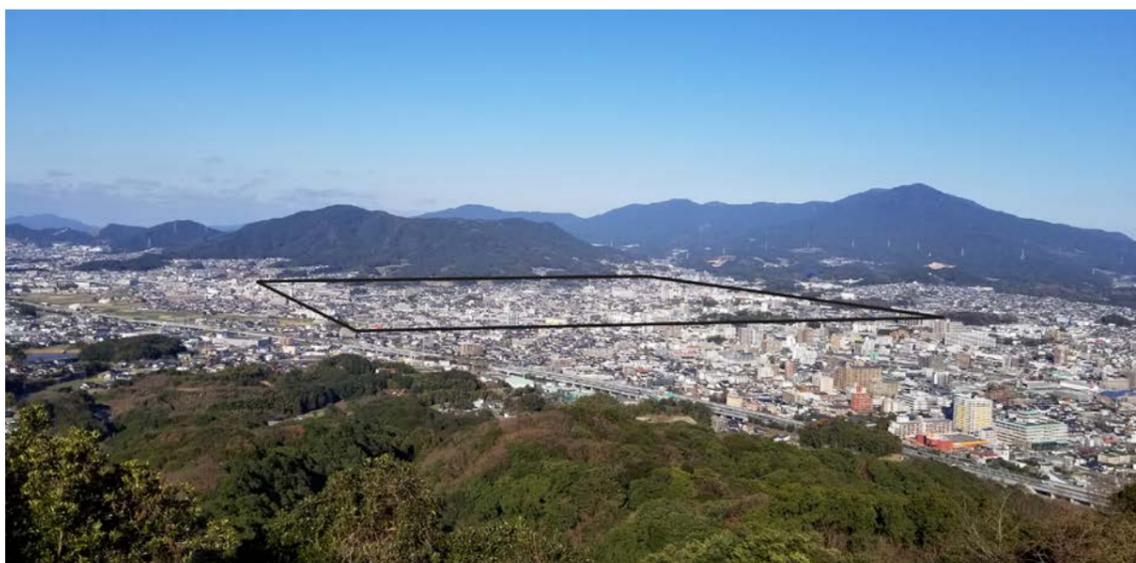


写真 天拝山山頂から望む大宰府と周辺の景観（黒線は条坊の範囲）〔2020年1月1日筆者撮影〕

第6章

航路でつながる信仰

山内 亮平

はじめに

中世の日中両国は、今日と同様、陸上で国境を接しておらず、外洋によって隔てられている。この外洋は国家の産業基盤として、時には国家間交通の障壁・境界として機能していた。しかし、唐船の登場によって、越境が可能になると、「人」や「物」、「知」が国家間を往来するようになる。しかし、両国が正式な外交関係を結んだのは、唐・明代であり、中世前期の交易においては、全面的に民間が担っていた。中国では明州が、日本では博多が特定の港湾として結ばれ、この航路を移動した商人や僧侶は、貿易や留学等を目的とし、後者の目的で渡海した僧侶は、中国寺院で修学・修行し、帰国後、多くは日本仏教に大きな影響を及ぼした。これに伴い、多くの物と知が、交易品として日本国内に搬入されることとなる。

とりわけ宗教色を色濃く反映する資料として、仏教経典を中心とする書物やこれに付随する情報、知識、風習があげられる。なかでも、入宋僧らにより来日した中国系石造物¹⁾と、その副産物である石材加工技術については、現在も両国で研究が隆盛している。

その契機となったのは、奈良県東大寺南大門の石獅子一対と、京都府泉涌寺開山の不可棄和尚開山塔の中国産搬入石材の使用発覚（山川2008）である。この発見により大型モニュメントである石造物が、海を媒介とした単純な交易品としてではなく、国境を跨いだ信仰や技術等「知」の結晶であることが明らかとなった。九州は古来より対外交渉の窓口を務めるとともに、東アジアにおいて政治・経済・軍事的にも要の地域であった。行政的発展と連動するように、信仰や造詣も九州ならではの様相を見せる。この要因は、官道や海を媒介として、統一新羅や高麗ないし宋の尊像や石造物の渡来、大陸からの情報・技術伝達、中央からの影響等、東アジア海域交易の勃興という激動を直接受け止めながら、様々な情報が九州独自の在来知と融合したことに起因する。そのような中で、北部九州をはじめ数多くの中国系石造物の発見が相次いでいる。そこで本論では、福岡県内を中心に北部九州の中国系石造物をとりあげ、その造塔背景や中国系石造物が九州に与えた影響について概観する。

1. 福岡県の中国系石造物～薩摩塔について～

源平合戦時に平重衡勢の焼き討ちで焼失した東大寺の再建を主導した俊乗坊重源は、東大寺の大勧進に就任し、再建に際して宋人工匠陳和卿を起用した。大仏鑄造や大仏殿再建などの難事業を推進する過程で宋人石工伊行末が、大仏殿内に石造脇侍像、四天王像を造立したことは、かねてより注目されてきた。その多くは、松永久秀の焼き討ちで灰燼に帰したが、南大門の石獅子一対は現在もその姿をとどめている。山川均らの検討で、これら石造物は、中国・浙江省寧波周辺で産出する石材「梅園石」が使用されている可能性が指摘された（山川前掲）。当初、日本に搬入された中国系石造物は、土木工事に伴い将来されたもので、信仰的側面としての「知」の要素は乏しかった。その後、彼らの石造物製作は一過性のもので終わるが、その製作にあたった中国人石工たちは、その後の日本（関西・関東地域）における新様式の出現に大きな影響を与え、日本は硬質石材加工技術が確立する。

さて、中世前期の貿易港であった博多やその周辺には、宋人海商が多数居住するチャイナタウンが存在したことは周知の事実である。近年、石原渉や井形進、桃崎祐輔をはじめとする研究者によって、彼

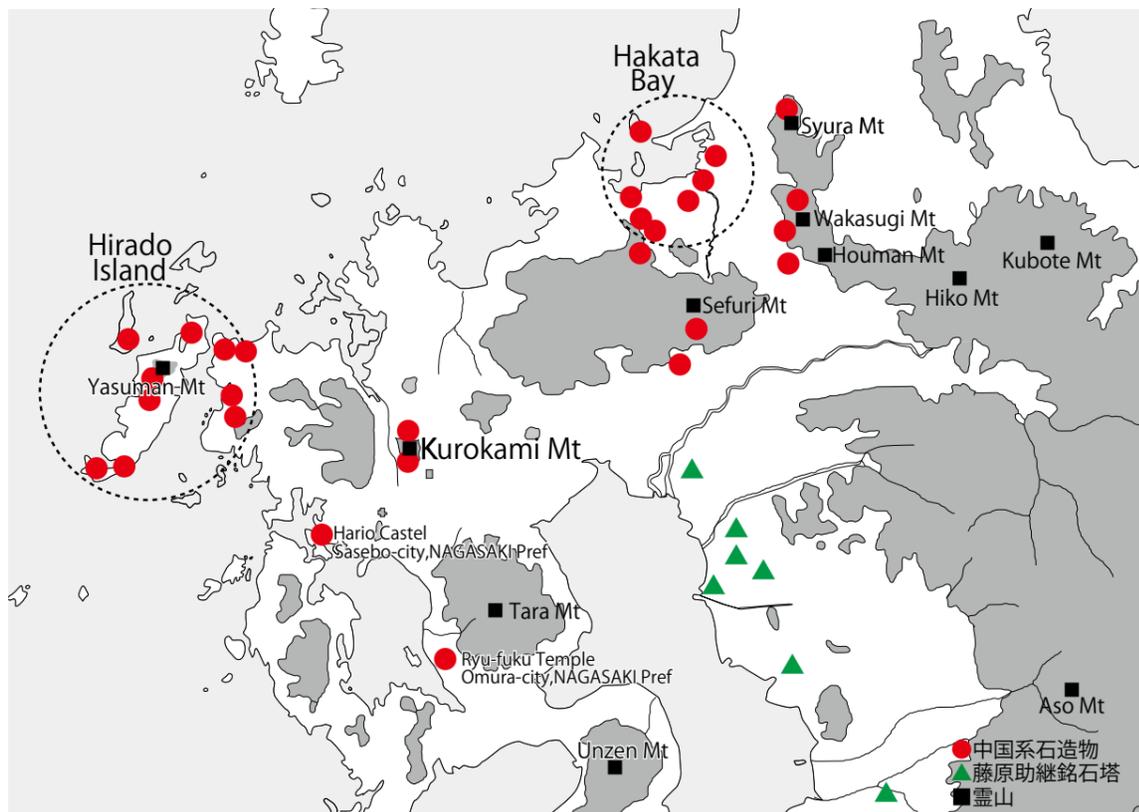


図1 北部九州における中国系石造物の分布

らの活動範囲には、船舶の碇石や中国系石造物の存在が指摘されている。今日、日本に将来している中国系石造物は、現在5種（薩摩塔、類薩摩塔、層塔、無縫塔、阿弥陀経石）が確認できる。なかでも、大型の層塔や無縫塔型式の中国系石造物は、博多や筥崎の中枢で発見されている。そのほとんどは、浙江省・福建省地域から搬入され、浙江省寧波周辺で産出される梅園石製で、南宋～元時代頃の製作と推定される。

中国系石造物のなかでも、研究の中心となっているのが、「薩摩塔」である。薩摩塔は、多田隈豊秋により紹介された異形の石造物として知られ（多田隈1975）、発見当初は鹿児島県南九州市周辺に集中していたため、この名称が使われている。近年の研究では、鹿児島県西部沿岸や長崎県平戸地域など、山岳寺院を中心に極めて限定した分布と想定され、現存する事例は九州西半、東中国海沿岸地域に偏在することが明らかとなっている（桃崎他2011）。

薩摩塔は台座・軸・須弥壇・壺・宝珠の5つの部材で形成され、軸部に四天王、壺部に僧形もしくは如来像を刻む。軸・須弥壇の形状は四角形を主体とし、六角形の事例も存在する（表1、図2）。

ここで構成要素の一部に着目する。屋根は、垂木と持ち送りを備えた瓦葺屋根表現で、一見すると禅宗様建築の影響を窺わせる。また、基礎は、脚部に見られる蕨手蝶足や雲形表現が無縫塔と共通する。角柱状部には四天王を配し、須弥壇上の壺部には如来像や祖師像を祀る立体的かつ階層的構想は、仏教世界感という須弥山の造形を思わせる。これらの塔は、主要港湾都市周辺の寺社に大型・中型石造物が、航海目標となる山岳や水系山岳に中型・小型石造物が、さらに深い山岳に小型が分布する同心円構造をなしている。

しかしその搬入・造立意図は明確ではなく、日宋の硫黄直接購入にかかる対外品や、臨済禅の檀越との関係により搬入されたものなど様々な見解が想定されている。なお、研究の課題として残るのが、薩

表1 福岡県内の代表的な中国系石造物

| No. | 石塔名 | | 所在地 | 紀年銘 | 構成 | 須弥壇 | 遺存 | 備考 |
|-----|-----------|-------|-------------|-----|------|-----|---------------|------------------|
| | 所在寺社等 | 石塔 | | | | | | |
| 1 | 宗像大社 | 阿弥陀経石 | 福岡県宗像市田島 | — | 3材構成 | 四角形 | 完形 | 宗像大社伝世 |
| 2 | 首羅山遺跡 | 薩摩塔1 | 福岡県糟屋郡久山町久原 | — | 4材構成 | 四角形 | 屋根欠損 | 白山神社 |
| 3 | 首羅山遺跡 | 薩摩塔2 | 福岡県糟屋郡久山町久原 | — | 4材構成 | 四角形 | 須弥壇・塔身・相輪欠損 | 白山神社 |
| 4 | 若杉山乙犬御堂 | 層塔 | 福岡県糟屋郡篠栗町乙犬 | — | 複材構成 | 四角形 | 軸部のみ残存 | 若杉山太祖宮下宮 |
| 5 | 旧宇美八幡宮 | 薩摩塔 | 福岡県糟屋郡宇美町宇美 | — | 複材構成 | 四角形 | 笠欠損 | — |
| 6 | 旧宝満山 | 薩摩塔 | 福岡県太宰府市 | — | 1材構成 | 四角形 | 完形 | — |
| 7 | 伝武藤資頼・資能墓 | 隅丸五輪塔 | 福岡県太宰府市安養寺趾 | — | 2材構成 | 四角形 | 相輪欠損 | 資頼は1228、資能は1281没 |
| 8 | 火焰塚 | 薩摩塔 | 福岡県福岡市志賀島 | — | 3材構成 | 四角形 | 基礎・軸部のみ残存 | — |
| 9 | 恵光院 | 層塔 | 福岡県福岡市東区箱崎 | — | 9材構成 | 四角形 | 相輪のみ欠損 | 宋代 |
| 10 | 明光寺 | 薩摩塔笠 | 福岡県福岡市博多区吉塚 | — | 複材構成 | 六角形 | 笠のみ残存 | 博多旧在 |
| 11 | 堅粕馬頭観音堂 | 薩摩塔 | 福岡県福岡市博多区堅粕 | — | 複材構成 | 四角形 | 基礎・蓮華座・塔身のみ残存 | — |
| 12 | 堅粕耕月院 | 層塔 | 福岡県福岡市博多区堅粕 | — | 複材構成 | 四角形 | 軸のみ残存 | — |
| 13 | 将軍塚 | 薩摩塔 | 福岡県福岡市城南区茶山 | — | 1材構成 | 六角形 | 笠・塔身（一部）欠損 | — |
| 14 | 田島御堂 | 薩摩塔 | 福岡県福岡市城南区茶山 | — | 1材構成 | 六角形 | 笠のみ残存 | 所在不明 |
| 15 | 油山天福寺 | 薩摩塔 | 福岡県福岡市城南区茶山 | — | 1材構成 | 四角形 | 軸部のみ残存 | 四天王像残る |
| 16 | 興徳寺 | 無縫塔 | 福岡県福岡市西区姪浜 | — | 1材構成 | 六角形 | 基礎のみ残存 | 大応国師墓 |
| 17 | | 相輪のみ | | | | | 一部欠損 | |

※他県の事例は桃崎・山内・阿部2011「九州発見中国製石塔の基礎的研究」を参照

摩塔の原型が中国で発見されないという点である。類例資料としては、浙江省麗水市万象山公園に靈鷲寺旧在の4基の大形塔がある（桃崎他掲）。天部を彫刻した基台上に中空で外面に雲文のある壺部が乗り、六角の笠と巨大な相輪からなる。この存在が知られた当初から、長崎県平戸市志々岐神社沖の宮塔等との類似性が指摘されてきた（大木他2009）。しかしながら、一部に構成要素の類似があるものの、明確な同一性を認めることはできていない。

薩摩塔は11世紀末以降、日宋貿易のなかで完成品がバラストとともに中国商人により港湾都市に搬入され、そこから港湾周辺の寺社、航海目標や水源のある山岳に分布すると考えられている。その造塔年代は、銘文をもとにした時期が設定されていたが、箱崎遺跡84次調査において出土した石塔片（図3-4）により、おおよその廃棄時期が12世紀代であることが明らかになった。形態は太宰府市個人蔵薩摩塔や宇美町個人蔵薩摩塔（図3-1・2）と似ること、使用石材は梅園石ではなく日本産凝灰岩製であることが示された（久住2019）。

この事実は、宋人工石ないし、その情報を有する僧侶等が日本で故地の石材に類似する石材を見だし、薩摩塔を作成した可能性を示唆する。中国系石造物すべてに該当す



1. 長崎県平戸市志々岐山薩摩塔 2. 長崎県平戸市海寺薩摩塔
3. 福岡県久山町首羅山薩摩塔（左） 4. 首羅山薩摩塔（右）

図2 北部九州の薩摩塔代表事例



図3 薩摩塔及び中国系石造物一覧

るとは限らないが、薩摩塔に関しては、石材は中国産（一部は類似の日本産）を中心として用い、個々の構成要素や属性は宋風であることから意匠に精通した宋人工工による施工が想定される。これらはバラスト材として日本に搬入され、港湾都市付近で製作した可能性も非常に高いと考えられる。

2. 薩摩塔以外の中国系石造物

北部九州には、かねてより中国系石造物の紹介が行われていた。その筆頭が宗像大社所蔵の阿弥陀経石（図3-5）や、長崎県平戸市志々伎山沖ノ宮塔（沖ノ宮須弥壇形六角石幢）（図3-3）である。特に平戸市志々伎山沖ノ宮塔は無縫塔に類似するも、塔身部が中空の甕状をなすこと、鹿児島県の薩摩塔と類似するという指摘がされていた。

ところで、九州西部の日本式層塔の各塔身には仏像を配し、屋根瓦や垂木、隅木を表現するものが多く見られる。これについて、川勝政太郎は「九州地方に多く、他には殆ど見られない。恐らく大陸の影響によるものであろう」と指摘する（川勝1957）。筆者もこの枠組みをもとに、九州の在地石塔の成立過程を検討しているが、影響の具体例を検討すると、その枠組みに該当しない宋代搬入資料も存在する。

（1）福岡市東区筥崎恵光院層塔（図3-6、図4）

薬師瑠璃光如来を本尊とする瑠璃山医王密寺恵光院は高野山真言宗。寛永年中（1624～1644）黒田忠之の開基で、筥崎宮座主坊五智輪院の正範大和上により開山された。燈籠堂厨子内の秘仏の十一面観音石仏は、承元二年（1208）に海中より出現したと伝える宋代の石仏である。門前に大型層塔があり、四面下層に天部、中層に供養者、上層に如来を刻む。層塔の残存高約2mで本来は4m以上とみられ、石材はやや軟質灰白色の凝灰岩で白色粒子を多く含む。肉眼による石材分析の結果、寧波東銭湖中周辺の石造物に使われた「椅子礬石材」と類似するという（高津他2020）。なお東銭湖二霊寺の石造物には北宋「政和」（1111～1118）銘があり、頭巾を被る供養者像下に天部、中に供養者、上に菩薩、如来と続く表現や、笠の上面に灯明用の穴が4箇所開あることも恵光院層塔と同様の形状を有す。

（2）乙犬お堂の層塔（福岡県糟屋郡篠栗町）（図5・6）

篠栗町乙犬は、霊峰若杉山の山麓で、山頂の若杉太祖宮上宮には宋風獅子2セット分3体が伝世しているが、層塔部材発見地は、隣接地が太祖宮の改修等の際にご神体を遷座する御仮屋であったと伝える。丘陵下に隣接する交差点に江戸期の猿田彦碑があり、その横の小さな祠の中に石仏と一緒に梅園石製の石造物の破片が納められている。正面は風化が激しく脆弱化し、阿蘇ピンク凝灰岩を思わせるが、像の両脇にかすかに雲文の区画が残り、さらに側面には格子状の蓮子窓と、仏龕内部の宋風のだぶつく衣装の仏・蓮座の表現が残る。

石材分析の結果、典型的な梅園石ではなく、層準が異なる石材あるいは光溪石と推測される（高津前掲）。

（3）堅粕耕月院層塔（福岡市博多区堅粕）（図3-7）

臨濟宗東長寺末寺の寺院で、境内に江戸時代～近代の砂岩製石仏を並べた区画に大薩摩塔系の層塔の軸部が現存する。方形の軸部に四方仏を刻む。高さ約30cmの立方形の部材で、四面に宝珠龕の繰り込み内部に、だぶだぶの宋風衣装を着た如来が表現されている。

石材分析の結果、角閃石や梅園石に見られる有色鉱物が含まれている凝灰岩であり、梅園石と同じ地層から切り出されたと推測される（高津他前掲）。

以上が、各層塔資料の概要である。層塔塔身に仏像を配する形状や乙犬層塔表面に彫出された雲気状表現や七宝繫状格子文は『营造方式』に示されるように明らかに宋風表現である。

これらの表現を、北部九州の古式層塔と比較すると、一部の塔に類似あるいはデフォルメした表現は確認できるものの、プロポーションや垂木形の有無など大きく乖離する。垂木形の表現は、中国系石造物では普遍的な扇垂木に対して、和様建築に普遍的な並行垂木が主であるなど、比較的的日本木造建築の容姿が色濃く反映している。以上の点からも、層塔に見られる中国系石造物の影響としては、木造建築を範としながらも、豊かな装飾性を反映・表現したものではないかと推測する。なお石材に関しては、

梅園石搬入製品だけではないことが判明している。薩摩塔と同様、宋人石工ないし、その情報を有する僧侶等が日本で故地の石材に類似する石材を見だし作成したあるいは梅園石に類似する石材をバラスト材として日本に搬入し、港湾都市付近で制作した可能性も非常に高いと考えられる。港湾都市周辺の発掘調査においては、石塔片の有無や石工の残滓等の凝灰岩製石片に注意が必要である。



図4 福岡市東区恵光院層塔

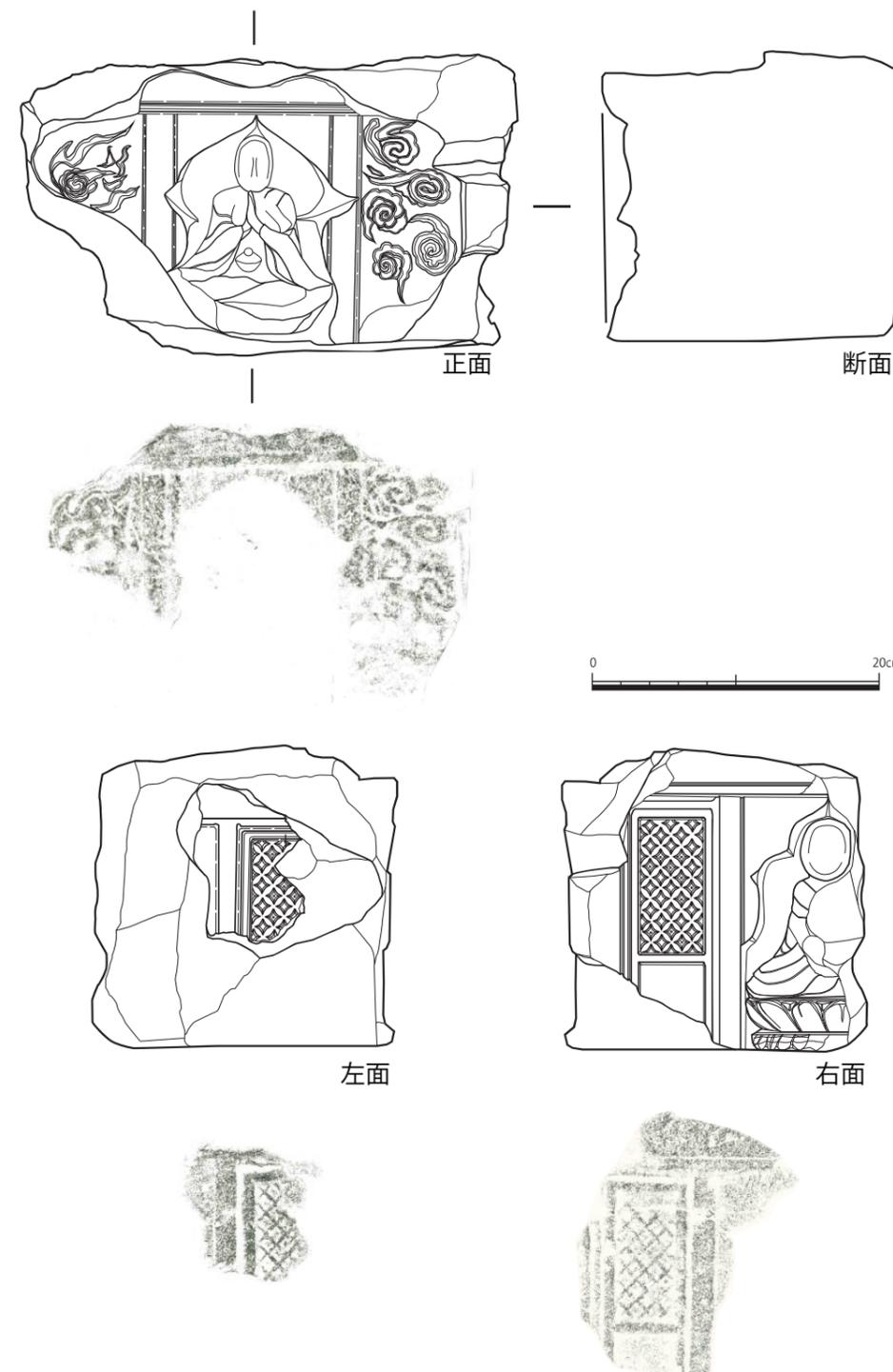


図5 若杉山乙犬お堂の層塔



図6 若杉山乙犬お堂の層塔（上・中）と中国所在の石彫表現（下）

3. 宋人石工がもたらした知《情報・信仰》と異形な九州在地石塔

ここで中国系石造物と日本の中世石塔との構造的差異について整理する(図8(上))。まず、日本の石塔は積上式が主流であるのに対し、中国系石造物は基本的には一石彫成が主流であること。次に、日本の石塔は幾何学的であるのに対し、瓦屋根や垂木・勾欄彫刻など、より建築的・装飾的な構成であること。さらに、基礎に四方仏や四天王、壺部に如来や僧侶の肉彫すること。最後に『营造方式』にみられる雲文や牡丹文などの中国的意匠を多用することがあげられる。

ここで、中国系石造物が有する要素ではなく、他の情報を反映させた可能性のある石造物を紹介したい。太宰府市安養院伝武藤資頼墓(図7)は、観世音寺四十九子院のひとつである安養院跡址にある。川勝政太郎は五輪塔の1種とみて、「安養院跡塔(福岡県筑紫郡太宰府町観世)は特殊な手法になるもので、珍しい遺品である。凝灰岩製の一石彫成で、こまかい仕事かしてある。特異なのは水輪が方形の四隅を円く削り落して、あたかも円盤を四方に立てたような形になり、その下方に反花を線刻していることと、いま風・空輪は亡失しているが、風輪下にも反花の座を刻むなどして、装飾的であることその他、各輪四方には梵字ではなく、仏坐像を月輪内に薄肉彫していることである」という。本塔は屋根・軸・基礎の各面に合計12体の円相・蓮座を有する仏像を配し、軸部の下端に持ち送り状の線刻複弁反花座を、屋根部の上部に持ち送りの肉彫複弁反花座を表現する。構成要素としては、宋風の要素とも思えるが、石材は在地石材を使用している。

特に軸部下端の持ち送り状線刻複弁反花座、屋根上部の持ち送り状肉彫複弁反花座の表現は、呉越銭弘俶八万四千塔(以下、「銭弘俶塔」)に類似する要素ではないかと考えている。呉越国王銭弘俶によりアジア諸国に分与された銭弘俶塔は、金、銀、銅製が存在し、日本には銅製が複数将来している。

銭弘俶塔は、日本の石造宝篋印塔の原形とするとの意見が定説となっていたが、現在では、中国の石造宝篋印塔と銭弘俶塔の要素が祖型であることが指摘されている。福岡県内では、渡宋拠点であった福岡県西区誓願寺や太宰府市原山にも伝世している。

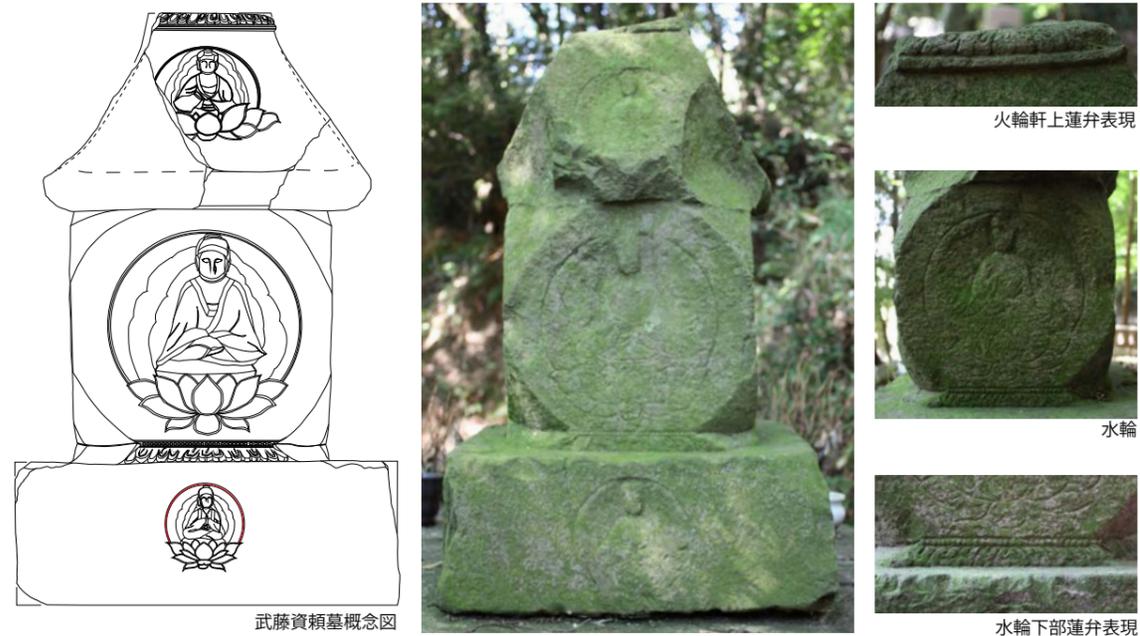


図7 太宰府市 安養院伝武藤資頼墓

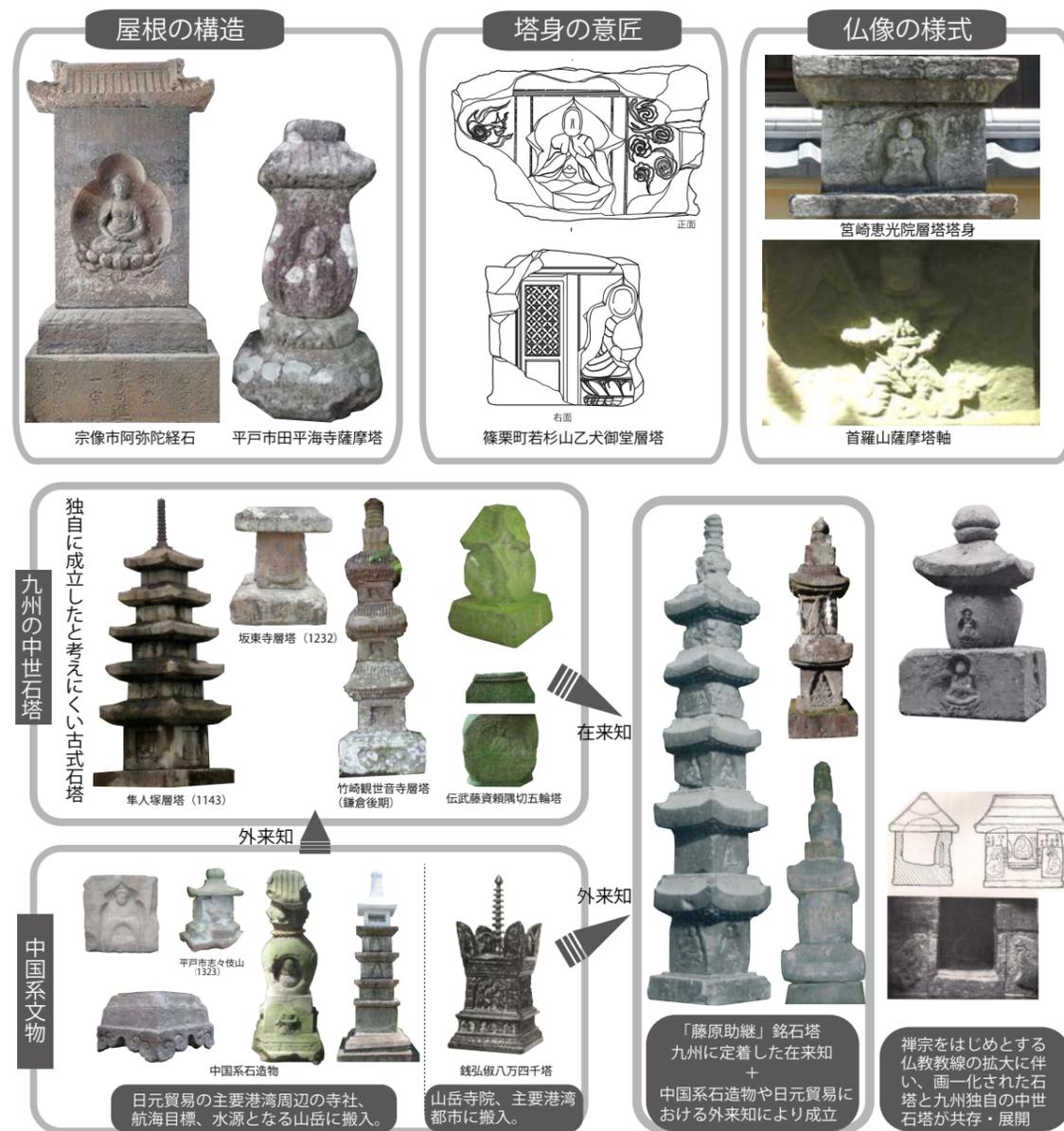


図8 中国系石塔の部材別様式（上）と中国系石造物と九州石造物の成立概念図（下）

この伝武藤藤頼塔（隅切五輪塔）は、東九州地区の隅切五輪塔の変形と捉えられた経緯があり、確かにプロポーションは明らかに日本の様式である。しかしながら、先述したとおり、宋風を想起させる表現と類似あるいはデフォルメした可能性のある資料である。日本木造建築の容姿を中軸としながらも、一部宋風の豊かな装飾性を反映・表現した資料が創造されたのではないかと推測されるが、この装飾が銭弘俣塔を踏襲したものであるか否かは、今後、十分な検討が必要である。

なお、これまで紹介した薩摩塔、層塔、無縫塔等の資料については、石材ないし未製品として搬入され、博多や平戸、坊津などに居住する宋人石工集団によって加工されたと考えている。その中でも石材は、搬入品を中心に、列島在地の類似石材を使用したとみる。

ただし、遠隔地にもかかわらず薩摩塔や無縫塔の酷似からも、宋人が何らかの規格をもって製作していたことは念頭に置かなければならない。平戸は、博多への途上であり、硫黄島の硫黄や薩摩の木材の

積み替え港であった。また、博多や薩摩と同様に平戸にも宋人石工が寄港していたことは、平戸市志々伎山中宮付近の薩摩塔に「真高」という中国系人名が刻まれることから明らかである。井形進は「中国商人、およびそれに連なる人たちの信仰に関わるもの」（井形2012）と解釈する。いずれにしても、中国系石造物が日本で最終加工された事、宋人石工が関与していたことを示すためには、港湾都市周辺の発掘調査において、石塔片や凝灰岩製石残滓等の精査、製作者の紀年銘等の発見が重要となる。

なお、中国系石造物が搬入された場所は、桃崎祐輔も指摘するとおり、「宋人海商やその縁者の菩提を弔った可能性」のある場所、貿易における港湾都市周辺寺社、航海の目標となる水源のある山岳であること（桃崎他前掲）を指摘したい。他地域においても、その分布は交易拠点や、中国系瓦を持つ堂を伴う宋人と深い関わりがある場所にのみ搬入されていることがうかがえる。これらの塔は如来像や、僧形など複数の尊像が彫出されていることから、単一の尊像への信仰と結びついた信仰物ではなく、南宋航海神や個人の祈りを反映するような特定集団との信仰で結びついたものと推察する。井形進は、薩摩塔を「東海の三神山、とくに中国において日本と重ねて言及される事のあった蓬莱との関わり」について言及し、聖堂の一種ではないかと指摘する（井形2020）。

薩摩塔をはじめとする中国系石造物の造塔背景については、それぞれに要因がある。しかしながら、航路や航海の守護という役割については共通しているのではないかと考える。

4. 九州成立の中世石造物の成立過程思案

近年、康治元年（1142）銘の鹿児島県大隅国分寺層塔・隼人塚層塔や、貞永元年（1232）銘の筑後市坂東寺層塔など12世紀前半～13世紀前半まで遡ることが明らかな古式石塔には、屋根に垂木や瓦、軸部に肉彫の四方仏や天部、窓や扉を表現するものが含まれることが確認されている。一方で、各地の中世石塔のモデルとなった関西地方には、このような要素が未だ一般化していないことから、関西圏の様式が導入され、地域化したとは考えられない。また、こうした複雑且つ洗練された意匠は、九州で独自に発生した在地様式が、自律的に発展したと考えるのは想像に難しい（桃崎他2017）。

首羅山遺跡薩摩塔や宗像大社阿弥陀経石と宮原天満宮五重層塔や風浪神社五重層塔の笠部を比較すると、屋根瓦や飛檐垂木の龍頭表現が酷似していることがわかる。また、福岡県篠栗町若杉山乙犬御堂層塔と宮原天満宮五重層塔や同宮笠塔婆の軸部を比較すると、仏龕内に如来像や祖師像を祀り、両脇に雲文や扉などの装飾を施す点は共通している。

特に顕著なのは、薩摩塔軸部の四天王像や恵光院層塔軸の四天王像・供養者像・如来像と乙宮神社石殿軸部、坂下阿蘇神社層塔主軸、風浪神社五重層塔主軸、藤田天満宮層塔主軸、宮原神社五重層塔の軸部に肉彫された四天王像・供養者像・如来像の彫出表現が、若干、日本様式にデフォルメされているものの細部の意匠に至るまで酷似している点である。

以上のことから、九州で成立する中世の石造物は、日本在来の「知」以外の影響、つまり宋代の中国系石造物の将来や書籍等からの直接・間接的な情報・影響により、先進的且つ地域色の強い石造物が形成されたのではないかと想定する（図8（下））。

しかしながら、細部の意匠が日本風にアレンジされていることから、宋人石工が直接指導したとは考え難い。つまり、九州における独自の日元交渉において大量の銅銭や陶磁器、書籍や薬種など様々な物品、蘭溪道隆をはじめとする禅僧が航路を往来する中で、中国系石造物の材料と情報も日本に将来したとみる。それらを手し、建築意匠や装飾などを模倣・摂取したものが中国系石造物ではないかと考えられる。

それを可能にしたのは、九州に定着していた在地石工の石造加工技術と、梅園石と在地産凝灰岩の材質的な類似によるものである。その後の九州各地の中世石造物の成因は、九州で自生していた在地様式が自律的に発展したのではなく、①近畿で成立した規範となる石造物が、特定宗派の教線拡大に伴い

地方へ拡散後ローカライズし、②中国や朝鮮半島、近畿・瀬戸内から外来の知が導入（実見・伝聞）され、③それを在地石工がアレンジし、④且つ各地域の地質上の特性によって形成された所産であるとする。

おわりに

日宋・日元貿易において、航路で往来した中国系石造物は、特定集団の信仰を象徴するだけでなく、その後の九州における中世石造物の成因に大きく寄与する資料である。中国系石造物の成立については、明確な結論を出すことはできないが、港湾都市に築かれたチャイナタウンにおいて、中国産石材だけではなく、列島石材を用いて造塔していることは、専任の石工集団の技術力の高さと石材への深い理解あったことを示すと考えられる。

また、中国製仏画や経典など図像的儀軌情報の摂取や、中国系石造物の実見により宋風の複雑な意匠は、幾何学的の一般的な中世石塔の一部に反映されていく。この背景には、九州各地に阿蘇火砕流堆積岩をはじめとする加工条件と耐久性に富み、中国系石材と類似した石材が豊富に供給できる地盤があり、且つ九州に定着していた在地石工集団の石材加工における技術力の高さがあったからであるとする。

註

1) 中国の石造物は「薩摩塔」が多数を占めるが、この型式に該当しない石造物も存在する。また、明確に中国の石材（梅園石等）と判断できない資料も存在している。そのため、本稿では「中国系石造物」と総称する。

参考・引用文献

井形進2005「宗像大社の宋風獅子とその周辺」『佛教藝術』283号 毎日新聞社 pp.81-98.

井形進2009「大宰府所在の薩摩塔」『市史研究ふくおか』第4号 福岡市博物館市史編さん室

井形進2012『薩摩塔の時空 異形の石塔をさぐる』花乱社選書4

井形進2020「九州の中国渡来の石造物—福岡平野を中心に—」『神仏と祈りの情景』九州の中世IV第4 高志書院

伊藤幸司2010「硫黄使節考—日明貿易と硫黄」『東アジアを結ぶモノ・場』アジア遊学 勉誠出版

大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘2009「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』42 鹿児島大学理学部

加藤和歳2009「大宰府所在薩摩塔の応急的保存修復処置」『九州歴史資料館 研究論集』34

川勝政太郎1957『日本石材工芸史』綜芸舎

久住猛雄2019『箱崎58—箱崎遺跡第84次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1373集

熊本県球磨郡湯前町1985『重要文化財 明導寺七重石塔保存修理工事報告書』

佐藤亜聖2020「造形・技術・石工の日中交流」『中世石造物の成立と展開』高志書院

静永健2009「阿弥陀経石の航路」『から船往来—日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』中国書店

高津孝・橋口亘・大木公彦2010「薩摩塔研究—中国産石材による中国系石造物という視点から」『鹿大史学』第57号 鹿大史学会 鹿児島

高津孝・大木公彦2020「浙江石材と日本中世—薩摩塔と中国系石塔—」『中世石造物の成立と展開』高志書院

多田隈豊秋1975『九州の石塔』上巻 西日本文化協会

久山町教育委員会2008『首羅山遺跡—福岡平野周辺の山岳寺院—』

松田朝由2008「鹿児島県の薩摩塔」『南日本文化財研究』No.7 南日本文化財研究刊行会

桃崎祐輔他2011「九州発見中国製石塔の基礎的研究」『福岡大学考古資料集成4』福岡大学考古学研究室研究調査報告第9冊 福岡大学人文学部考古学研究室

桃崎祐輔他2017「薩摩塔と助継塔—九州に搬入された中国製石塔と在来石塔への様式的影響—」『ISHIKU』2017外来知研究会シンポジウム資料

森克己1975『新訂日宋貿易の研究』国書刊行会

山内晋次2009『日宋貿易と硫黄の道』日本史リブレット75 山川出版社

山川均2008『中世石造物の研究—石工・民衆・聖—』

第7章

海を渡った陶磁器と土師器の交差点

—両筑平野周辺の貿易陶磁器と土師器の相伴関係—

小野 裕子

はじめに

中世の九州北部では博多を中心に貿易品として扱われていた陶磁器が大量に出土し、発掘調査により多くの貿易陶磁器が流通していたことが判明している。特に一大貿易港であった博多や、政治都市であった大宰府から出土した貿易陶磁器は多く、編年研究なども行われている。大宰府出土品については主に森田勉氏・横田賢次郎氏による型式分類と編年の検討（森田・横田1978）、山本信夫氏による中国陶器も含めた検討や細分類、追加、修正が行われている（山本1983・2000）。また、博多遺跡群出土品については森本朝子氏による分類があり、森田氏・横田氏による型式分類と編年を一部踏襲しつつも白磁皿などは新たに分類を組み直し、先行分類では網羅できない部分なども示し、博多出土の貿易陶磁器の傾向を提示した（森本1984）。

これら貿易陶磁器の編年では、基礎となる年代観として土器編年の使用が多い。大宰府出土の土器編年については幾度も検討がなされ、土器と貿易陶磁器の年代を対照している（前川威洋ほか1978、森田・横田1978、山本1990）。なかでも山本氏は土師器法量の統計値を使用することで土師器の変遷を示し、その編年を明らかにしている。また、貿易陶磁器の出土傾向とを比較対照することで、土師器と貿易陶磁器の相伴関係を示し、地域における特色の存在を認めながらも、大宰府における相伴関係と土師器の年代が九州北部でも概ね当てはまり、大宰府の土器型式が有効であることを示した。そのなかで筑後地域については14例（相伴関係については2例）の遺跡・遺構を取り上げるが、当時よりも調査発掘数は増え、より多くの遺跡・遺構を対象として検討することが可能となっている。特に、貿易陶磁器と土師器の年代観を検討するうえで最適な副葬品・供献品を持つ中世墓の発掘調査件数は確実に増加している。よって、本論では、両者が相伴した中世墓の発掘調査報告件数が多い両筑平野を中心に検討していきたい。両筑平野は、筑紫平野のなかの背振山地と耳納山地によって狭まった部分を境にした北側を指し、南側を東西に筑後川が流れる。また、両筑平野の北端は大宰府と接している。

本研究では貿易陶磁器と土師器の相伴関係から両筑平野の地域性を捉える。そして、大宰府の相伴関係と比較することで、大宰府周辺における貿易陶磁器の使用状況と流通の様相をみていきたい。

1. 両筑平野を中心とした地域における貿易陶磁器と土師器の相伴関係

(1)

同一の墓から出土する副葬品・供献品は、埋納・使用時期にさほど差がないと考えられる。このため貿易陶磁器と土師器の使用時期、流入関係を検討するにおいて有利な一括資料といえる。よって、本論では両筑平野を中心とした地域における貿易陶磁器と土師器の両方が同一墓から出土したものを悉皆的に取り上げ、検討対象とした。ただし、今回は実見できたもの、或いは報告書に法量記載があるもの、また、貿易陶磁器の年代把握が可能なものを対象としている。前述したように副葬品・供献品は使用時期の差は大きくはなく、今回は同時期に使用されている点を重視するため特に副葬品と供献品の区別はしない。

考古学の年代検討には相対年代・交差年代・暦年代の3つがあるが（武末2003・長2019）、今回の検討では、

まず、特定地域でのA、Bという二つの考古資料の新旧を相対的に位置づける相対年代を検討する。つまりは、両筑平野周辺における中世墓出土の相伴貿易陶磁器・土師器の相対年代を、大宰府の編年を使用し検討する。次に、大宰府の編年に当てはまらないものを洗い出し、それらの特徴を捉えることで、両筑平野周辺地域における貿易陶磁器の使用状況などを見出したい。

対象地域の中世墓で相伴した貿易陶磁器と土師器について、貿易陶磁器は大宰府編年（山本2000）を、土師器は山本氏の編年（山本1988a、1990）を対応させたりストが表1である。貿易陶磁器の分類は残存状態により判別できた範囲での分類レベルを表記した。よって分類の細分（大分類・中分類・小分類）が遺物によって異なる。また、土師器で完形でないものは、計測可能な部分のみ計測したため、部位によって平均値の正確性に差が生じているが、おおよその傾向をつかむためには支障はないと考える。土師器の分類で使用した法量は、各遺構の資料個数が5点以下のものが多いため平均値を採った（山本1990）。土師器の型式は、各遺構の資料数が少ないため幅広く採っている。また、貿易陶磁器と土師器の編年を検討する場合、どちらを軸とするかが問題だが、今回は大まかな傾向を捉えるために出土傾向が長期的である貿易陶磁器を軸にした。まずは貿易陶磁器の編年で整理し、時代ごとの傾向をみてみたい。

（2）

・11世紀後半～12世紀前半

本時期は土師器杯・小皿ともに底部ヘラ切りとなるが、出土した土師器が全てヘラ切りであった遺構は池田遺跡の1号木棺墓のみである。津古東宮原遺跡1号土墳墓と宝楽遺跡2号土墳墓の土師器小皿は資料点数が少ないものの、全て糸切りで12世紀中頃以降の条件を備えている。

貿易陶磁器は白磁の碗、皿が出土するが、博多遺跡でもこの時期の多くの白磁が出土しており、その傾向と齟齬を生じない。しかし、津古東宮原遺跡1号土墳墓の土師器は糸切りであり、法量もXVI・XVII型と考えられるため、少なくとも約半世紀の差がある。

・12世紀中頃～13世紀初頭前後

本検討で一番対象数が多かった期間である。大部分の遺構で貿易陶磁器と土師器の年代は合致する。つまり、貿易陶磁器・土師器ともに、埋葬時に入手したものを副葬品・供献品として使用しており、主要流通時期と埋葬時期に差がないと判断できる。柿ノ上遺跡の1号土墳墓では底部ヘラ切りと糸切りがそれぞれ1点ずつ出土しており混在するが、白磁碗IV-1aは12世紀後半まで一定量が出土しており、年代は合致する。同様に仁右衛門畑遺跡9号墓、栴田遺跡8-1号墓、出口遺跡2号木棺墓の白磁碗IV類も11世紀後半～12世紀前半の標識磁器だが、12世紀後半まで一定量を占めるため、土師器の年代とズレは生じていない。

白磁碗についてはほぼIV-1類かV-4類である。この2種類が両筑平野では手に入り易かったタイプであるのか、副葬・共献方法で作法があったのかは不明だが、何らかの要因があるように思われる。青磁碗については龍泉窯系青磁碗I類が多くみられるようになる。I-1～4類がまんべんなく出土している。また、龍泉窯系青磁碗以外の青磁碗も数点見られる。出口遺跡2号木棺墓の青磁碗は胎土や釉薬、外側の櫛目文をみると同安窯系に似ているが内面の模様が異なり、博多の分類の「その他の青磁」のII類に近い（森本1984）。

土師器小皿の各遺構の平均値は口径8.4～10.0cm、底径6.4～8.1cm、器高1.0～1.9cmと幅があり、山本編年のXIV～XVI型に当てはまらないものもある。確認できるものにおいては全て底部糸切りで、多くに板状圧痕がみられる。また、仁右衛門畑遺跡9号墓、志波ノ本遺跡7号墓からは他の遺構に比べ多量に出土している。土師器杯については3遺跡からしか出土しておらず、仁右衛門畑遺跡9号墓からは山本編年に該当しない型品が出土している。また、志波ノ本遺跡7号墓からは杯が11点と小皿同様に多く出土しており、貿易陶磁器の2点と比べると数量の多さは顕著である。

貿易陶磁器と土師器のセット関係で注目したいのは碓遺跡である。貿易陶磁器は青白磁合子のみで、碗が出土していない。狭川真一氏は12世紀中頃～13世紀前半における貿易陶磁器と土師器が共献するケースにおいて、「椀形態の主体は徹底して陶磁器」としている（狭川1993）。しかし碓遺跡では陶磁器の碗は出土せず、椀形態のもので出土したのは瓦器碗1点と銅製小碗2点である。よって、椀形態のものが瓦器、或いは銅製品となっており、例外的なケースと言える。

・13世紀初頭前後～14世紀前半

本時期は対象数が減少する。狭川氏が指摘するように13世紀中頃以降、貿易陶磁器の碗と土師器のセットという形態の墳墓が減少するという九州北部における傾向（狭川1993）は、両筑平野を中心とした地域でも齟齬はない。

貿易陶磁器はほぼ龍泉窯系青磁碗II類であり、大園遺跡のみ白磁碗と皿が青磁碗と相伴する。龍泉窯系青磁碗では大宰府編年の13世紀中頃～14世紀初頭前後の標識磁器であるIII類は全く無い。III類は龍泉窯系の優品であり、両筑平野では小都市の稲吉元矢次遺跡の大溝遺構からIII類の杯1点が出土している。本遺跡は鎌倉時代の集落遺構が主体で、III類は両筑平野に流通していなかったわけではないが、副葬品や供献品としては使用しなかったといえる。大園遺跡の2号土墳墓においては、蓮弁文の龍泉窯系青磁碗ほぼ一色になっていく13世紀中頃以降の時期（狭川1993）に、白磁碗・皿を含む豊富な種類が見られる。また、山下遺跡S T11では龍泉窯系青磁碗I-1類とII類、II-c類が相伴し、年代が12世紀中頃～14世紀初頭前後までと年代が幅広い。しかし、土師器小皿はXVI型であるため、I-1類とII類の時期とはほぼ合致はするが、II-c類の時期とは合わない。土師器杯は口径12.1cmで、XVII～XIX型とみられるものがあり、下限は14世紀初頭前後と考えられる。

土師器小皿については、山本氏の編年においては13世紀前後は扁平化、その後は小型化が進むが、概ね本傾向がみられる。しかし、本時期の最も小さい口径の平均値は8.4cmで、7.0cm代のものはなく、XVIII型とみうけられるものはなさそうである。よって下限は13世紀前半頃までと考えられる。

2. 大宰府編年との比較

次に、上述の検討結果をもとに、両筑平野周辺における傾向を探るが、比較検討の前提条件がいくつかある。

まず、貿易陶磁器と土師器の年代を検討する際、どちらを基準として検討するかにより結果も異なる。しかし、年代の差が生じた場合にどちらの年代が正しいかという基準を現状では持たないため、差が存在するという事しか提示できない。また、都市の性格でも、物の流入や消費の様相は異なる。10世紀から12世紀前半まで、大宰府は来日した中国商人の来着・滞在地であるケースが多く、大宰府の役人は彼らの入国手続きのようなことを行っている。また大宰府の権帥や大貳等の官長は、中国商人とのつながりも深く、大宰府は中国商人と係わりが強い地の官司であった。一方で両筑平野では南西端には国府が置かれ、荘園・集落も多い地である。このように性格の異なる地域では、貿易陶磁器や土師器の流入方法や使用者層、消費についての差が当然存在するであろう。また、今回の検討では墓地という特定遺構のみを取り上げており、そこにも一般的な消費との違いが表れる可能性がある。更に、貿易陶磁器は山本氏が指摘するように出土傾向の年代に幅があり、また、伝世として継続して使用している可能性も考慮しておく必要がある（山本1990・2000）。以上を踏まえたうえで大宰府編年とのズレが生じたものを検討し、両筑平野を中心とした地域の特徴をみてみたい。

まず、11世紀後半～12世紀前半においては、津古東宮原遺跡1号土墳墓の白磁碗と土師器小皿に約半世紀の差が見受けられる。当該時期の土師器小皿はほぼ底部ヘラ切りであるが、出土品は糸切りであり、また小型でもあるため、白磁碗V-2類の時期に該当するXII・XIII型には該当しない。さらに、

これらの白磁碗と土師器小皿は一括で出土しているため、使用時の時間差は存在しない。以上から考えられることは、「白磁碗V-2類が長期間使用された」或いは「土師器小皿が早めに出現した底部糸切りタイプで、法量も小型のものが存在した」ということである。ただし、この約半世紀の差はやや大きいような気もする。宝楽遺跡2号土壙墓においては、土師器小皿が糸切りのため、白磁碗V-2 a類のほうが時期がやや早い。資料点数がそれぞれ1点しかないが、「土師器小皿が早い時期に出現したというよりも白磁碗V-2 a類が12世紀中頃まで使用されていた可能性のほうが高い」と思われる。

池田遺跡1号木棺墓については白磁皿Ⅲ類よりも土師器小皿、杯のほうが時期がやや早い。これは土師器小皿と杯の計16点全て底部ヘラ切りであるが、ヘラ切りと糸切りが混在するXIV型であり、「葬送の場においてヘラ切りだけが選別された」または「白磁皿Ⅲ類が12世紀中頃よりもやや早い時期から出現する」の両方が考えられる。池田遺跡Ⅱ地点についてはこの木棺墓以外の遺構が発見されておらず比較するものがないが、しかし、計16点もの土師器が全てヘラ切りのためXⅡ或いはXⅢ型（11世紀後半～12世紀初頭前後）の可能性が高いと思われる。よって、「白磁皿Ⅲ類が12世紀中頃よりもやや早い時期から出現する」可能性がある。

12世紀中頃～13世紀初頭前後の時期では、貿易陶磁器と土師器の年代観に差がある遺構は祇園山第2号墳の土壙墓、本郷流川遺跡5号土壙、下高橋上野遺跡SR-1、大保龍頭遺跡1号土壙墓がある。4件は全て出土した貿易陶磁器が龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、土師器小皿はXⅥ・XⅦ型の扁平、或いは小型化が進んだものである。土師器小皿は山本氏の編年ではXⅦ型の13世紀前半頃から小型化するため、比較すると「やや早い時期に現れた小型の小皿」ということができるかもしれない。或いは「土師器小皿が小型化する13世紀前半ごろまで龍泉窯系青磁碗Ⅰ類が使用されていた」可能性もある。

13世紀初頭前後～14世紀前半では、土師器小皿は扁平化の後、小型化が進む時期であるが、八ツ並金丸遺跡S P5047の出土品は小型化しておらず、龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類の時期よりも早い時期の型式に区分される。また、山下遺跡S T11は貿易陶磁器の年代幅が大きい、土師器小皿は小型化しておらず、XⅥ類の時期と合致するのはⅠ-1類とⅡ類であり、Ⅱ-c類は外れる。よってこのⅡ-c類については「大宰府よりもやや早い時期から両筑平野に出現した」と考えることができる。或いは「両筑平野では土師器小皿の小型化はこの時期にはあまり進んでいなかった」とも考えられる。このような視点で他の遺構のⅡ-c類をみると、柚比本村遺跡S P4002においても重なる時期はあるが土師器小皿のほうがやや早い時期の型となっている。これら3つの遺跡は両筑平野の南西に位置しており、「Ⅱ-c類は大宰府よりもやや早い時期にこの地域に出現している」ということが可能ではないだろうか。

このように各遺構の出土品をみると、多くは貿易陶磁器と土師器の年代は大宰府の編年、型を合わせても齟齬は生じない。しかし、全てにおいて合致するわけではなく、そこに両筑平野を中心とした地域における独自の様相が存在する。

宝楽遺跡2号土壙墓や下高橋上野遺跡S R-1をはじめとした、貿易陶磁器のほうが年代が早いものについては11世紀後半～13世紀初頭前後にかけてみられる。本パターンについては、土師器の型が早い段階に出現したというよりは、貿易陶磁器が大宰府よりも長期間使用されていたと考える方が自然であろう。ただし、津古東宮原遺跡における約半世紀の差は大きく、土師器小皿は糸切りが出現する初期段階のXIV型（12世紀中頃）とする方が妥当であろうか。また、貿易陶磁器の使用期間における終焉期は明確にすることは難しく、両筑平野での長期間の使用も、大宰府より期間が長いと断言はできない。あくまで、一つの傾向として、大宰府で増加する時期より後にも使用されていた、という傾向と判断する。

一方、貿易陶磁器のほうが年代が遅いものは、八ツ並金丸遺跡S P5047、山下遺跡S T11からみるように、貿易陶磁器が大宰府編年よりやや早い時期に両筑平野に出現した、或いは土師器小皿は13世紀中頃以降も小型化しないものがあったと考えられ、大宰府とは異なる傾向を持っていたことかえらる。

おわりに

中世墓において共伴する貿易陶磁器と土師器の年代関係を検討し、両者のズレで貿易陶磁器の方が早い場合と遅い場合（或いは土師器のほうが遅い場合と早い場合）を抽出し、貿易陶磁器の出現・使用時期、土師器の変遷が大宰府と異なる傾向を把握した。本傾向は都市の性格差から発生する使用者層、使用状況の差であり、出現時期の差ではないかもしれない。また、葬儀の場での使用であり、日常的な使用とは異なる可能性もある。しかし、貿易陶磁器と土師器に関して、同時期にどのタイプを使用していたか、という点においては提示することができ、「両筑平野を中心とした地域と大宰府とでは使用状況に差がある」ことは確実である。

本論では二地域における差を示したに過ぎないが、両筑平野を中心とした地域における傾向はつかめた。貿易陶磁器と土師器のセットでの出土状況を比較すると、大宰府とは異なる傾向もみられ、大宰府の隣接地でありながらも、使用状況の差や、貿易陶磁の出現状況に違いがみられ、よって貿易陶磁器の流入状況も異なっていたのではないかと推察できる。

今回は貿易陶磁器と土師器が共伴している中世墓を対象に絞ったが、より詳細に両筑平野での状況を検証するには、他遺構の出土様相も把握することが必要である。また、比較対象を大宰府だけでなく他地域にも広げることで、より両筑平野の地域性を明確にすることができるであろう。中世北部九州での貿易陶磁器の様相は、圧倒的に出土量が多い博多遺跡群や太宰府地域のみで説明されることが多い。しかし、近年は両筑平野等での出土報告も増えており、それらの状況を等閑視しては、九州北部での貿易陶磁器の様相をつかむことはできない。今後は検討する資料数を増やし、より広範囲での貿易陶磁器の流通や使用状況を把握することを課題としたい。

表1 註

- 1) 山本信夫 2000『太宰府条坊跡XⅤ —陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会
- 2) 山本信夫 1988 a 「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器 —10～12世紀の資料（1）本分編—」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会
山本信夫 1990『統計上の土器 —歴史時代土師器の編年研究によせて—』『乙益重隆先生古希記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 3) 森本朝子 2003『博多遺跡分出土の合子について』『博多研究会誌』第11号
- 4) 出土状況から土壙墓の可能性が高く、検討対象の遺跡とする。
- 5) 土師器の法量は、筆者の実測、或いは報告書の数値を使用している。復元値は使用していない。

参考文献

- 江浦洋 1988「中世土壙墓とめぐる諸問題」『日置荘遺跡（その3）—調査の概要—』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
小郡市 1999『小郡市史』
小郡市 2017『小郡市史 補遺編』
小郡市教育委員会 1988『稲吉元矢次遺跡 小郡市文化財調査報告書第45集』
勝見（坂田）孝彦 1993「近江中世の土壙墓と輸入陶磁器に関する若干の検討」『貿易陶磁研究』No.13
佐賀県教育庁文化課 1989『礫石遺跡 佐賀県文化財調査報告書第91集』
狭川真一 1993「墳墓にみる共献形態の変遷とその背景—北部九州を中心として」『貿易陶磁研究』No.13
狭川真一 2007「絵画からみた遺棄葬と中世墓」『墓と葬送の中世』高志書院
武末純一 2003「弥生時代の年代」『考古学と暦年代』ミネルヴァ書房
太宰府市 1992『太宰府市史 考古資料編』
太宰府市 2005『太宰府市史 通史Ⅰ』
筑前町 2016『筑前町史 上』
橋田正徳 1993「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』No.13
長直信 2019「西海道の土器編年研究」『大宰府学研究 九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集 第1集』

福岡県教育委員会 1970「浦城跡」『福岡県文化財調査報告書45』
 前川威洋ほか 1978『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第8集(下)』福岡県教育委員会
 森田勉 1977「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『九州歴史資料館研究論集3』九州歴史資料館
 森田勉・横田賢次郎 1976「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集2』九州歴史資料館
 森田勉・横田賢次郎 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について ―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館
 森本朝子 1984『博多出土貿易陶磁器分類表 博多 高速鉄道関係調査(1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊』福岡市教育委員会
 山本信夫 1983「土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第7集
 山本信夫 1988a「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器 ―10～12世紀の資料(1) 本文編―」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』日本中世土器研究会
 山本信夫 1988b「北宋期貿易陶磁器の編年 ―大宰府出土例を中心として―」『貿易陶磁研究』No.8
 山本信夫 1990「統計上の土器 ―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『乙益重隆先生古希記念論文集 九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
 山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV ―陶磁器分類編―』太宰府市教育委員会

表1 中世墓の貿易陶磁器・土師器共伴リスト(面筑平野を中心とした地域)

| 遺跡 | 遺構 | 貿易陶磁器 | 員数 | 陶磁器の編年(註1) (標識、或いは標準陶磁器) | | 報告書表測図 頁・番号 | 土師器 員数 | 土師器の法重(㎝) (注5) ①～⑦は測定の番号は連動しない | | | 土師器の備考 | | | 平均値 (小数点2位四捨五入) | | 土師器の編年(註2) | 報告書表測図 頁・番号 | 掲載書 |
|---------|-------|-------------|-----|-----------------------------|---|-------------------|-----------|--------------------------------------|------|-----|---------------|----------------|-----|--------------------|-----------------------|-----------------|---|--|
| | | | | 分類 | 員数 | | | 口径 | 底径 | 器高 | 口径 | 底径 | 器高 | 口径 | 底径 | | | |
| 宝業遺跡 | 2号土壌墓 | 白磁碗 | 1 | V-2a | 11C後半～ 12C前半 | P232 第194図 2 | 1 | 8.9 | 5.8 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 8.9 | 5.8 | 1.4 | 12C中頃～ 13C初頭前 後 | P232 第194図 3 | 『久間遺跡・宝業遺跡・上林古墳 筑前町文化財調査報告書 第 15集』上巻 2012 筑前町教育委員会 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | ① |
| 津古東宮原遺跡 | 1号土壌墓 | 白磁碗 | 1 | V-2 | 11C後半～ 12C前半 | P78 第85図 1 | 4 | ② | 8.3 | 7.0 | 1.1 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 8.3 | 7.0 | 1.1 | 13C初頭前 後～前半か | P78 第85図 2～5 | 『津古遺跡群Ⅱ 小野市文化 財調査報告書 第92集』1994 小野市教育委員会 |
| | | | | | | | | ③ | 8.6 | 6.1 | 1.0 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 8.6 | 6.1 | 1.0 | | | |
| 池田遺跡 | 1号木棺墓 | 白磁皿 | 1 | Ⅲ-2か | 12C中頃小 | P20 第18図 17 | 15 | ④ | 9.0 | 7.4 | 1.0 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.0 | 7.4 | 1.0 | 11C後半～ 12C中頃 | P20 第18図 1～16 | 『池田・黒水遺跡 夜須町文化 財調査報告書第26集』1993 夜須町教育委員会 |
| | | | | | | | | ⑤ | 9.4 | 7.4 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.4 | 1.4 | | | |
| | | | | | | | | ⑥ | 9.5 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑦ | 9.5 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑧ | 9.4 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑨ | 9.5 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑩ | 9.4 | 7.4 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.4 | 1.4 | | | |
| | | | | | | | | ⑪ | 9.5 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑫ | 9.4 | 7.4 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.4 | 1.4 | | | |
| | | | | | | | | ⑬ | 9.5 | 7.5 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.5 | | | |
| | | | | | | | | ⑭ | 9.4 | 7.4 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.4 | 1.4 | | | |
| | | | | | | | | ⑮ | 9.4 | 7.7 | 1.6 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.7 | 1.6 | | | |
| | | | | | | | | ⑯ | 9.5 | 7.6 | 1.9 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.6 | 1.9 | | | |
| | | | | | | | | ⑰ | 9.5 | 7.3 | 1.2 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.3 | 1.2 | | | |
| | | | | | | | | ⑱ | 9.5 | 7.4 | 1.6 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.4 | 1.6 | | | |
| ⑲ | 9.5 | 7.3 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.3 | 1.4 | | | | | | | | | | | |
| ⑳ | 9.4 | 7.0 | 1.5 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.0 | 1.5 | | | | | | | | | | | |
| ㉑ | 9.3 | 7.0 | 1.3 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.3 | 7.0 | 1.3 | | | | | | | | | | | |
| ㉒ | 9.4 | 7.0 | 1.1 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.0 | 1.1 | | | | | | | | | | | |
| ㉓ | 9.4 | 7.7 | 1.6 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.4 | 7.7 | 1.6 | | | | | | | | | | | |
| ㉔ | 15.3 | — | 32 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 15.3 | — | 32 | XⅡB～XⅣ 後～中頃 | 15.3 | — | 32 | XⅡB～XⅣ 後～中頃 | | | | | | |
| 柿ノ上遺跡 | 1号土壌墓 | 白磁碗 | 1 | Ⅳ-1a | 11C後半～ 12C前半 (ただし、 12C後半ま で一定量を 占める) | P26 第23図 3 | 2 | ① | 8.4 | — | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 8.4 | — | 1.4 | 12C中頃 | P26 第23図 1、2 | 『柿ノ上遺跡・高田林遺跡 筑前 町文化財調査報告書 第16集』 2013 筑前町教育委員会 |
| | | | | | | | | ② | 9.3 | — | 1.2 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.3 | — | 1.2 | | | |
| 仁右衛門畑遺跡 | 90号墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 2 | Ⅰ-3a | 12C中頃～ 後半 | P208 第193図 8、9 | 7 | ① | 9.5 | 7.5 | 1.4 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.5 | 7.5 | 1.4 | 12C中頃～ 後半 | P208 第193図 1～7 | 『仁右衛門畑Ⅰ 一般調査210 号発掘/ハ/ハ/ハ関係埋蔵文化 財調査報告書 第12集』2000 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② | 9.6 | 7.0 | 1.3 | 外周底部:糸切、内面:ナ子 | 9.6 | 7.0 | 1.3 | | | |

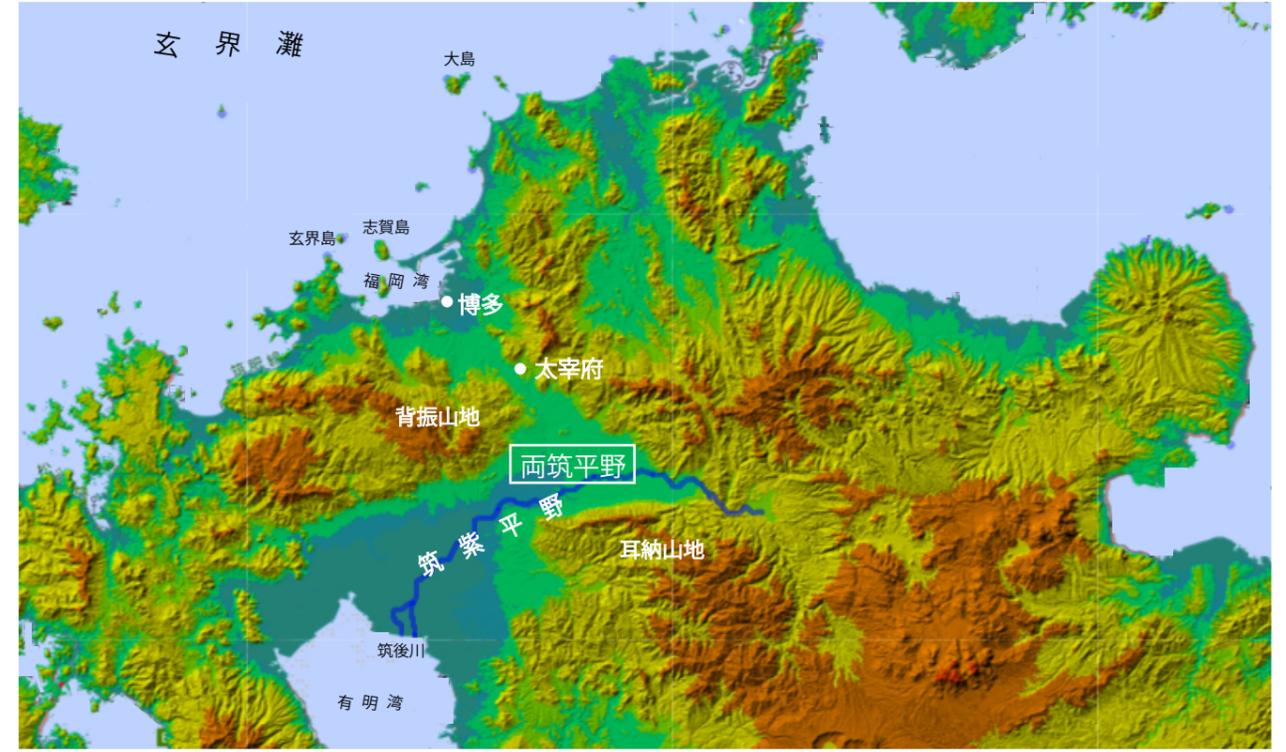
| 遺跡 | 遺構 | 貿易陶磁器 | 陶磁器の編年(註1) (標識、或いは標準陶磁器) | 報告書表測図 頁・番号 | 土師器 | 員数 | 土師器の法量(Cm) (リフトと実測の差は運動しない) | | | 土師器の備考 | | | 平均値 (小数点2位四捨五入) | | 土師器の編年(註2) 型式 | 報告書表測図 頁・番号 | 掲載書 |
|--------|----------------|-------------|--|------------------------|-----|----|--------------------------------|------|-----|--------|--------------------|-------------------|--------------------|--|------------------|----------------|-----|
| | | | | | | | 口徑 | 底徑 | 器高 | 口徑 | 底徑 | 器高 | 口徑 | 底徑 | | | |
| 堤当正寺遺跡 | 土壇墓 | 白磁碗 | V-4a 12C中頃～後半 | P83 Fig80 1 | 小皿 | 4 | ① | 10.2 | 8.3 | 1.2 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P83 Fig80 2 ～5 | 『堤当正寺古墳 甘本市文化財調査報告 第9集』2000 甘木清隆教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | — | 6.2 | 1.2 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| 栲田遺跡 | 8-1号墓 (木棺墓) | 白磁碗 | ① IV-1 11C後半～12C前半 (ただし、12C後半まで一定量を占める) | P119 fig-72 145、146 | 小皿 | 5 | ① | 9.5 | 7.3 | 1.7 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | — | 『栲田遺跡 栲田町埋蔵文化財調査報告 第9集』2011 栲田町教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 9.1 | 7.0 | 1.9 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | 9.8 | 7.7 | 2.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | 9.7 | 7.4 | 1.8 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑤ | 9.4 | 7.3 | 2.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| 出口遺跡 | 2号木棺墓 | 白磁碗 | IV-1b 11C後半～12C前半 (ただし、12C後半まで一定量を占める) | P87 第53図 371、372 | 小皿 | 4 | ① | 8.8 | — | 1.4 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | — | 『出口遺跡 夜須町文化財調査報告 第49集』2000 夜須町教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 8.9 | — | 1.7 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| 碓遺跡 | 墳墓 (ST80) | 青磁碗 | — | — | 小皿 | 7 | ① | 8.8 | — | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P18 第14図 50～57 | 『碓遺跡 第5次発掘調査報告 第2号墳 久留米市文化財調査報告 第32集』2017 久留米市教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | — | 6.3 | — | 外面底縁:板状圧痕 | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | — | 7.0 | — | 外面底縁:板状圧痕 | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | — | 外面底縁:板状圧痕 | | | | | | |
| | | | | | | | ⑤ | 9.4 | 7.6 | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕 | | | | | | |
| | | | | | | | ⑥ | 9.4 | 7.1 | 1.5 | 外面底縁:糸切、板状圧痕 | | | | | | |
| | | | | | | | ⑦ | — | — | — | 外面底縁:糸切、板状圧痕 | | | | | | |
| 大板井遺跡 | 1号土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | I-1a 12C中頃～後半 | P42 第31図 5 | 小皿 | 4 | ① | — | — | 1.4 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P42 第31図 1 ～4 | 『大板井遺跡 小郡市文化財調査報告 第65集』1990 小郡市教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 9.1 | 7.7 | 1.4 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | 9.2 | 8.2 | 1.3 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | 1.5 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| 津古真台遺跡 | 2号土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | I-2a 12C中頃～後半 | P60 第48図 1～3 | 小皿 | 4 | ① | 10.0 | 7.5 | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P60 第48図 5～8 | 『津古真台遺跡 1 小郡市文化財調査報告 第64集』1993 小郡市教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 10.1 | 8.2 | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | — | — | 1.0 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | 9.0 | 7.5 | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |

| 遺跡 | 遺構 | 貿易陶磁器 | 陶磁器の編年(註1) (標識、或いは標準陶磁器) | 報告書表測図 頁・番号 | 土師器 | 員数 | 土師器の法量(Cm) (リフトと実測の差は運動しない) | | | 土師器の備考 | | | 平均値 (小数点2位四捨五入) | | 土師器の編年(註2) 型式 | 報告書表測図 頁・番号 | 掲載書 |
|---------|-----------------|-------------|--------------------------------|------------------------------|---------------|----|--------------------------------|-----|-----|--------|--------------------|-------------------|-----------------------------------|---|------------------|----------------|-----|
| | | | | | | | 口徑 | 底徑 | 器高 | 口徑 | 底徑 | 器高 | 口徑 | 底徑 | | | |
| 才田遺跡 | 1号木棺墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | ① I-2 12C中頃～後半 | P175 第126図 6～8 | 小皿 | 5 | ① | 9.0 | 8.0 | 1.2 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P175 第126図 1～5 | 『才田遺跡 才田遺跡 九州横断自動車道開通関係埋蔵文化財調査報告 48』1998 福岡教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 8.5 | 7.2 | 1.1 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | 9.2 | 8.0 | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑤ | — | — | 1.0 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑥ | — | — | 1.0 | 内面:ナナ | | | | | | |
| 筑後国府跡 | 土壇墓 (SX3066) | 龍泉窯系 青磁碗 | ① I-4a 12C中頃～後半 | P40 第24図 7、8 | 小皿 | 6 | ① | 8.4 | 6.5 | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P40 第24図 1 ～6 | 『筑後国府跡』1986 久留米市教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 9.6 | 8.1 | 1.1 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | 9.7 | 7.9 | 1.5 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | 1.3 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑤ | — | — | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑥ | 9.5 | 7.7 | 1.3 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| 観音寺遺跡 | 3区7号 土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | ① I-3 12C中頃～後半 | P179, fig-59 126,127 | 小皿 | 4 | ① | — | — | 1.2 | 内面:ナナ | 12C中頃～13C初頭前 後 | P179, fig-59 128～131 | 『中元寺遺跡群 1 添田町埋蔵文化財調査報告 7集』2009 添田町教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | 9.2 | 7.0 | 1.2 | 外面底縁:板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | 8.8 | 7.7 | 1.1 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | — | — | | | | | | |
| 志波桑/本遺跡 | 7号土壇墓 | 白磁碗 | ① V-4a 破片: V-4a 4cm幅か | P92 第83図 3、P93 第85図 33 | 小皿 | 18 | ① | — | — | 1.1 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | 12C中頃～13C前半 | P92 第83図 4 ～27, P93 第84図 28～32 | 『志波桑/本遺跡 九州横断自動車道開通関係埋蔵文化財調査報告 45』上巻 1997 福岡県教育委員会 | | | |
| | | | | | | | ② | — | — | 1.0 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ③ | — | — | 1.1 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ④ | — | — | 1.5 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑤ | — | — | 1.2 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑥ | — | — | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑦ | 9.1 | 6.8 | 1.2 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑧ | 8.6 | 6.3 | 1.3 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑨ | — | — | 0.9 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑩ | 8.5 | 6.8 | 1.3 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑪ | — | — | 1.1 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑫ | 8.8 | 7.4 | 1.2 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑬ | — | — | 6.4 | 1.2 | | | | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | |
| | | | | | | | ⑭ | — | — | 1.1 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑮ | — | — | 0.9 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑯ | 8.6 | 6.0 | 1.0 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑰ | — | — | 1.3 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | |
| | | | | | | | ⑱ | — | — | 0.8 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | |
| ⑳ | 15.0 | 8.2 | 3.9 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉑ | 14.0 | 8.9 | 3.2 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉒ | — | — | 2.4 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉓ | 15.2 | 10.0 | 3.9 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉔ | — | — | 2.7 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉕ | — | — | 8.8 | 3.9 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | |
| ㉖ | 15.1 | 9.7 | 2.7 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉗ | — | — | 7.7 | 3.9 | 内面:ナナ | | | | | | | | | | | | |
| ㉘ | 15.4 | 9.7 | 3.6 | 外面底縁:糸切、板状圧痕、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | | |
| ㉙ | — | — | — | 3.2 | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | |
| ㉚ | — | — | — | — | 外面底縁:糸切、内面:ナナ | | | | | | | | | | | | |

| 遺跡 | 遺構 | 貿易陶磁器 | 員数 | 陶磁器の編年(註1) (標識、或いは準標識磁器) | 報告書実測図 頁・番号 | 土師器 | 員数 | 土師器の寸法(cm) (1)土師器の寸法は運動しない | | 土師器の備考 | 平均値 (小数点2位四捨五入) | | 土師器の編年(註2) | 報告書実測図 頁・番号 | 掲載書 |
|---------|--------------|-------------|----|---|-------------------|-----|----|-------------------------------|-----|---------------|--------------------|-----|-----------------------|------------------------|--|
| | | | | | | | | 口径 | 底径 | | 口径 | 底径 | | | |
| 西島遺跡 | 1号木棺墓 | 白磁碗 | 1 | V-4a 12C中頃～ 後半 | P38 第37図 9 | 小皿 | 8 | ① 8.4 | 6.3 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 9.0 | 1.0 | 12C中頃～ 13C初頃前 後 | P38 第37図 1～8 | 『三田地区遺跡群3 小都市文化財調査報告書 第1集』1994 小都市教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.8 | 6.6 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 船越宮ノ前遺跡 | 3号土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 2 | ① I-4a ② I-2b 12C中頃～ 後半 | P68 第145図 1、2 | 小皿 | 5 | ① 9.3 | 7.6 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.8 | 1.3 | 12C中頃～ 13C前半 | P68 第145図 3～7 | 『船越宮ノ前遺跡Ⅱ 田主丸町文化財調査報告書 第1集』1999 田主丸町教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 9.1 | 8.3 | 内面:ナリ | | | | | |
| 本郷流川遺跡 | 2号土坑 (註4) | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-2b 12C中頃～ 後半 | P18 第10図 16 | 小皿 | 4 | ① 8.0 | 6.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.8 | 1.0 | 12C中頃～ 13C前半 | P18 第10図 12～14 | 『本郷流川遺跡 福岡県文化財調査報告書 第16集』2001 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.7 | 6.8 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 田原遺跡 | 火葬墓 | 白磁碗 | 1 | V-4b 12C中頃～ 後半 | P205 第239図 774 | 小皿 | 2 | ① 8.1 | 5.8 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.6 | 1.4 | 12C中頃～ 13C中頃 | P205 第239 図 772、773 | 『田原遺跡 川崎町文化財調査報告書 第15集』2015 川崎町教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 9.0 | 7.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 柏木宮ノ元遺跡 | 2号土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-2a 12C中頃～ 後半 | P98 第354図 3 | 小皿 | 2 | ① 9.0 | 6.8 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 9.0 | 1.0 | 12C中頃～ 13C中頃 | P98 第354図 4、5 | 『宮ノ元遺跡・柏木宮ノ元遺跡 京前町文化財調査報告書 第17集』下巻 2014 京前町教育委員会 |
| | | | | | | | | ② — | — | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 仁右衛門畑遺跡 | 9号墓 | 白磁皿 | 1 | IV-2か 11C後半～ 12C前半か (ただし、 12C後半ま で一定量を 占める) | P207 第192図 16 | 小皿 | 14 | ① 9.2 | 7.4 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 17.0 | 3.1 | 12C後半～ 13C初頃前 後 | P207 第192図 1～15 | 『仁右衛門畑Ⅰ 一般国道210号浮羽八ノ入関係遺跡文化財調査報告書 第12集』2000 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 9.2 | 8.4 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 祇園山第2号墳 | 土壇墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-2b 12C中頃～ 後半 | P151 Fig.102 5 | 小皿 | 4 | ① 8.5 | 7.8 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.5 | 1.2 | 13C初頃前 後～前半 | P151 Fig.102 1～4 | 『九州歴史資料館福岡県埋蔵文化財調査報告書 XXV集』1979 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② — | 7.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |

| 遺跡 | 遺構 | 貿易陶磁器 | 員数 | 陶磁器の編年(註1) (標識、或いは準標識磁器) | 報告書実測図 頁・番号 | 土師器 | 員数 | 土師器の寸法(cm) (1)土師器の寸法は運動しない | | 土師器の備考 | 平均値 (小数点2位四捨五入) | | 土師器の編年(註2) | 報告書実測図 頁・番号 | 掲載書 |
|---------|-----------------|-------------|----|--|---------------------|-----|----|-------------------------------|-----|-----------------|--------------------|-----|-----------------------|---------------------|--|
| | | | | | | | | 口径 | 底径 | | 口径 | 底径 | | | |
| 本郷流川遺跡 | 5号土坑 (註4) | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-4a 12C中頃～ 後半 | P21 第12図 5 | 小皿 | 3 | ① 8.7 | 7.2 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.6 | 1.2 | 13C初頃前 後～前半 | P21 第12図 2～4 | 『本郷流川遺跡 福岡県文化財調査報告書 第16集』2001 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.2 | 6.5 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 下高橋上野遺跡 | 1号土壇墓 (SR-1) | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-4a 12C中頃～ 後半 | P10 第17図 41 | 小皿 | 4 | ① 8.6 | 7.2 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.4 | 1.3 | 13C前半 | P10 第17図 37～40 | 『遺跡下高橋上野遺跡周辺遺跡群40集』2007 大分県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.2 | 7.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 大原龍頭遺跡 | 1号土壇墓 (屋敷墓か) | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | I-2a 12C中頃～ 後半 | P6 第6図 1 | 小皿 | 4 | ① 8.8 | 7.2 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.4 | 1.3 | 13C前半 | P6 第6図 2～5 | 『大原龍頭遺跡6 小都市文化財調査報告書 第16集』2004 福岡県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 7.8 | 6.5 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 大板井遺跡 | 1号中世墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 2 | ① II-b ② II-b 13C初頃前 後～前半 | P83 第64図 5、6 | 小皿 | 4 | ① 8.7 | 7.7 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 9.0 | 1.1 | 12C中頃～ 13C初頃前 後 | P83 第64図 1～4 | 『大板井遺跡Ⅷ 小都市文化財調査報告書 第176集』2003 小都市教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.9 | 8.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 久間遺跡 | 2号土壇墓 | 青磁碗片 | 2 | ① II-aか ② 破片のため 判別不可 13C初頃前 後 | P172 第143図 6、7 | 小皿 | 3 | ① 8.8 | 7.5 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.9 | 1.4 | 12C中頃～ 13C初頃前 後 | P172 第143図 1～4 | 『久間遺跡Ⅲ 宝楽遺跡・上林古墳 京前町文化財調査報告書 第15集』上巻 2012 京前町教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.5 | 7.0 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 八ツ並金丸遺跡 | 土坑墓 (SP5047) | 龍泉窯系 青磁碗 | 2 | ① II-c ② II-c 13C中頃～ 14C初頃前 後 | P215 図3-162 9、10 | 小皿 | 7 | ① 9.0 | 7.7 | 外面底部:板状圧痕、内面:ナリ | 9.1 | 1.3 | 12C中頃～ 13C初頃前 後 | P215 図3-162 2～8 | 『八ツ並金丸遺跡3 佐賀県文化財調査報告書 第155集』2003 佐賀県教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.8 | 7.2 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 津古・空前遺跡 | 方形周溝墓 | 龍泉窯系 青磁碗 | 1 | II-a 13C初頃前 後～前半 | P67 第51図 8 | 小皿 | 6 | ① 8.4 | 6.6 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 8.7 | 1.4 | 12C中頃～ 13C前半 | P67 第51図 1～7 | 『津古・空前遺跡 小都市文化財調査報告書 第53集』1999 小都市教育委員会 |
| | | | | | | | | ② 8.7 | 5.7 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |
| 山下遺跡 | 土壇墓 (ST11) | 龍泉窯系 青磁碗 | 3 | ① I-1 ② II ③ II-c 12C中頃～ 後半 13C初頃前 後～前半 13C中頃～ 14C初頃前 後 | P22 第19図 137～139 | 小皿 | 4 | ① 13.6 | 8.4 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | 13.6 | 2.9 | 13C初頃前 後～前半 | P22 第19図 133～136 | 『久留米市埋蔵文化財調査報告書 XXIX 久留米市文化財調査報告書 第42集』2019 久留米市文化財部文化財保護課 |
| | | | | | | | | ② 9.0 | 7.9 | 外面底部:糸切、内面:ナリ | | | | | |

| 遺跡 | 遺構 | 遺物 | 貿易陶磁器 | 員数 | 陶磁器の編年(注1) | | 報告書表測図頁・番号 | 土師器 | 員数 | 土師器の法量(cm) | | | 土師器の備考 | | | 平均値(小數点2位四捨五入) | 器高 | 型式 | 土師器の編年(注2) | | 報告書表測図頁・番号 | 掲載書 |
|--------|-------------|---------|-------|---------------|------------|----------------|---------------|-----|-----|------------|-----|-----|--|--|-----|----------------|-----|----------|------------|---------------------|---|-----|
| | | | | | 分類 | 種類、或いは標準磁器 | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 口径 | 底径 | 器高 | | | | 13Cの編年 | 14Cの編年 | | |
| 柚比本村遺跡 | 土坑墓(SP4002) | 龍泉窯系青磁碗 | 1 | 1 | II-c | 13C中頃～14C初頭前 | P146 図5-104 5 | 小皿 | 4 | ① | 9.0 | 7.8 | 1.1 | 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 | 8.8 | 7.4 | 1.1 | XVI～XVII | 13C初頭前後～前半 | P146 図5-104 1～4 | 『柚比遺跡群2 佐賀県文化財調査報告書 第159集』2003 佐賀県教育委員会 | |
| | | | | | | ② | | | | 8.8 | 7.5 | 1.1 | ③ | | | | | | | | | 8.6 |
| 大園遺跡 | 2号土坑墓 | 白磁皿 | 3 | Ⅳ-1' Ⅴ-1' Ⅵ-3 | 13C | P23 第20図 23～28 | 小皿 | 4 | ① | 8.8 | 6.9 | 1.2 | 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 | | 8.4 | 7.3 | 1.2 | XVII | 13C中頃 | P23 第20図 8～11、15～19 | 『大園遺跡 夜須町文化財調査報告書 第14集』1989 夜須町教育委員会 | |
| | | | | | ② | | | | 8.5 | 7.6 | 1.2 | ③ | | | | | | | | | | — |
| | | | | | ④ | | | | — | — | — | ① | | 12.1 | — | 2.8 | — | — | — | 12.1 | — | 2.7 |
| ⑤ | — | — | — | ② | — | — | 2.7 | — | — | — | | | | | | | | | | | | |
| 大園遺跡 | 2号土坑墓 | 龍泉窯系青磁碗 | 2 | IIか | 13C初頭前 | P23 第20図 23～28 | 杯 | 5 | ③ | — | — | 3.1 | 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 外面底部:糸切、板状圧痕、内面:ナ子 | — | — | — | — | — | — | — | — | |
| | | | | | ④ | | | | — | — | 2.3 | — | | | | | | | | | | — |
| | | | | | 判断不可 | | | | | ⑤ | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | |



対象地域周辺地図

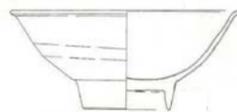
※国土地理院の地図を基に作成



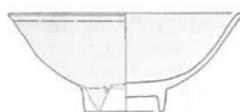
遺跡の位置図

土師器の編年と年代差のある貿易陶磁器 (縮尺不統一)

白磁碗 V-2 類



宝楽遺跡
2号土墳墓



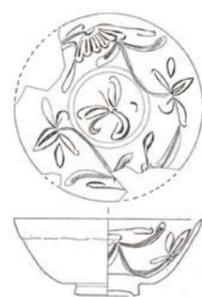
津古東宮原遺跡
1号土墳墓

白磁皿 III 類か

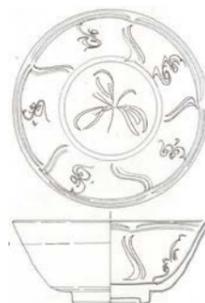


池田遺跡
1号木棺墓

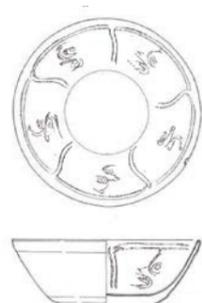
龍泉窯系青磁碗 I 類



祇園山第2号墳
土墳墓



本郷流川遺跡
5号土坑

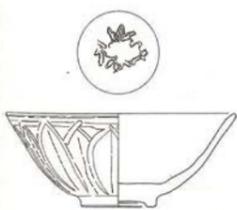


下高橋上野遺跡
SR-1

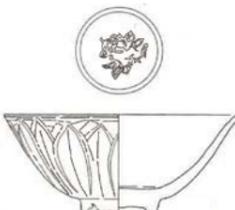


大保龍頭遺跡
1号土墳墓

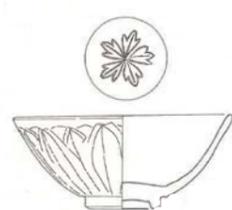
龍泉窯系青磁碗 II-c 類



八ツ並金丸遺跡
SP5047



山下遺跡
ST11



柚比本村遺跡
SP4002

第8章

基肄城跡と水門

主税 英徳

はじめに

基肄城といえば、水門。一度、基肄城跡の水門を訪れたことのある方ならば、このように答える方も少なくないだろう。実際、基肄城跡訪問記念に撮られた、昭和初期を含む写真類を見ても、水門の前で撮られたものが多いことに気付く。このことから、かつてより、水門が基肄城跡において、訪問者にとっても印象的なものであるといえ、基肄城を象徴する遺構であることがいえよう。今でも、水門の前に立つと、古代の技術の高さに圧巻される。水門は、基肄城が築造された当時、最新の土木技術を駆使し、石塁を築くとともに、その中間に排水機能をもつように、石積の空間である水門をつくった。

平成24年度には、水門石垣保存修理工事における石垣解体時に、新たに3つの通水溝が発見された。これにより、基肄城跡の水門石垣は、計4つの排水施設をもっていたことが明らかになった。同石垣のなかで基肄城のほどの複数の排水施設をもつものは、日本の古代山城においては、現在のところ類を見ない。

本稿では、基肄城跡の最新の状況とともに、水門と通水溝に関する構造の概要を紹介し、その機能に関する若干の検討を試みることにしたい。

1. 基肄城跡について

基肄城は、日本書紀による天智4(665)年に大野城とともに、基山¹⁾に築造された朝鮮式山城である。その立地からみて、大宰府の南の守りとして位置づけられることが多い(写真1)。

基肄城跡の城内には、水門跡をはじめとして、土塁や礎石建物跡、つつみ跡、推定を含み4つの門跡(南門跡、東南門跡、東北門跡、北帝門跡)などがある(図1)。城周は、全長約3.9kmにも及び、大部分が土塁であるが、谷部には城内に流れる谷水を流すため石塁が築かれている。礎石建物跡は、これまでの調査により、約40棟が確認されている。城内の平場上の地形に立地することが多く、地形からみると、礎石建物跡はさらに発見される可能性が考えられる。5×3間の礎石建物跡が大部分を占めるなか、その約2倍の大きさを誇る通称「大礎石群」という礎石建物跡が基山山頂から少し下った平場に立地している(写真2)。

このように比較的良好な状態で遺構が保全されていたことなどから、昭和12年(1937)に史跡に、昭和



写真1 大野城跡からみた基肄城跡
(写真中央下部に大宰府跡、中央上部の最も高い山が基肄城跡のある基山(きざん))

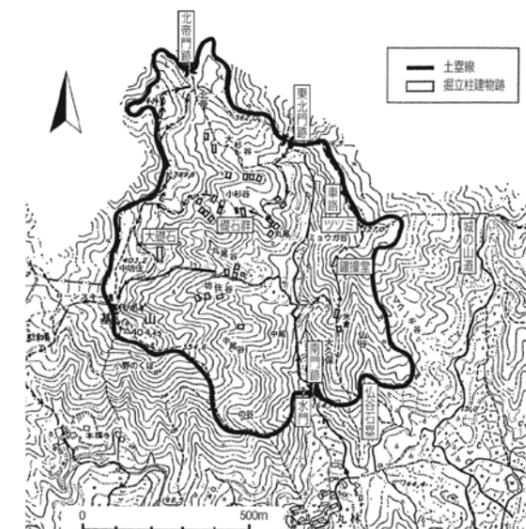


図1 基肄城跡の遺構分布図
(基山町2009より転載)

29年（1954）に佐賀県ではじめて特別史跡に指定された。史跡指定にまで至る背景には、基肄城跡を守ってきた地元の人々や、基山町出身で基肄城跡に関する多くの調査や研究をなされた久保山善映氏など、多くの方々のご尽力があった。史跡指定を願い、基肄城跡を周知化するために、多くの寄附によってつくられた建造物群が現在でも基山山頂付近に残っている。昭和8年（1933）建造の天智天皇欽仰之碑（写真3）や通天洞、展望所跡である。史跡指定までの歩みやその後の調査、さらには基肄城跡を取り巻く文化遺産などについては、中島恒次郎氏らによってまとめられているので、詳細はそちらを参照されたい（中島・主税2018）。

近年においては、平成30年7月豪雨により、城内中央付近の谷部において、大規模な土砂崩れが発生し、基肄城跡に大きなダメージを与えた（写真4）。幸いにも直接的な遺構への影響はなかった。現在、大規模な土砂崩れがおきた谷部には、防災機能向上のために、佐賀県よる治山ダム設置の工事が実施されている。文化財面の災害復旧工事としては、基山山頂部や水門跡周辺、管理道路の法面などについて、文化庁・佐賀県の補助を受けながら、災害復旧工事を実施している状況である²⁾。

一方で、吉報もあり、令和2年（2020）には、日本遺産「古代日本の『西の都』～東アジアとの交流拠点～」が拡充認定されたことにより、基肄城跡も日本遺産に認定された。

2. 基肄城跡の水門について

次に、基肄城跡を象徴する遺構の一つである「水門」と、石垣保存修理工事の際に新たに発見された「通水溝」について、詳しく見てみることにする。通水溝の内容については、最近刊行された基肄城跡水門石垣保存修理事業の報告書（基山町教育委員会2020）を参考にした。

(1) 水門

上記したように、基肄城跡の城壁は、土塁によって構成されており、これらは尾根沿いに立地することが多い。一方で、谷部においては、石塁で築かれ、水門は、基肄城跡の南端部付近に位置している。基肄城跡が北から南に傾斜する地形をなしていることから、城内の谷水のほとんどが南方向へ流れていき、この地点に集水される。よって、城外へと水を流す必要があり、石塁のなかに水門を築造したと考えられる。

現在の水門は、城内の谷水が集まって形成された住吉川（筒川）に隣接して位置している（図2）。水門築造当時、この川の全ての水が水門を通っていたかは、わからない。長さ約26m、高さ約8mの残存



写真2 昭和初期頃の大礎石群
(基山町2011より転載)



写真3 基山山頂にそびえる天智天皇欽仰之碑



写真4 基肄城内中央部の土砂崩れ
(撮影協力：九州大学考古学研究室・九州大学アジア埋蔵文化財センター)

している石塁の東側下部に水門が築かれている。本石塁の西側は土塁に接続し、東側は現在町道が通っており、土塁との接続が確認できないが、立地からみてこの空間に「南門跡」があった可能性が指摘されている。

水門の規模は、天井部の長さ約9.5m、排水口の高さ約1.4m、幅約1mであり、床面は約7度の傾斜で外側を下る。構造は、自然石を両壁に平積みにし、天井と床面には横長石を一枚ずつ敷き並べている（図3）（基山町2009）。規模からみると、国内の古代山城の水門として最大級であるといわれている。

本来、水門のなかには、隣接する住吉川（筒川）から分岐した水が流れていた（写真5）。しかし、平

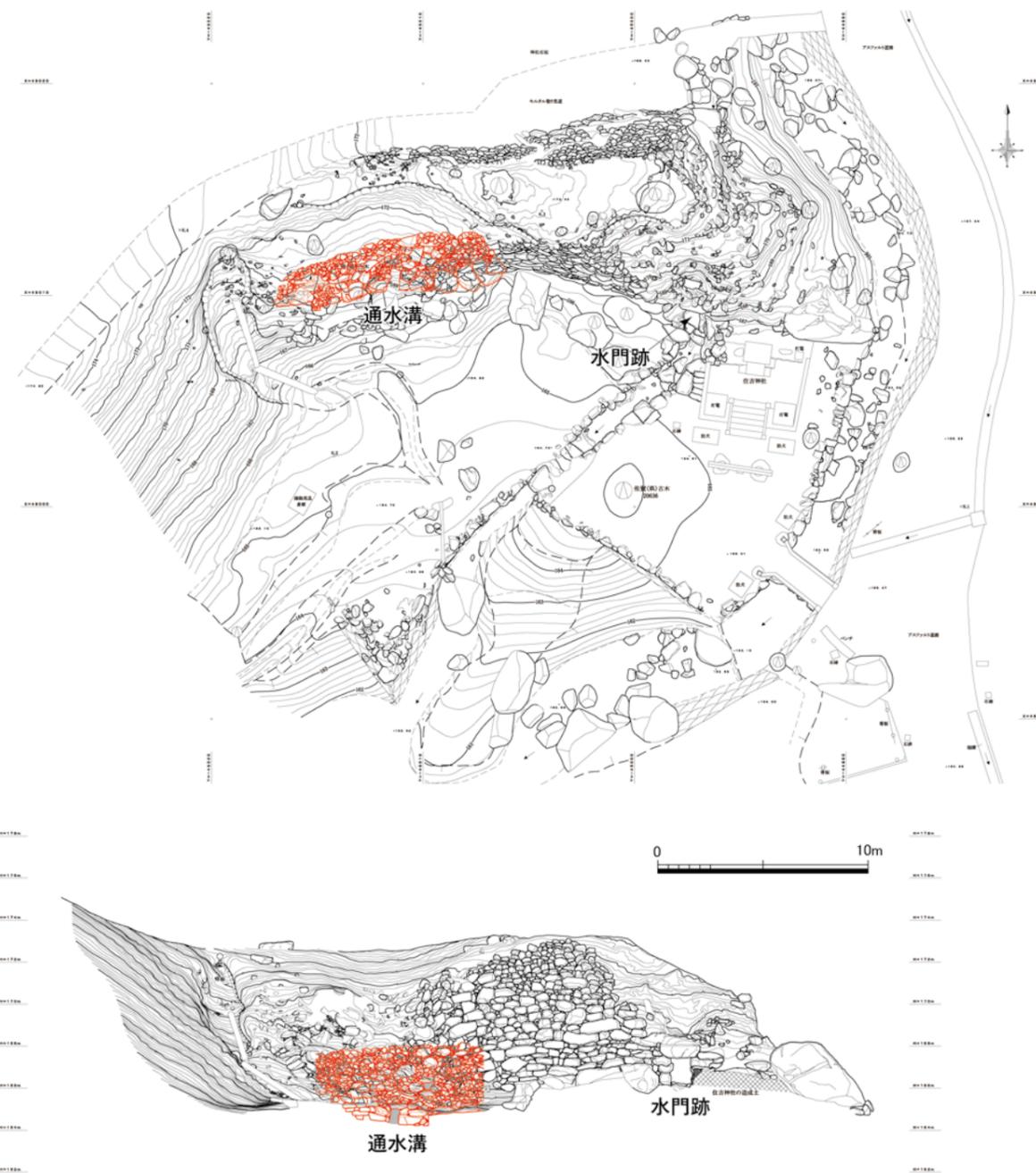


図2 基肄城跡の水門・通水溝 1～3 平面・立面図 (1/300)
(基山町教育委員会2020より一部改変・転載)

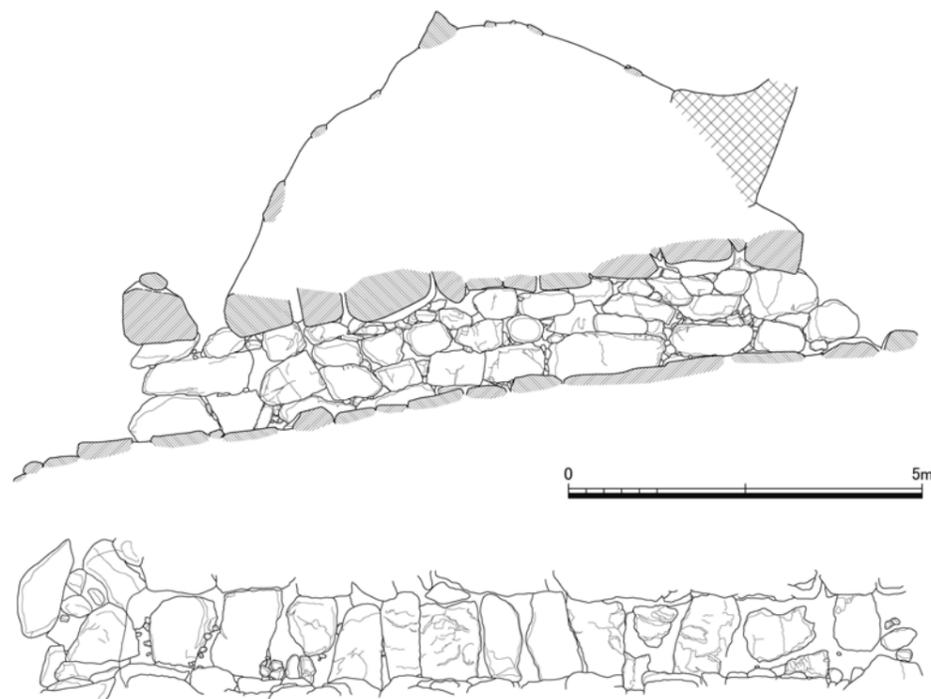


図3 基肄城跡の水門 側壁・床面見通し図 (1/100)
(基山町教育委員会2011より一部改変・転載)

成30年7月豪雨により、隣接する住吉川の河床や護岸などに大きな被害があり、現在、流れる水を見ることができない。今後、上流部に施工されている治山ダムが全て竣工した後、住吉川（筒川）に流れる水量の安定がみられた際に、再び水門のなかに水を通すか検討する必要がある。

(2) 新たに見つかった通水溝

水門がある石垣は、経年による谷水や樹木などの影響を受け、積石の歪みや崩落などが徐々に進んでいる状況であった。そこで、文化庁と佐賀県の補助を受け、平成21年度から平成27年度まで、水門石垣保存修理事業として、石垣の積み直しや土塁の修理、水門前広場の整備など実施した（写真6）。

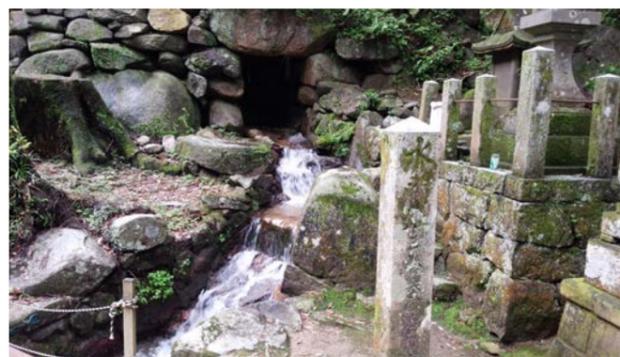


写真5 水門を流れる水 (2015年撮影)

本事業の過程において、平成24年度の石垣崩壊部解体中の際に新たに3つの通水溝が発見された（写真7）。発見された排水口の部分は、本来あった排水口の位置より2～3石後方にあたる箇所のもので推測される。石垣に向かって、便宜上、右上を「通水溝1」、左上を「通水溝2」、中央下部を「通水溝3」と称する。

各規模について、通水溝1は幅約0.5m×高さ0.4～0.5m、通水溝2は幅約0.5m×高さ0.2～0.4m、通水溝3は幅約0.5～高さ約0.75mである（図4）³⁾。奥行きは、通水溝1～3いずれも7m程度は確認でき、最奥の地点は石などでふさがっている。構造は、「水門」と同じようなつくりをしている。両壁は自然石を平積み、通水溝1と2の天井と床面は、横長石を1枚ずつ敷き並べているに対して、通水溝3の天井は同様のつくりをなすが、床面には敷いた石を確認できず、地山に直接両壁を設けた可能性がある。

通水溝1～3を比べると、通水溝3がやや大きく、位置も通水溝1・2に比べると約1.5m低い地点に設けられている。

新たに3つの通水溝が発見されたことにより、基肄城水門跡は同じ石塁に、水門も含め、計4つの排水施設をもっていたことになる。国内において、同石塁に複数の排水施設を確認できる古代山城は確認できるが、4つももつものは他に類を見ず、基肄城の新たな特徴といえる。

3. 基肄城跡水門の位置づけ

次に、基肄城の水門および新たに発見された通水溝について、規模や機能などに関する検討を試みる。検討にあたっては、拙稿（主税2018）の研究成果を参考にしながら、日韓の古代山城との比較を行い、類似点や差異点などを把握することにより、基肄城跡の水門と通水溝の特徴について位置づけたい。

(1) 日韓の古代山城からみた基肄城跡の水門と通水溝の規模

基肄城の水門と3つの通水溝について、日韓の古代山城をも対象として、排水口の規模についての比較を行う。なお、計測値が未記載のものは、図面より計測を行い、天井石に傾きがあったり、左右で高さが異なったり、形状が台形のものなどは最大値を採用した。対象資料数は、日本の古代山城計26箇所、韓国の古代山城計21箇所、計47箇所である。

結果は、図5のようになる。日韓の古代山城の排水口の規模は、様々なバリエーションがありそうである。そのようななか、基肄城の水門の規模は、日本の古代山城のなかで最大級といわれていたが、現在のところ、日韓においても群を抜いて、最大の規模を誇る水門であることがわかった。一方、通水溝1～3について、通水溝3はやや大きい部類に入りそうであるが、通水溝1・2は、古代山城では平均的な値を示しており、一般的な大きさであるといえそうである。

(2) 基肄城跡の水門・通水溝に関する排水口の高さと立地について

亀田氏によって、排水口の高さを対象とした分類が行われている（亀田1995、2002）。この亀田氏の研究成果を参考にしながら、日本の古代山城計33箇所、韓国の古代山城計21箇所、計54箇所を対象に、分類を行った結果、排水口の高さは、大きく以下の3つに分類できる。

A類：石垣の最下部にあるもの

※地面や地山に直接、あるいは数段の石垣の上に構築

B類：石垣下部～中部



写真6 基肄城跡水門保存修理事業
工事着手前（上）と工事完了後（下）
(基山町教育委員会2020より転載)



写真7 新たに発見された通水溝1～3
(発見当時に撮影)

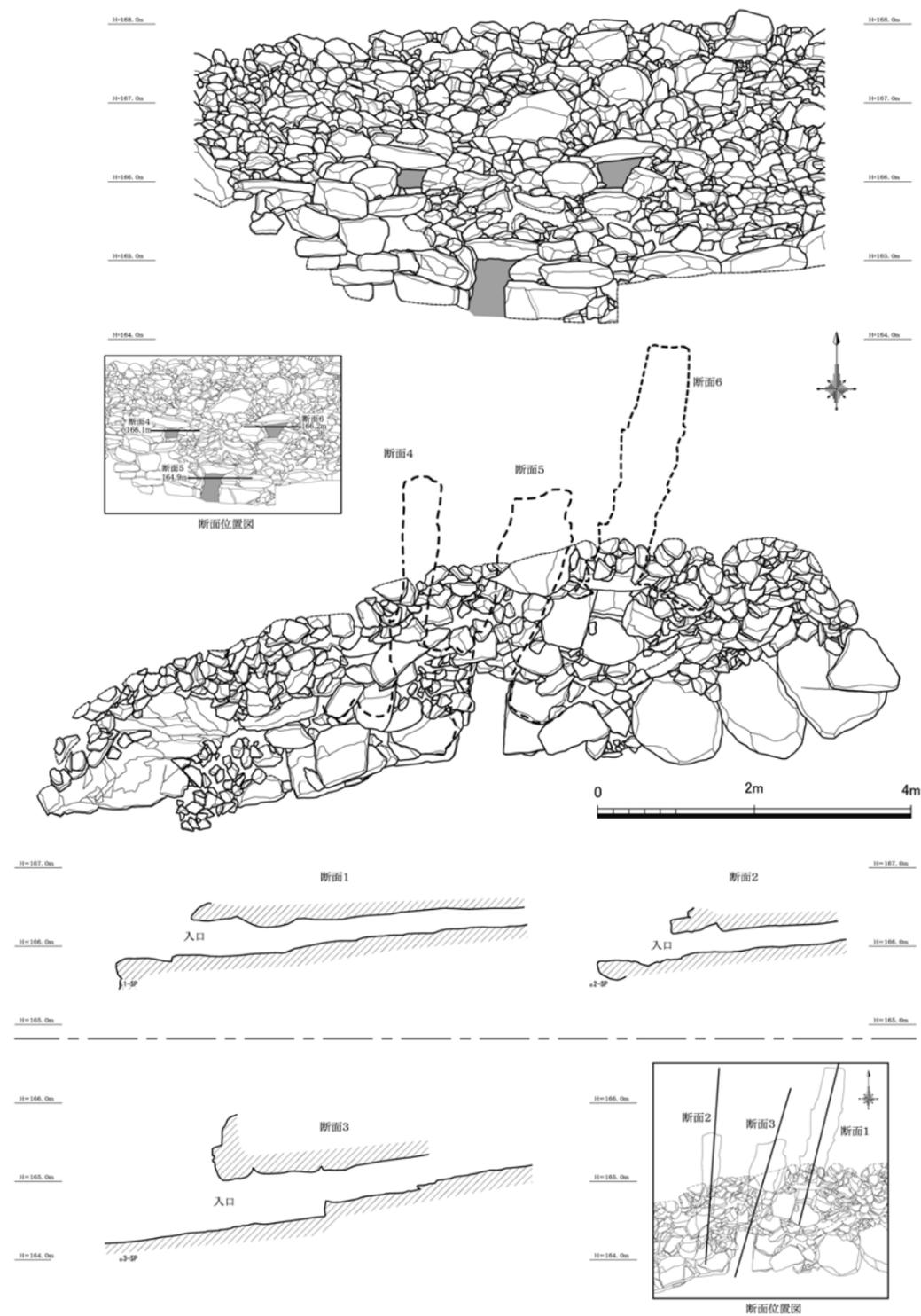


図4 基肄城跡の通水溝1～3 立面図・平面図・縦断面(1/80)
(基山町教育委員会2020より一部改変・転載)

C類：石垣上部～最上部

基肄城跡の場合、水門と通水溝3はA類、通水溝1・2はB類にあてはまる。日本の古代山城の全体でみた場合、A類は約76%、B類は約15%を占めている。

次に、排水口の高さとその立地との関係の傾向を探ることにより、排水施設の機能について検討を行う。

排水口が石垣の最下部にあるA類の場合、石垣が谷部に設置されることがほとんどである。これは、城内から流れてくる水を城外に流すため、もしくは、石垣構築の過程で排水するために設置したものと考えられる。

基肄城跡の水門も、谷部に設置されており、住吉川(筒川)の一部も流れていたことから、常時城内から流れてくる水を城外に排水するためのものとみて間違いはないと思われる。基肄城の通水溝3の場合は、水門よりもやや西側に位置しているが、溝の軸の方向は水門に近く、同様の機能を果たしていた可能性はある。ただし、水門と構造面で比較した場合、通水溝3は、床面に石を敷いておらず、水門ほどの排水機能を持ち合わせていた可能性は低いと考えられる。よって、通水溝3は、常時排水していたとしてもその水量に水門に比べると少ないものであった、もしくは、石垣構築の過程で、谷水を排水させるための機能をもっていたのではないかと推測する。

一方で、通水溝1・2が該当する、排水口が石垣下部から中部にあるB類の場合、日韓の古代山城でみると、谷部に設置されるもの、もしくは排水口の背部が貯水遺構であるものがある。現在、基肄城跡の通水溝1～3の背部には、築造時期が近代頃と思われる石垣と個人宅敷地があり、旧地形を把握することは難しく、貯水遺構の形跡を探ることが困難である。

(3) 基肄城跡の水門と通水溝の背部について—順天剣丹山城との比較—

先の分析を通して、基肄城跡の通水溝1・2がB類にあてはまり、その場合、背部が貯水遺構である可能性が出てきた。同石垣面に複数の排水施設をもつ韓国の古代山城のうち、排水口の位置が石垣下部から中部にある山城を見ると、石垣の背部が貯水池や井戸になっているのを見ることができる。あえて、排水口を石垣中部に配することにより、貯水の調整の役割

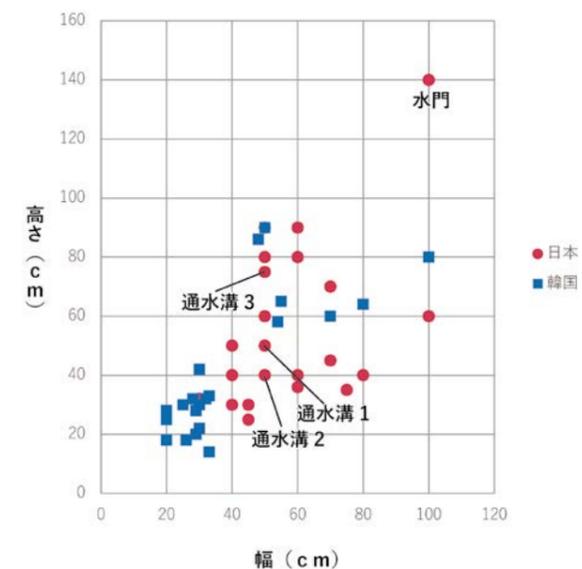


図5 日韓の古代山城 排水口の規模
(主税2018より一部改変・転載)

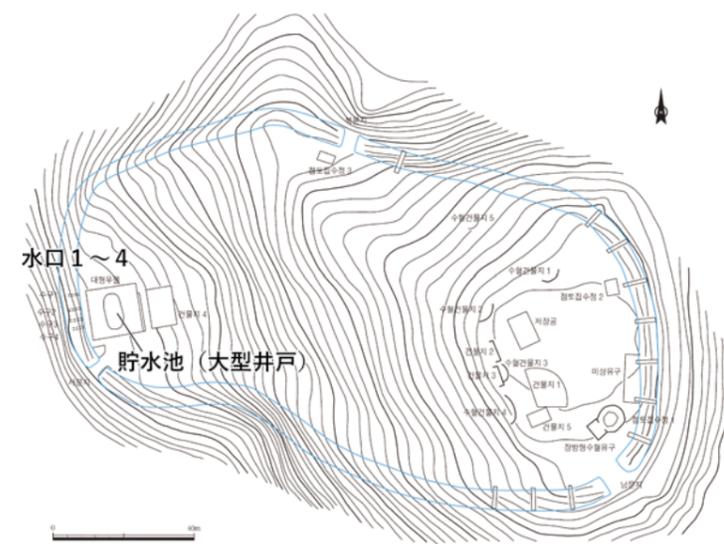


図6 順天剣丹山城 平面図(1/2000)
(順天大学校博物館2010より一部改変・転載)

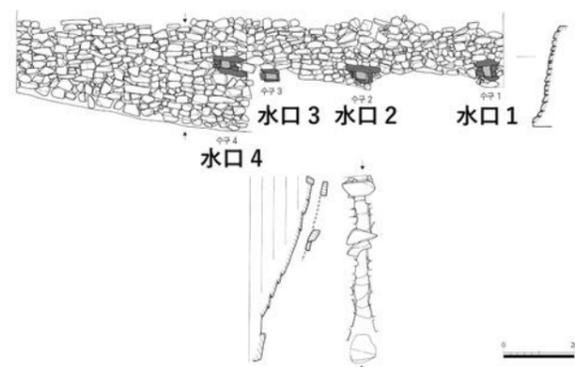


図7 順天剣丹山城水口1～4平面図、
および水口2平面・断面図(1/200)
(順天大学校博物館2010より一部改変・転載)



写真8 順天剣丹山城貯水池(大型井戸)
※奥の石垣に水口が見える
(順天大学校博物館2010より一部改変・転載)

を果たしていた可能性も考えられる(主税2018)。

よって、最後に、貯水遺構が背部にあり、同石垣面に4つの排水口をもつ韓国・順天剣丹山城と基肄城跡について比較を行い、背部構造に関する検討を行う。

順天剣丹山城は、韓国・全羅南道に順天市に位置する百濟時代の山城である。これまでの学術調査により、建物跡や南門跡、さらには貯水池(大型井戸)など発見されている(図6)。貯水池から城外へと排水溝が延び、水口1～4が設置されている(図7・写真8)。

順天剣丹山城と基肄城跡を比較した結果、同石垣面に4つの排水口をもつ、排水口の形状が方形という点では同じといえるが、それ以外の要素については異なる点が多い。

排水口の規模は、順天剣丹山城の方が小さい。幅・高さとも基肄城跡通水溝1・2の1/2程度である。また、通水溝の角度は、順天剣丹山城はかなり急であるが、基肄城跡の場合、水門・通水溝1～3ともに緩やかに傾斜している。

また、排水口の配置も異なる。順天剣丹山城は、排水口をおおよそ同じ高さに配置しているのに対して、基肄城の通水溝1～3は、通水溝1・2を石垣中位に、通水溝3を石垣最下部にと異なった高さに配している。このように、異なる高さに排水口を各々配置することは、排水量の調整、もしくは下の排水口が土砂に詰まった際に上の排水口から流す機能などが考えられる。

いずれにしろ、基肄城跡と順天剣丹山城を比較した結果、異なる点が多く、基肄城跡の背部構造を推察できる段階まで至らなかった。古代の人々は、山城ごとに、各々地形に合わせてながら、排水施設を築造していったのか。今後、日本だけではなく、韓国も視野に入れながら資料蓄積し、検討していきたい。

おわりに

本稿では、基肄城跡の水門と新たに発見された通水溝1～3について、その概要について紹介を行った。その上で、拙稿(主税2018)での検討資料を基に、日韓の古代山城との比較を試みた。結果、基肄城跡の水門の規模は、現状の日韓の古代山城では、最大であることがわかった。また、排水施設が配置された位置より、背部に貯水遺構がある可能性を指摘した。その後、同石垣面に複数の排水施設をもつ韓国・順天剣丹山城との比較を試みたが、異なる点が多く、背部構造を推察できるまでは至らなかった。

古代山城を考古学的視点から検討するにあたり、「水」は重要な要素の一つである。古代山城を運営・維持する上で、貯めることで、生活用水や防火用水などに活用でき、その一方で、排水することで、城の維持につながる。このような行為を表す遺構の一つが排水施設、すなわち、水門や通水溝などである。

今後も上記のような視点に立ちながら、城の構造を明らかにすることで、そこに生きた人々の行為や

知恵などを少しでも明らかにできればと思う。

註

- 1) 基山と書いて、一般的に山を指す場合は「きざん」と呼び、町(街)を指す場合は「きやま」と呼ぶことが多い。
- 2) 現在、これらの復旧工事により、工事車両の通行等もあり、来訪者の安全を確保するため、基肄城内の所々に通行制限がある。今後、復旧工事が完了した地点から随時通行を可能にしていく予定である。来訪される際は、事前に基山町のホームページ等で確認していただきたい。
- 3) 基肄城跡水門石垣保存修理事業の報告書の編集は筆者が担当したが、通水溝に関する図面において誤りがあった。61・62頁における第23・24図の縮尺は、1/40と記載していたが、実際は1/80である。この場を借りて、お詫び申し上げる。

参考文献

- 亀田修一1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3
 亀田修一2002「朝鮮半島古代山城の見方」『韓半島考古学論叢』
 基山町2009『基山町史』上巻
 基山町2011『基山町史』資料編
 基山町教育委員会2020『特別史跡基肄(椽)城跡-平成21～27年度水門石垣保存修理事業報告書』基山町文化財調査報告書第34集
 順天大学博物館2010『順天 剣丹山城II』(韓国語)
 主税英徳2018「日韓古代山城の水門構造からみた鞠智城」『鞠智城と古代社会』第7号 熊本県教育委員会
 中島恒次郎・主税英徳2018「特別史跡 基肄城跡考」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会 編集 高志書院

基肄城の眼下では、大宰府から基山東麓を抜ける「城の山道」が南北に縦貫する。この縦貫道が通過する谷筋を閉塞した土塁が、千塔山丘陵を挟んで連続する「関屋土塁」と「とうれぎ土塁」である。同地は後の筑後国府と肥前国府へと至る官道の分岐点に位置し、大宰府防衛の要所（関）の一つであったことがうかがえる。関としての役割は長期的に受け継がれたと見られ、「関屋」の地名を今日に残す。7世紀後半に築かれたと考えられる関屋・とうれぎ土塁は、後世の改変により断片的にしか残されておらず、その全体構造は未解明である。ただし、基底部の発掘調査で版築が確認されたことから、大宰府北方の水城や小水城と類似した土塁であった可能性が高い。仮に関屋土塁が谷筋全体を閉塞していた場合、同地点を南流する城戸川・関屋川の水流をどのように処置していたのだろうか。本課題は古代日本の防衛施設・土木技術の実態解明に直結する。

（小嶋 篤）



基肄城から眺めた関屋土塁・とうれぎ土塁（佐賀県基山町）



とうれぎ土塁の現状（佐賀県基山町）

第9章

山城で水をつかう—古代山城の水資源—

小澤 佳憲

山城においては、城内に水資源を確保することが、重要な課題であった。

ときは戦国時代末期、1584年のことである。大軍で九州を北上しつつあった島津軍に対峙した大友方の武将高橋紹運は、かつて古代山城大野城が作られた四王寺山の南麓に築いた中世山城、岩屋城に764名の将兵とともにたてこもって、後方の立花城を守る我が子統虎（のちの柳河藩初代藩主立花宗茂）や、宝満山城にて留守を預かる妻子らを守るため、総勢5万ともいわれる島津軍に対し2週間にわたって奮戦し、将兵に一人の脱走者を出すことなく全員討ち死にした（岩屋城の戦い）。紹運の奮戦により島津軍は大きな打撃を受け、その北進は大きく遅れることになり、結果的に豊臣秀吉の九州上陸と島津軍の撤退へとつながったとされる。

この戦いに関して、山城の水資源がいかに貴重であったかを物語る逸話が伝わっている。岩屋城を攻めあぐねた島津軍の将兵は、里の老婆に金を渡し、岩屋城の生活用水がどこから得られているかを探ろうとした。金に目がくらんだ老婆は水口を密告し、水場を押さえられた紹運らは継戦難く敗北した。のちに、紹運を慕っていた里の民らは、水口を案内した老婆をとらえて水場の近くに引き据え、上から石を詰めて生き埋めにした（石子詰め）という（石こづんばば、<https://dazaifu-bunka.or.jp/info/legend/detail/2>より）。なお、この水口とは、大野城跡太宰府口城門横にある水ノ手石垣を流れる小川のこと、また老婆を石子詰めにしたと伝わるのは太宰府口城門の西側袖石垣（図1、福岡県教育委員会1991）のことである。もちろんこれらは伝承であっておそらく真実ではないが、山城を守るうえでの水資源の確保の重要性をよく表現したものであり、これに類する伝承は各地の山城に伝わる。

韓国では近年、古代山城の発掘調査の中で、利・貯水施設に関するものが特に目を引く成果を上げつつある（朴2006、車2010など）。それらの多くは、山城内の水が集まりやすい谷部などに巨大な穴をうがち精緻な石築などにより穴の壁を保護して貯水部を構築する構造をもち、しばしばその壁面には、穴の底へと降りていく通路ともなる段構造が見られるなど、その構造にある程度の共通性があり、古代山城の研究において利・貯水施設の比較研究は一定の地位を得ようとしている。また、近年では慶北聞慶市姑母山城や忠南錦山郡栢嶺山城で木槨構造の貯水施設と考えられるものも発見され、今後の研究が期待されている。

一方、西日本の古代山城においては、調査事例が少ないこともあって、利・貯水施設についてはこれまであまり着目されてこなかった。城内に利・貯水施設が発見された、あるいはそれが想定される事例はいくつか指摘されているものの、その種類や形状、構造は共通性が薄く、また本格的な発掘調査が及んでいない事例



図1 発掘された太宰府口城門（城内側より、報告書より抜粋）右側の石積み「石こづんばば」伝承地、その右側谷部が水場

もほとんどないことから、城内の利・貯水施設に関する総合的な検討は進んでいないのが実情である。

古代山城が「城」である以上、城内に一定期間、一定人数の兵士などが駐屯できる環境を整えることは、その防衛機能からみて必須である。飲料水や生活用水がなければ兵士たちは城内での生活を維持することはできないからである。

城の施設を整え、維持するための水もまた必要である。古代山城の貯水池はしばしば「貯木場」として用いられたことが、韓国二聖山城や熊本県鞠智城跡などのいくつかの発掘調査成果より指摘されている。城内で用いる木材を、必要になるまでの間貯蔵し、またその間に木材の中に生息する害虫を殺し、木材のアクを抜くなどして利用しやすくするために、木材を水に漬ける行為は、古くより行われており、古代山城でもまたこうしたことが行われていた可能性が高い。

また、城は当然、戦いの舞台になる可能性を考慮して作られているはずであり、「防火用水」としての水資源を確保することも重要である。城内の木造諸施設、例えば城壁にあって出入口を守る城門や、兵士たちが日々暮らす兵舎、そして糧食を保管する米庫、武器を保管する兵庫（武器庫）などの諸施設は、戦いにおいては火矢の攻撃による炎上の危険にさらされることを想定する必要がある、城内の火災を鎮火するための環境や施設を整えることも、城の防衛機能の整備における重要な側面の一つであろう。このように、一口に山城の水の利用といっても実に様々な用途が想定されるのであり、それに応じて様々なタイプの利・貯水施設が作られたことは考えうる。

ここでは、韓国の山城における利・貯水施設の調査事例を参考にしながら、西日本の古代山城においてこれまで利・貯水施設の可能性があるものと指摘されているいくつかの数少ない事例を取り上げて、その概要を紹介するとともに、利・貯水の目的がどこにあり、そしてそれに応じてどのような場所どのような施設が作られたのかといった、列島古代山城の利・貯水施設にかかる諸問題について予察的に検討したい。

2. 利・貯水施設の実例

韓国古代山城の利・貯水施設

韓国では主に整備に先立つ古代山城の発掘調査例が年々増加しており、大規模な発掘調査によって城内に利・貯水施設が見つかる事例が蓄積されている。古くから知られる例としては忠南公州市公山城の貯水池（図2）が代表的であろう（公州大学博物館1987）。平面略円形で断面はすり鉢型、内面は全面石貼りの非常に精緻なつくりである。同じように平面が円形を呈する貯水施設はこれまでに、清州父母山城、巨済屯徳岐城、南海大局山城など多くの遺跡で出土している。

やはり石貼り構造ながら平面が（長）方形状を呈するものも多い。京畿河南市二聖山城（漢陽大学1987ほか）からは大小2基の貯水池が出土しておりいずれも平面形状が（長）方形の石貼り構造を持つ（図3）。忠州忠州山城から出土した貯水施設のうち一つは略正方形、またもう一つは上部構造が略円形、下部構造は略長方形の二重構造（図4）を呈する（忠

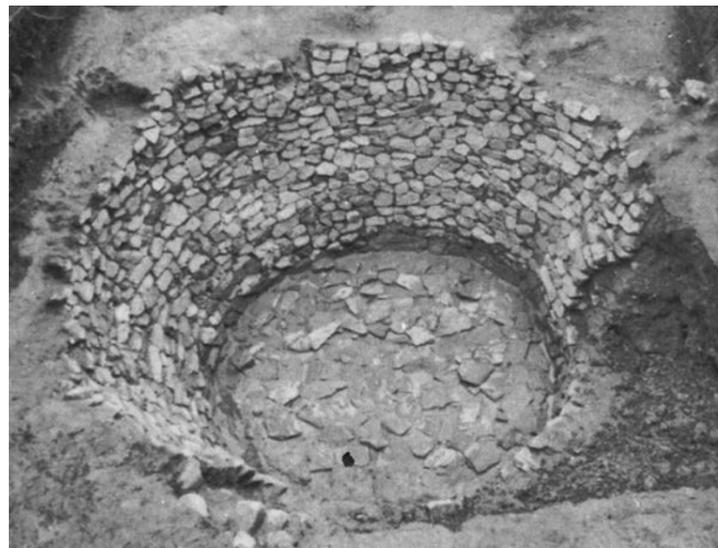


図2 公山城王宮址地区の貯水施設（報告書より、一部改変）

北大学校中原文化財研究所2005、韓国立中央文化財研究所2008）。陰城望夷山城や聞慶姑母山城からも略方形のやや小ぶりの貯水施設が出土している。いずれも石貼り構造の貯水施設である。また、全南光陽市馬老山城（順天大学校博物館2009）からは、同一地点に繰り返し、貯水施設が設置されており、平面が円形のものと同方形のものが見られる（図5）。

木槨構造の貯水池と推定される遺構も出土している。錦山栢嶺山城では地中に木槨を埋め込んだ遺構が出土している。木槨を構成する木材の隙間は粘土で目張りが施されていて、調査者によって貯水施設の可能性が指摘されている。聞慶姑母山城（中原文化財研究院2007）でも方形の貯水施設の近くからおそらくこれに先行するであろう木槨構造の地中式貯水施設とされるものが見つまっている（図6）。このほかさらに、不定形の貯水池として咸安城山山城の第2号貯水池なども知られる。

韓国の古代山城における利・貯水施設の多様性は、上記に紹介したごく一部の事例を見るだけでも十分に理解できるものと思う。これらの多様性の背景にはいくつかの要因が想定される。たとえば地域性や時代性、そしてまた立地や目的などがあげられよう。ここではそうした多様性の中からここでは利・貯水施設の城内における立地条件に着目したい。

利・貯水施設に期待される機能のひとつに「集水」があることは自明の理である。地下の湧水にしる、地上への降水にしる、城内の水を効率よく集めるためには、その立地が集水に適していることが必要である。この観点から古代山城の利・貯水施設についてその城内における立地条件を見ると、水源が湧水であれ表流



図3 二聖山城の貯水施設のうち大型のもの（報告書より）



図4 忠州山城の貯水施設のうち、上部が円形、下部が方形プランのもの（報告書より）



図5 馬老山城で集中的に検出された貯水施設群（報告書より）

水であれ、集水により適した谷部に配置されるものと、さほど適しているとは認めがたい城内の平坦地など比較的高所に配置されるものと大きく二分される傾向が認められる。前者の代表例として大田特別市鶏足山城例を、後者の代表例として忠南公州市公山城例を見てみよう。

鶏足山城跡の貯水施設（忠南大学校百済研究所2005）は、山頂部を一周するように築かれた石築の城壁が、谷地形を横断する箇所の内側に築かれた、長辺約25m、床面積115㎡の規模を持つ巨大な平面略長方形の石貼りの貯水施設である（図7）。付近はかなり険しい斜面に囲まれていて、城内建造物等が近くにあったとは想定しづらく、集水効率を最優先に立地が決められているものとみられる。規模の大きさや立地条件からみて、おそらくさまざまな目的のために城内で用いられる水の大半がこの貯水池によって賄われたものと考えられよう。

公山城の円形貯水施設（図2、公州大学校博物館1987）は、城内の高所にある平坦地（図8）に築かれた平面円形、断面すり鉢状の石貼りの貯水施設である。この平坦地は、百済の王都熊津が危急の際、王族が避難して生活する施設があったと想定され、「王宮址」と呼ばれている地区である。立地条件的には湧水や降雨時の集水が豊富に期待できる場所ではなく、貯水池を配するうえではそれほどいい地点とは思えない。集水能力をある程度犠牲にしても、貯まった水を使用するうえで利便性が高い位置に作られたものと考えられる¹⁾。

この両者は、立地条件が両極端であるが、それゆえに貯水池に期待される機能が推測しやすい。利・貯水施設の集水能力をある程度犠牲にしても、水が用いられる施設などの近くに設置する場合は、その水の使用目的が、近隣施設の使用目的に特化して、ある程度限



図6 姑母山城で検出された木柵構造の貯水施設（報告書より）



図7 鶏足山城で検出された大型の貯水施設（報告書より）



図8 公山城内貯水施設の位置（報告書より）

定的であったことが推測される。一方、谷部など集水力が大きな場所を選んで設置される利・貯水施設は、付近にほかの施設が見られない場合などは特に、城内で想定されるさまざまな水の用途に対応する総合的な機能が期待されたときとみなすべきであろう。本稿では、この視点を国内古代山城の利・貯水施設の分析に生かしたい。

西日本古代山城の利・貯水施設

国内古代山城における利・貯水施設のうち、発掘調査が行われた代表的な事例として、熊本県鞠智城跡（熊本県教育委員会2012）例が挙げられる（図9）。城の中央やや北東寄りの、城内でも最も幅の広い谷部を柵列で囲い、内部に段々畑のように堰を設けて水をためたと想定される施設で、その広さは少なくとも約5300㎡と、けた違いに大きい。この貯水池跡からは、木組みの水汲み場のほか、貯木場と推測される場所なども確認されており、多様な用途に用いられる目的で作られた施設であることが分かる。立地条件を見ると、建物群が集中している地点に隣接するが、城が広域なため距離としてはやや離れている。

鞠智城内ではほかにいくつかの谷地形に湧水点が認められるが、これらの湧水点からの自然湧出水量はそれほど多量ではない。よってこの貯水池は、自然湧水ももちろんではあるがむしろ城内への降雨を集水して貯める、「集水力優先」型の貯水池であったと考えられる。またそのほかの施設との位置関係から、特定の施設や場所に即して、すなわち特定の目的のために作られたというよりは、城内における日常用水、防火用水全般を賄う目的で作られた施設と理解する方が妥当であろう。

岡山県鬼ノ城跡（岡山県古代吉備文化財センター2013）からもやはり、発掘調査の成果より貯水施設と推測されている遺構がある。城壁線に作られた7つの水門石垣のうち、第3・第5水門石垣の置かれた谷部の上流に、谷を横断するように作られた「土手状遺構」が岡山県教育委員会の調査によって「貯水池」の一部と報告され（図10、報告者の想定する貯水範囲）、また第1水門石垣上流にも同様の構造による貯水池があると総社市教育委員会の調査によって報告された（総社市教育委員会2006）。これらはいずれも、城壁線が谷部を横断する部分に作られた水門石垣の上流にあたる谷部に、（人工的かどうかは未確定のものを含むが）谷を横断するようにある堰き止め状の地形の上流側を貯水池と認定したものである。実際、第3・5水門上流の堰き止め状地形は人工的な盛り土と石垣により構築されたものであることが発掘調査によって明らかになっていて、立地条件からもその目的が治水関係である可能性は高く、堰の上流側が現状で湿地帯となっていることなどからも、報告者がこれらを貯水池の一部と評価したのも理解できる。しかし筆者は、むしろ



図9 鞠智城跡の貯水池（報告書より）

ろこれらの施設は、いみじくも報告者がまた述べるように、水門石垣を土石流や洪水から守る堰堤として評価し、この遺構の下方、水門石垣までの間に当時形成されていたであろう谷地形を貯水池と認定したいと考えている²⁾。

鬼ノ城跡の水門石垣は、ほかの西日本古代山城の水門石垣と、その構造において大きく異なる点があることは以前より気にかかっていた。すなわち、石垣の中に作られた通水溝（多くは排水口のみ確認であるが）の高さ（図11）が、石垣の上位に位置するという点である。国内の他の古代山城水門石垣における通水溝はその大半が石垣の基底部または下半部に存在するとされ（主税2019）、鬼ノ城跡水門石垣の構造は特殊と評価できる。

排水口が石垣の上位にあるということは、その石垣が挟築式であれば、上流側にあたる取水口も同じく石垣の上位に位置することになる。実際現地でも周辺地形を確認すると、第3・第5水門は程度の差はあれ挟築式の城壁構造となっており、城内側の石垣のかなり高い部分に取水口が位置することになる。よって、この取水口が機能するためには、石垣の内側に、取水口の高さまで水が滞水することが必要となる。鬼ノ城跡の場合は特に、城自体が山頂部に作られているためそれぞれの谷の集水域は狭く、意図的に水をためない限り洪水時であっても取水口の位置まで水位が上がるがあったとは想定しがたい。すなわち、これらの水門石垣の取水口が機能するためには、その高さまで城内側に意図的に水を貯めることが前提となる。したがって、鬼ノ城跡の水門石垣は、城外に水を排出する「水門」としての機能とともに、その内側に水をためる「貯水施設」としての機能を併せ持っていたと考えるべきである。こう考えることによって、土手状遺構の下流側にあたる地山面などに施された貼石遺構などの機能が理解できる。

これをあとづけするためには、貼石などが確認されている土手状遺構の下流側から、水門石垣までの間の範囲をさらに調査するとともに、水門石垣が総石垣（福岡県教育委員会2010）であれば石のすき間から水が流れ出てしまうため、水門石垣の内部構造について検討を加えるなど、水門石垣地区全体にかかる総合的な検討が必要と考えられる。今後の調査研究が期待されることである。

以上のことからここでは、鬼ノ城跡の利・貯水施設については、報告書で指摘されている「土手状遺構」の上流側よりもむしろその下流側、土手状遺構と水門との間の谷部に貯水域を想定し、水門石垣が滞水堰と

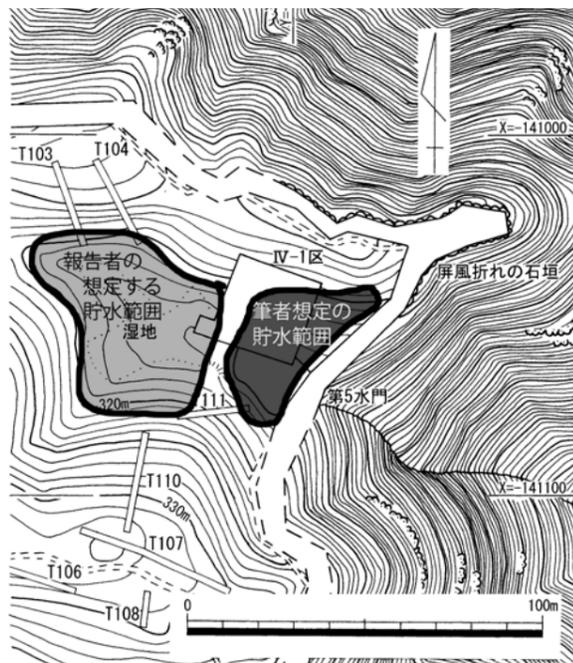


図10 鬼ノ城跡第5水門付近の谷地形と想定される貯水施設の位置（報告書より一部改変）

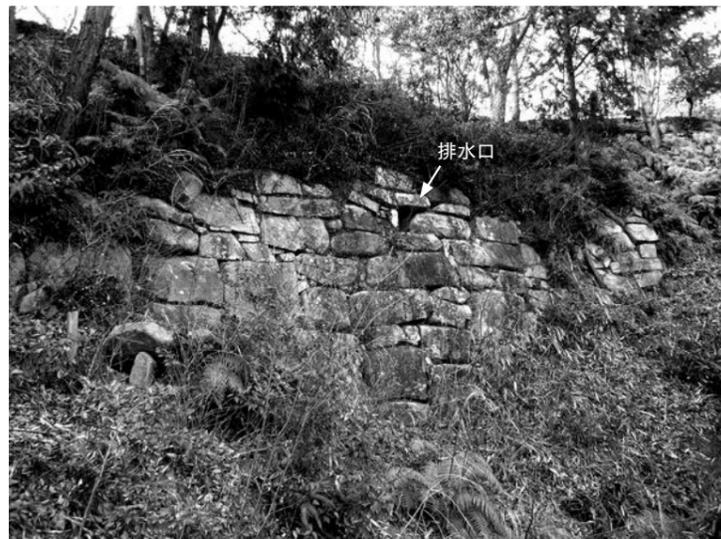


図11 鬼ノ城跡第5水門（筆者撮影）

して、土手状遺構は報告書の指摘のように貯水域を土石流などから保護する施設として評価するという試案を提示したい（図10、筆者想定貯水範囲）。

ただし、貯水域を土手状遺構の上位に想定するにしろ下位に想定するにしろ、利・貯水施設の城内における位置関係はそれほど大きく変わらない。門や建物など、水が多く使われるであろう場所からはやや離れた位置にある鬼ノ城跡の利・貯水施設もまた、鞠智城跡のそれと同様に、城内の施設との位置関係よりはむしろ集水機能を優先して設置された、すなわち、城内で賄う様々な用途の水を一括して確保するための施設とみられる。鬼ノ城跡の城郭構造がいわゆる「鉢巻式」であって、城内に流量豊富な谷を有しないという地形的条件によるところが大きいものとみたい。

さて次に、これらとは異なり、集水機能よりもその立地、そしてすなわちその立地を生かした特定の用途を重視したと思われる利・貯水施設の事例を見ていきたい。

福岡県大野城跡では、発掘調査こそ行われていないものの、城内の2ヶ所に利・貯水施設が知られる。「鏡ヶ池」と「けいさしの井戸」である。

鏡ヶ池は、大野城の城域南側、増長天礎石建物群地区にある、直径10mほどの規模の池である（図12）。増長天礎石建物群地区は、大野城跡の中でも最も高い個所にある礎石建物群地区である（福岡県教育委員会1978）。大野城の南側内周土塁の走る尾根状丘陵のすぐ内側を平坦に造成して4棟の建物群を配しており、その建物群に隣接する場所に鏡ヶ池がある。また、背後を走る城壁には1ヶ所に大きな切れ目があり、城門推定地の一つとなっている（福岡県教育委員会2010）。

付近は大野城の最高所を走る尾根上にあたるため、池に流れ込む常時表流水はなく、また地形的に見てもその表流水の集水域は極めて狭いにもかかわらず、なぜかこの池は常に水をたたえている。土地の古老の話ではこの池は水が枯れたことがなく、付近の神社で湯水時の雨乞神事をするときにはこの池に祈りをささげ、すると必ず雨に恵まれたという（鏡山1968ほか）。おそらく常時、池の底より湧水があり、水が枯れることがないのだと思われるが、詳細な調査はいまだ行われていない。

けいさしの井戸は、同じく大野城の城域南側、土塁とそして土塁線上に作られた水城口城門のすぐ内側にある広目天礎石建物群地区に接するように掘られた平面円形の石組井戸で、現在は涸れ井戸となっている³⁾。こちらは鏡山猛氏により石組の実測図が公開されており（鏡山猛1968）、その特徴から石組自体はおそらく中世まで下る可能性が高い（図13）。山の頂部付近ではあるものの、井戸の周囲は小さなす

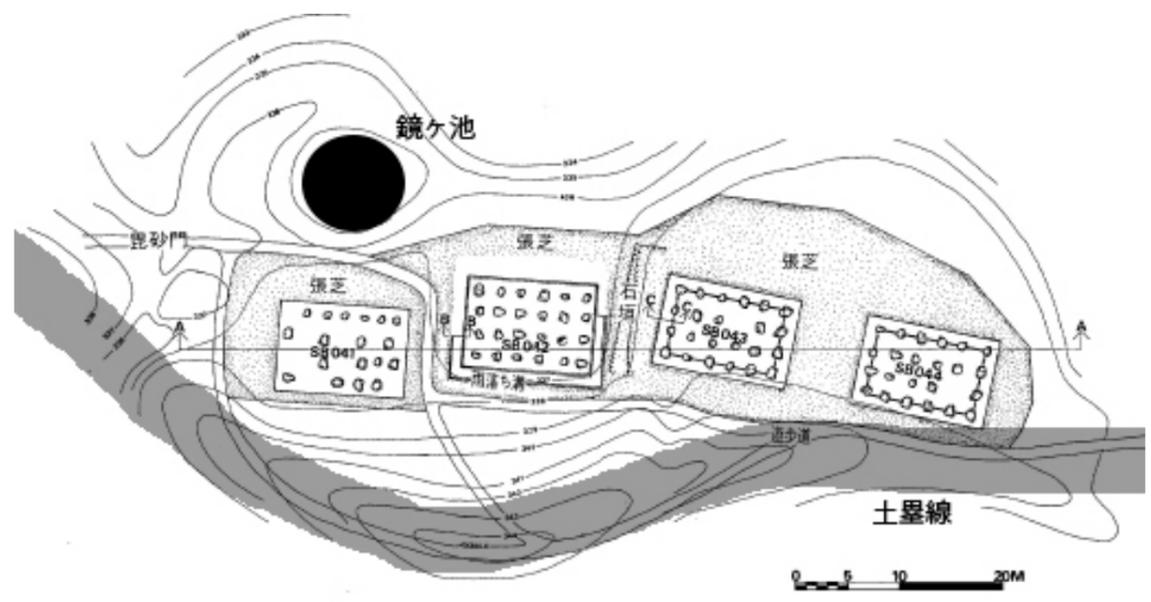


図12 増長天礎石建物群地区と鏡ヶ池（報告書より一部改変）

り鉢状の地形を呈しており、おそらく少量の湧水のほかこの範囲に降った雨水を集めて貯める天水井戸であろう。この類の貯水施設は、設置できる地形条件が限られることから何度も同じ場所につくられることが多い。したがってけいさしの井戸も現在残る中世以降の遺構の下層に、これよりも遡る時期、おそらく大野城の城としての機能時の貯水施設が埋没している可能性があると考えられる⁴⁾。

これら二つの利・貯水施設はその立地に共通性が認められる。すなわち、いずれも集水に決して適しているとはいえない高地に所在すること、そしてその付近には礎石建物群が立っており、またすぐ脇を土塁線が走っていて城門や城門推定地が隣接することである。集水能力をある程度犠牲にして、特定の施設、この場合は城門や倉庫群のすぐ近くに利・貯水施設を配置していることから、これらは城門や倉庫群などの施設で用いられる水を得ることが主目的だった可能性が極めて高い。大野城跡の倉庫群は米庫や武器庫とされ、そこで生活用水が必要とされたとは考えづらい。城門で日常的に多量の水を用いる必要性も考えにくい。城壁線に作られた城門や、そのすぐ近くにある倉庫群は、火矢などの攻撃にさらされる可能性が高い。高所にあつて谷部の湧水から標高差がかなりあることなどを考えると、火災時の消火用水を得ることが主目的で作られた利・貯水施設と理解することが整合的と考えられる。

同じような利・貯水施設の可能性があるものとして、佐賀県基肄城跡米蔵礎石群から北に尾根線を登ったところにある「つつみ跡」というくぼ地が挙げられる(基山町2018)。現在は干上がっているが、地元、基山町小倉地区の古老によれば、尾根線上にあるにもかかわらずかつては湧水がたまり、特に降雨後は水量も豊富で、子供のころはここで泳いで遊ぶこともあるほどだったという(中島・主税2018、また筆者も2019年夏頃、基山町小倉城戸地区在住者より複数回、同様の聞き取り証言を得た。植林など山仕事の時に手を洗う水としても重宝したという)。防火用水としての機能が期待された利・貯水施設であったとみたい。

大野城、基肄城はいずれも大きな谷を城内に抱えていて、一定量の流水が常に谷底を川となって流下している。よほどの渇水時にもこれらの谷川の水は干上がることはない。鞠智城のような大規模な貯水施設がなくとも生活用水に困ることはなかったと考えられる。ただし、それらの水源から距離や高低差のある地区に特定の水の需要がある場合があり、それを特定の目的とした利・貯水施設が別途設置されたとみられる。立地条件と使用目的が密接に関係する利・貯水施設のあり方の好例であろう。

3. 水門と利・貯水施設の諸問題

古代山城における水利関係施設としては、利・貯水池よりも「水門」が古くより注目されてきた。水

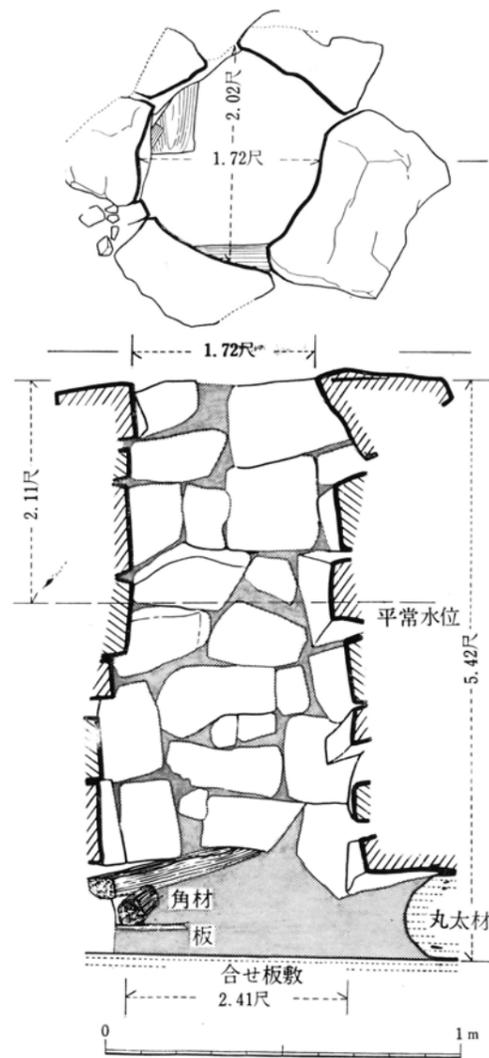


図13 けいさしの井戸
(鏡山1968より一部改変)

門は、城内の水を城外に排出するための施設であり、韓国では主に城壁に開けられたトンネル状の「通水溝」と取・排水口(呼称については主税2019に従った)、またその周辺施設を水門とみなすが、列島では、大半の城壁が版築盛土で構築され、排水機能の必要な谷部のみ石垣構造の城壁がみられる城がほとんどを占めることから、「通水溝」がなくても積み石のすき間から水を排出する機能があることに着目して谷部の石垣を「水門」と呼ぶことが多い。そしてこれまで、通水溝の傾斜角度や排水口の形状などから、日韓水門構造の比較検討が進められてきた。

西日本の古代山城のうち、城壁線に城内から城外に向かって水を排出する施設としての「水門」が築かれた例は、これまでに16城42例が知られるという(主税2019)。それらは、通水部の構造から大きく2種類に分類することが可能である。すなわち、明確な暗渠通水溝を有するか、それともこれを持たないか、である⁵⁾。前者の場合、谷部に作られた石垣などを貫通するように石組みの暗渠排水路(通水溝)が設けられ、城内側の取水口から城外側の排水口に向かってその内部の水が流れて城内の水を外に排出する特徴的な構造を持つ。一方後者の場合、谷部に作られた石垣などの基礎部分にあたる積み石が、あえて隙間が多くなるように積まれるなどして、石と石の間にできた隙間を水が浸透して通過することで、城内側の水が城外側に排出される構造となっている(福岡県教育委員会2006・2010など)。

水門は、城内を流れる(必要のない)水を城外に排出する施設であり、その立地は基本的に、①城壁線上の、②水の集まる谷部に、作られる。利・貯水施設も、その多くは水の集まる谷部に作られるため、この点で両者の立地は共通しており、両者が近接して併存する、あるいは両者が一体の構造を持つ場合が想定される。例えば韓国では、しばしば城壁に設けられた通水溝の取水口すぐ近くに利・貯水施設がもうけられる例がみられる(図14)。よって、古代山城の利・貯水施設を検討するにあたっては、水門との関係を十分に考慮することが重要と考えられる。特に、明確な通水溝をもつ水門石垣については、取水口側に何らかの集水に関する施設があり、それが利・貯水施設を兼ねている可能性を十分に考慮すべきであろう。水を排出する水門と水をためる利・貯水施設、両者は全く正反対の機能を持つようだが、場合によっては非常に強い関係を持つ場合が想定される。本稿で提示した鬼ノ城跡における貯水施設の想定もまた、この視点に沿ったものである。

国内の古代山城においてはこれまで、こうした観点から水門背後の発掘調査を行うことがほとんどなかった。数少ない例として、上述の鬼ノ城跡例や、大野城跡水ノ手石垣周辺の調査(福岡県教育委員会2006)などが挙げられる程度である。国内の古代山城の発掘調査においては、利・貯水施設という視点がこれまで抜け落ちていたといわざるを得ない。

山に築かれた城にとっての水資源の重要性は、古代も中近世も、また日本も韓国もみな同じであった。この意味で、今後、利・貯水施設について様々な観点から比較検討を進める必要性は極めて高い。古代山城の水資源について、検討する資料の蓄積は現在、圧倒的に韓国古代山城の方が進展している。韓国の考古学界ではすでに山城の利・貯水施設に対する調査研究が進められており、日本の古代山城研究者がこれに学ぶところは大きいと考える。

山城で水をどのように用いたか、また用いるためにどのような工夫をしていたのか。我が国古代山城の利・貯水施設に対する調査研究はいまだ緒についたばかりである。



図14 剣丹山城の貯水施設と城壁、水門取水口(報告書より)

本稿の執筆にあたっては、以下の諸氏にさまざまな助言や協力を賜った。ここに記して謝意を表します。

大森真衣子、亀田修一、主税英徳、中島恒次郎、能登原孝道、南健太郎、渡邊誠

註

- 1) なお、このほかに公山城では北東を流れる錦江に城壁線が接する位置に平面方形の大型の利・貯水施設が作られている。こちらは城内全域の日常用水を賄う施設とみられる。
- 2) なお、同様に城内にあって谷を横断する土手状遺構で貯水池の可能性が指摘されているものに、御所ヶ谷神籠石の馬立場石塁がある(小川2010)。この石塁を見ると石の積み方にすき間が多く水を貯えることが可能なようには思えない。鬼ノ城跡の土手状遺構と同様に、下流に位置する中門石塁を土石流などから保護するための施設の可能性を想定しておきたい。また中門石垣とはあまりに用いられた石積み技術に隔たりがあり、その施工の時期についても慎重な検討が必要であろう。
- 3) 鏡山氏の調査時には、通常時には井戸の縁から2尺(=約60cm)の高さまで滞水していたという。
- 4) ただし、大野城跡内の礎石建物群地区の中でも、けいさしの井戸に近接する広目天礎石建物群地区は、ほかの礎石建物群地区とはやや性格が異なるのではないかという推測は古くよりみられる。広目天地区の礎石建物群が大野城跡内の他の礎石建物群と比べて小型で、柱間距離が狭いからである。これらが古代のものよりもやや新しく位置付けられるとすれば、けいさしの井戸の石組の特徴が示す中世という时期的な推測と関連する可能性はあろう。
- 5) 埋没や後世の破損などにより通水部の構造が不明確なものも多い。

参考文献

- 岡山県古代吉備文化財センター2013『史跡 鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第236集
小川秀樹2010「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』62-2 古代学協会
鏡山猛1968『大宰府都城の研究』風間書房
韓国立中原文化財研究所2008『中原の山城』(韓文)
漢陽大学校博物館1987『二聖山城発掘調査報告書(1次 中間)』漢陽大学校博物館叢書第5輯(韓文)
漢陽大学校博物館1988『二聖山城発掘調査中間報告書(2次 中間)』漢陽大学校博物館叢書第6輯(韓文)
漢陽大学校博物館1991『二聖山城発掘調査報告書(3次 中間)』漢陽大学校博物館叢書第12輯(韓文)
基山町2018『特別史跡基肆城跡保存整備基本計画 第2次』
熊本県教育委員会2012『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第8～32次調査報告—』熊本県文化財調査報告第276集
公州師範大学博物館1987『公山城百済推定王宮址発掘調査報告書』(韓文)
公州大学校博物館1993『公山城池塘』(韓文)
車勇杰2010「韓国三国時代の山城—最近の調査資料を中心として—」『古代山城日韓シンポジウム—瀬戸内・日本・東アジアからの視点で屋嶋城の実像にせまる—』高松市教育委員会
順天大学校博物館2004『順天剣丹山城1』順天大学校博物館学術資料叢書第51冊(韓文)
順天大学校博物館2009『光陽馬老山城Ⅱ』順天大学校博物館学術資料叢書第64冊(韓文)
総社市教育委員会2006『古代山城 鬼ノ城2—鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 東門、第1水門貯水池ほか—』総社市埋蔵文化財発掘調査報告第19集
主税英徳2019「日韓古代山城の水門構造から見た鞠智城」『鞠智城と古代社会7』熊本県教育委員会
中原文化財研究院2007『聞慶姑母山城1』中原文化財研究院調査報告叢書第41冊(韓文)
中原文化財研究院2008『清州父母山城1-1・2次発掘調査総合報告書 北門址・水口部一円』中原文化財研究院調査報告叢書第53集(韓文)
忠南大学校百済研究所2005『大田鶏足山城』忠南大学校百済研究所学術研究叢書第13輯(韓文)
忠北大学校中原文化研究所2005『忠州山城 東門南側貯水池試・発掘調査報告書』中原文化研究叢書第48冊(韓文)
中島恒次郎・主税英徳2018「特別史跡基肆城考」大宰府史跡発掘五十周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』高志書院
朴鍾益2006「韓国の山城最新発掘調査成果について」『日韓の古代山城を掘る』九州国立博物館国際シンポジウム資料集 九州国立博物館
福岡県教育委員会1978『特別史跡大野城跡環境整備事業実施報告書』
福岡県教育委員会1991『特別史跡大野城跡Ⅶ—太宰府口城門跡発掘調査概報—』
福岡県教育委員会2006『特別史跡大野城跡整備事業』福岡県文化財調査報告書第210集
福岡県教育委員会2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ(下)』福岡県文化財調査報告書第225集